
AKB48 少女たちの軌跡と少年の奇跡

夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AKB48 少女たちの軌跡と少年の奇跡

【Nコード】

N3985U

【作者名】

夢

【あらすじ】

人気アイドル境直人は、48人の少女で構成されたアイドルグループAKB48のマネージャーとなる。メンバー一人一人の心を癒し、少年は少女たちを成長させていく。

第一話 中学卒業

第一話 中学卒業

「やっぱり境直人はすげえなあ」

「そうね。デビューしてすぐアイドルランキングとか一位だもんねえ」

完璧な歌声と容姿で人気を得た境直人は中学卒業を迎え、屋上で寝そべっていた。

「いい風だ」

それが中学校生活に残した最後の言葉だった。

「敦子と優子は今頃美術室かなあ」

直人は空を見て微笑む。

「出番が来た」

そして、AKBが舞台にたつ準備に入る。

美術室では、後にセンターとなる前田敦子と大島優子が話していた。

「敦子、ほんとにできるの？多勢の前で歌える？」

「うん、直人がいたら、大丈夫だと思う」

「ナオ君もきつとあなたを守ってくれるでしょ」

二人がアイドルになろうと決心したのは、この瞬間だった。

第二話 アイドル（前書き）

これは、全くではないですが、AKBのi fストーリーです。
今回はチーム結成をして半年ほどという設定です。

一応、正規は48人ですが、大島麻衣や小野恵令奈などがいたりと
ちょっと人数設定があやふやになっていますのでご了承ください。

第二話 アイドル

境直人の中学卒業から、ちょうど一年が経とうとしていた。

「康さん、一応メンバーはそれなりに集めましたけど、レッスンとか、公演とかどうすんすか。上には期待してくれって言っちゃいましたよ」

「いいんだよ境君。君は物事をマイナス思考に考える男ではないだろうに」

とある劇場の控え室。境直人と、秋元康がいた。

「マイナス思考とかそういう問題じゃないでしょう。チームは皆素人の女の子。中には、子供のころから女優としてやってきた人かいますけど」

「まあ、そう焦らなくてもいいだろう。AKBは、君のチームなんだよ」

「僕のチーム、ですか・・・」

そつだ。あれは、僕が作ったチームなんだ。

中学卒業後、直人は秋葉原を拠点においたアイドルグループAKB48を結成した。正規メンバーは48人。それに研究生を交えている。実際は正規に予備メンバーがいたりするのだが、そこはそこだ。あまり気にしてはいけない。

半年間、彼はスカウトに励んだ。

メンバーの条件はただ一つ。諦めない心を持った少女。

彼はまず、昔からの友人である前田敦子と大島優子を誘ってみた。二人はすぐに了承してくれた。

その後、とりあえず、宣伝してみようと思って全国にポスターを配布した。

応募者は1000人を超えたので、結果的にその中から直人が決めることになったのだが、人を比べるのを好まない直人はそれがで

きなかった。そのため、くじ?のような結果になった。

親の反対。駄目だったらどうしようという恐怖感。それが原因で、メンバーになれないものもいた。

直人は一人ずつ会い、勧誘していった。

その結果、メンバーはそろったわけである。結果的に直人のチームだ。

「康さん、あんたは僕の恩師だ。だけど、本当にこれでいいのかな?」

「ああ、いいとも」

「・・・そつか。じゃあ僕は、これからメンバーに会ってくるよ」

直人はその部屋のドアノブに手を差し伸べる。

「逃げない僕たちに、非常口はいらない・・・か」

直人は秋元康とはまた別の恩師（命の恩人）の口癖を、呟いた。

直人は、その言葉の感想を述べる。

「ドラマの名言だな」

第三話 デビューの準備

一つの広場に集まれた48人の少女たち。

そこは、ダンスレッスナルームと呼ばれる場所だった。

「直人、こんなに女の子集めて、ほんとにアイドルグループ作るつもりなんだね」

48人の中に、敦子がいた。彼女は優子と一緒にいる。

この二人は、直人が一番最初に誘った人物である。敦子と優子はすぐに了承してくれた。

二人の周りには同世代の女の子ばかりだった。

「ねえ、私、『長髪の直人』に誘われたんだけど」

「私もなんだあ」

直人は、髪が女の子のように腰まであり、それを一まとめしていることから『長髪の直人』と呼ばれている。彼は中学三年生の二期頃に伸ばし始めた。ちょうど一年がたった今、髪は腰まで伸びている。

ガールズトークがあちこちで聞こえる中、ダンスレッスナルームに一人の少年が入ってきた。少年は長い髪を翻し、中央の鏡の前に立つ。

「みなさん、はじめまして。境直人です」

直人はお辞儀をする。少女たちもお辞儀をする。頭を上げた直人はふつと微笑む。

「みんな、着てくれてありがとう。聞いたとおり、僕は君たちを、アイドルグループAKB48として成長させたいと思う。まず、君たちにはこれを見せよう」

そう言っ直人はみんなに書類を渡していく。

「今ここにいる、メンバー最優先候補者のリストだ。他の女の子たちのことをよく知ってほしいと思う。レッスンする前に、まずはこれからだ」

直人はそう言いながらその場にしゃがみこんだ。
正座で。

「さあ、今から自己紹介タイムだ」

直人は腕時計を見る。

「約三十分・・・そんなぐらいあったら十分か。はい」

直人は両手をあわせ、パチンと鳴らした。

「自己紹介タイムスタート」

第四話 自己紹介タイム

「自己紹介タイム、スタート」

直人のその一言により、静寂だったルームがざわざわと騒ぎ始める。

直人がレッスルームに入るまでに、もう会話を始めた者などもいた。たぶんもうちゃんとした初対面も済ませただろうと思う。だが、直人は、もっとたくさんの人を知ってほしかった。だから自己紹介タイムを実地した。直人は正座を崩さないまま皆の様子を伺う。ここにいる少女は全員直人がスカウトした。

ここにいる48人はそれぞれ同年代の女子と打ち解けていたる者が多かった。

宣伝を行っていたときはまだ実感が湧いてこなかった。だけど、応募してきた少女たちはただの興味本意で応募している人たちもいたが、自身のアピールから、本気でアイドルを目指しているという少女が分かった。その中から、60人ほど選んだ。そして、前田敦子、大島優子をスカウトし、OKしてくれた。

その後、選んだ60人に直人が会いに行った。一人ずつ、住んでいる家まで行き、両親の許可を得る。それで初めてスカウト成功になる。時に問題も起こったが60人が60人スカウトに成功した。そして最後に、境直人は篠田麻里子に出会った。

「麻里子さんは、ほんとスカウトに苦労したよなあ」

そうだ。カフェで働いていた背の高い女性。いや、大人びた少女と言うほうが正しいのだろう。

60人と直人自らがスカウトした3人の中から正規メンバーの最優先候補を48人選び、ここに呼び出した。

「スカウトするのになんであんな苦労したんだろう」

直人は天井を見る。そして思い出す。この半年間に渡る、少女たちとの出会いを。

「残り十分。なんかみんなの顔が笑顔でいっぱいだ」

これできっと、このチームはそれぞれ仲良しの子を見つける。敦子も今麻里子と喋っていた。

「なぜだろう。昨日までがとても昔のような気がする。とても懐かしい・・・」

自分の両手の掌を見下ろす直人。

「俺も、どれだけでもつだらうか・・・」

また天井を見上げる直人。

直人の脳裏に浮かんだのは、麻里子との出会い。

第四話 自己紹介タイム（後書き）

この物語は、ところどころで、メンバーのスカウトをしていた日々
の場面が流れます。設定は直人の回想です。次回は篠田麻里子との
出会いを描いてます。

第五話 麻里子との出会い

それは、直人が麻里子と出会った日の出来事。

直人は自身の特徴と言っていていい後ろの髪をジャケットで隠し帽子をかぶって秋葉原を歩いていた。

誰も彼が境直人とは気づいていない。

「僕って、そんなに人気なかったかなあ」

通行人が自分に気づいて騒がないのは自分の人気にあると思っ
ている直人。

能天気の彼は、上を向きながら歩いていた。

直人の目的は、AKBの劇場に選んだ建物の点検。

「なんか、喉かわいたなあ」

辺りを見回し、近くの喫茶店へ。この時間帯は出入りが多いらし
く、人が多かった。直人はカウンターから遠い窓際の席に座った。

頼んだのはアップルティー。熱め。直人は一日に五回紅茶を飲むこ
とがある。暇さえあれば飲むというタイプ。

「紅茶をお持ちしました」

少し長身の少女が紅茶を持ってきた。

「ありが……」

お礼を言おうとして少女の顔を見た瞬間、言葉がとまった。

どう説明したらいいだろう。なんていうか、綺麗だった。可愛い

笑顔と、整えられた髪。完璧だと一瞬思った。こんな人が、チーム

に加入してくれれば……

「君……」

しかし、それだけではなかった。

AKBを考案した秋元康。結成を実行する境直人。

芸能界に出たいと、あらゆる気持ちがかもるメンバーオーディシ
ョンの応募。

そして、選ばれなかった少女たち。

「なんでしよう？」

ウェイトレスの少女が問いかける。

そうだ、この少女は……

「いや、なんでもないよ。紅茶、おいしいよ」

「ありがとうございます。それでは……」

あのウェイトレスの少女は、応募に受からなかった少女たちの一人だ。

こんな近くに、いたのか。夢が叶わなかった人が。

「……」

直人は感じた。ただの見間違いかもしれないが、この少女には才能がある。

ちらつと店内を見回す。《当店人気ウェイトレス第一位！篠田麻里子！》と搔かれた名札と、その上に先ほどの少女の写真。

決めた。

この少女も、チームに加入させよう。

あの子には、類まれぬ素質がある。僕はそう思う。

「君！」

「はい？」

少女は、篠田麻里子は振り返る。

「ちよつと、いいかな？」

直人の目にとまった一人の少女。

直人と麻里子の出会い。

直人は麻里子にチームへの勧誘をし、麻里子はすぐに了承する。

秋元康は、賛成することも、反対することもなく、話を聞くと、ふつと笑った。

第六話 対面

自己紹介タイムは終わった。これで一通りの流れが終わった。

「さて、どうしようかねえ」

直人は、優れた頭脳を持っている。その頭脳を活かして、彼はいくつもの計画を練り、ファンをサプライズに導いた。だが、計画性をもっていない。

自己紹介をした後の計画を、直人は考えていなかった。

「えっと、一通り終わったみたいだね。どうだったかな？」

直人は時間稼ぎをするのと同時に、次はどうするかを考える。

「これで、メンバー同士の対面は終わったね。じゃあ次は・・・」
どうする、どうするんだ僕！

直人が、考えていたときだった。

突如、レッスルールの扉が開かれた。そこから現れたのは、秋元康だった。

「やあ、はじめまして。総合プロデューサーの秋元康だ」

言いながら、康は直人のところまで歩いてきた。

「どうも」

「苦戦しているようだね」

「分かりますか」

「君は分かりやすい」

直人と短い会話を終わらしたところで、康は少女たちを見回す。

「二カ月後に、初の公演を行ってもらいます。みんな、しっかりダンスの練習をしてください」

「待ってください！」

直人が康に講義する。

「素人の彼女たちに、たった二ヶ月で歌とダンスを完璧にしろっていうんですか！」

「そうです」

「なっ……」

直人はたじろぐように康から距離を取る。

「頑張ってください。以上」

秋元康はそのままレッスルームを出て行った。

「やってくれるじゃないか。康さん」

直人は少女たちを見回す。

少女たちの顔色には、不安の曇りが見られた。

だけど、それを僕が笑顔にしなければいけない。

「まずは、歌だ」

第七話 レッスン・歌

直人は秋元康がレッスンルームから出て行って数分後に行動に移った。

「じゃあまずは歌からはじめたい。えっと……」

様々な理由で女の子たちを集めては見たが、実際に歌が上手いかどうかは言いがたい。歌の観点なんていつも考えていないというわけではないが、正直曖昧だ。

「えっと、歌に自信がある人！」

挙手してくれといわんばかりに直人は自分の右手を上げる。

上げてくれたのは48人中……13人。

まあ、最初はこんなもんだ。

「康さんが考えてくれた曲が一曲ある。それがこれだ」

右手を下ろした直人は左手に持っていたあるものを掲げる。それは、歌詞。

「この曲は、君たちのデビュー曲になると思う。だから、この曲を歌えるようにしてもらいたい。だけど、急じゃ無理だと思うから、まずは僕の曲を歌ってもらう」

「はい？」

最初に声を出したのは高城亜樹だった。そのまま直人に話しかける。

「あの、それって、男の人の歌を私たちが歌うってことですか？」

「なんか不満？」

「いや、あの、音程とか……」

「それなら大丈夫。女性が歌いやすいように変えてあるさ。じゃあ、今からみんなに歌詞をくばる」

直人は歩きながら一人一人に歌詞をくばっていく。

48人全員が「ありがとう」という言葉を言う。

当たり前の言葉だったが、直人の心にはなぜか深く響いた。

（僕はなんで当たり前の言葉に感動してんだ？）

不思議に思っている直人だが、本当はその答えが本当は分かっているのかもしれない。

「まず、僕が歌ってみるから。聞いてて」

直人は先ほどいた場所まで戻り、みんなのほうに顔を向ける。

今から歌うのは、直人の思い出の曲であり、みんなに感動を呼ぶ歌と評判になった曲。

『子供から大人へ』

それが、この歌の曲名。

アイドルのような元気な曲ではなく、声援を上げるようなものではない静かな曲。

「すう……」

大きく息を一つ。

そして、直人は口を小さく開け、歌い始めた。

「♪世界のお、かあたあすうみで」

彼が歌っている間、誰も声を出すことはなかった。

（これが、ナオ君の歌か。良い歌）

優子は心の中で呟いた。

そして微笑む。

その隣で、敦子は複雑な想いを抱えていた。

第八話 歌声（前書き）

第七話に前書きで言うつもりでした。

初の歌レッスンは編スタートです！

ちなみに、これから編というふうにしていきます。

第八話 歌声

直人が歌い終わり、次第に歓声の音が漏れていく。ここにいる少女全員が、初めて直人の歌を生で聞いた。敦子と優子さえも歌を傍で聞いたことはなかった。

「分かったかな？まあ、何度でも聞いてくれたらいいさ。じゃあ、メドレーを流すよ」

CDを用意し、直人は歌のメドレーを流す。

「このタイミングで歌いだし。まずはここを練習してもらおう。その後、一人ずつ歌ってもらおう」

「どうして？」

亜樹が問う。彼女はさっきから反抗してばっかだ……と直人は思う。

「歌い方には、その人の本性が表れる。それを見る」

直人はみんなを見渡す。

48人いるから……グループ分けが一番良い。

この部屋には、ラジカセが六つある。

「じゃあ、今から七つのグループに分けるから。適当に決めるからね」

48人いるから。一つのグループに8人。

直人は前から適当にグループを作っていく、それぞれレッスンルームの端に固まらせた。ラジカセでメドレーを聞きながら、歌いだしの練習を始めさせる。

「少しは休憩できるな」

正直、この短い時間……疲れた。

偶然だったが、敦子と優子は同じグループだった。

いや、必然なのかもしれない。

「さっきの亜樹って子は、正規メンバーに入りそうだな」

意見を声に出さない少女たちの中、堂々と意見を出した少女。恥

ずかしがらない少女はステージに立った時歌えるはずだ。急に多勢の前にたつてほら歌えなどと言われて歌える人は少ない。だけど、高城亜樹という少女はできそうだった。

「とりあえず、30分待とう」

第九話 亜樹（前書き）

今日は、回想です！

回想内容は、高城亜樹との出会いです。

実際なら、六期生のオーディションに合格した亜樹。
この物語では、物凄く速くステージに立っています。

第九話 亜樹

「とりあえず、30分待とう」

直人はその場に寝転び、高城亜樹を思い出す。

（そういえば、家族、おもしろかったかも）

○

直人が選んだ48人は様々な地域に住んでいる。高城亜樹は、高城樹衣を姉に持つ少女で、しかも東京都に住んでいる。そのため、直人はすぐ訪問することが出来、敦子と優子を除いて、二人目のスカウトとなった。彼女は学生であるため、同級生などに亜樹の事を聞いたところ、天然キヤラらしい。聞いた時、相手の女の子からサインをねだられたりして聞くのに時間がかかったが。我ながら人気だな……なんて自惚れてしまった。

「ここかな……」

住所確認。たしかに高城という札がある。

ここで間違いない。

一つ心を落ち着かせるための呼吸をしてから、インターホンを押す。

「はい？」

ドアを開けて、顔だけを覗かせる少女。

それが、亜樹との出会い……ではなく。

「えっと……境直人です」

バチン！

勢いよくドアを閉められた。

「えっと……拒否されちゃった。これじゃあ、スカウトできないじゃん」

たぶん、さっきのは亜樹の妹なのだろう。あんな行動取るってこ

とは、僕のことを知ってるはずなんだろうけど……僕って、変人に見られてる？

直人の苦悩が二分続いた。

そして…

「すいません！どうぞ上がってください」

さっき見た時はスッピンだったのに、たったの二分で完璧にメイクしている！しかも服がオシャレになっている！さっき明らかにパジャマだったぞ！女子恐るべしだ！

「あ、じゃあ、遠慮なく」

（いきなり家を訪問するのが間違いだったな）

一つ勉強になった、直人であった。

家に入る。今日は土曜日だったことからか、亜樹の父は休み。直人は和室に案内されて、そこには一家四人が揃っていた。

「座ってください」

「あ、はい」

母親の真正面に座らされてしまった……なんか、怖いな。

「ああ、ごめんなさい！」

腰を落とした途端、和室に一人の少女が入ってきた。

それが、高城亜樹だった。亜樹は母親の隣に正座で座り込む。

「やあ、君が、亜樹ちゃん？」

「はい！そうです！私、受かったんですか！」

身をテーブルに乗り出して問う亜樹。

「あ、うん！」

「やったあ！私、すごく嬉しいです！」

なんか、スカウトどころじゃなくなってる気がする……

しかし、この家族…仲良いなあ。

そう思いながら、直人は急な展開？的な感じの、家族の喜びを見守っているのだった。

第十話 パート練習（前書き）

初の歌レッスン編は、大きな章……

レッスン編に入っていきます！

ちなみに、とっさに思いついたことです。

第十話 パート練習

「やっぱ、小学校の音楽での練習とは各が違うね」

「当たり前だよ」

暢気なことを言う優子に対して喋る敦子。

（直人の歌声、初めて近くで聞いたな）

だが、敦子は練習とは全く別のことを考えていた。

「直人……」

敦子は少年の名を呟く。

「おい、あっちゃん？」

気がつくと、敦子の目の前を優子の手がひらひらと動いていた。

「え？」

「次、あっちゃんが歌う番だよ」

七人が七人、敦子をじーっと見ていた。

「その目は、恋煩いですか!？」

途端に、七人のうちの一人、指原莉乃が言った。

「え？は、はい？」

一気に敦子の頬が紅潮する。

「確かに、そうかもしれませんね」

「由紀ちゃんも何言ってるの!？」

「なんか、慌ててるのも怪しいなあ」

「優子まで!」

完全に悪戯の的になっている。

「え、えっと……」

敦子は返す言葉が見つからない。

（どうしよう……）

敦子が困り果てた、その時だった。

「こら、お遊びはそこまで。早く、練習しなさい。一番最初に歌わせるよ」

気がついたときには、直人が近くにいた。

「優子、君に敦子を護ってもらいたいのには、一番悪戯楽しんでちゃ駄目じゃないか」

直人は冗談のようにいいながら敦子に視線を移す。

「頑張つて、練習してくれよ」

直人は微笑み、元いた場所に戻っていった。

「面白くないなあ、ナオ君ってば。さ、あっちゃん」

「う、うん」

敦子はラジカセに一步近づく。

（また、直人に助けられたな」

第十一話 歌の良さ悪さ（前書き）

やばい！第十話更新したらお気に入り登録が減ってしまった！

それは、さておき……ここで一つお知らせ！

高橋みなみと峯岸みなみ。

名前、どちらもひらがなのので、この二人はニックネームで記させてもらいます。

第十一話 歌の良さ悪さ

30分たった。そろそろ始める時間だ。

直人は立ち上がり、両手を合わせてパチンと慣らした。

「時間だ。みんな、そこに適当に横に三列に並んでくれ」

みんな、直人の言うとおりに三列に並んだ。偶然だろうか、背の順に並んでいる。

「一番前の列……その一番右から、一人ずつ歌ってもらおう。みんなが聞いているからって緊張しなくていいから」

最後に緊張をほぐせるような言葉を言ってからラジカセをセットする。

（今の言葉……緊張ほぐせたのかなあ）

不安な直人だった。

「てことで、まずは君だね」

前の列の一番右にいるのは、高橋みなみ。

背が一番小さいその少女は、少し男っぽかった。

……気のせいだな。うん、今の言葉は却下だ。

「たしか、高橋みなみ……だったよね？」

「は、はい。みんなからはたかみなって呼ばれてます」

「じゃあ、たかみな。歌えるかな？」

「はい！歌えます！」

ビシッと右手でグッドマークを見せるたかみな。

声が低いな……

直人はそう思った。

とりあえず、歌声を聴いてみよう。

「じゃあ、かけるよ。歌わない人は座っててね」

ラジカセの再生ボタンを押す直人。

メドレーは流れ、次第に場に緊張が走る。

一応、緊張ほぐす言葉あは言ったよ……

歌いだしにかかる。そして……

たかみなが、歌い始めた。

直人は瞬間、驚いた。

あの低い声で、たかみनाは直人を驚愕させるほどの歌声を発揮した。

他の少女たちも、固唾を吞んでその歌声を聴いた。

たかみなが歌い終わったが、直人はしばらく啞然としていた。気を戻してから慌ててラジカセの停止ボタンを押す。

「えっと、私、悪かったですか？」

たかみナは不安そうな表情をしながら直人を見た。

「いや、むしろ神様みたいな歌声だったよ。この声にはびっくりした」

「いや、そんな……」

今言った言葉は決してお世辞なんかじゃない。

あの歌声は本物だ。

そして、次々と歌い始める少女たち。

直人は、たかみなが一番上手いと感じた。

第十一話 歌の良さ悪さ（後書き）

感想受け付けます！

良いところを言ってくれとありがたいです！

悪いところを言ってくれると次から気をつけれるので
どんどん言ってください！

第十二話 背の低い少女／前編（前書き）

今回は、回想です。

前話で直人を驚かせたたかみなとの出会いです。

第十二話 背の低い少女／前編

敦子と優子をアイドルの道へと誘った直人。

本題はこれからだ。いまから、46人の少女に会い、スカウトしなければならぬ。

まず最初に、東京からだ。

「顔写真からして、身長はそこそ高そうに見えたんだけど、まさかの148cmかあ」

スカウトしなければならないのだが、なにせアイドルの直人はスカウトなんてものをしたことがない。一体、どうすればいいのだろう。

一緒に食事？違うな。それじゃ、ただのデートだ。

直人はずっと悩んでいた。その悩みは、横浜市に来るまでずっと消えないでいた。

「よし、ここだな」

ついた一軒。そこは、直人の初のスカウトとなる相手が住んでいる家。

「なんか、不安だな……」

ぼそつと呟きながら、直人はインターホンを鳴らした。数秒待つと、背の低い少年が現れた。

「はい？……え、境直人？なんで！？」

ソロのアイドルって、やっぱり地名度高いんだな…と自惚れる直人。

「えっと、みなみさんの、弟？」

「あ、はい、そうですけど……」

「高橋みなみさんは、いるかな？」

「あ、はい。自室で昼寝でもしているんじゃないかと」

まだ昼じゃないけど昼寝と言っている弟は、直人を見てパニックに陥っていた。

直人は失礼します、と言いながら玄関に入る。

「その、自室って？」

「あ、ご案内します」

別に敬語じゃなくてもいいのに、歳近そうだし……と頭の中で呟く直人だった。

自室の前まで案内してもらい、直人は弟にお礼を言ってからドアをノックした。

「そういえば、昼寝……だっけ」

直人はドアノブを握る。そして、開けていいのかなと躊躇しながらもドアノブを回す。

弟の言ったとおり、昼寝していた。ベッドで豪快に。

「えっと……おい！」

大声を出してみる。

「おい！」

繰り返し三回。次第に瞼が開いていった。

「え？」

みなみは、直人を視界に捉えた瞬間、目を見開いた。

「……おはよう」

みなみは仰天した。

「境直人……さん」

「スカウトに来ました」

「見ないで！私スッピンですう！」

枕を投げられてしまった。

第十二話 背の低い少女／前編（後書き）

初の回想前編ですが、後編は多分日曜日に更新すると思います。
みなさん、面白くなくてもぜひ読んでください。

第十三話 背の低い少女／後編（前書き）

久しぶりの執筆……

少々腕が鈍っているやもしれません。

第十三話 背の低い少女／後編

十分後。簡単にメイクを整えたたかみなは改めて直人と対面した。なぜか、直人は正座だった。たかみなが正座をしているから……という理由ではないが、なぜかたかみなからなんらかの威圧感を感じる。

たぶん、緊張感だ……緊張感であってほしい。

「えっと、初めまして。境直人と申します」

なぜか武士っぽく自己紹介してしまった。

「高橋みなみと申します」

武士っぽい自己紹介したら武士っぽい自己紹介されてしまった！これは何かが気まずい。

どうしたらいいんだ、優子よ？

直人はこの場にいない人物に相談していた。

「えっと、君を、アイドルチームのにスカウトしてきたんだけど……
……どうかな？歌とか、ダンスは、得意かな？」

「いや、私インドア派なんで、あんまよく分かりません」

……普通の面接だな。こりゃ。僕は楽しくスカウトしたかったのに

……

心の中で唸る直人だった。

（はあ……一応、キャプテン候補だって言っただけなのに）
なあ）

そう、直人の目の前で正座しているたかみなは、キャプテン候補理由は……直人の思いつき。

思いつきだけど、少しぐらいならうちちゃんとした理由あるぞ！

誰に言っているのだ、直人よ。

「えっと、なんで私選ばれたんですか？」

「え？それは……」

どう答えたものか、直人は数秒間返答することができずに迷い続

けた。

迷い続けた結果……

「僕は、君に何か運命的なものを感じた。ただ、それだけだ」

「え？あ、そうですか……」

俯くたかみな。

（言う言葉ミスったかな？）

ある意味明らかにミスっています。

それから数分間。二人は黙ったまま、時を過ごす。

（これは、もう言ったほうがいいな……）

直人は深く一呼吸。そして、たかみなを見据えて言った。

「高橋みなみさん、僕のチームにあなたも加わってくれませんか、キャプテンとして」

「え？」

たかみなが顔を上げる。

嬉しいのか、不安なのか、たかみなの頬を一筋の涙が流れた。

「え、僕なんかしたかな？」

「い、いや、あの、私がキャプテンって、どういうことですか？」

「あ、それは、えっと、君に相応しいと思ったからで……」

「そうなんですか……」

キャプテンという言葉聞いた瞬間、不安が募り、たかみなのは一筋の涙を流したのかもしれない。

第十四話 直人のお手本

「ありがとう。みんな、歌はとても良いよ。ああ、上手だ」

これは、お世辞で言っているのか、自分でも分からない。

「じゃあ、これから、本格的に歌のレッスンを始めたいと思う。今から、君たちに楽譜を配るよ」

直人はさきほどと同じような手順で楽譜を配っていく。

「君たちが、ステージで初めて歌うことになる曲だ。これから、この歌を練習していく。まずは、メドレーを聞いてもらいたい」

さつきから使っているラジカセ。それを使用する。ちなみに、このラジカセは直人の家から持ってきたものだ。まあ、どうでもいいと思うが。

「じゃあ、かけるよ」

ラジカセの再生ボタンを押す。

約4分。メドレーが終わった。

「次に……僕が……歌ってみるから」

少し気恥ずかしいが、直人はみんなのためにも歌わなければならぬ。

いかにも女子っぽい曲なので、直人は少し……いやかなりの抵抗感がある。

「そういえば、この楽譜曲名が書いてないね」

敦子がぼそと呟いた。その隣で優子が肯定の意を見せた。

「ほんとだ。なんて名前なんだろ。ナオ君教えてくれないのかなあ？」

そう言いながら優子は直人を見据える。

「歌い終わったら、教えてくれるんじゃない？」

「そうかもね。でもナオ君、恥ずかしくて言わないんじゃない？」

「実は私もそう思う」

敦子と優子は誰かをからかっているような笑みをした。

当の直人は、頬を真っ赤に染めていた。それほど抵抗感があるの
だろう。

（ああ、トラウマになりそうだな……これを何回も続けると思うと
……）

そう思いながら、右手を胸に当てる。

直人はいつも、歌い始める前にいくつかの仕草をとる。それが、
直人の癖だ。

右手を下ろし、左手で髪をいじる。

「……ふう」

ゆっくりと息を吐きながら、ラジカセの再生ボタンを押す。

直人の、本日二回目の歌が始まった。

第十五話 ステージにたつ者たち

直人は歌いだした。低音が低いため、実際に彼女たちが歌う時とは雰囲気が違う歌になるかもしれない。

「きょうしつのまどべには」

あれ、別に男が歌っても違和感ないな、と思いながら歌い続ける直人。

サビにさしかかる。

「さくらはなびらたちがさあくころお、どこかできいぼうのかあねがありいひいびくう」

直人は歌うほど、心に何かがこみ上げてきた。それは、アイドルとしての、アーティストとしての感覚。そうだ。歌うとき、直人はいつも心の中で盛り上がっていた。気持ちが高ぶり、ずっと歌い続けたくなってくる。それは、今も同じだった。

歌い続けて約五分。ようやく歌い終わった直人は、久しぶりに歌ったためか、少し息が荒くなる。

以前自身が歌ったのは、秋元康とアイドルグループを作ろうと決めた二日後。一日かけて開かれた直人のコンサート。その終盤で、彼は「僕は、新しいアイドルグループを作ろうと思います！」と宣言した。その宣言がコンサート終幕のきっかけになり、その日のコンサートは幕を閉じた。それから半年間少女たちのスカウトに専念し、今こうしてレッスンを行っているため、ここ半年間コンサートをおこなっていない。

「まあ、こういう歌だよ。みんな、分かってくれたかな？」

ごく僅かだが、頷いてくれた。小さく。

「この曲は、48人全員で歌えるわけじゃない。それは、想像したら分かることだよな？」

そうなんだろうか……

「この曲の名前は『桜の花びらたち』だ。最初の舞台に立てるのは

48人中たったの16人だ。『桜の花びらたち』をダンス込みで歌ってもらった後、48人全員が舞台上がるんだ。まあ、それは、いつになるかわからないけど」

「どういうことですか？」

そう聞いたのは渡辺麻友だった。ツインテールの髪型をした彼女は真っ直ぐ直人を見つめる。その質問をした後、他の少女たちも直人を見た。

「客が集まるという保障はないんだ。観客席が、客でいっぱいになったら、48人全員を舞台上がらせる。それが、今の僕の目的だ」ファンとは言わない。観客席が埋め尽くされても、それはただの興味心で来ただけの人たち。その時、まだ彼女たちを好きだとは断定できない。

「この曲は、48人全員で歌う曲だ。ここに、僕が頼んで……アーティスト八人でこの曲を歌ってもらった。誰かは会えて言わないよ」一応、忠告しておく。ちなみに、そのアーティストというのは誰もが知っている、オーディションで受からなくても踏ん張り続けた女性たちのグループである。

「そのアーティストに歌ってもらった『桜の花びらたち』をCDで用意したから、さっきのように分かれて練習してくれ。さあ、今からしばらくその練習続けるから、何か、聞きたいことあったら、僕に直接聞きにきてくれ……じゃあ、スタート」

直人は、両手を合わせ、パチンとならした。

二回目のパート練習……といったところだ。

みんなはさきほどいた場所へ向かう。直人はそれぞれ集まっていたところに向かい、CDを渡していった。すべてのCDを渡して終わると、鏡の前辺りまで戻り、その場に座り込んだ。

正座で。胡坐をあくのがいつもの直人なのだが、今はなぜか正座をしたくなった。

だがその気持ちも数十秒であっという間に撃沈。直人はリラックスできるように座りなおした。

第十六話 音楽の楽しさ（前書き）

今回は、回想です。

誰かは……まあすぐに分かります。

ちなみに、AKB正規メンバーは、二千十一年時点に決定いたしました！最近まで大島麻衣とかどうしようかなあと悩んでたんですよ。メンバーの年齢は二千十年六月時点です。一応、デビューしていないとっつことを考えると、もうちょっと若いほうがいいかなと思っただけ。

第十六話 音楽の楽しさ

直人は質問がない限り暇となつてしまった。みんなはそれぞれの場所で真面目に練習している。サボっている者はいないようだが、まあガールズトークはおこりつつある。まあ、別に最初のうちはいいだろう。

などと甘い考えをめぐらせていると、

「あの、ちよつといいですか？」

さつそく質問が来た。

直人はすぐさま顔を上げる。渡辺麻友だ。

「質問？何かな？」

直人が立ち上がるうとする前に麻友が直人の前に座り込んだ。

「えつと、このリズムなんですけど、コツっていうか……どうやったら上手く歌えるとかつてありますか？音程とか」

「うーん、そうだねえ。難しい問題だな。少し、待ってもらえるかな？」

「はい、大丈夫です」

音程は、やっぱり女の子は高い方がいいよなあ。『翼をください』みたいな音程が似てるかなあ。いや、それで通じるか？リズムを考えるべきか。うーん、答えづらい……。

悩む直人に、麻友がまた話しかけた。

「そういえば、あなたがスカウトしに来た時も、同じような質問しましたっけ？」

「え？……ああ、確かにそうだね」

あの時は、スカウトっていうより高校生がするようなどうでもいい話みたいな感じだったけど。

「このリズムは、音程を上げて歌うといいね。腹式呼吸をしてみるといいよ」

「分かりました。ありがとうございます」

麻友は立ち上がってお辞儀をしてから、もといたグループの場に戻っていく。

「質問…か…」

。

今日は、渡辺麻友という、まだ学生の少女をスカウトしに行く。奇遇なことに、今日は3月26日。プロフィールで知ったのだが、麻友の誕生日だった。せっかくの誕生日なので、祝ってあげようと誕生日プレゼントにネックレス（値段は二千円ぐらい）と小さなシヨートケーキを三個ほど買って彼女の家に向かった。

埼玉県。直人は、麻友の家に着いた。

もう何度もスカウトを経験したので自然と緊張はない。

「あの、どちらさまで？」

出てきたのは麻友の母だった。

「えっと、境直人です」

「えっと……」

お母さん、完全に焦ってるよ。

「麻友さんとお話がしたいんです」

「えっと、どうぞ。上がってください」

見た目からして、焦りは一瞬で消えたようだ。

リビングに案内された。結構綺麗だ。

「麻友さんは、どこに？」

「部屋にいますよ…それは？」

麻友の母親は直人が持っているケーキやネックレスをいれた袋に気がつく。

「あ、今日誕生日だって聞いたんで、ケーキとプレゼントを」

「あら！きつと麻友も喜ぶわ。今すぐ呼んでくるわ」

そそくさと麻友の自室があるらしい方向に向かう。

数分後。眼鏡をかけた少女がリビングに現れた。少し寝ぼけてい

るらしく、目をこすりながら来た。

「どなたですか？」

長い髪をくくりもせず、しかもパジャマ姿じゃないのか、これ。

「お誕生日、おめでとう」

直人はそう言いながら微笑んだ（50%営業スマイル）。

「さ、ささ……」

「……………」

「境、直人……！」

「え、あ、うん、そうだけど」

「な、なんで？」

完全にパニックってる。どうしよう。ここは垂直に言うべきか。

「渡辺麻友……僕の、アイドルグループに入ってくれないか？」

「はい！」

返答、早っ！

「あ、そう、良かった」

ちらつと、隣の母親に視線を向ける。

母親はにこつと微笑んだ。どうやら、不安があるとか、そんなの認めたくないとかいうのはないらしい。

「あ、まあ、このまま帰るのも尺だから、とりあえず雑談する？」

「はい」

麻友と直人は向かいあって座る。どちらもソファだ。

「お茶用意してくるわね」

母親は台所へ向かった。

「えっと、今日誕生日だってプロフィールに書いてあったから、ケーキを用意したんだ。それと、誕生日プレゼントも」

そう言っ、袋に入れたネックレスを渡した。

「やびゃあ！ありがとうございます！」

「やびゃあ？」

「あ、やばいの意味です」

そうなのか。最近の女子高生たちはそのような言葉を使っている

のか……二歳ぐらいしか歳違わないのに、こんなことも知らないのか、僕は……

心の中で唸る直人だった。

しばらくして、母親がお茶を持ってきた。そこからケーキを食べる時間が始まる。

「私、凄いアニメが好きで、よくネット見てるんですよ。AKBのメンバーを応募してるっていうのもあなたの公式サイトで知って……」
「ああ、あれか」

直人は、自身の公式サイトを立ち上げている。ほぼブログなのが、公演内容とかを表示しているサイトだ。あれに、メンバーを応募していますと宣伝したんだっけ。半年間でスカウトをはじめて終わらせるつもりだったから、誰かを決めるという作業は早く終わらなかった。だから、宣伝して、一ヶ月までに応募してくださいなんて言ってしまった。だから、みんな慌てて応募してきたよ。よくそんな決心がすぐできるねと思った。

「な……境さん、えっと」

「あ、好きなように呼んでくれていいから」

「あ、そうですか。じゃあ……直人さん」

「はい」

「アニメはお好きですか？」

首を傾げながら問う直人。

「うーん、アニメは見るほうかな。よく読書するから、それがアニメ化したら見る程度」

「へえ、そうなんですか」

しばらく、麻友の話にあわしていたので、アニメの話ばかりだった。

「でも、そんなアニメばかり見ていたら、いつまでたっても好きな人ができないよ？」

「私は三次元になんて興味ありません。絶対に二次元は裏切りませんから」

「あ、そう……」

少しがつくり頂垂れる直人だった。実際、

（麻友に好きになれたら、どんなアプローチされるだろうか？）

などとはしたないことを考えていた。直人のアイドル精神はどこへやら。まあ、ほぼ関係ないんだが。

しばらく続くこと、30分。

「面白いね、麻友は」

「そうですか？」

「ああ、正直そう思う。話してて飽きないよ」

さすがにちよつと分からない話もあるが。

だけど、直人は思った。

こういう気さくで、自分の好きなものを、誰かに楽しく言う人ってというのは、チームには必要だと思うと。

第十七話 練習という名の交流（前書き）

今回は、直人の視点から離れます。
少し短いかもしれませんが。

第十七話 練習という名の交流

直人がぐるぐると頭を回転させていろいろ思い出している頃。少女たちは時折直人に質問をしながら練習していた・練習はちゃんとしているのだが、たまに会話が弾んでいく。

「さっきの自己紹介タイムであんまり自己紹介できなかったですね。私は柏木由紀です」

「よろしく。私は北原里英。よろしくね」

と、改めて自己紹介をする人たちもいれば

「へえ、そうなんだ」

「でね、佐江はそこでどばっ」と立ち向かったわけよ」

と、仲良く会話を弾ませている人たちもいる。

人はそれぞれだ。友達の作り方もそれぞれで、その人のペースというものだ。早くに仲が良くなれるなんていうポジティブで友達作りが上手い人。逆に、ゆつくりと、相手の好い所を見つけて、そして相手に見つけられて初めて仲良くなるなんて人もいる。

ちなみに直人は、前者だ。

「おう、段々歌えるようになってきた！」

優子がガッツポーズをとる。敦子はそれを隣で見ていた。

「私はまだあんまり歌えないやあ」

「じゃあナオ君にコツとか聞いてこれば？ほら、もう聞いている人いるよ」

「え？」

優子は直人がいる方向を指差した。敦子はその指先の方向をうかがう。

麻友がさっそく直人に質問をしにいつている。敦子はそれを見て「どうやったら歌を上手く歌えるのか」と聞いていると予想した。実際当たっている。

「いつまで見てんの？」

気がつくと、優子が敦子の肩を揺らした。

「別にナオ君が好きなのはいいけど、歌にも集中してね」

「…優子は冗談がおもしろいね」

「敦子、なんか怒ってない？」

同じグループの子が練習で一通り歌った。次に歌わしと敦子の手を挙げる。誰も否定はせず、敦子はラジカセの再生ボタンを押す。

（歌を上手く歌えるようになって、ソロの歌手になるんだから！）

それが、敦子の夢だった。

第十八話 練習という名の交流は過去でも続く（前書き）

今回も回想です。

長い半年間のスカウトの日々。そんな日々が始まるまえの物語です。

そして、境直人という人物がイメージできない方！

境直人の姿についてちよつと説明されますので。

第十八話 練習という名の交流は過去でも続く

世界つてのは、どんなことが起きたらひっくりかえったように感じられるんだろうか？

中学生を卒業した直人は、昔は行きたかった高校を諦め、アイドル仕事に専念することにした。そんな彼に与えられた仕事、それはアイドルグループを結成すること。

最初はすぐにできるだろうと簡単に思っていた。だけど、後から気づいた。これは、一千万人を前にして歌うということよりも辛いのだと。

アイドルグループ。それは、何人かのアイドルで構成されたグループ。直人は、恩師である秋元康の頼みを断ることはできなかった。まあなんとかなるだろう、そう思って軽々しく了承してしまった。

だけど……

「はぁ……」

直人は机に置かれた数え切れないほどの資料を見渡す。ここ一週間で応募された、AKB48のメンバーになりたいという人たちのプロフィール。

あまり応募は多くないと思っていた。だけど、違った。直人がざっと見ただけでも軽く300人分はある。ここから、48人だけを選ばなければならないのだ。直人にはとても無理に思えた。

いや、46人か。

「直人、それどうしたの？」

「僕のチームに入りたいという人たちだよ」

「ああ、たしか、アキバ48だっけ？」

「- AKB48だよ」

「ああ、ごめん……」

直人がいるのは、家のリビングだった。そして、卒業してまだ三日しかたっていない敦子と優子を招いている。

彼に、親はいない。兄弟どころか、血のつながる者もここにはいない。両親は直人が六歳の頃に死んだ。直人の目の前で。

ドライブしている日。直人には、家族の中心だった母親、優しくいつも場を和ませてくれた父親、高校生でモデルをしている姉がいた。歳の離れた弟を可愛がっていた姉の提案でドライブすることになった。だけど、交通事故が起きた。それは、交差点での出来事。信号が赤だったので父親は車を止めた。だけど、後ろからトラックが猛スピードで走ってきた。当然直人たちが乗っていた車は衝突した。母親は直人を抱えて護った。父と姉も必死に車にしがみついた。だけど、運命は直人と姉から両親を奪った。親戚も近くにはいない、かと言ってこの街から離れたくはなかった。姉は高校を中退し、仕事に集中した。おかげで不自由なく暮らせた。

だが、直人は更なる悲劇に襲われた。唯一の肉親であった姉が、殺されたのだ。モデルで人気も高かった。熱狂的なファンも少なくない。そして、ストーカーもあった。

姉のストーカーはある日の夜、姉を襲った。そのストーカーは情緒不安定だった。そのまま彼は気が狂い、姉をナイフで殺害した。

直人は悲しんだが、その分生きようと思った。そして、その日から髪を切らなかった。

一年かけて彼はアイドルとして芸能界にデビューした。すぐに絶大な人気を得た直人は、後ろで一つに束ねている長い髪が特徴的なことから『長髪の直人』と言われた。

「なんで髪伸ばしてんの？いつも気になるけど」

敦子がお茶を入れて直人に渡してくれた。敦子と優子はいつも直人の家に来て、家事をしてきている。一人暮らしである直人は悪いと思っているが、正直有難い。直人は料理は大得意だが、アイドル仕事で洗濯や家の掃除ができないのだ。敦子と優子はそれを気遣って家事をやってくれているのだ。

「微妙に伸びていったもんねえ、その後ろ髪」

優子も敦子の質問の答えに興味があるようで、そそくさと直人の

座るソファにこしかけた。優子の横で直人は何枚もの資料とにらみ合っている。

「決別したいんだ。姉に頼っていた頃の僕と」

直人は資料から目を離さず、二人に言った。少し場の雰囲気が悪くなったかもしれない。

「お姉さん、優しい人だったね」

「そうだったね。僕にとって、尊敬できる人だったよ。それに、弟の僕が言うのもなんだけれど、とても綺麗だったよ」

姉の話をするときの直人は、とても幸せそうだった。それほど、姉のことが好きだったのだろう。小学校の頃、何度かシスコンといわれたことがあったが、直人は気にしなかった。

「あ、この人可愛い！」

ふいに、優子が一枚の資料を手にとった。資料一枚につき一人のプロファイルが書かれている。左上に写真が貼られているため、どんな人が見ることができる。優子がつた資料を直人が横から覗く。

「誰？」

直人が問う。

「……篠田……麻里子……さん、だって」

篠田麻里子。もう二十歳過ぎて……まあ、顔立ちはいい。表情も明るく感じる。だけど……

「この資料だけだと、選ばれないな」

「どうして？」

「何かが足りない。実際会ってみないと」

「じゃあ会ってみたら？」

敦子が提案する。確かにそれも正論だ。

「そんな余裕はないよ。すくなくとも、七ヶ月以内には全員のレッスンを始めなければならない」

「へえ……で、何人？」

「48人だよ」

「へえ……」

優子は篠田麻里子の資料を机に置く。

「……なあ、二人とも」

直人は机から視線をはずして、敦子と優子を視た。

「アイドルになりたくないか？」

「「え？」」

二人同時に声を漏らした。

「それって……」

「AKB48に、加入してほしい」

直人は言った。それから、三十秒は沈黙が続いた。次第に、声を出したのは、敦子だった。

「いいよ、優子もいいよね？」

「うん。ナオ君の頼みなら、断れないもんね」

二人は了承してくれた。

「ありがとう、敦子、優子」

直人は微笑んだ。それは安堵からくるものというより、とてつもない安心感。チームを作り、成長させる。だけど、最初は会話をしたりすることができないかもしれない。だけど、知り合いがいたらだいぶ安心できる。直人はそう思ったのだ。

それに、直人は今日の前にいる二人は可愛いと思っている。中学校でも音楽の成績は良かった。きっと、この二人には才能があると思っただのだ。その才能を惹きだしたかった。

「じゃ、残り46人か」

直人は再び机に視線を釘付けにした。

第十九話 つかの間の会談（前書き）

今回は前話に続いて回想です。
前話よりも前の話です。

第十九話　つかの間の会談

直人と彼が作り上げるチームAKB48の物語が始まったのは、あの日なのだろう。

直人はレッスンルームを見渡す。直人が集めた少女たちが歌の練習をしている。誰も、練習をサボろうとしている者はいない。皆は自分自身の歌声をだしている。すごく高音な子もいれば、逆に低音だが、個性さをだす子もいる。

「ぼくと……彼女たちの始まり……それは……康さんとの打ち合わせ、のときだったな。ずいぶんと軽い始まり方だよな……」

だけど、あの日の記憶は、今でも昨日のことだったように、鮮明に蘇る。

○

今日のライブが終わった。直人はすぐにシャワーを浴び、その後は待合室で読書をしていた。読書をするときや、てがみを書くときは直人は眼鏡をかけている。そこまで悪いというわけではないが、眼鏡は昔から読書用として愛用していた。いまやかける理由も分からなくなってきたほどだ。

「もう今日は仕事はないですよ」

待合室にマネージャーの橘花蓮たちばなかれんが入ってきた。彼女は二十二歳にして優秀なマネージャーで、直人が絶対的信頼を置く数少ない人物でもある。

「そうですか」

「ですが、秋元康さんがお会いになりたいそうですよ」

「康さんが？」

直人は読んでいた本をテーブルに置いた。

「第一会議室でお待ちです」

「分かりました。ありがとうございます」

直人は立ち上がった。腰まで伸びる髪が揺れた。彼の身長は170?。そして一つに束ねた後ろ髪は80?弱。つまり彼の後ろ髪は身長の中の長さを誇るといふことだ。直人の特徴として取り上げられるのも分かる。彼の髪は長いし、細い。普通の男なら少し髪が跳ねるが、直人の後ろ髪は束ねても女性のようになりと伸びている。女性も男性も見惚れるほどのきれいな髪だ。

「じゃあ、今すぐ向かいます」

「分かりました」

直人は眼鏡をはずして上着の内側ポケットにしまいこんだ。

直人は待合室をでた。花蓮は待合室に残っている。第一会議室はナオとの待合室から左に向けて三つ先の部屋だ。

「失礼します」

第一会議室の前に来たナオとは、ドアを二回ノックしてから一声かけた。

ドアを開けると、机をはさんで真正面に秋元康が座っている。

「どうしたんですか、康さん?真面目な話ですか?」

「ぼくはいつも真面目だよ」

康は微笑む。直人は部屋に入ると、康の向かい側に座った。

「あなたはいつも、無茶な事を要求してくる。それも突然に」

「別にいいじゃないか。サプライズだよ」

「はあ……あなたって人は」

いつも笑えない冗談ばかりだ。

「ぼくは、君に一つ頼みがある」

「それは、すぐ終わることですか?」

「いや、すぐには終わらない。もしかしたら一生終わらないかもしれない」

「……聞きたくないですね」

直人は今日の前にいる人が、自分にとってろくでもないことを頼むと思っている。確かにそのとおりだった。だけど、直人にとって、

秋元康は恩師だ。命を救ってくれたほどの……いや、少し大袈裟かもしれない。

だが、姉を失った自分に対して手を差し伸べてくれた友人…敦子と優子。嬉しかったけど、今の世の中、金がなければ生活ができない。こんな世界は嫌いだが、存在する以上仕方がない。中学一年生に何ができるだろうか？僕はずっと悩み、悩み、悩んでいた。そんな僕は、秋葉原で、秋元康と出会った。それは、道ですれ違っただけのことだったけれど。康さんは、数秒後に僕に声をかけてきた。そして、一言、ただ一言聞いてきた。

「アイドルになりたくないか？」

それが、少年が境直人と名乗ることになるきっかけだった。その後は断る結果になってしまったけれども、また再会することになった。記憶障害で覚えていなかったんだ。

「…康さん、僕は、もう境直人なんですよね？」

「ああ、そうだよ。君が、過去にとらわれなかったために新しい名前を与えた。この僕が。君はもう、幸せのときを過ごしていたこの名前を名乗らなくていい。新しい君が生まれたんだよ」

「……分かりました。あなたの頼みごと、何ですか？」

「……君が、アイドルグループを作るんだ」

「はい？」

直人は恩師に向かって目を見開いた。

「名は、AKB48。アキバの略だよ。48人のメンバー構成で行こうと思っているからそういうネーミングにした」

「ちょ、ちょっと待ってください……僕に、一からグループを作れってことですか？」

「そうだとも。一言で言うと、君は48人の少女、あるいは女性をスカウトし、正規メンバーを構成する。その後、秋葉原を拠点とし、活動開始。拠点地に舞台を設立してそこで踊って、歌ってもらう。そのときは16人程度。観客席が埋もれば、48人でデビュー曲を披露してもらう」

「デビュー前提ですか……」

「私の眼鏡には、成功の二文字しか移らないのだよ」
言ってくれるねえ、決め台詞。

「で、その後の想像は？」

直人は聞く。

「人気があがれば、ＴＶにも出放題だよ。そして、出る人をきめなくちゃいけない。ステージに立つ者たちもだ。そのときは選挙しようと思う」

「これはまた、大胆ですね」

直人はそう言うしかなかった。

「できれば、姉妹グループも作りたい。そうだなあ、東京にあるんだったら、大阪とかがいいなあ……直人君はどう思う？」

「そうですね、名古屋とかどうですか？」

「いいねえ、それ」

康が相槌を打つ。

「色々したいことがあるんだ……そこで、君にお願いしたんだよ。AKB48を作ってほしい」

「どうして僕なんですか？あなたには他にも頼める人がいたはずですが……てかそもそも、自分で作ればいいじゃないですか」

直人が正論だ。だが、康には直人にこれをさせるちゃんとした理由がある。

「AKB48を構成するにあたって、さまざまなスタッフが専属の役職についてもらう。直人君。君には、それら役職をしきる、総合プロデューサーになってもらいたいんだよ」

「だから、どうして僕が……」

「自分では気づいてないかもしれないが、君には統率力がある。誰にも負けない、まっすぐな強き心がある。その心は類まれぬ才能だ。その才能を生かしてもらいたい」

「統率力なんて……」

そんなものあるわけがない。

「君には、責任力がある。だから、総合プロデューサーになっても
らいたい」

「……いいでしょう」

いきなりそんなこと言われても無理だと思った。だけど、断る理
由もないと思い、直人は頷いた。

「引き受けてくれると思ってたよ。だが、一つ忠告しておくよ。こ
れはとても重要な仕事だ。一からつくり、そのまま引っ張っていく
のだからね」

「……よく、分かってますとも」

直人は呟く。その後、康を見る。

「僕のライブは？」

「しばらくできないだろうねえ」

「そんなあ」

がつくりうな垂れる、直人だった。

第二十話 小さな組織

「まあ、あの日は少し慌てたが、やっぱり、これから組織を作るんだっていうワクワク感があつたんだよな」

直人は小さく呟いた。あれから半年。彼は歌うことがなかった。ステージに立つ事もなかった。

みんなが歌の練習をしているところを見ると、ステージに立って思い切り歌いたくなってくる。今はその衝動を抑えることしかできない。

「そろそろ復帰しよつかな」

そう独り言を呟きながら直人は時計を見やる。

「もう終わりときかな……」

後10分で正午をまわる。そろそろ昼飯どきにしないといけない。一応、弁当を持参してこいと言ってきたが、「持ってこれる人は」と言っていたのできつと持ってきていない人もいるだろう。

「はい！終わりにしてくれ！みんな集まって！」

全員に一声かけると、次第に聞えていた音楽が止まっていく。

数分たつて全員が集まった。直人は立ちあがる。

「今から昼食にしようと思う。弁当を持ってきていない人はいるかな？」

直人がそう聞いた丁度三秒後に、10人ほど手をあげる。

「僕は近くのコンビニに昼飯を買いに行くから、弁当を持ってない人はついてくる？」

結果的に絶対についてくることになるのだが、直人は一応聞いてみた。さきほど手を挙げたものでちで断る人はいなかった。

「じゃあ、もう弁当食べていいよ。買いに行く人は、僕から離れないでね」

別にそんな言葉は言わないでいいと思うが……言ってみたくなくなった直人であった。

レッスルームは、建設中の建物の一室だ。後にドン・キホーテと呼ばれるその建物の八階にAKB48劇場を建設中だった。直人たちがいるレッスルームはドン・キホーテの二階にある。レッスルームを出て廊下が続いている。その廊下を少し歩くと階段があるのだ。

ここ秋葉原は一通りも多い。近くのレストランに行くという方法もあるのだが、それじゃ弁当を持ってきている人たちと平等にならない。

「ナオ君、どうして弁当作ってこないの？」

「優子、それはこっちの台詞だよ」

優子も弁当を持ってきていないのは想定内だ。

「いやあさ、あっちゃんが弁当作ってくれないんだよあ」

「当たり前だろ。作ってくれる人っていたらお母さんだろ」

「まあ、そうなんだけどね」

優子はいつも陽気だった。それは直人にとっても、優子の好きな一面だ。

「ナオナオって、なんでそんなに人気なんですか？」

「ナオナオ？」

話しかけてきたのは亜樹だった。それにしても、ナオナオなんてニクネームつけられたの初めてだよ……

「人気の理由かい？なんか、自分では答えづらい質問だね……」

直人は自信家でもなければ、自分を過小評価しているわけでもない。亜紀の質問に答えるのは結構難しい。

「ナオ君は容姿がいいからじゃない？」

直人の横で優子が言った。

「そんなことないさ」

直人は少し照れながらも否定する。

「いやあ、それに、ナオ君はファンにサービス旺盛だもん」

「サービス？」

今まで聞いていただだけの宮澤佐江が声をだした。なんか、疑問系

なのに彼女からすごい元気が伝わるなあ。

「ライブ中にすべての席回ってハイタッチしたりとか…」

「時間かかりそうだね」

亜樹が感想を呟く。

「そのほかにもすごいよね。この前なんか、誰かも知らない女の子にハグしてたときもあったよ」

「こら、優子」

嘘ではないが、あの時はちゃんとした理由がある。いざ言われると恥ずかしくなってくる。

「たくよ、歌いたくなってくるからライブは禁句な」

「ええ」

亜樹がおもしろくない！と言ってきたが、直人は軽くスルーした。

「直人お、女の子無視するのは駄目だよ」

そう言ったのは佐江だった……。

「そういう君はいきなり呼び捨てか」

「私のほうが一つ年上ですけど？」

「はあ……おっしゃるとおりで」

「年上の私を敬って、佐江様と呼びましょう」

「なんで様なんだよ!？」

コンビニはまだまだ遠い。

第二十一話 コンビニに着くまでに（前書き）

レッスン編はまだまだ終わりそうにありません。

第二十一話 コンビニに着くまでに

コンビニに行くのにこんなに遠いと思ったことはない。直人はそう感じた。

女性陣のガールズトークは終わることを知らない。しかも、一步の歩幅は非常に遅く、身長が高いため歩幅が多い直人は合わせるのに苦労していた。

「でねでね…」

直人は無論男であるため、ガールズトークには入りにくい。

「ナオ君ってこの半年間出会い続きたっただよねえ」

直人の左横を歩くのは優子。優子は直人に歩幅をあわせているらしいが、実際あわしているのは直人のほうだった。

「合計48人」

直人が答える。

「ねえ、そういえばさ」

「？」

「篠田麻里子さんってあなたが自ら加入させようと決めたんだよね？」

「うん、そうだけど？」

「もともとの48人目って誰だったの？」

48人目。それは麻里子ではなく、別の誰かだった。それは確かだ。だけど……

「48人目は、もともといなかったんだよ。誰にしようか迷ってたときに、彼女と……麻里子さんと出会った」

「そうなんだ…」

優子は相槌を打つようにして納得した。

「私はそれほど綺麗に見えたってことよ」

「え？」

後ろから麻里子が話しかけてきた。そういえば、さっき後ろ歩い

てたなあ。

「麻里子さん、自分を過大評価してますね」

「ファッションには結構自信あるよ」

まあ確かに、いま来ている服もオシャレだった。直人にはあまり女性のファッションはよく分からないが、それでも可愛いと思えた。「似合ってますね。そんなにファッションセンスがあると羨ましいですね」

「あなたの服もコーデしてあげよっか？」

「お願いします」

「私をおいてかないでよお」

いつのまにか会話から外れていた優子がようやく割り込んできた。「てか、麻里子ちゃんには敬語で私にはタメ口なの！一応私も年上なんですけどお」

「優子は昔からの友達じゃないか」

「友達、ねえ……」

「なんだよ？いきなり暗い顔して」

「なんでもないよお、だ」

優子がそっぽを向く。

「もしかして、中学は先輩だった、とか思ってる？」

「……」

「いてっ！」

直人は優子のチョップをくらった。

「凶星かよ……」

「なんか言った？」

「いえ、何も」

一瞬、優子からものすごい威圧感と殺気を感じた直人はとっさに言葉を閉ざした。あそこで何か反論したら、自分が怪我をすると判断したようだ。

「そっいえば優子、今は女優の仕事してないね」

「AKBに加入するって報道されてからはみんなレッスンするだろ

うとかつて言っているんな仕事一気にやっちゃってね。それで今は仕事なし」

「へえ、優子って女優だったんだ」

「七歳の頃からセントラル子供劇団に所属してたの」

麻里子がいきなり呼び捨てになっっていることに気づいていないのか、あえてスルーしているのか、優子はそのまま喋っていた。

「十人十色、己を信じ精進せよ……確か、君の座右の銘だったよね」

「うん、高校での恩師の言葉だよ。私すっごく気に入ってるんだ」

「そうなんだ……」

そこで直人の脳内にふと一つの考えが思い当たる。

やっぱり、アイドルって、人気とかあったら、言葉の一つや二つ、いるよな？

「ねえ、みんなにキャッチフレーズを考えてもらおうと思ってるんだけど」

直人は麻里子と優子に話題を持ちかける。

「キャッチフレーズ？」

「AKBの公演にはMC……つまり、演奏の間に君たちが会話をする時間が五分ほど設けられる。そこで、自分を紹介するときにキャッチフレーズを言って紹介してもらおうと思ってるんだ。相手に印象付けるために。別に、キャッチフレーズはいらないっていう人は言わなくていいんだ。でもなるべく言っただけいいなって、思って」

「へえ」

優子より先に、麻里子が反応した。

「また後で説明しないとね」

麻里子と言った。

「その前に歌だよ」

直人は少し歩幅を緩めた。

「お、コンビ二についたな」

直人が小さく指差した。その方向の先に大きなコンビ二が見える。
「なんか長い道のりだった気がするね」

優子が言った。

「うん、そうだね……」

言いたかった事を先に優子に言われてしまった直人だった。

「そういえば私、お金持ってくんの忘れちゃった」

優子、来た意味ないじゃん。

第二十二話 今日は客が多い

直人たちはコンビニに入った。集団で入ってるためか、いつも人氣が少ないコンビニは少しにぎやかになった。

「みんな、できるだけ早くお願いな」

一言そう言った後には、みんな弁当が並ぶ棚に集まっていた。

「私これ！」

「私おそば！」

次々と商品棚から弁当が消えていく……と思いきや、みんな他の商品にも目がくらんでなかなか決められていなかった。

直人は昼飯を選ぶ前に雑誌棚の前に来た。彼はコンビニに来ては色んな雑誌を読む。ちなみに、読書が趣味で、小説も漫画も何でも読む。

ちなみに、直人が好きな漫画雑誌はジャ。プである。

直人がとったのは男性誌だった。

「うん？」

直人がとった男性誌があったすぐ横の女性誌がとられた。それに反応して直人は横にふりむいた。

いたのは、横山由依だった。

「あ、直人さんも雑誌読むほうなんですか？」

「うん、まあね。君も読むほう？」

「はい」

「そうなんだ」

彼女がとったのはどうやらファッションをテーマにした雑誌のようだ。女性誌は大体そうだと思うが。

「お昼を選びにいけないの？」

「コンビニ来たらまず読みにいくんです」

「へえ、そういえば、好きな食べ物は何に？」

「えっと……牛丼、です」

少し言つのが恥ずかしかったのか、その時だけは目を逸らしながら答えた。

「へえ、確かにおいしいよね、牛丼。女の子でも結構好きな人多いからね」

「あ、そ、そうですか？」

由依が顔を上げる。やはり、女の子が好きな食べ物とかつてあんまりどんぶり言わないからためらったんだろな……と直人が解釈した。

「あのさ、こっちに上京してこないの？ほら、京都から通うの、っらいでしょ」

直人がさつきと話題が変えた。すると、由依は快く説明してくれた。

「今、部屋を探してます。私、やっぱり京都からだと思っただから。でも、なかなか見つからないなんですよねえ……」

「そうなんだ。僕も探すよ」

直人はそう言いながら男性誌をしまい、別の雑誌をとって適当にページを開いた。そのページにはマンションの特集が載っている。

「君は、中学の頃バスケットに夢中だったんだよね？」

「はい」

由依が頷いた。彼女からは疑問の表情が浮かび上がっていた。

「僕も、バスケットに夢中だったんだ。小学校の頃も、お金はなかったけど、友達が誘ってくれたおかげで、ミニバスに参加することはできた。中学もバスケット部のキャプテンをしてたんだ」

「え？そうなんですか？」

同じ事が好きだとその相手に共感できる。直人はそれをよく知ってる。

「バスケットが好きな人に悪い人はいない。だからこそ、助けてあげなくちな」

「……ありがとうございます」

由依は一言お礼を言いながら由依は雑誌を棚にもどして直人が持

っている雑誌に目を凝らした。

「ここなんかいいと思わない？」

「予算が……」

「ああ、そうだな。生活費がいるもんね」

直人はお金の問題について考えなかった。最近、アイドル仕事を分報酬がもらえたために最近はお金について考えることはなかった。もちろん、両親を失った後の頃は稼いでくれる人が姉がいなかったため、電気を節約、水を節約、などばかり考えていた。「安くていいところって、なかなかないんだよねえ」

「そうゆうもんですよね」

「…そういえば、生活費ってどうするの？ やっぱり、実家から？」

「はい。部屋が決まったら、十分な生活費を家族からもらって。後で返そうって思ってます」

「真面目だね」

「小さい頃とかは、親孝行できませんでしたから」

それからしばらく、雑誌で良い部屋を探してみる。だけど、結局見つからなかった。

「まだ、時間はあるから。ゆっくり探そうね」

「はい」

由依は部屋が見つかるまで京都と東京を行き来するのだろう。直人はそう思った。実際、そうだ。由依は休日を東京で過ごし、平日は京都で過ごす。きつと疲れるだろう。

「あ、麻里子さん。もう買ったんですか？」

「うん、まあね」

麻里子はビニール袋を持ちながら近づいてきた。そしてファッション雑誌を取り出す。

「お昼にカレー？ レッスルームにはレンジないよ？」

「いいよ、一応今温めたから」

そういえば、好きな食べ物はカレーってプロフィールに載ってたな、といまさらながら過去をプレイバックする直人。だが、そのプ

レイバックは右耳に激痛が走ったことによって遮られた。優子が直人の耳たぶを思いっきり引っ張っていたのだ。

「はい、これだけ買って!」

うわ……おにぎり、パン、プリン、ジュース……なんか見ただけでも十個もの食品が優子の腕で抱えられていた。

そういえば、お金忘れたから僕が奢るんだった。ああ、言うんじやなかった。食いしん坊だってこと思いつき忘れてたあ……

財布の中身を見る直人。今日はあまり入れてはいない。

「はあ……ほら、自分で買つといいで」

そう言つて、直人は福沢諭吉さんを優子に渡した。

「ありがとう、いつか返すねえ」

いつかっていつだよ……

返してもらえないだろうと確信しているため直人はあえてツツコまなかった。

「はあ……」

直人は今持っている、マンションの特集が乗っている雑誌と適当にファッション誌と情報誌を一冊ずつとる。直人はよく雑誌を買う。今から買うのは、AKBについての方向性を考えるためだった。

ちなみに、直人の昼食は、メロンパン一個とスポーツドリンクのアクエリ。スである。

「もう、みんな買ったみたいだね。じゃあ、そろそろ行こうか」

直人がレジ店員から雑誌等を入れた袋を渡される。

「この女の子たち、あなたのチームの子ですか?」

店員が袋を渡す際に問う。

「まあね」

嘘をつく必要はない。デビューするまで秘密だ、なんてことはする必要がないため、直人は頷いた。

「頑張ってくださいね」

それはアイドルの直人に言ったのだろう。

「ありがとう」

だが、直人的には、AKBになる彼女たちに言ってほしかった。

第二十二話 今日は客が多い（後書き）

この小説がおもしろいと思う方は、感想をお願いします！
良ければ、でいいので。

第二十三話 昼食or昼飯

直人たちがコンビニに向かっている頃、レッスルームでは弁当を持参している少女たちが食べ始めていた。レッスルームにはいくつもの小団体が見える。今までの練習の経緯で、気が合う子でも見つけたのだろう。気が合うと大抵は仲良くなれる。だが逆に、趣味が違ったり、相性が悪いからって仲が悪くなるわけじゃない。少なくとも、敦子はそう信じていた。

敦子も三人ほど誘って一緒に昼食を食べていた。彼女の弁当には鮭味のふりかけをかけたご飯、卵焼き、ウインナー、それに小さなハンバーグとたらこスパゲティが入っている。そのほかはサラダなど、野菜を盛り付けている。

「おいしそうだね、あつちゃんのお弁当」

「そんなことないよ」

彼女の隣で峯岸みなみが敦子の弁当を覗き込んでいた。

敦子は彼女をみいちゃんと呼ぶことにした。さっきの自己紹介タイムでたかみなと対面している敦子は、同じ名前の人がいるということに二ツクネームを考えてみた。すると、みんながそう呼ぶようになった。

みいちゃんのほかに、敦子の周りには板野友美、小嶋陽菜、たかみながいる。さっき気があっていた麻里子はコンビニメンバーの一人だ。優子もコンビニに買いに行っていた。

「なんで財布忘れるかなあ？」

敦子は優子の忘れ物に気がついていて、優子のことだから、ただ単に忘れただけなのだろう。

「優子ちゃん、お金使いたくないから誰かに奢ってもらおうって考えてるんじゃない？直人君とか？」

「ありえるなあ」

ほんとにそうだったら、今頃両手にいっぱいパンとか抱えてるだ

ろうなあ。

優子の行動を予想しているうちに、敦子の弁当の中身はほとんどなくなってきた。

「あっちゃん、食べるの早いね」

友美が言った。

「暇がある時間イコール食べる。私の生活ってそんな感じだから」

敦子は言った。彼女はよく食べる性格だ。それは直人も知っている。直人が作った特製オムライスも7分で平らげたことがある。

ちなみに、優子は4分だった。決して特製オムライスの量が少なかったわけではない。

「直人君って、実際どうやって呼べばいいのかなあ？ニックネームとかあるの？」

陽菜が敦子に聞く。

「えっと、私は直人って呼び捨てで読んでるよ。優子はナオ君って読んでるし、中学校ではナオとか、なつくんとか、色んな呼び方があったよ。彼、友達も多かったから」

「へえ、そうなんだあ」

陽菜の横で友美が相槌を打つ。

みいちゃんもなるほど、と呟いている。

「じゃあ、私はなんて呼ばっかなあ」

みいちゃんのその一言で、話題は直人の呼び方へと変わった。そこまで深く考える必要はないと思うが、敦子もその話にのった。

「うーん……」

みいちゃんは深く考えていた。

「陽菜……にやんにやんは？」

「にやんにやん？」

陽菜がそう言いながら猫の手招きをする。

さつきとつさに敦子が考えたものである。

「私は……直人って呼ぶ！」

陽菜が大きな声で宣言したため、部屋にいた全員が陽菜を見た。

「あれ？ちよつとうるさかった？」

暢気だな……陽菜の傍にいる三人はそう感じた。

「もしかしてパクリ？」

敦子がイタズラっぽい微笑みで問う。

「駄目？」

陽菜は本当にパクリをするようだった。

「ともも直人かなあ」

「ええ、もちろんもお？」

敦子はそう言いながらも、友美はそれが一番良いと思っていた。友美自信、呼び捨てが一番自分らしいと感じている。

「みいちゃんは、結局どうするの？」

「やっぱり、直人君、かな？」

「結局、そうなるんだね……はい、次の話題にいこ」

と言つても、何も思いつかない敦子だった。

とそこへ、コンビニに行つていた直人たちが戻ってきた。

「ああ、戻ってきた！」

一番最初に反応したのは陽菜だった。

「もう食べ終わつてる人いるかな？後一時間ぐらい休憩とるから、みんなゆつくり体を休ましてね」

と言つても使つてたのは声だけだね……と付け加えながら直人は歩いていく。

そして午前中ずつといた鏡の前に座り込んだ。

「私もいれてえ！」

明るい声をかもし出しながら優子が敦子の隣に滑りながら近づいていく。後で麻里子もやってきた。優子の隣に麻里子が座り、少し急いでカレー弁当を取り出し、口に頬張る。

「やっぱり、カレーが一番おいしい」

麻里子が幸せそうな顔をした。その横で優子がガツガツ、パンをかじっていく。

「優子、財布持っていってないけど、そのパンどうしたの？」

「ナオ君に買ってもらった」

「最初からそのつもりだった？」

「ナオオフノホモ？」

きつと、「何の事？」と言いたかったのだろう。だけど、優子の口の中にはまだ消化してきれいていないパンがあるので上手く喋られなかったみたいだ。

悪女……今の優子にはそれがぴったり……だと敦子は一瞬思ったが、優子の表情からして本当に忘れただけなのだと感じ取ることができた。

「優子ってほんとドジなんだね」

微妙に冷めているカレーを口に運びながら、麻里子は呟いた。

第二十四話 元気のみなもと（前書き）

今回も回想が入ります。

第二十四話 元氣のみなもと

パンを豪快にかじりながら、直人は雑誌のページをめくっていた。内容は、『激安マンション！』という見出しの特集。

やはり直人には、由依の住める所を探してやりたいという気持ちがあった。

こうなったのはやはり自分がスカウトしたせいなのだから、自分が責任を持って助けなければならない。直人にはそういう想いがあった。「京都、かぁ。綺麗な都市だったなぁ」

直人は呟いた。

由依の故郷。それは京都。京都の町並みは東京と比べ物にならないほど綺麗だった。

。

横山由依。京都出身。高校三年生。そろそろ卒業式の練習を始めている頃の時期。直人は京都を訪れた。由依の暮らす街に来る前に、彼は金閣寺を見てきた。直人は金閣寺の美しさに涙が出そうだった。いや、少し大袈裟かもしれない。

「由依が住んでる家って、どこだ？」

恥ずかしいことに、直人は道に迷ってしまった。確かに近くには来ているのだが、分らない。金閣寺のことばかり考えてしまったからだろうか……

直人は辺りを見回す。だが、彼の頭の中には金閣寺が思い浮かんでいた。彼は世界遺産などに興味があるわけではない。目立つようなものが好きなのだ。金閣寺はというと、金色でピカピカ光っているから好き……というのが直人の思考内の理由だった。

「はぁ……やっぱ来たことがない地域って、よくわかんないなぁ」呟きながら、直人は地図を広げた。

地図を見ても現在地すら分からなかった。

「はあ……とりあえず、休める所を探すか……」

直人は近くに公園があるか探した。運が良かったのか、直人はすぐに公園を見つけることができた。

今日は休日だったため、人通りも少ない。戯れる子供、サッカーをする中学生、散歩をする女性と犬……様々な人たちがいる。そんな中、直人は誰も座っていない木の下ベンチに座った。

小さく深呼吸を一つ吐く。目的地がどこにあるか分からない以上、探す方法を考えるしかない。誰かに聞くのが一番の方法だが、公園が現在地なら地図で少し調べてみるのも良いだろう。

「この公園は……お、見つけたぞ」

地図を開くと、自分がいる公園がすぐに分かった。

だが、肝心の由依の家が分からなかった。

（お手上げだ……）

誰か一緒についてきてもらえば相談できたのに……と後悔する直人だったが、今更どうしようもない。

直人はとりあえず今の気を紛らわそうと、音楽再生機……別名アイポッドを取り出す。正確にはアイポッドタッチ。タッチパネル式だ。アイドルたるもの、アイポッドは欠かせない。

一応、練習するために自身の歌も入れているが、ほとんどは女性アーティストの曲だ。ちなみに直人が好きな女性アーティストは、面識があるYUIである。アルバム、シングルともにすべてアイポッドに入っている。YUIも直人のことを良く思ってくれている。

何せ、直人がAKBの前に芸能界にデビューさせた女性でもあるのだから。

「あ……」

イヤホンをつけようとしたときに地図が落ちてしまった。イヤホンを耳につけてから地図を取ろうと直人は体を屈めた。だが、地図を拾ったのは直人ではなく別の人だった。足を見てすぐに女性だと分かった。直人はすぐさま顔を上げた。

「落としましたよ？……境直人さん？」

地図を拾ってくれたのは、直人自身が探していた人物であった、横山由依だった。

「あ、えつと、やあ」

とりあえず挨拶をしながら体をベンチにもたれさせる。

「もしかして、私が採用されたんですか？…いや、そんなわけありませんよね」

由依がそう言いながら地図を直人に渡した。

「いや、僕は、君を採用したんだよ」

「え？ほんまですか？」

由依が一瞬ほころんだ。

いや、一瞬どころではない。直人の言葉を聞いてずっとほころんだ表情が続いた。

「いやあ、ちよつと道に迷っちゃつて。あははは……」

とりあえず直人は笑って誤魔化してみた。

「悪いけど、家まで案内してくれるかな？」

「あ、はい、もちろんです！」

由依は力強く頷いた。

応募のプロフィールには、保護者からの評価という項目がある。

由依のプロフィールは彼女の母親が書いたものだった。

—彼女は誰もが認める努力家です。

ただ一言だけ。評価はその一言だけだった。

それが、直人の興味を引いたのだ。

直人は立ち上がった。由依は歩みをはじめ、直人もそれに続いた。由依は散歩していたらしい。そして少し足を休めるために公園に着いた直後直人と出会った、という経緯である。

歩いて数分、由依が住まう自宅に着いた。

「ご両親は反対はしていないんだよね？」

一応、スカウトというのには両親の説得という目的もある。

「はい。それじゃあ、入ってください」

「じゃあ、失礼いたします」

玄関に入った直人は、すぐに由依の母親に出迎えられた。

「あ、あの境直人さん！？うちの娘、採用されたん。嬉しいわ！とにかく、入って」

手招きされ、直人は小さく礼をして靴を脱いだ。リビングに案内され、直人は横山親子と対面する形で椅子に座った。

直人はリビングに案内された。

「この子、すごい努力家なのよ」

「ええ、分かってますよ」

直人は娘を褒め称える母を見てほくそ微笑んだ。自分の母も、今生きていたら同じことを言ったのだろうか……

「僕は、必ず彼女を素敵なアイドルにして見せますよ」

「ほんと？約束してくれるん？」

由依の母親が問いかける。

直人は母親の隣に座る由依を見据えた。

「はい」

自分でも、この言葉には強さが感じられるはずだ、と思った。

保護者の評価で、たった一言しか書かないということは、その一言に相当自信があるということだ。

横山由依は本当に努力家なのか、本当はサボリたがり屋ではないのかと、直人は一瞬考えたが、すぐにその考えを頭からかき消した。人の言葉を簡単に信じるな、と前にある人から教わったが、直人は逆に思う。

人の言葉を簡単に疑うな、と。

第二十四話 元氣のみなもと（後書き）

いやあ、思わずAKB以外の女性アーティストの名前をだしちゃいました。一応それが直人の過去設定なので、不満がある人はどうか勘弁してください。

第二十五話 片隅の記憶

「またか……」

痛くてどうしようもない頭痛が、直人を襲った。必死に堪えたため、周りの人には頭痛のことを気づかれていない。

（どこだ、頭痛薬は……）

直人は服のポケットをあさった。左ポケットに手を入れると、直人は探していたものを見つけた。直人はポケットから取り出す。それは、錠剤が入ったビンだった。

直人は薬を三つほど取り出して口に放り込む。錠剤のため、すぐに飲み込むことができた。

「俺もそろそろ永眠かな……」

冗談めいた言葉を口ずさみながら、直人はビンを再びポケットにしまいこむ。

直人は逆の右ポケットに手を入れた。そこから取り出されたのは、黒のカラーリングが特徴の録音機だった。ちなみに、直人が自分で作り上げたものだ。機種はデジタルオーディオプレーヤー。

直人は、アイドルとしての仕事で、様々な資格を獲得しているため、色々な作業ができる。録音機を作るという作業もそのうちの一つだ。実際に今も試験を受けている。

直人はイヤホンを耳につけた。録音機で二ヶ月前の記録を再生する。

その記録は、今この部屋にいる少女たちと出会ったときの記録。

「どうしたの？」

「え？」

直人に話しかけてきたのは、柏木由紀だった。そういえば、近くで食べてたような気もする。

「録音した音を聞いているだけだよ」

「何を録音してるんですか？」

「色んなことだよ……お弁当は、もう食べたのかい？」

「はい」

「そっか。もう少し休憩していいよ。まだまだ食べてる人多いから」

「はい。ありがとうございます」

由紀はまだ直人が聞いている音が気になるようだ。

「ごめんな。この音は、人には聞かせたくないものなんだ」

「そうですかぁ。残念です……」

由紀は名残惜しそうにその場を去っていく。

でも、直人にはどうしても他人にこの録音機を使わせなくなかった。

これは、直人の生きる目的を思い出させてくれる大事なものなのだから。

――直人には、欠点が一つある。

それは、重い病気を抱えているということ。病名は不明。治療法なし。

いわゆる、不治の病というやつだ。医師は健忘の可能性が高いと言っていた。

不治の病が引き起こす症状……それは記憶障害だった。彼の病気事態が記憶障害だと断言できる医師はいなかった。脳の状態が記憶障害そのものの状態ではないというらしい。記憶障害よりもひどいらしかった。

直人は忘れないように、もしくは忘れた時に思い出せるようにと、色々な工夫をしている。録音機で録音し、こまめにメモを取り、一日の最後にはページ一枚で一日分の日記を書く。

それでも、記憶障害は悪化する一方だ。

脳の状態は悪化していく一方だった。優秀な医師は、直人にこう告げた。

—いつか、近い将来に身体が動かなくなる。手も足も。そして、視神経が悪化して目が見えなくなる。視覚の悪化だな。そして、視覚の他に、臭覚、聴覚が悪くなる。最悪だと、身体の機能はすべて低下するだろう。声も出せなくなるな、たぶん。

「今は悪いこと考えてても仕方ないよな……」

録音機をさらに巻き戻した。

（不治の病って、ほんと、漫画みたいな話だよな。身体の機能全部が停止するって、現実にはないと思ってたよ）

直人は心の中で微笑んだ。本当は怖いだけだ。強がってるだけだ。「後二十分休憩とるからねえ」

みんなに合図してから直人は身体を床に倒した。

境直人—12歳—6月10日—午前12分

時間が詳しく説明された後、数秒間イヤホンから音は聞こえない。

—ありがとう！

ただ、一言、少女が発した5文字の言葉だけが、その時間の記録だった。

たった5文字だが、直人にとっては大切な記録だった。

「はあ……休憩が終わったら、何しよ……」

やはり、計画性がない直人だった。これは決して病のせいではない。

「今日は歌のレッスンだけで終わらせようと思ったけど、大丈夫かな。レッスン終了予定は確か……何時だっけ？」

「四時だよ」

いつのまにか、直人の傍に優子がいた。独り言を聞かれたみたいだった。

「そっか。今日は早く終わるかもしれないな」

「たった一ヶ月で歌とダンスを完璧にしなきゃいけないのよ？素人の私たちが。なのに、そんな暢気がいいのお？」

「ああ、きつと大丈夫さ」

きつと……いや、たぶんかな。

第二十五話 片隅の記憶（後書き）

いやあ、すごい重い病気っていうのを説明したくて、よくわからない文章になっちゃったかもしれない。

第二十六話 テスト

休憩は終わりだ。そろそろ練習に入らないといけない。

直人は辺りを見回す。皆誰かと会話している。

「みんなあ、集まってくれ！」

元々直人の傍にいた優子は「整列！」といわんばかりに手を挙げた。

「最初に並んでたときと同じように並んでね」

見事に背の順だった。どうしたらこんな風にすぐ並べるのだろうか。

「じゃあ、今から一人ずつ歌ってもらおうと思う。簡単なテストだと思ってくれたらいい」

周囲から、というか列からどよめきの声が上がる。

あんだだけ練習したんだから大丈夫だと思うのだが……

「今回は、順番は自由にしようと思う。さあ、誰から行く？」

すぐには誰も手を挙げなかった。

まあ、当然だと思う。

「僕が決めても、いいのかな？」

きつと、少女たちはそれも嫌だろう。

一分待っても、手を挙げる者はいなかった。

直人は、自分が決めることにした。

「誰にしよっかなあ……」

直人自信、最初に歌わせるとなると、判断にこまる。正直言つて、歌の上手さには人それぞれ違いがある。ここは、とてつもなく上手い人を先に出すべきなんだろうか……

「じゃあ、一人目は、君にしよっかな」

直人は適当に指を指してみた。

「え？あたし？」

反応したのは、小嶋陽菜だった。

「ああ、君」

別に彼女を指差したわけではないのだが、直人は頷いた。直人には嘘をつくのが引けるが、仕方ないと思った。直人には迷って選べない。

「さあ、前に出て」

陽菜に直人は手招きをした。

陽菜は少し表情を曇らせたが、立ち上がって前に出た。

「カラオケだと思って歌ってみてくれ。今回は歌詞を見てもいいし、音楽もカラオケじゃないから」

「はあい」

陽菜は返事をする。スカウトした日にも思ったが、この人は天然なのだろうか……

「じゃあ、かけるよ」

直人はラジカセを少し陽菜に近づけて置いてから再生ボタンを押した。

次第に音楽が歌いだしに近づく。

「……」

陽菜が歌いだした。音程は取れている。歌としてはいいだろう。直人は最後まで歌を聞くことにした。全員の歌を最後まで聞くのは少々時間がかかるが、直人はそれでもいいと思っている。

「……ありがとう。歌い終わった人はこっちに来てくれ」

歌い終わった陽菜を列から少し離れたところに座らせる。

「次から、適当にどんどん当てていくからねえ、覚悟しとけよ」

最初からこう言えば良かったと心の内で後悔する直人だったが、もう過ぎたことだった。

「次は、君だ」

直人が指差したのは、敦子だ。

「はい、敦子だね」

選んだ人を手を引っ張ってでも前に連れ出していった。そのまま、テストは続いた。

皆、最初の時より歌は大分良くなっている。自分たちだけで練習をしていたとは思えない。

学生は、音楽の授業もあるおかげか、音程もちゃんと取れていたため、直人にとっては好評価だった。

最後は増田有華だった。

「君で最後だな」

確認してから、直人は音楽を流した。

有華が歌いだす。

（歌唱力、完璧だな）

彼女の歌声は歌手の直人自信驚くべきものだ。たかみなも良かったが、有華には少し劣る。午前に歌いだしたときとは全く上手さが違う。

直人は、ずっと有華の歌声を聞きたいと思ったが、今はテスト中であり、音楽は永遠に続くわけではない。

直人が思った一分後、有華は歌い終わり、全員のテストが終わった。

第二十七話 キャッチフレーズ

テストは終わった。実際、今日はテストで終わろうと思ったが、いくらなんでも早すぎる。

「みんな、ありがとう。ここで一旦歌の練習はやめるよ。他にやってもらいたいこともあるから」

直人にはふとひらめいたことが二つある。

「今から、自己紹介時のキャッチフレーズを考えてもらいたい」
「キャッチフレーズ？」

佐江が呟く。

「ああ。公演にはMCの時間がある。その時に、自分を自己紹介するときに、観客が心にグツとくるようなキャッチフレーズを考えてほしい。別に、言いたくないと言わなくていいって人は考えなくていいんだけど」

直人は立ち上がった。

「座って待っててくれ」

直人はそう言いながらレッスンルームの端に向かう。その先には小さな机がある。

直人はその机の引き出しを開けて、中から何かを取り出した。

それは小さな紙。その紙を何十枚と持っている。

「みんな、鉛筆は持っているよね？今から、考えたキャッチフレーズを紙に書いてもらう。書いたら、僕のところまで持ってきてほしい。いいね？」

否定するものはいなかった。

「じゃあ、配るね」

直人は一人一人に紙を配っていく。それはB4サイズの白紙を小さく切りとったものである。

「では、始めてくれ」

直人の始まりの合図と共に、皆が鉛筆を取りに行く為にレッスン

ルームを出た。

鉛筆は当然鞆に入れてある。その鞆はというと皆更衣室においてある。ということで、皆は更衣室に鉛筆を取りに行ったのだ。したがって、レスンルームにいるのは直人一人だけだった。先ほどまで可愛い少女が48人もいたのに今は男一人だ。

なんだか、寂しかった。

「こういう時に音楽はかかせないんだな」

人が誰もいないと、辺りは静かになる。そんな時、直人は必ず音楽を聴く。

直人はイヤホンを両耳につける。

流れるのは女性アーティストの曲である。実際、直人は女性アーティストの曲ばかりを聞く。

なので、Ipodに男性アーティストの曲は少ない。

「はあ……少し、音程が低いんじゃないのか、この曲は。あまり良い曲とはいきれないかもしれない」

直人は呟く。最近独り言が多くなってきたかもしれない。

「キャッチフレーズ、なんにしよっかなあ」

最初にレスンルームに戻ってきたのは由依だった。直人は喋り方ですぐ分かった。由依は京都弁だ。

「ゆっくり考えてね」

直人はそう言いながら、聴いている曲をスキップする。シャッフル再生しているので何が流れるかは分からない。

……イヤホンから聴こえるのは自分の歌だった。

「自分の曲を聴くのは性に合わないな」

直人は微かに、笑みを浮べた。

第二十七話 キャッチフレーズ（後書き）

少し短かったかもしれませんがね。

第二十八話 続・キャッチフレーズ

次第に皆がレッスンルームに戻ってきた。仲が良くなった子にどんなのがいいか聞いたりしている。

「一番最初に見せに来るのは誰かなあ」

直人は呟く。

やはり、自分のキャッチフレーズを考えると、すぐに思いつく人はいない。

直人は待つ間、ずっと音楽を聴くことにした。

……正直、暇だった。

「ううん……キャッチフレーズは難しいな」

佐江が唸る。

「やっぱ、普通じゃ駄目だよね？」

「そうだね」

佐江の質問に答えたのは優子だ。優子は優子でキャッチフレーズに悩んでいる。

「私はキャッチフレーズいらなかなあ」

「え？敦子、いらなの？」

敦子は紙を床に置いた。

「なんでなんで！」

佐江が驚いた表情を見せる。

「なんとなく、私には必要ないと思って」

敦子は言った。

「じゃあ、ナオ君に言いに行きな」

「うん、そうするね」

敦子は立ち上がって直人に近寄った。

「もう思いついたのか？」

「ううん」

敦子は首を横に振った。

「いらんのか、キャッチフレーズ？」

「うん、私はキャッチフレーズはいらないの。だから、紙返すね」

「……わかった」

直人は頷き、敦子から紙を受け取る。

「……私はどうすればいい？」

「そうだね……どうしよつか？」

「考えとかないと駄目じゃん」

「まあ、そうなんだけどね」

直人は顎に手を当て、しばらく考えるそぶりを見せた。

「そうだ。これを貸すよ」

直人が渡したのはデジタルオーディオプレイヤーだった。

「これに、YUIに歌ってもらった《桜の花びらたち》が入ってる。これを聞いて、リズムを覚えてほしい」

「わかりました」

敦子はデジタルオーディオプレイヤーを直人から受け取った。

「YUIさんと随分仲が良いよね、直人は」

「彼女は僕のおかげで今もアーティストとして生活できるからね」

「威張っちゃって。もう……」

直人は敦子の言いたいことが分かる。

きつと、私も有名人と友達になりたい、と思っているに違いない。

「凄く身近に、幼馴染の有名人がいるじゃないか」

「あなたは男でしょ。女の子で、有名人の友達がほしいのよ。というか、言葉に出してないのになぜ分かるの？」

一応、敦子はつつこむが、直人の返す言葉はいつも一緒だ。

「顔に書いてある」

本当にいつもと一緒の言葉が出てきた。

「今度YUIに会わせてやるから、さあ行った行った」

「なによそれえ……全く、これだから気分屋は……」

「それは関係ないだろ」

直人が反論する。

「音楽聴いてるんじゃないの？」

「実は音楽ストップしてる」

「詐欺ったなあ」

「なんでだよ。さあ、早くYUIの天才的な声でも聞いて来い」

「はいはい、分かりましたよ」

敦子はさつき居た場所に戻っていった。

直人は再び音楽を再生させていた。

「それ、どうしたの？」

優子が敦子の左手に包まれているものを指差した。もちろん、先程直人が渡したものである。

「直人がYUIさんの歌声を参考にしろ……だって」

「なんでYUIさんなの？」

佐江が敦子に聞いた。

「頼みやすいから……だと思っよ」

答えたのは敦子ではなく、優子だった。

「知り合いなの？」

佐江はさらに質問を投げかける。

「まあ、そんなところだよな」

「そうだね」

敦子と優子は顔を見合わせる。

「なんか私、一人だけ直人のこと知らないみたいな感じで仲間はずれっぽい……」

佐江が少し俯く。

「なんでそんなところで悲しくなっちゃうの？」

確かにその通りでもある。

「元気に行こうよ。ね、佐江」

「……そうだね」

佐江が元気よく頷く。大体、なぜあれでへこむのだろうか、優子

にはあまり理解できなかった。

「ゲンキングだね、佐江は」

優子が言った。

「ゲンキング？」

佐江が反応し、優子は説明を始めた。

「元気の王様。ゲンキのキング。略してゲンキング。これ、良いと思わない？」

優子が敦子と佐江に聞いた。

「私は良いと思うよ」

敦子が肯定の頷きを見せた。佐江はというと、しばし考え込んでいた。

「よし、決めた！」

佐江は勢いよく立ち上がった。

「何を決めたの？」

いきなり立ち上がったためか、少し注目を集めた。音楽を聴いている直人は目を瞑っていて佐江には気づかない。

「キャッチフレーズ！」

佐江はもう一度座り、紙に考えたキャッチフレーズを書きこんだ。そして、紙を持って直人のところに向かった。

「直人、起きて！」

佐江は直人の肩を叩いた。

「決まったのか。どれ、実際に言ってみてくれないか？」

直人は音楽を停止させた。

佐江は一つ咳をする。

「ゲンキングこと、宮澤佐江です」

「……シンプルで良いと思うよ、ただ……さりげなくゲンキングを説明しといたほうがいいかもね」

直人は微笑んだ。

「これで決定だ。佐江。君のキャッチフレーズは、これでいいよ」
直人は佐江の手からそつと紙を取った。

「この紙は僕が預かる。後で報告書にまとめるから」

「分かった」

「じゃあ、敦子と一緒に歌を聴いてリズムを覚えてくれ」
「りょうかい……」

佐江は敦子の元へ駆け寄った。

一人目、キャッチフレーズ決定。

第二十九話 キャッチフレーズ・開始十分後

佐江のキャッチフレーズが決まってから約10秒。

直人は、佐江のキャッチフレーズが書かれた紙を眺めていた。

「はつきり言つて、なんでもいいんだよなあ。僕が良いか判断するみたいな感じになっちゃったけど」

直人は呟く。佐江のキャッチフレーズは個性的で良いし、ゲンキングというネーミングはなかなか良いと思う。だが実際のところ、直人はどんなキャッチフレーズでも良いと言っだろう。

「次は誰だろうなあ……」

直人は辺りを見回す。次に誰が来るかは全く予想できない。だが、必ず誰かが来る。

麻友は思いつきそうで思いつかなかった。彼女はキャッチフレーズを考えることを甘く考えている。

そう大袈裟で言うことでもないが。

麻友の隣に座っているのは柏木由紀。彼女もアイデアが全く思いつかない。

さらにその隣で指原莉乃が唸っている。

3人中3人が、アイデア一つ浮べていない。

「やつぱり、印象的なのが良いよねえ」

由紀がペンを口に当てる。

「自分のニックネームを入れるとかは？例えば……まゆゆ！」

莉乃が麻友を指差した。

「まゆゆ？」

「そう。麻友ちゃんのニックネーム。良いと思わない？」

「……そうですね」

麻友は「まゆゆ」というあだ名を気に入ったのか、何度も呟いて

いた。

「まゆゆ……でキャッチフレーズか……難しいなあ」

麻友は気に入ったあだ名でキャッチフレーズを考えようと決めたらしく、紙の真ん中にまゆゆ、左端にまゆゆと書いては消してゆく。「私もなかなか思いつかないなあ……梨乃ちゃん、良い案ありませんか？」

「うーん……難しいなあ」

莉乃はしばし考え込む。

「由紀……ゆきりんだよ……ゆきりんワールドなんてどう？」

「ゆきりんワールドって……どう言っんですか？」
その通りだった。

「夢中にさせちゃうぞ！……とかは？」

「うーん……なんかイタイタしい……でも思いつかないから、そうしましょう！」

「え？ホントにそれにするんですか！？」

莉乃のツツコミを無視して由紀は紙に文章を書き出した。

「じゃあ、直人さんに見せてきます」

由紀は静かに立ち上がった。佐江の時とは違い、みんなから注目を浴びるのは一瞬だった。

佐江の時は勢いよく立ち上がったからだ。由紀はとても静かに立ち上がったため、気づいていない人さえいる。

「直人さん、どうですか？」

「言ってみて」

佐江の時と同じように促す。

「寝ても覚めてもゆきりんワールド……！夢中にさせちゃうぞ、ゆきりんこと柏木由紀です」

「……良いんじゃないかな？」

「ほんとですか！？いやあ、よかった。少しイタイタしいなあ、と思うってたんですよ」

由紀は安心したように紙を由紀に渡した。

「……これ聞いてリズム覚えてね」

「わかりました」

直人からデジタルオーディオプレーヤーを受け取った由紀は満足したように麻友たちの元へ戻っていった。

確かに、少しイタイタしかったのかもしれない。だけど、一人ぐらいいはこういうのが良いだろう。直人はそう思う、ことにしたのだった。

直人は佐江が書いた紙の上に由紀から渡された紙を重ねた。

「次は手短なキャッチフレーズが来てほしいなあ」

直人は今願うことしか出来ない……

麻友は由紀が戻ってきた瞬間に思いついた。自身のキャッチフレーズを。

「さっしー、あなたのおかげですよ！」

「え？あ、どういたしまして」

麻友は早々に直人の元へ駆け寄った。

「今度は待たずに済んだな……さあ、どうぞ」

「……言っちゃいますよあ」

麻友は相当自信があるようだった。言葉に出さなくても分かる。何せ、麻友の口元がいやらしいほどに吊り上がっているのだから。

「ーみーんなの目線を、いただきまゆゆーまゆゆこと渡辺麻友です」

「…凄くいいんじゃないかな。僕は気に入ったよ」

自信のニックネームをキャッチフレーズに入れるというのは直人にとって想定内だ。

「じゃあ、由紀と音楽を聴いてリズムを覚えてくれ」

「わかりましたあ」

麻友はそそくさと戻っていった。

「まともなキャッチフレーズだ」

直人はまた、紙に紙をかぶせた。

第三十話 手紙（前書き）

今回はいきなり回想に入ります。

ちなみに、時間的に問題に気づいたので設定を変更

メンバーの年齢は……直人の同い年である敦子を基準に考えてください。彼女が中学を卒業して半年とちよつと経った……という感じです。

第三十話 手紙

東京都出身の女の子ってのはほんと非常に有難い。他にも東京出身がいたが、その時も同じことを思った。

今日は、宮澤佐江という少女をスカウトしに来た。

直人が聞いた時点では、彼女はとても元気で明るいらしい。高校の同級生に会った時、彼女はボーイッシュキャラだと言っていた。だが、佐江には中学という言葉はあまり使わないほうが良いのかもしれない。

中学時代、佐江はバスケット部に所属していた。だが、一時期いじめにあい不登校になっていた。バスケット部の顧問でもあった恩師がいなければ、佐江はその先一生いじめに苦しみ続けていたかもしれない。

「ここか」

佐江が住む家を見つけた直人。

インターホンを押してすぐに玄関が開いた。

玄関からひよいっと顔が突き出される。

佐江だった。

直人は佐江の母が出てくると予想していたため少し驚いたが、顔には出さなかった。

「境直人です。よろしく」

直人は手を差し伸べる。無論、握手できる距離ではない。

「わぁ！もしかして、私受かった！？」

印象的な声だった。これから忘れることはないかもしれない。

直人は頭の中で冗談を呟きながら手を下ろした。

「あ、どうぞ上がってください」

佐江は玄関をさらに大きく開け、直人を家に招き入れた。

玄関に靴はない。今佐江が履いているサンダルだけだ。

「佐江ちゃん、だよね？」

「うん、そつだよお」

さつきは敬語じゃなかったつけ。

「じゃ、お邪魔します。家には誰もいないの？」

佐江以外に誰かがいるような雰囲気はなかった。

「うん、今はママ……お母さんも仕事だから」

「いつもの呼び方で大丈夫だよ」

佐江の頬が少し赤く染まった。きっと、恥ずかしいのだろう。

直人は佐江に優しく対応した。直人はとても温厚な性格だ。それは直人の身内ならば誰もが認めることだろう。直人は今まで他人に怒ったことがない。

「こつちに来て」

「ああ」

案内されたのはリビングだ。

凄く綺麗だった。家具の配置がとても良い。机に置かれたリモコンやティッシュペーパーが綺麗に固められて置かれている。

「綺麗だね」

「私が片付けたの。なんか、部屋が汚いって、凄く嫌じゃない？」

「ああ、確かにそうだ」

そう言えば、保護者の評価……綺麗好き……だったのを今更思い出した。別に悪いことではない。いや、むしろアイドルグループにはあつてほしい性格だ。

直人はソファに座った。佐江は二人分の紅茶を用意し、机に置いた後直人の左横に座った。このリビングにはソファの向かいに椅子はない。あるのはテレビだ。

「知ってるんだ、僕が紅茶が好きだったこと」

直人は紅茶をすすす。

「みんな知ってるよお。あなたのサイトでも載ってるし、この前テレビで一日に三回ぐらい飲むって言ってたじゃん」

「ああ、そういえばそうだったね」

確か、三日前に放映された番組で直人はそう言った。だが実際は撮影したのが一ヶ月も以前であるため、直人は全く覚えていなかった。

た。

「なんで私なの？」

佐江は聞きながら紅茶をすすった。

「君みたいな元気な子が、グループには必要だからだよ」

直人はゆっくり紅茶を味わった。

「それに……僕は、バスケットが好きでね。同じスポーツが好きな人がいてほしいなって……」

佐江は直人の言葉を聞いて俯いた。紅茶が入ったカップを机に置く。それに続いて直人もカップを机に置いた。

「中学の時、僕はバスケットだった。アイドルを初めて、キャプテンになっても出来ることはなかったけど、練習できる時は僕が指示を出していたんだ……だけど、僕の指示に反対して、揉めたことがあるんだ。その後、僕は一時期悪ふざけのようにちよっかいをかけた。それは、第三者から見たらいじめだったのかもしれない……だけど、僕は乗り切ることができた。大切な友人のおかげで」

直人の脳裏に、二人の少女の顔が浮かび上がった。

「君も、あの人のおかげで乗り切れたんだよね。自分自身じゃない、支えてくれる人のおかげで乗り越えたんだよね、君は」

佐江は頷く。

「僕もそうだ。やっぱり、同じ境遇の人がいるとね、傍にいてほしいうって思っちゃうんだ……一言で言ってみるよ。僕は、自分のわがままで君をAKBに入れたと思ったんだ」

直人が言い終わる頃には、佐江の頬を一筋の涙が浮かんでいた。

聞いたとおり、彼女は涙もろかった。

直人は佐江に共感していた。彼女を選んだ理由は、ただ共感したからだと思ったからなのかもしれない。

「僕には君が必要なんだよ」

直人は言った。佐江を嫌う人なんて絶対にいない、直人はそう感じていた。

涙を流す佐江の肩を、直人はそっと抱いた。抱き寄せられた佐江

は彼女の腕に頬をつけた。

「ありがとう、直人さん」

「さん付けはいいよ」

「……わかった、直人」

「……別に、慣れない泣き方はしなくていいんだよ」

「うん、そうだよね」

佐江は鼻をすすった。

「あ、でも、僕の服で涙を拭くのはちょっと……」

「……わかってるよ」

「……ただ今明らかに僕の服で拭こうとしてたよ……」

直人の静かなツツコミは声にだしていいため、佐江には聞こえなかった。

第三十一話 キャッチフレーズ・開始一時間後

キャッチフレーズ考案時間が開始されてから一時間が過ぎた。キャッチフレーズがいらないと言う敦子をふくめ、17人がキャッチフレーズを決めた。

正直、みんな良いと直人は思った。それに、直人は一時間で17人もキャッチフレーズが決まるとは思わなかった。

直人自身、印象的だったのが小嶋陽菜の「埼玉県から来ました！こじはること小嶋陽菜です」だった。別に以外だということではないが、実際に聞いてみると、シンプルすぎて逆に印象に残った。あまりアイデアが思い浮かばなかったのだろうな。

「僕もキャッチフレーズ考えてみようかな」

良い暇つぶしになるだろうと、直人は考えた。

だが、全く思いつかない。自分を紹介するための言葉を考えるだけなのに……

「僕の良いところって、なんだ？」

自分の良い所……いわゆるチャームポイントが分からない。

自分のことをアピールできない奴にキャッチフレーズはいらないか……

「あの、決まりました」

「言ってみてくれ」

キャッチフレーズを言おうとしているのは、田名部生来だ。

「熱EYEに火の用心！あなたのハートをロックみん。たなみん」と田名部生来です」

「良いね。これで決定だ。じゃ、リズム覚えてね。確か……みいちやんが一人で使ってると思うよ」

「分かりましたあ」

生来は満足したような顔つきで去っていった。

これで18人目だ。そろそろ直人は待つのに飽きていた。

生来とすれ違いに板野友美がやってきた。彼女には今時のギャルという印象があった。

「君は……知らないかな？」

「え？なんで分かったの？」

「勘だよ。はい、どうぞ」

直人はオーディオプレイヤーを渡す。

「どうも」

友美は少し早い足つきで直人を離れていく。

直人はキャッチフレーズが書かれた紙を手にとった。一枚ずつ内容を確認していく。

やはり、否定するようなキャッチフレーズはない。

「どう？調子は？」

話しかけてきたのは優子だった。

直人は耳からイヤホンを外す。

「ぼちぼちだね。まあ、そろそろみんな決めてほしいなあ」

直人はあまり待つのが得意ではない。そろそろ限界だった。

「じゃあ、私があなたについて話をしてあげるわ」

「丁度良い。今僕のキャッチフレーズを考えていたところだ」
少し前に諦めたが。

「へえ……あなたの性格って……一言で言うと、鈍感だね」

「え？」

「恋愛に関しては全然駄目だよねえ。プレイボーイっていうか、色んな子と付き合ってたのに」

「父さんの遺言だよ。色んな子と付き合って恋愛をたくさん経験しろって」

「あなたのお父さんいつも言ってたよねえ」

「第一、デートはしてたけど付き合ってたはなかったよ。付き合ってたのは今までで二人だけだ」

直人は自信ありげに言った。直人は本当のことを言っている。四年生の終わりごろに他県の子に告白されそのまま付き合い、今も一

応別れてはいない。いないが、ほぼ自然消滅みたいな感じになっている。もう一人は、中学一年の同級生。タイプの女の子で可愛く優しかった……そして何より他県のガールフレンドに似ていた、という理由で告白を断れなかったのだ。その一年後、同級生の女の子は親の転勤が都合で海外に留学した。

「なのに、鈍感なんだよねえ」

「鈍感って、どういうことなんだよ？」

「だって、大抵の人だったら、この子絶対俺のこと好きだ！って分かるようなアプローチ受けても全く好意に気づかなかったもん」

「そうだったっけ」

直人はあまり覚えていないようだった。

第三十二話 キャッチフレーズ・開始一時間十分後

確かに境直人はプレイボーイかもしれない。いや、確実にそうだけだ。それはただ、直人が気分屋なだけで……

「僕ってそんなに気分屋かなあ？」

「気分屋、マイペース、超鈍感」

「わあ凄い。僕の性格を三連発だ。どれも褒め言葉として受け入れることはできないな」

「その通り」

優子は頷いた。

「今、あの女の子とはどうなってるの？」

優子が言っているあの女の子とは他県の子のことだ。

「そういえばちゃんと別れていなかったなあ。でもなあ、捨てるには勿体無い子なんだよなあ。可愛いし、タイプだし、何より俺の理想の女性像に近い」

直人は自信ありげに答えた。

「関係を維持するの？それじゃあ新しい出会いはいつまでたってもないよお？ここには女の子が48人もいるんだよ」

「悪いけど、君たちは恋愛禁止だ」

「え？ということ？」

直人は優子の瞳を見据えた。

「康さんが考えたルールだ。恋愛禁止条例」

「何それ？」

「片思いはしていいが、両思いは駄目。それがAKBのルールの一つだ」

「ええ？？そうなの？ここには恋愛をしなきゃいけない年頃の女の子だっているのに」

「仕方ないだろ」

直人自身、恋愛禁止条例には反対だ。女の子はやっぱり恋愛すべ

きだと思っし、何より十代後半で恋愛をしていないっていうのは駄目だ。

「僕は恋愛禁止条例には反対しているよ。たぶん、他にも反対する子はいと思う」

「……かもねえ」

優子は小さな声で言った。

「決まりましたよお、直人さん」

優子と話していて、話しかけられるまで気づかなかった。

立っているのは仁藤萌乃だ。

「じゃあ、優子。ちよつと待つてね」

直人の視線は優子から萌乃に移った。

それから30分経った。

キャッチフレーズを決めていないのは後、麻里子だけだ。

「あの時はふざけすぎて近くのおじさんに怒られたじゃないか」

「ああ、そうだったよね」

直人と優子は昔話に華を咲かせていた。

内容は中学生の時の話ばかりだ。

「コスプレした僕を見たときの敦子の反応、あれは面白かった。激レアだよ」

「あっちゃん、凄い蒼白な顔してたもんね」

「ああ、そうだな」

直人が頷いた直後、麻里子がやってきた。

「君で最後だよ」

麻里子は頷くと、自身の考え出したキャッチフレーズを言い出した。

「魅惑のポーカーフェイス、篠田麻里子です」

「魅惑、か。なかなかいいんじゃないか」

「なかなかいいね……じゃないの？」

「そう言ってほしいのかい？」

「別に……どっちかっていうと言ってほしいかも」

「はいはい。じゃあ、智実が一人で聞いているから、一緒に聞いてね

……智実って誰か分かる？仲塚智実だよ」

「わかってますよお」

麻里子は辺りを見回し、智実を見つけると近寄っていった。

「そういえば、君と一緒に聞いている子は今一人なの？」

「うん、そうだけど？」

「……早く戻れ！」

「きやあ！」

一応、追い返す形となった。

第三十三話 キャッチフレーズ・終了二分後

これで全員のキャッチフレーズが決まった。

これから少しリズムを覚えてもらう時間をとろう、直人はそう想い、携帯で時間を確認した。

歌のテスト、それにキャッチフレーズを考案する時間を費やした結果、今は午後3時だ。丁度良いだろう。今から30分ほどの時間に費やして、その後は説明やらなんやらして時間をつぶすか。

「今から30分でリズムを完璧に覚えてくれ！」

皆音楽を聴いているので、直人は大きめの声で言った。

数人が頷いてくれた。あくまで数人。

「じゃ、俺も音楽聴くか」

再び直人はイヤホンを両耳につけた。左手でI podを操作して音楽を再生させる。ちなみに、直人は両利きだ。

流れたのはYUIの曲だ。

「……」

右手で携帯を手についた。待ち受け画面の写真に映っているのは直人と、同年代ぐらいの女の子だ。身長は直人の肩ぐらい、髪を一束ねにしている、優しそうな瞳だ。

その写真は、他県のガールフレンドとの写真だ。今はほとんど会っていない。

直人はもう一度左手で掴んでいるI podに視線をやる。タッチパネル式のI pod。直人はこれを常日頃持ち歩いている。最近、携帯をスマートフォンに変えようと思っている。

直人のI podのボタンを押すと、まずロック中の画面が映し出される。その画面に設定している壁紙にも、直人と女の子が映っていた。

だが、その女の子は彼のガールフレンドではない。直人が音楽界へデビューさせたYUIだ。写真は丁度その当時のもので、デビュ

ー祝いのパーティーで撮った。

ロック画面を解除させる。解除すると、ホーム画面が映し出され、そこであらゆるアプリを起動することができる。そのホーム画面の壁紙にも、写真を設定してある。中学三年生の夏に行った遊園地で優子と敦子と直人で撮った写真だ。その日、直人は敦子、優子と遊園地に行ったのだ。一日休暇があまりもらえなかった直人にとって、その日もらった休暇はとて有難かった。せつかくの休暇を無駄にするわけにはいかない。直人は敦子と優子を誘って遠くに行こうと誘い、遊園地に行くことになったのだ。その日の帰り際、最後に観覧車に乗ろうと言った。その観覧車が頂点に達した時、直人の携帯で撮った写真だ。

「僕って、そんなに女癖悪いかなあ」

直人は呟く。

「女癖が悪いんじゃないで、プレイボーイだって言いたいんだよ」
「え？」

また優子か、と直人は思った。だが、話しかけてきたのは優子ではなく、もう一人の大切な友人である、敦子だった。

「佐江と一緒に聴いてるんじゃないかったのか？」

「佐江は一人で聴いてる。ちよつと直人と話したくて」

「じゃなくて、サボりたいんだろ？」

「かもね」

敦子は微笑みながら直人の横に座った。

「あ、懐かしい写真……アプリで私の顔隠れちゃってるう！」

「まあ、仕方ないだろ」

直人はI podの画面を消した。ボタンを押すと、画面は一瞬に消える。I podをズボンのポケットにしまいこむ。直人は左腕の肘で床について寝転んだ。直人にとって、この姿勢はリラックス状態だ。

「あ、やばい。I podがつぶれそうじゃねえか」

慌ててズボンのポケットからI podを取り出して、再度肘をつ

いてリラックス。

右手で掴んだままの携帯を見た。その画面には変わらない写真が映し出されている。

「たまには会ってあげなよ。きつと寂しがってると思うよ」

敦子が言った。それに対し直人は、首を横に振った。携帯を閉じて傍の床に置く。

「今は少し時間が必要なんだ。君たちの面倒を見なければならいから、今会うことはできない。それに、会いすぎると、きつと寂しくなると思うんだ。遠距離恋愛だから、会えなくて寂しくなるのは当然のことだ。だから……」

「もういいわよ。あなた、絶対話長くなるでしょ？」

「かも……」

「……しれないってばつか言って曖昧な答えださない」

直人は返すことがなかった。最近「かもしれない」が口癖になりつつあるのかもしれない。

……また言ってしまった。

直人は時間を確認してから敦子を見据えた。

「ところでさ、覚えたの？リズム」

「ええ、もう完璧に」

敦子は自信満々のようだった。

「YUIさんの歌声はとっても綺麗だったわ。さすが、あなたの好みの女の子ね」

「何言ってるんだよ、急に」

そうは言っているが、直人は敦子の言っている意味が分かった。

つまり、直人の、女の子の好みのタイプがYUIだということだ。直人自身、否定はしていない。以前にも同じようなことを優子にも言われたが、その時も否定しなかった。

それは、自分でも認めているからだ。

「なんでそういうこと言うかなあ、君も優子も」

直人は俯きながら言った。

いや、YUIが好みのタイプだと指摘されて少し照れているだけだ。

「なあ、敦子」

「何？」

直人は顔を上げた。

「あのさ……僕はさ、いつまで生きられるんだろうな」

「え？」

「あ、いや、なんでもない。さあ、もう話は終わりだ！佐江んところ行ってこい！」

「ええ？もう終わり？もうちょっとサボりたいよ」

「何言ってるんだよ、さあ早く行った行った」

敦子を自身から遠ざけた。遠ざけたかった。

今の直人には、敦子に自身の病のことを言ったかどうか覚えていない。それどころか、彼女との記憶すら、直人は忘れかけていた。

第三十四話 最後の夏で僕は……（前書き）

今回は回想ですが、スカウトの日ではありません。

第三十四話 最後の夏で僕は……

直人はまだ中学三年生で、アイドルになって二年たってもまだ大人の世界には興味が湧かなかった。

中学校では直人はアイドルであることもあつて、皆の中心人物だった。バスケ部のエースで、アイドルでなければキャプテンとしての偉業を果たしているはずだ。

だけど、その才能も大して発揮できなかった。アイドルという職業に縛られ、自由を得られることは滅多になかった。アイドルという職業を得た代償に、自由の学校生活を失った。バスケの試合にも出られなかった。三年になって、出られたのは予選大会だけ。直人のチームは全国大会に出場したが、直人は出場することができなかった。それを悔やんでもう一ヶ月だ。もうすぐ夏休みが終わる。

「え？」

「……だから、一週間後の日曜日は一日休暇よ」

その時の直人の笑顔は、作り笑いではなく、本当の笑顔だった。両親を失ってからあまり見せなかった笑顔だった。きっと、敦子と優子でさえ見られない、いわばレアな笑顔だ。

「でも、なんで急に？」

「あなたにも、友達とゆつくりしたい日があるはずよ。だから、この日曜び、敦子ちゃんと優子ちゃんを誘って遊園地に行つてきなさい」

そう言つて直人の女性マネージャーは机に三枚の紙を置いた。

それは、遊園地のチケットだった。丁度三人分ある。

「絶対に誘いなさいよ。休暇をとるのに大変だったんだからね」

「ありがとう……詩織さん。僕と四歳しか変わらないのに、君はもう完璧な大人だよ」

「私をオバさんみたいに言わないでくれる？」

「あ……ごめんなさい」

その時のマネージャーの詩織はとても怖かったが、感謝の気持ちのほうが強かった。

○

「遊園地？」

敦子が聞き返す。

「ああ、今度の日曜日なんだけど、開いてるかな？」

「ここは中学校の教室だ。今日は皆部活でいない。もちろん、卒業生の優子もここにはいない。」

「大丈夫だけど……仕事はないの？」

「詩織さんが一日休暇をくれたんだ。いける？」

「……うん、大丈夫」

「よかった……優子も行けるって」

「そうなの」

言いながら直人は敦子にチケットを渡した。

「ホントに行ける？」

「うん、ホントに大丈夫だよ」

「そうか、ありがとう！」

せつかくの一日休暇を無駄にせずに済んだ。

「お、境くんがデートするの？」

「は？」

「おおい、あの境直人様がデートだってよお！」

「ええ！？そんなぁ……！！」

今の会話は、どうやら廊下で部活終わりのクラスメイトに聞かれていたようだった。

○

「へえ、結構いいところだねえ。賑やかだしねえ」

優子が当たりを見回した。

「まずどこから行こうか？」

直人が二人に聞いた。

「そうだねえ、やっぱり最初はジェットコースターかな？」

優子が提案し、二人はそれに賛成した。

ジェットコースターは丁度一列3人乗りだった。直人は真ん中に座り、左右に敦子と優子が座る。

「はあ……実はさ、僕って遊園地初めてなんだよなあ」

「そうなの？」

敦子が問う。それと同時にジェットコースターが動き出した。

「両親がいないのに、兄妹だけで遊園地行くか？」

「……ううん」

敦子はしばし後悔した。直人に辛い過去を思い出させてしまったと。

ジェットコースターがゆっくりと上昇してゆく。優子が下を見下ろすと、地面からは遠くかけ離れた光景が見えた。

「なあ……ジェットコースターって、怖い？」

直人が二人に聞いた。

「まあ、怖いっちゃ怖いよね。手を挙げたら相当スリルがあるよ？」

優子がそう言いながら両手を空高く挙げた。その瞬間――。

ジェットコースターが……降下していった。

当然、優子は‘相当’なスリルを味わうことになった。隣で直人は安全レバーをしっかりと両手で掴んでいる。敦子も安全レバーを掴んで……簡単に言うとはしゃいでいた。

まあ、それはいいのだが……

「うおおおお！わあああ！」

きやあ！という悲鳴だったら分かるのだが、優子の悲鳴はそんな今時の女子高生のような悲鳴ではなく、無邪気にはしゃぐ子供のよな悲鳴だった。

直人は子供のような悲鳴を傍で聴きながら、ジェットコースター

のスリルを味わった。

第三十四話 最後の夏で僕は……（後書き）

回想はまだまだ続きます。

第三十五話 一夏の思い出の中で……（前書き）

前話の回想の続きです。

第三十五話 一夏の思い出の中で……

「さあ、ジェットコースターの次は何に乗る？」

優子はもう完璧に子供だった。敦子は敦子で中学生らしくはしゃいでいた。

「お化け屋敷なんてどうだい？」

「ええ？やめようよお」

優子が即座に否定した。それを見て直人は少しからかいたくなかった。

「怖いのかい？」

「ええ。怖いよお。敦子だってそうでしょ？」

「うん……まあね」

「敦子もなのか……へえ、それが弱点なんだね。君みたいな元気な女の子にも弱点あるんだ」

直人は本当に優子が嫌がっていることに驚いた。

「どんな人にだって弱点ぐらいあるよ、ナオ君。インディ・ジョーズだってヘビが弱点でしょ？」

「君ってインディ・ジョーズ好きだっけ？」

直人が若干話を逸らした。

「とにかく行こうぜ」

「ええ……」

「でも……」

「学校の掲示板に『三年生の前田敦子と卒業生の大島優子は世界一臆病者！』なんて見出しの新聞が張られるかもよ？」

直人のその言葉が二人をお化け屋敷へと誘うことになった。はつきり言って脅しだが、今の直人はからかうことしか考えていなかった。一年後の直人と比べると、少しやんちゃな性格だった。

お化け屋敷はこの遊園地でも人気があるアトラクションだったが、今の時間帯はあまり人気が少なかった。

五分待つてから、直人たちの順番になった。

「怖がつてるの？」

「直人がイジワルだつて今更気づいた？」

「へえ、そうなんだ。そういう君は怖がりっ子？」

本当に今の直人はからかうことしか考えていない。

中に入ると、やはりそこは視界が薄暗かった。

直人の左右に敦子と優子が並んで通路を突き進む。

しばらく突き進むと、床が軋む音が響いた。少し優子が肩を震わせた。

軋む音がだんだん近くなってきた。そして……

「うわあああ！」

幽霊のコスチュームをした男が後ろから脅かしてきた。

「「きやあああああ！」」

直人の左右で二人の少女が悲鳴を上げた。優子は直人の左腕にしがみ付き、敦子は首に両腕を回してしがみついた。健全な男子中学生なら、これは喜ぶべき事態だ。何せ、簡単に言つと二人の美女に抱きつかれているのだ。直人自身、喜ばしいことだ。喜ばしいことなのだが……

「く……苦しい……」

よほど怖かつたのだろうが、直人に力強くしがみつきて、直人に被害が及んだ。

それから七分ぐらゐはその状態が保たれてしまった。おかげで直人は怖がる余裕すらない。

「早く行こう」

直人は早くお化け屋敷から出たいと願うしかなかった。

結局、直人は六回苦しみを味わうことになった。

「なんで直人、中一の時の文化祭ではあれだけ怖がつてたのに、今は怖がらないの……？」

「あの時とは状況が違うの」

敦子の言っている事、それは二年前の、中学一年時の文化祭のことだ。二年生のお化け屋敷に敦子と一緒に行った直人だったが、その時、直人は凄く怖がっていた。ただ怖かったわけじゃない。アイドルとしてデビューした直人を知らない人は学校にはいない。二年生は後輩をからかうのが好きで、仕事であまり学校に来れなくなった直人を標的にしたのだ。その結果、お化け屋敷で直人はしつこく幽霊に追い掛け回され、狭い通路を四つん這いで進む時には腕をしつこく握られた。約四人ほど。

「はつきり言つて、怖かったっていうより、辛かった」

「あ、ごめん、トラウマだったかな？」

敦子の言うとおり、直人はその日の出来事がトラウマになっていた。

ちなみに、優子は話に全くついていけなかった。

「私、何にも知らないんだけどお」

「だって、優子。その時はもう卒業生だったじゃん」

「でもいつつも会ってるじゃあん」

「まあ、いいじゃないか。次はあれに乗ろう」

適当に直人は指差した。その先には、メリーゴラールランドがある。

「あ、えつと……」

「……くすっ」

敦子が小さく微笑んだ。慌てる直人を見て可笑しかったのだ。

「……乗ろうよ、ナオ君」

「……えつと」

やられた。お化け屋敷の仕返しだな……チキショウ。

「いいよ、乗ってやるよ」

直人はちよつと強気だった。実際、彼は負けず嫌いだ。こんなことでただし返しされるのは性に合わない。

直人たちはすぐさまメリーゴラールランドに乗った。直人は恥ずかしさを隠すのに必死だった。

メリーゴーランドが発車したようだ。直人の乗る馬が徐々に動いていく。

「どう、ナオ君？すごく楽しそうね」

「ああ、そうみたいだな」

……完全に優子の口元が吊り上っていた。悪魔みたいに。

第三十六話 三度の飯の二度目の飯で…（前書き）

回想の半分ぐらいが過ぎました

第三十六話 三度の飯の二度目の飯で…

「そろそろご飯にしない？」

敦子が提案した。その隣で直人はうかない顔をしている。メリーゴーランドでのことが原因だ。どうやら、彼がアイドル境直人であることに気がついた客たちが、メリーゴーランドに乗っている所を写真に撮ったのだ。きっと明日にでもなったらネットで話題になるだろう。もしかしたらブログのコメントに写真が載るのかもしれない。敦子が優子が映っていたらきっと交際疑惑をかけられてしまう。「いいねえ、私すつごくおなかすいたあ」

優子がおなかに手をおいた。彼女の食べる量は決して少なくはない。だが、敦子も決して引けを取らない。敦子は暇があれば食べるなんて言っているほどの食いしん坊だ。この二人を一度におこると言ってレストランにでも連れて行けば財布の中身はほぼ空になってしまう。

直人は財布の中身を確認した。入っているのは二万円だ。直人は人気絶頂のアイドルで、給料が非常に高い。それに加え、色々な人から同情されて晩飯代をくれるなんてこともあった。

「どこが良い？」

直人が聞いた。この遊園地には様々なレストランがある。

ピザの専門店なり、バイキングなりと、エリアの各地に散らばっている。

「そうだねえ、あっちゃんは？」

「迷うなあ」

二人とも迷っていた。

「あれ？優子、さつきは敦子って呼んでたのに、今はあっちゃんって呼んでるね」

直人が言った。それに対して優子は「ああ……確かにそうだね」と相槌を打った。

「なんかね、呼び方なんてどうでもいいんだよね」

「それってちよつと敦子に失礼なんじゃないのか？」

「そう？」

優子が敦子を見た。

「……えつと……分かりにくいから、あっちゃんていいよ。直人も……」

「いや、僕は敦子のみまでいいよ」

敦子の言葉を途中で遮って直人は言った。

今更呼び方なんて変えたくない、直人は思っていた。

「ナオ君はどこがいいの？」

「僕は……なんでもいいかな？」

実際、直人にはオムライスが食べたいという希望があるが、目の前にいる二人の希望を尊重したかった。

「優子は何が食べたいの？」

直人は自分から話を逸らすために優子に問うた。

「私はねえ、お肉をガツツリと食べたい！」

「はは、優子らしいなあ」

直人は笑った。

「でも、焼肉はここでは食べれないよ」

「じゃあ、スィーツ男子さん？お肉がある場所を教えてください！」

肉に決まりかよ。

「スィーツ男子に肉のこと聞くなよ……そうだなあ」

直人は遊園地の地図を開いた。

「一番近いところは、バイキングだね」

「じゃあ、そこにしよう。あっちゃんもそれでいい？」

「うん、いいよ。バイキングは色々あるしね」

バイキングに決定した。直人は地図を敦子に渡した。敦子は自分の鞆に地図を入れた。

「さあ、いこうか」

3人はバイキングの店に向かった。

ちなみに、直人の好物は、林檎とスイーツだ。スイーツが好きなのは小学生の頃からで、特別にタダで通うことが出来たミニバスケットでは昼飯に必ずスイーツを持ち込んだり、食べ物で最優先するものはスイーツ、と主張したことからスイーツ男子というニックネームがついた。その頃は、タダでスイーツをおごってもらうために試合に出て20点決めると宣言したものだ。顧問がそのことを面白がって認め、その顧問はスイーツを10個以上奢ると言った。

そして、試合に出て彼は30点以上決めた。一緒に出ていた正規メンバーはあまりシュートをする機会がなかったうえに、レンタル部員として試合に出た直人が大活躍したのだから嫉妬する者もいたが、やはりみんなは直人を褒め称えた。

ちなみに、奢ってもらったスイーツは30個は越している。

「さあ、ついたよ」

バイキング店についた。そこは、一人1200円で1時間半食べ放題という店だ。結構人気があるらしく、5分並ぶことになった。

店に入ってまずお金を支払ってから食べ放題の始まり。直人たちが3人は入り口のドアから一番遠い奥の席に座った。その席は窓に一番近く、何人かの女性が少し直人を見て2、3度振り向いた。きくと、直人がかの大人気アイドルだと気づいたのだろう。

「さきに取って来なよ」

直人が椅子に座った。椅子といってもソファ式で、直人は横にもたれかかったため奥、つまり窓際に座った。優子と敦子はトレイに皿を乗せて、なにやら肉料理のほうに向かった。

そんなに食べたかったのか……

「ふう……」

直人はズボンの後ろポケットから録音機を取り出した。ジーンズだったので少し取りにくかった。

録音機は、遊園地に来る前から録音モードにしている。今までの音をずっと録音していたのだ。さすがにジェットコースターの時は録音機を持っていくことはできなかったが。

直人のマネージャー詩織がこの時期に一日休暇を与えたのにはもう一つ理由がある。

それは、記憶障害が酷くなっていることだった。もしかしたら、敦子と優子のことも忘れてしまうのかもしれない。

忘れるのならいつそその前に、直人を支えてくれたこの二人と思いい出を作ろうと、詩織は思ったのだ。彼女は直人にとっても優しい。詩織なりの、最高の配慮だ。

「ありがとう、詩織さん……」

直人は、自分でさえもあまり聴こえないぐらいの小さな声で呟いた。

その直後、敦子と優子が戻ってきた。

「はい、直人の分。優子と一緒に取って来たよ」

「ああ、ありがとう……って、スイーツは？」

「たまにはサラダも食べなさい。野菜嫌いは駄目だよ」

「僕が嫌いなのは寿司と納豆だ」

直人は言いながらも、敦子からサラダの入った皿を受け取る。

「次は自分で取りに行くよ」

テーブルの端に置かれた箱の中からフォークを取り出し、サラダのとっぺんらしきところのキャベツを刺した。そして素早く口に放り込んだ。

「……ドレッシングは苦手だな」

「ナオ君、好き嫌いが激しいんだよ。それじゃグルメリポーターにはなれないよ？」

「なりたくないよ」

第三十七話 青春のページは続く…（前書き）

遊園地回想編、午後にさしかかりましたね。

第三十七話 青春のページは続く…

直人はサラダを口にほうばった。

「しかし以外だよねえ。直人が野菜嫌いだなんて」

「この15年間で優子からその言葉を聞いたのは35回目だよ」

「え？私そんなに言ってるの？てかずつと数えてたの？」

「……まあ、そんなとこかな」

実際、最近の日の録音を聞いていたらたまにまた分かったただけだ。

「スイーツだけ食べようと考えてたでしょ？」

敦子が直人の顔を覗き込んだ。まさに凶星と言った表情である。

「まあ、いいじゃないか」

直人は早々にサラダを食べ終えた。

「てことで次は自分でとりに行ってくるよ」

携帯と財布を机に置いて……若干スイーツがある方向に向かった。数分してから直人が戻ってきた頃には、二つの皿の3分の2をスイーツが占めていた。

「3度の飯よりスイーツ、だな」

直人が言いながら少ない量の炒飯を口にほうばっていく。

炒飯の近くにウインナーが3つある。後はスイーツだけだ。会わない献立だ。

炒飯をたいらげ、次にウインナーをすべて食べると、待ち遠しかったように直人はスイーツにフォークを差し伸べた。

まずは少し小さめのチーズケーキ。直人の口の中に行くのになったの2口だった。

「ああ、おいしかった！ねえあつちゃん？」

「うん、久しぶりにいっぱい食べたよお」

「いっつもいっぱい食べてるじゃん」

「あはははは、そうだったね」

楽しそうに会話する優子と敦子の後ろでずっと直人は微笑んでいた。直人曰く、「スイーツは一ヶ月ぶり」だったらしい。久しぶりに食べたから直人は凄く幸せだった。傍にいた優子と敦子の覚えでは、20個以上は食べていたが、

「まだ食い足りないなあ」

直人は呟いた。敦子よりも食いしん坊ではないのだろうか。

「食べた後だから、コーヒーカップに乗らない？」

敦子がアトラクションのコーヒーカップを指差した。直人たちと同じ理由で乗っている家族やカップルが多数だ。

「そうだね、行こう」

直人と優子も賛成し、3人はコーヒーカップに乗った。ただ大きなコーヒーカップに乗るだけのこのアトラクションだけど、カップルには大人気の場所だ。だけど、子供にはあまり受けない。

直人もあまり好きではなかったが、2人が楽しそうだったので良いと思った。

コーヒーカップを乗り終えた後は、近くのリターンコに乗ることにした。これは人が多かったため、1人乗るのに6分ほどかった。

最初に敦子、次に優子、最後に直人の順でリターンコに乗った。敦子は少し怖がっていたようだったが、優子ははしゃぎまくりだと言っているほど叫んでいた。

ちなみに直人は、恐れず、逆に叫ばずに終わるのを待っていた。なぜなら、スイーツの食べすぎで嘔吐しそうになったからだ。

「気持ち悪い……」

リターンコから降りてすぐ直人はうずくまっていた。

「あんなに食べるからだよね」

敦子が直人の背中をさすった。

「ああ、大分よくなったかも」

直人は上体を起こした。

「敦子のおかげだよ」

「どういたしまして」

「ねえ、私は？」

優子が自分を指した。

「君は……何かした？」

「イジワルウ」

「はいはい。次行こうか」

直人は辺りを見回す。優子はうううと唸りながらも次に乗るアトラクションを探した。敦子も探す。

「あ、これがいいなあ……クレージ・ヒュー・ストーンか」

それは60メートルのツインタワーを急上昇したり急降下するアトラクションだ。

このアトラクションはすぐ乗ることが出来た。直人を真ん中に挟んで敦子と優子が席に座る。

「幽霊屋敷の時みたいに腕にしがみ付かないでくれよ。あの時めっちゃ苦しかったんだぜ」

「悪かったね」

優子が皮肉めいた口調で言った。それと同時に、身体が浮いた。直人たちの座る椅子がゆっくり上昇してゆくのだ。次第にタワーの頂上に到達すると、椅子が止まった。三秒間そのままだった。三秒後、椅子は急降下を始めた。何の予告もなく。

「きやああああ！」

さすがの優子も雄叫びのような悲鳴は出さなかった。

「うお！」

直人も少しびっくりして小さな悲鳴を上げた。その悲鳴はほんの一瞬であつたため、左右の少女は気づいていない。

一瞬の急降下は1分あつたように感じられた。けどそのスリルはまだ終わらない。急に椅子が止まったがまた急上昇していった。急上昇が終わった後はゆっくり降下しただけだった。それで終了ということだ。

「おもしろかったね」

直人が2人に言った。当の2人はセットした髪が少しぐちゃぐちゃになったらしく、手鏡で顔を見て髪を直していた。

「そんなに髪気になるかい？」

「そういうあなたも今日ワックスかけてるでしょ？」

「まあね」

直人は微笑んだ。

第三十八話 最後の夕陽になっても…（前書き）

遊園地回想編、ラストです。

第三十八話 最後の夕陽になっても…

「そろそろ終わり時だなあ」

「ええーやだあ」

優子が駄々をこねるように直人の肩を揺すった。

「仕方ないだろ、なあ敦子」

「まあ、時間は止まってくれないからな」

敦子の言うとおりだ。時間は待ってくれない。

残り少ない命のタイムリミットも止まってはくれない。

「やっぱり思い出の最後を飾るのは……」

直人は言いながら観覧車を指差した。

「分かってるねえ、ナオ君は」

優子が肘でつついた。優子が言いたいのは、彼がデートの経験から言えるという事だ。

他県……言ってしまうと千葉だが、そこに住んでいる彼女と遊園地に行ったことがある。丁度、今いる遊園地に。

だが、直人はあまりその時の記憶がなかった。記憶障害のせいだ。

彼の脳は、次々と幸せの記憶を消滅させていく。

千葉県彼女は第一印象で言うと、目元が女優の夏帆に似ているということだった。本人はあまり自覚していないようだったが。

「ななは今頃どうしてるんだろうな……」

ナオトは呟いた。

「へえ、平仮名で『なな』かあ。」

「うん、死んだおばあちゃんが名付け親なの。」

微かだけ覚えていた片隅の記憶。それはどうでもいいような記憶の一部であり、何よりも大切な心の一部だ。

「ありがとう！」

録音した記憶で、彼が一番大切としている記録。たった5文字の記録。それは、ななと会えなくなる…… デビュー当初かその前ぐ

らいに録った。歩いていると直人はななを見つけた。彼女はハイヒールが折れて歩けなさそうだったから肩を貸してやった。その拍子に録音機が録音モードに入り、彼女の言葉が録音された。

偶然生まれた、かけがえのないもの。それが、このときの録音だった。

「結構並んでるみたいだよ」

敦子が指差したのは観覧車の下。三列ぐらい並んでいる。

「気長に待とうじゃないか。さあ、行こう」

2人の手をとって直人は歩き出した。

列は丁度最後尾で並ぶことができた。係員の話によると、観覧車は30分待ちだった。

直人は録音機の電源をオフにした。少し休まさないといけない。

もし2人と会話を交わして、何か重要な内容になった場合はまた電源をつけなくてはならない。そうしないですむように、直人は音楽を聴くことにした。優子と敦子はガールズトークで直人に話しかける素振りはない。彼が音楽を聴いているせいもある。

30分なんてあつという間だった。直人は音楽に夢中になりすぎていることもあつて30分経ったことに肩を揺さぶられるまで気づかなかった。

直人がすわり、その正面に敦子と優子が椅子に座ることになった。直人は両耳からイヤホンを取って、再び録音機を再生した。観覧車ってというのはどの漫画でも告白並の重要な話があるはずだ。

「もう中学校生活終わりだね」

敦子が名残惜しそうにいった。

「私は新たな学校生活を踏み出しますけど」

その隣で優子がくすくすと笑った。

「なあ、この観覧車が、回り続けて……僕たちが今乗っているこの部屋がてっぺんに到達したのと同時に、写真をとろう」

直人がズボンのふとも部分にあるポケットから何かを取り出した。それはデジタルカメラだった。しかも超小型。

「そんなのずっと持ってたんだ。気がつかなかったなあ」

優子が言った。しばらくすると、もうすぐ頂上の位置になるとこまで来た。

「早くこっちに座りなよ」

「そう急かすなよ」

敦子と優子の間、いわば真ん中に直人が座り込んだ。重さで少し傾いた。

「行くよお」

後10秒だろうか、てっぺんに到達するのは……

「はい、チーズ……」

3人がポーズを取りながら直人が右手でシャッターを押す。その時に、夕陽が昇った。

「どれどれ、見てみようじゃないか」

その写真はとても良い出来だった。たいしたブレもなく、何よりバックが良い。夕陽が昇るのは直人の計算になかったが、偶然といえどとても良かった。

「また、来れる日があったら行こうよ。3人で、遊園地に」

直人が優子の顔を伺った。優子は微笑んだ。

次に敦子の顔を覗き込む。敦子は小さく頷いた。

「私たちの、約束だよ！」

このとき、2人の少女は直人の病を深くは知らなかった。

直人にとって、これは最後の夏になったのかもしれない。だけど、彼は信じていた。また、この2人と同じように夏を迎えられることを。

第三十九話 一日目練習の最後に

直人は、一年前の夏のことだけは鮮明に思い出す自信があった。あの日は彼にとって最高の思い出だったからだ。

「……なな」

直人の恋人であるななからメールが届いた。携帯から流れる着信音はYUIの to Mother だ。

YUIは直人に絶対的な信頼を置いている。だから、桜の花びらたち も歌ってくれた。

―その女の子たちのためにも、あなたのためにも、私は歌うよ。

YUIはそう言って引き受けてくれた。

直人もYUIを信頼している。まるで、家族のように。

「……なな、やっぱり僕は、君が好きだ」

直人は呟いた。

【最近会っていないなあ、私すごく寂しいよ。でも仕方ないよね。アイドルをデビューさせるなんてもう二回目だからへっちゃらだよね！お仕事頑張って！あ、それと、私に電話してきてくれるのはいつかかな？女の子を待たせるのはいけないよ？】

それが、ななのメール内容だった。少し長かったが、内容が大事だ。最近直人はななの事をあまり気にしなくなってきた。このままメールのやり取りを終えたら関係は終わるんじゃないかと。自然消滅という形でもう彼女とは会わないようにしようと。そう思っていた。

だけど、やっぱり僕には無理だ。僕はやっぱり、ななの事が大好きだ。大好きで、仕方がない。

直人はそう気づいた。

直人はすぐに返信した。

【ごめんな。一旦落ち着いたら、会いに行くよ。その時に、僕は君に最高の日をプレゼントする】

少し変かなとも思ったけれども、返信ボタンを押した。

なの返信がくるのに時間はかからなかった。いや、1分も経っていないかもしれない。

「ほんとにいい？じゃあ楽しみにしてるよ。出来るだけ早く会いにきてね。ナアオ」

なのメールを見て、直人はほくそ微笑んだ。これは、返信しなくていいだろうと直人は思った。そこへ、1人の少女が顔を覗かせてきた。

「佐江、敦子が戻ってこなかったのか？」

「イヤホンの調子がなんか悪いんだよねえ」

そう言いながら佐江はイヤホンを直人に渡しながらメールを見ようとしていた。

「彼女から？」

「君には関係ないさ」

「ねえ、どんな子どんな子？可愛い？」

「恋人がいない君には関係ないさ」

佐江のおでこを人差し指で押した。だが彼女は逆にどんどん近づいてきた。

「ねえ、いいじゃんか、教えてくれるくらい」

「分かったから顔近づけるなよ、吐息が熱いから」

そっち？とツツコミながら佐江は直人から離れ、横に座りなおした。

「この子だよ」

直人はなの写真を見せた。

「うわ！すっごく可愛い！なんでこの子をAKBに入れなかったの？」

「彼女には、夢があるんだよ。パティシエになるっていう夢が。今も専門学校に入れるように勉強中だ」

「そうなんだあ」

佐江は写真を見続けた。

「どんな子なの？」

「凄く優しいよ。それに明るくて、僕に積極的だった。君と比べたら天と地だね」

「うわぁ！ひつど！直人その子にベタ惚れじゃん」

「違うよ、彼女が僕にベタ惚れなんだよ」

「大した自信だね。そんなのどっから湧き上がってくるの？」

佐江は聞いた。それに対して直人は再度微笑んだ。

「そりゃあ当然、僕の心からさ」

直人は携帯の画面部分を閉じた。

第四十話 終了の合図

直人は携帯を閉じた。その瞬間、外側の小さな画面に時刻が表示される。

今は午後4時だった。一日目のレッスンはこれからへんで終わりにしとこうと、直人は佐江に言った。

「みんな、聞いてくれ！今日のレッスンはこれで終わりにするから、支度が出来たら適当に帰って言うてくれ」

直人が立ち上がった。

「後、オーディオ返して」

少女達は次々と直人にオーディオを返していくなり、更衣室に向かった。

佐江も立ち上がって更衣室に向かった。

再度、直人はレッスンルームに一人取り残された。いや、少し表現が悪いかもしれないが。

だが、直人はすぐに他人と会話することになった。

レッスンルームに、直人の恩師である秋元康が入ってきた。

「どうだい、調子は？」

「どうも何も、全く僕はおかしくなったみたいです。急がないといけないのにこんな時間でもうレッスンを終了させてしまっている。

しかも今日のレッスン内容は中学校に入学したばかりの一年生たちの授業風景みたいでしたよ」

もちろん、その授業は音楽だ。

「きつと、最初の公演には誰もこないさ」

「そうかもしれません。ですけど、僕は絶対に、5人は観客席に座らしてやりますよ」

直人は自信の笑みを浮かべた。

その笑みの意味を悟ったのか、康は問いただした。

「君に自信はあっても、彼女たちには不安しかないぞ？どうやって、

あの観客席を満員にする気なんだ？250人は必要だよ？」

「そんなの……後になってみないと思いつきませんよ」

直人はその場に胡坐をかいて座りなおした。

「チッ……」

直人は舌打ちをした。さっき言った自分の台詞に意味などない。

康の言葉に負けたくなかったただけだ。

「また発狂したいのか？君は？」

「黙れよ、おっさん」

「もうしているのか？」

「いや、今の演技です。すいません……」

康の声に圧倒されて、直人は慌てて謝った。

やっぱり、境直人は秋元康には勝てない。

「さて、僕も帰らせていただきます」

「そのまま帰るのか？」

「僕の手荷物はすべてポケットの中に」

ポケットをつまみ上げ、康にジェスチャーした。彼の所有物は、

携帯とIpodだけだ。デジタルオーディオプレーヤーは秋元康が

用意したもので、ここへ来たのもそれを回収しに来たからだ。

「では、失礼いたします」

小さく礼をしてレッスンルームを出て行こうとする。

「待て」

ドアノブに手をかけたところで、直人は歩みをとめた。

「君は、死ぬ前に何をしたい？」

「……」

直人の瞳が一瞬、輝きを失ったかに思えた。

そのとき、脳裏に浮かんだのは、ななとYUI、敦子と優子、そして……自分をずっと護ってくれていた姉の顔だった。

「……大切な人が、幸せに笑っているところを見たら、未練はないですかね」

「ついこの間、未練があるから未練はないと言っていなかったかい

？」

「ええ、そうですね」

直人は顔だけを康に向けた。

背を向けていた康も顔だけをこちらに向けた。

「君は、また逃げる気か？」

その康の言葉に対して、直人はふっと笑った。

「逃げない僕には、非常口は必要ありません」

いつものきめ台詞（その一）を言って、レッスンルームを後にした。

廊下に足を踏み入れ、ドアを閉めてから直人はうつむいた。

「人の決め台詞、勝手にアレンジしちゃった……」

ドン・キホーテを出ると、近くにAKBのメンバーが何人が歩いていた。

いや、まだメンバーと決まったわけではない。

「あ、ナオティ」

「え？あ、明日香」

変な呼び方をされて直人は少し戸惑った。ナオティと呼んだのは倉持明日香だった。確か、彼女は人に奇妙なニックネームをつける。

「明日はダンスレッスンだから、体を休ませてきてね」

「はあい、じゃあまた明日。さようなら」

「じゃあね」

明日香はとても温厚な性格だ。直人に対しても敬語でしゃべる。

直人のほうが二歳ほど年下だというのに。

「あ、明日香」

「はい？」

「敬語は使わないでくれるかな？僕のほうが年下だし、これから僕たちは仲良くなれないといけない。敬語じゃ仲良くしろなんて言われても無理だろ？」

「……はい、わかったよ」

直人が微笑むと、明日香は微笑み返して駅へ向かっていった。

「優しい人。あんな人ばかりなの？AKBは？」

気がつくのと、隣に敦子がいた。逆の隣には優子が立っている。

「あなたにはななちゃんがいるでしょ？」

「僕が浮気するっていうのか？」

直人は軽く冗談を口走りながら、駐車場へと向かった。敦子と優子も続く。

駐車場につくと、直人は黒と青のコンセプトカラーが特徴的なバイクのハンドルに触れた。

彼は、中学卒業時にバイクの免許を取った。一人暮らしなのだし、移動手段は必要だ。

彼のバイクはオートバイクなのではない。サーキットに出場してそうな立派なスポーツバイク。

バイクのハンドルに吊るされていたヘルメットをかぶり、直人はバイクに跨った。

「どっちか一人なら、乗せてってあげれるけど？」

「意地悪だなあ、ナオ君は……大丈夫。私たちは電車で帰るから」
「そうか。じゃあ、また明日な」

直人は軽く指を振ると、バイクのエンジンを唸らせた。

彼はレースに出場したいと少々思っている。なぜなら、バイクの運転の腕前に自信があるからだ。

直人が乗るバイクは、騒音を出しながら、秋葉原の大通りを走っていた。

第四十一話 二日目

二日目。今はあ……午後の一時を過ぎた頃だ。

二日目はダンスを中心としたレッスンだ。いや、正確に言うとダンスレッスンだけだ。

「たかみな、キレがあっていいねえ」

「ホントですか！？いやあ、嬉しいなあ」

直人に褒められて照れているのか、たかみなは口元を両手で隠すような仕草をとった。

「夏海、腕をもつとこうして」

「えっと、こう？」

直人は一人一人を褒め、アドバイスした。皆が皆、直人のアドバイスに従ってダンスのレッスンをしていた。

ちなみに、直人は人を名字で呼ぶのを嫌う。当人は、「名前で呼んだら親近感が湧く」と言っている。だが、敦子と優子は「名字で呼ぶと周りの人が遠い存在だって思っただろう」と解釈している。

「とも、もうちょっと大袈裟に動いてみて」

「これでどう？」

「ああ、いいと思うよ」

名前がメンバーと重なっていると、ニックネームや名字で呼ぶ。それは仕方がないことなのだろう。

幼い頃からダンスを経験してきた子もいれば、全く経験のない素人もいる。今の時点で差がついていたとしても、ステージに立つ時には、皆がダンスのプロになっていなければいけない。

そのためには、48人をデビューさせなければいけない直人自身にも責任がある。

「さあ、全員で合わせるぞあ。適当に並んでくれ。さあ、早く！」

48人が適当に並んでいく。また背の順なのは気のせいなのだろうか。

「さあ、かけるよ」

もう馴染みになりつつあるラジカセの再生ボタンを押した。彼女たちが練習していたのは 桜の花びらたち ではない。デビューした時にシングルとして出すつもり of スカート、ひらり だ。

デビューすると決まったわけではないが、直人には絶対的な自信があった。それは、YUIをデビューさせることが出来た過去から来ているのかもしれないし、目の前で踊っている少女たちを見てなのかもしれない。だけど、これだけは確実だ。

デビューはまだ程遠い。

今だって、直人が実際に見本として踊っていないと、彼女たちも通して踊れないからだ。

こっちは今日徹夜で様々なダンスを完璧に覚えたのに、スカウトして集めた女の子たちはまだ完璧に出来ないのか——と直人は思っていた。

今日はジーパンを履いていなくてよかったよ。結構汗かているからな。

「オッケー。休憩してくれ」

体力に自身がある直人はまだ息を切らしていない。

携帯と一緒にあるスポーツドリンクを手にとった直人はがぶがぶと飲んだ。

500mlのスポーツドリンクはあっという間に空になった。

「ああ、そういえば、あれをみんなに言わなきゃな」

直人はI podを取り出した。メモアプリを起動し、三日前の記録を表示する。

「みんな、ちよつと集まってくれ」

直人が召集をかけ、皆が集まってきた。

「これから、君たちを三つのチームに分ける」

並んだ少女たちを見て直人が言った。

「チームA、チームK、チームB。それが、三つのチーム名だ。あの舞台で毎日48人が歌うのは無理がある。だから、チームに分け

て、日によってチーム公演を行えるようにしたい。そのために、チーム分けを試してみた。別に、違うチームだからって…そんな会えなくなるわけじゃないからね」

直人はメモを見た。

「まず、チームAから発表するよ。チームAのキャプテンに、高橋みなみ」

「え？」

いかにもたかみなの上にクエスチョンマークが浮かびあがりそんな表情だった。

だが直人は、たかみなに説明せず説明を続けた。

「……………前田敦子、前田亜美、前原夏海。以上16名がチームAだ。チームAはあつちに集まってくれ」

直人が指差したのは部屋の東方向の端だった。

移動する敦子や麻里子たちを見て、直人はチームKの説明を始めた。

「キャプテンに秋元才加。メンバーは彼女を含め、板野友美、内田眞由美……………横山由依、米沢留美の16名だよ。チームKはこつちに集まって」

指差すのは東の反対、西側だ。

「チームBキャプテンは柏木由紀だよ。で、石田晴香……………宮崎美穂、渡辺麻友の16名だ。君たちは、もうそこで集まってくれ」

少し面倒くさくなってしまった直人は、もう考えるのが嫌になってきた。

「後、AKBの総合キャプテンに、高橋みなみを推薦する」

「え？」

その時の声は、たかみな一人だけではなかった。もちろん、スカウトされた日にキャプテンになってほしいと頼まれていたたかみなは驚いているわけではなかった。

第四十二話 キャプテン

直人は一度たかみなの表情を伺った。彼女は困惑したような顔をしていた。

「今から、メンバー内で色々自分をアピールしてみてくれ。昨日の自己紹介で皆話したと思うけど、話しきれていない所もあると思うし、何より同じチームだ。同じチームの子の事を良くしらなきゃいけない。てことで、さっそく始めてくれ」

指で音を鳴らした。少しカッコつけたかっただけだ。

ざわざわと声が聞こえてきた。直人はそれを確認してその場に座り込んで胡坐をかいた。携帯の画面を見下ろす。

「あの、直人……さん？」

「さんはいらないよ」

「えっと、直人……どうして私がキャプテンなんですか？」

直人はその台詞ですぐに誰か分かった。いや、声で分かっていたかもしれない。

たかみなだ。彼女のポニーテールは一目見ただけで凄く印象に残る。

「私、そんなキャプテンなんて務まらないですよ？」

「それは、君がそう言っているだけだよ」

携帯を閉じ、床に置いた。

「初めて君に会った時から、僕は君をAKBのキャプテンにしようと思っていたんだ。それは、君に統率力を感じたからだ」

「統率力って……？」

「いや、僕でも良くわかんないかな……ただ、ただ単に君をキャプテンにしたかった。それだけなのかもしれない」

直人はたかみなを見た。その途端、たかみなが目が少し見開いた。「コンタクトしてるんですか？」

「え？良く分かったね。このコンタクト結構わかんないんだぜ？」

「いや、左目のコンタクトがずれかかってます」

「嘘！」

直人は咄嗟に左目を隠した。たかみなは少し驚いて体勢を崩しかけた。

「ちよつと、直してくるよ」

直人は立ち上がると、そそくさとレッスルームを出て行った。

「あぶねえ……危うく眼の色がばれるところだった……」

男子トイレの洗面台。直人は左目のコンタクトをとった。

鏡で自分の眼を見る。右目は茶色に近い色をしている。それはコンタクトをつけた状態の瞳だ。

左目は、深海のようなブルーの色を宿していた。

「しかし、母さんの遺言もわけがわからないな……瞳の色を誰にも見せるなつて、そんなに自分の瞳の色が嫌いだよ」

直人はふつと微笑んだ。

実は、彼は日本人とフランス人のハーフである。彼の母が生粋のフランス人であり、姉は日本人の血を多く受けついたが、弟の直人はフランス人の血を多く受け継いだ。簡単に説明すると、直人は母に似ているということだ。瞳の色も、フランス人の血からきたものだ。小学生の頃は全く瞳の色を隠そうとはしなかったが、姉が日本人らしいということとで全く似ていないと言われた。

だからと言って、他の所がフランス人に似ているというわけではない。というか、そんなに違いはあるのだろうか？フランス人は金髪が多いが、彼は黒髪だ。

ちなみに、小学校の頃から友人関係にあつた敦子と優子は彼がハーフだと知っている。

「たくよ……」

昔はその遺言に従っていなかった。なぜなら、コンタクトが苦手だったからだ。遺言には従おうと思ったけど、その頃はまだ小1だ

つたし、眼に何かを入れるのはあまり得意じゃなかった。

小5になってようやくコンタクトがつけれるようになり、今はこの状態だ。

ちなみに彼は病気が悪化してきて視力は悪い。今だって眼鏡をかけるないと読書できない状態だ。

「僕はそのうち補聴器もつけなきゃいけないのかな？」

そう言いながら直人はコンタクトを左目につけた。

あまり日本では売っている所が少ないカラーコンタクト。直人はこのカラーコンタクトをマネージャーの詩織からもらった。

詩織と直人が出会ったのは小学五年生の初期だ。彼女のなの遠い親戚にあたる詩織は、ある俳優のマネージャーをやめたばかりだった。その頃に、直人がアイドルになることを決意して詩織をマネージャーに推薦した。

「そろそろレッスルームに戻らないとな」

直人は男子トイレをでた。

「ゲームはまだまだこれからだ。優子たちに頑張ってもらわないと、こっちも給料がさがるんでね」

直人は一人呟いた。

「僕のデマを愚痴にこぼすのはやめてくれないかな？」

「駄目ですか、康さん？」

一歩足を前にだす。彼の後ろには康がいる。

「知ってますか？フランス人って、言語が通じない人は無視するんですよ。後、アンフェアなことは嫌いです」

「何が言いたいんだ？」

「あなたが彼女たちにデマを言ったんじゃないかと思ったただけですよ」

直人は後ろの長い髪を揺らした。

第四十三話 嘘

直人がトイレに向かった頃、3つのチームに分かれた少女たちは自分をアピールしていた。

「ええっと……私がキャプテンの高橋みなみです。ああ、たかみなって呼んでください」

たかみなは身を縮めながらも小さく右手を挙げた。

「別に、私、大して言うこともありません。まあ、えっと、歌は得意なほうだと思います」

たかみなは言う事が思いつかなかった。それは他のみんなも一緒だった。

たかみなはチームAのキャプテン、そしてAKBのキャプテンだ。今、チームAで円形に並んでいる。

「私もしかして最年長かな？」

声をだしたのは麻里子だった。

「あ、歳は？」

「二十？」

「わあ、きつと最年長だよお！」

倉持明日香が両手を合わせた。眼を輝かせている。

「やっぱ年上の人は大人っぽくて綺麗だなあ」

それが明日香の本心らしい。

「ありがと。私ね、ファッションに興味があってね、そのうち自分のファッションも見つけ出したいなあって思ってるの」

「わあ、すごあい！」

明日香の目もつと輝いて見えた。

これが引き金となり、チームAは盛り上がりを見せてきた。

次に、チームK。

「わあ、才加って腹筋割れてるの!？」

「嘘!私も見せて……うわ!男みたい!」

「それは言わないで！」

とつくに盛り上がっている。

チームBも同様だった。こっちは若い世代の女の子が集まっていた、アニメなどの話があがっていた。

それぞれのチームが盛り上がりを見せてきた頃だった。

レッスルルームに一人の男が入ってきた。秋元康だ。彼が入ってきた途端、部屋の雰囲気が一瞬にして変わった。秋元康から放たれるのはとてつもない威圧感だった。

「やあ君たち。話があります、座ったままでいいから聞いてくれませんかね」

康はドアを閉めてそこから動こうとしなかった。そこから用件を言うらしい。

「直人君がいらないから言わせてもらいます。彼はたぶんですが、あなたたちを不作だと思っているでしょう」

「え？」

小さく声を上げたのは敦子だった。優子も声を上げそうになったが堪えた。

この2人は境直人という人物にもっとも近い2人だ。驚くのも無理はなかった。

「きつと公演を始めてもデビューの日はこない……彼はそう思っているかもしれません。諦めているかもしれません。皆さんに失望しているのです。君たちが努力すれば、彼の想いは変わるかもしれません。私の言いたかったことはこれだけです。みなさん頑張ってください」

康は部屋を出て行った。

その言葉を信じた人と、信じていない人、さらには迷う人に分かれた。康の言葉を聴いてショックを受けている子が大半だった。敦子と優子は当然康の言ったことを信じていない。

もちろん、秋元康の言葉はすべてが嘘であり、でっち上げだ。

直人はこの事態を予測していた。彼がデマを流すのではないかと。

だが、このレッスン時に言うことは確率が低いだろうと思っていた。それは、康の性格を考えての性格だ。だが、計算は少し間違っていたようだ。康は、最初からこうしようと思っていたらしい。

レッスルームから出て行った康は少し口元を吊り上げていた。

「どこまで行けるかな……」

その言葉をレッスルームのドアに残して彼は歩いていく。

少し歩いてトイレの前を通り過ぎた。その時、物音がして歩みをとめた。数秒の後、直人が男子トイレからでてきた。

「優子たちに頑張ってもらわないと、こっちも給料がさがるんでね」

直人が康に視線を向けることなく独り言を呟いた。決して気づいていないわけではないだろう。

「僕のデマを愚痴にこぼすのはやめてくれないかな？」

「駄目ですか、康さん？」

康に直人の給料を下げた覚えはない。いや、今から下げるかもしれない。何せ、嘘のことを愚痴で言っていたのだから。

「知ってますか？ フランス人って、言語が通じない人は無視するんですよ。後、アンフェアなことは嫌いです」

「何が言いたいんだ？」

さつき自身が言ったデマのことを知っているのだろうか？ だったら凄いい情報網だ。

「あなたが彼女たちにデマを言ったんじゃないかと思っただけです」

直人が顔を揺らした。その拍子に後ろの長い髪も揺れた。

「僕がデマを言ったかどうかは君が決めることだよ」

「また、わけがわかんないことを……」

直人は康と目線を合わそうとはしない。

「あなたが何をしようが、僕はいつだってあなたの逆手をとる。そうして僕はあなたに勝ってきたんですよ。音楽にも、人生にも」
顔が見えなくても、康には直人の余裕の笑みが思い浮かんだ。

「まあ、否定はしないよ」

康も笑みを浮べた。きっとその笑みは、康の顔を見ていない直人にも分かったことだろう。

第四十四話 舞台へステージ (前書き)

なるべく現実と同じ事を言っているようにしていますが、最近どうもオリジナリティが増えてきます。

第四十四話 舞台へステージ

直人はレッスルームに戻る前に、彼女たちの公演場所となる舞台へ向かった。

ドン・キホーテの8階、AKB48劇場という看板をつけようと数人の作業員が看板を運んでいる。

「どう？調子は？」

直人は近くの若い作業員に声をかけた。彼は直人と同い年であり、父の手伝いをしに今日ここへやってきた。

「おう！君が境直人君！生で見るの初めてだな！」

「そつだろうね。作業は順調なの？」

「ああ、ばっちりさ。なんなら中を見ていくといいよ」

「ありがとう」

若い作業員に軽く手を振って直人は歩き出した。

ドン・キホーテの8階を選んだのにはいくつかの理由がる。まず第一に、天井には証明をはじめとして多くの機材を吊り下げる必要があったからだ。そのためにはある程度の天井の高さが求められたのだ。他にいくつかの候補もあったが、天井高に難があり、最終的にここを選んだのだ。

あともう一つ、直人が直感的にここが良いと言ったからだ。秋元康も否定はしなかった。それどころか、「さすがだよ、直人君」と褒めてくれた。

劇場に入る。三ヶ月前から全面的に進めたから大分劇場構成が見えてきた。

劇場の座席構成は、定員250名と決めていた。椅子席は170席。椅子は6人がけの長椅子で、残りの80席は立見となる。それは直人が実際にもう作り上げている。

AKBのコンセプトを『会に行けるアイドル』と決めた直人は、それを理由にステージと客席を非常に接近させる提案をした。その

提案は採用された。

「みんな、今から休憩をとりなよ！」

直人がみんなに声をかけた。

「おお、ありがたい！」という声が漏れた後に、みんなは作業を中断して劇場ロビーにでた。それに続いて直人も劇場を出た。劇場ロビーに通じる通路の壁に、メンバーの写真を貼るうとも思っている。「境君？」

「え？」

劇場ロビーで直人に話しかけてきたのは、三十代前半ぐらいに見える女性だった。

「あ、まゆみさん。こんにちは。わざわざ来てくれて有難うございます」

「いやあ、なんの」

直人は女性と握手をする。その相手は夏まゆみと言って、AKBのダンスレススを担当してくれる人だ。

「明日から頼みますので、宜しくお願いしますね」

「ド素人だろうとなんだだろうと、絶対にプロにするわ」

夏まゆみは自信満々だった。過去に何人ものアイドルを担当したか直人には分からなかったが、凄い人だということはわかった。

気がつくと、もう午後の四時だったため、直人は早々にレッスンルームに戻った。

案の定、みんなが暇そうにしていた。

「あ、えっと、ごめんね。今日のレッスンはここまで。明日から本格的になるからね。はい、解散してね！」

直人は少し面倒くさくなってしまったためか、早口で説明した。ぞろぞろとレッスンルームから人が減っていった。

直人はリラックスして適当に座り込んだ。

正直、疲れた。

「ああ、まゆみさんのおかげで少しは楽かな？明日はライブ活動もあるし。ああ、久しぶりだから歌えるかなあ？」

直人はそのまま横になった。そのまま眼を瞑る。疲れが溜まっていたのか、そのまま寝てしまいそうだった。いつそ寝てしまおうか。

「はあ……」

「どうしてそんなに溜息ついてはりますんか？」

眼を開けると、天井のライトを遮るように由依の顔が映った。

「あ、まだ帰っていなかったんだね」

「あ、少しナオと話がしたいかなあって……」

「そっか」

直人は上体を起こした。由依は先ほどまでレッスンしていた格好とは違うが、ラフな格好という点は変わらなかった。

「そういえば、今日は日曜だったっけ？京都に戻らなきゃいけないのか」

「はい」

由依は休日になんか東京に来ることができない。学校もあるし、上京するのはまだまだ先だろう。

「友達は、このこと知ってるの？」

「はい。応援してるって言うてくれてました」

「そっか……」

あまり同世代の女の子から敬語で話されるのは好きではない。一応学校的に言えば一つ学年は上だが。直人が中3の頃は、後輩に敬語を使わないでくれと頼んでいたほどだ。もちろん、「先輩」をつけるのも嫌だと言っていた。

だけど、敬語は使わなくてくれと言っても仕方ないだろうと直人は分かっていた。

あまり会話を交わしたことがないけれど、直人には分かる気がした。

「随分遠くから来てるよね。梨乃は大分から上京してきたよ」

「そうなんですか。私も早く決めちゃわないと」

「そうだね」

会話の内容があまり思いつかなかった。

直人はなんとか言葉を繋ぎ合わせて文章にしようとする。

「じゃあ、平日は自主練習でもしておいてもらおうかな」

「あ、はい。そうするつもりです」

「じゃあ、ちよつと待って」

直人はレッスンルームを出て行った。数分後、紙とボールペンを持って戻ってきた。由依の横に腰を下ろす。

「じゃあ、まずは発声練習だよね」

紙の上辺りに『1・発声練習』と書き込んだ。

「次に、ダンスだね。振り付けはまだ覚えていないだろうから、次の一週間分を教えなきゃならない。今、君たちにダンスを教える夏まゆみさんにこれをもらってきた」

直人が別の紙を広げた。それは、ダンスの振り付けの説明書だ。

「色んなダンスがある。レッスン用のもあれば、君たちが歌うことになる歌のダンスの振り付けもある。当分はこれを練習していきなれ」

『1・発声練習』の下に『2・振り付け練習』を書き加える。

「まあ、こんなもんなんだよね……後、YUIの桜の花びらたちも聴かせておいたほうがいいんだよな」

直人はそう言いながら服のポケットを探った。薄いチェック柄の上着の右ポケットを探る。すると、錠剤の入ったビンが落ちた。

「あ、落ちましたよ」

由依がビンを拾った。

「風邪薬ですか？」

「まあ、そんなところだよ」

直人はそう言いながら左手でビンを受け取り、右手で取りたかったものをとった。それは銀色のMDウォークマンである。彼は音楽再生機を一つ持ってるに飽き足らず、いくつも持ち歩いている。一

番良く使うのはI podだ。

「これを君に貸すよ」

小さなヘッドホンと一緒にMDウォークマンを渡す。

「これに、YUIが歌ってくれた曲とメドレーが入ってる。アルバムの一番上のフォルダがそうだから」

そのMDウォークマンには容量ギリギリまで音楽が入っている。ほとんどが直人の友人である。同じアーティストとして直人は親しく接している。

「充電器があるよね……バイクの椅子の中に入ってるから、帰るときに取りに行こう」

「はい」

直人は左手で錠剤のビンをポケットに押し込んだ。

「そろそろ帰ったほうがいいんじゃないのか？何で帰るんだ？」

「夜行バスか新幹線です」

「じゃあ、今日は新幹線にしなよ。電車賃は僕が奢るからさ」

「え？いいんですか？」

「大丈夫だよ。実は最近、お金を使いたくてしょうがないんだよ」

直人は笑みを浮かべながら立ち上がった。由依も立ち上がる。

駐車場につくと、直人はまず椅子を開けた。中からヘッドホンを取り出して由依に渡した後、黒のヘルメットと自分用のヘルメットを取り出した。

「これをかぶって。君の鞆はここにいれるから」

「はい」

由依は言われたとおりにした。直人が椅子に座りながらヘルメットをかぶった。後ろに由依が乗る。

「飛ばすから。しっかり掴まっててね」

由依は軽く直人の腰に両腕を回す。直人はハンドルを回した。バイクを走らせる。

「きゃっ！」

予想よりも大分早かったらしく由依の両腕が少しきつくなった。

直人はそれを強く感じた。

（女の子の匂いって独特だよな…）

直人は暢気にそう思いながらも、第三者から見れば暴走している風に見えるぐらいの速さでバイクを走らせている。

由依は少し困惑していた。彼女から見た直人の印象は、「優しい人」だった。だけど、今の状況は明らかにギャップがあつた。

駅から送り届けた直人は、由依に鞆を渡し、ヘルメットを受け取った。

「ほら、電車賃」

直人が財布を取り出す。

「本当にいいんですか？」

「いいって。一応、僕のほうが先輩なんだからさ、ちゃんとこっちと聞かないと」

「……ずるいですね」

「よく言われるよ」

直人は微笑んだ。由依はそれを見て溜息をついて手を差し伸べた。直人は電車賃をその手の上に乗せた。

「じゃあ……一週間後？」

「はい。そうなりますね」

由依は歩き出した。少し歩いてから振り向きざまに手を振ってくれた。直人は手を振ることで対応した。

少し可愛いと思って、直人は照れ隠しにひたすら微笑んでいた。

第四十五話 レッスンスタジオ（前書き）

これからどんな時間がスキップしていくので、そこは分かって
おいてください。

第四十五話 レッスンスタジオ

三日目。直人は久しぶりに、野外ライブを行っていた。観客は総勢約2000人。女、男、子供に老人まで、まさに老若男女と言わねば風景だ。

「今日は久しぶりのライブで、少し歌が下手かもしれない。でも、最後まで付き合ってくれよ！」

直人はマイクに向かって叫んだ。彼はギターを持っている。その周りには、ドラムとベース、ギタリストが立っている。

「よろしくな」

バンドの仲間に直人は小さく言った。みんな快く手でグッドマークを作った。

「よし、行くよみんなあ！」

直人はまず最初に持ち歌である 心の欠片 を歌い始めた。

「あのおきのきいみとくもし、てをつうなげええたらく」
会場は瞬く間に歓声に包まれた。

直人は半年ぶりにその光景を見た。自分がアイドルグループを作ると宣言した時は、会場に盛大が湧いた。効果音などではない。本当のどよめきだった。

今はそのどよめきはない。何せ、発表することがないからだ。久しぶりのライブだ。思う存分歌わせてもらう。

「今日はサービスするよ！」

直人は少し調子に乗りながらも歌い続けた。当初は2時間の予定だったが、直人はサービスしまくるので、ライブは3時間した。彼のファンは歓声を増していった。

ライブが終わるなり、直人はライブ会場の待合室にあるシャワーで汗を流していた。

「ああ、気持ちいい。シャワーも命の洗濯だよなあ」

頭のシャンプーを洗い流してシャワーを止めた。

直人の髪は艶やかで、鮮やかだった。止めていないため、髪は背中
中の全体にへばりついている。

直人は前髪を上げた。深海が広がっているような鮮やかなブルー
の瞳が、目の前の鏡に映る自分を見た。

「これが僕の顔なんだな……フランス人なのか、日本人なのか、ど
っちなんだろうな」

直人はシャワールームを出た。髪を乾かすのに苦労するため、直
人はまず後ろ髪をくくって、頭に巻きつける。さして軽く髪を拭い
てから身体を拭く。それを終えてから髪を乾かすのだ。

それから30分経つてようやく髪を乾かすことができた。待合室
で椅子に座った直人は携帯をいじり始めた。そこへ、花蓮とは別の
マネージャー詩織が現れた。

「直人君、午後の授業だけでも言ってきなさい」

「詩織さんはいつから僕のお母さんになったんですか？」

「保護者よ。さあ、早く行ってきなさい」

もちろん直人は敦子と同じ高校だ。だがほとんど通っていない為、
出席日数が足りなくて危うい。

詩織はそれを心配して学校に行かせるのだ。

今、高校は午前の授業を終え、午後の授業に差し掛かっていた。
たった今、午後の授業を告げるチャイムが鳴った。

「席につけ」

敦子のクラスは今から数学だ。号令がかかってみんなは席に座る。
敦子は窓際の席に座っていた。一年生の教室は学校の正門を見渡
せる位置にあるため、直人が来るとすぐに分かるのだ。

だから、直人が来た時は皆が窓に押し寄せた。

「おいおい！バイクの音だぞ！」

男子生徒の一人がいた。確かに、うるさいぐらいの騒音が学校に
響いてきた。みんなは窓におしかかるように近づいた。

しばらくして黒と青のバイクが門を通って入ってきた。軽くカーブしてバイクが止まった。運転手はエンジンを止めた後、ヘルメットを取った。そこから現れたのは、全校生徒の人気のある境直人だ。

「直人、遅かったなあ！」

別の教室から先輩の男子生徒が声をかけた。

「久しぶりのライブだったんですよ！」

大きめの声で直人が答えた。

彼はバイクを自転車置き場に置いた。他に置き場所がないからだ。直人が着る制服は大分乱れていて、ネクタイは完全に緩んでいた。

「境、早く来い！」

数学の教師が声をかけた。

「はあい！」

数分も経たないうちに直人は教室についた。彼は教材をすべて学校においてある。小さな鞆を持ちながら直人は教室に入るなりみんなに「おっす」と挨拶した。

「何を暢気にしとるんだお前は」

直人は誰よりもマイペースで、掴みどころのない人物だ。姉を失って発狂してから、彼は情緒不安定と言われてきたが、直人はそれをネタにして場を盛り上がらせたことがある。直人に弱点はないと誰もが思っていた。

「あ、数学めんどいんで保健室行きまあす」

「そうはさせるか」

数学の教師は直人を無理やり席に座らせた。

「はあ……勉強だるかったあ……」

「2学期始まってばかりだよ。これから勉強ばかりが続くんだからねえ」

机に突っ伏した直人に敦子が話しかけた。その隣には、同じAK

Bのメンバーである仲川遥香がいる。彼女は偶然同じ高校だった。

「いくらIQ210でも、出席日数が足りないと……」

「仕事があるんだから仕方ないだろ。仕事のために頭の良い奴が通う学校も諦めたんだぜ？出席日数について一番甘い学校がここだたんだよ」

「私と一緒にの学校が良いっていう理由じゃないの？」

敦子が自分を指差した。

「どうだろうね……さあ、部活行くか」

「あなたって部活入ってた？」

「入ってるわけねえだろ。レンタル部員だよ」

直人は席を立った。

「君たちは今から厳しいダンスレッスンだぜ」

そう言った時の直人は真面目な表情をしていた。

「私はあなたたちの公演を絶対に成功させなきゃいけない。そのために私は甘くしない。容赦しないからね」

レッスンルームとはまた別の部屋。直人は区別するためレッスンスタジオと呼んでいる。

そこに、敦子たちが集まっていた。由依など、東京から遠い所に居るためレッスンに来られない者もいるため少し人数は少ない。今レッスンスタジオにいる少女たちを見て、夏まゆみは厳しい一言を言った。

「今のあなたたちじゃ、一生デビューなんてできないよ」

まゆみは少女たちを見回した。

「とりあえず、適当に踊ってみな。まず、その……高橋みなみから」

「え？私ですか？」

たかみなは少し戸惑ったが、頷いて少し前に出た。小さな声で歌を歌いながら踊りはじめた。

「はい、全然駄目。そんなのダンスでもなんでもない。ただ暴れるだけだよ」

まゆみはさらに言葉を飛ばす。

「どうせ全員これごときなんだな。お前たちのダンスなんか、誰も振り向かないよ」

まゆみは場の雰囲気을暗くしていく。だが、これがまゆみの作戦というべき事だった。

これで、彼女たちが本気になってくれれば……

第四十六話 少女が輝くと渋谷も輝く（前書き）

今回は回想です。

第四十六話 少女が輝くと渋谷も輝く

秋葉原と同じ東京に位置する渋谷。その街はギャルが多く歩いて
いた。

境直人は、雑誌の取材を終えたばかりだった。詩織と花蓮の2人
のマネージャーが、たまには仕事をした方が良いということで、ス
カウトの直前に取材を入れたのだ。

ここに来るのは久しぶりかも……と直人は思った。ありえないこ
とではない。

直人が渋谷に行く理由は一つだけだ。服を買いにきた。それ以外
には仕事でしかこない。

今日もスカウトの予定はあった。相手は板野友美だ。だが、先ほ
ど彼女の家で電話したら、渋谷に出掛けていると彼女の母に言われ
た。

だから、直人は今ここにいる。

今、友美を探している直人は、最近ファッションのコーデを変え
ようと思っている。

そろそろ夏に差し掛かるため、ラフな格好にしようと思っている。
今の直人の服装は、シャツの上に黒のベストを着ている。ズボン
は色が濃いめのジーンズ。

そして仕上げて黒のハットをかぶる。

渋谷を普通に歩いてても、自分が境直人とはばれない。それはそ
れでガツカリなのだが、都合が良いのは確かだ。

直人は近くに洋服店を見つけ、そこに入った。

男性服が並ぶ棚に向かう。

「やっぱ、黒シャツはこれがいかなあ」

この頃の直人はいまいちファッションセンスに自信がない。以前
服を買いに行った時は、優子連れて行ったものだ。

「ああ、これサイズが合わないな」

直人は黒シャツを商品棚に戻した。

その際に、直人は商品棚の反対側にいる女性の姿をとらえた。

「あ……」

「え？」

直人がいる商品棚の反対は丁度女性服が並んでいる。その商品棚は丁度直人の肩の高さで、女性の顔がはっきりと見えた。

「境……直人？」

女性が呟いた。いや、まだ少女だろう。

「や、やあ」

直人が、今探していた少女だ。

「友美ちゃん、だよな？」

直人がなんとなく聞いた。友美は頷く。

「友美、AKBに入ってくれないか？」

「とも……受かった？」

「ああ、受かったさ」

直人は微笑んだ。

友美も微笑んだ。

「じゃあ、私、もう一流のアイドル？」

「いや、それはどうだろう……」

正論だ。

「で？直人は服を買いに来たの？ともを探しに来たの？」

「両方さ」

友美が自分をいきなり呼び捨てで呼んだのには黙っておこう。

直人は友美に今していたことを話した。

「夏のコーデを考えてたのさ。でも、ファッションにいまいち自信がなくて」

「じゃあ、私がコーデしてあげる」

友美が直人の隣まで来た。

「黒シャツがいいかなって、思ったんだけど……」

「じゃあ、ジーンズで……ほらほら、試着試着！」

「え？ちよっ！」

直人は友美に背中を押された。

それから2時間は経っただろうか。

直人の両手は幾つもの袋を握っていた。もちろん、友美が選んできた服だが、それは一つだけだ。九割を友美の買った服が占めている。

「次は…こっちな？」

「まだ行くのかよ？」

直人は溜息をついた。彼はたまに、口調を変えることがあった。いつもの時より比べて、口調が偉そうになるときがあるのだ。学生の時はいつも偉そうなほうの口調になる。

「今日は私の彼氏つてことで……」

「なんでそうなるんだよ？」

「彼氏は恋人の荷物を持たなければいけないのよ」

「そんな規則だったっけ……？」

直人の経験では、そんなことをするのは規則ではなかったはずだ。だけど、今の友美に言っても聴いてはもらえないだろう。

今日だけは、友美の言う事に聴こうと直人は思った。

直人は友美を見た。

彼女が輝いているように見えた。

第四十七話 不安（前書き）

出会い・レッスン編完結です。

第四十七話 不安

「君たちの初めての公演日が決まった。今から一カ月後の12月8日だ。グランドオープンという形になる。もう振り付けは完璧だと思う。今日はレコーディングをもらった。公演では君たちは踊るだけでいい」

直人は皆を見渡した。ここはレッススタジオ。部屋にはメンバー全員と夏まゆみがいる。グランドオープンまで後一ヶ月ということとを彼は伝えにきたのだ。

「明日からは、練習場所を劇場スタジオに移す。まゆみさんの指導に皆良く耐えられてきたと思ってる。今日はそれだけだ。解散してくれ」

直人はそれだけ言うとしゅんすんスタジオを出た。解散とは言ったが、彼女たちは夢を追いかけている。きっと練習を再開しているだろう。

「はあ……観客は何人いるんだろうな」

きつと、初の公演の観客席には関係者も座るはずだ。たぶん、数十人ほど。

直人は劇場へ向かった。劇場は一応完成している。後は照明などの機具をとりつけるだけだ。

スタジオに入ると、一人の女性スタッフがすりを磨いていた。

「サクラさん」

「あ、直人君？どう、皆は」

「ボチボチってとこかな」

スタッフのサクラは現場のチーフだ。任命したのは直人自身である。

「良いことを教えてあげよっか？」

直人はサクラの雑巾をそっと取ると、せり一枚をゆっくり丁寧に拭いていった。

「直線で雑巾かけるとね、すりの隙間に埃が落ちるんだよね」

「へえ、そうなんですか」

「親もいなくて、育ててくれる人もいなかったから、姉さんは必死に金を稼いでくれた。出来るだけ僕は姉さんの役に立ちたくて、最初は家の掃除をしてたんだ。それで、家に床がすりの部分があつてね。埃が隙間に落ちていくのがわかつたんだ。それでこの方法が分かつたんだよ」

直人は埃を綺麗にふき取って、水の入ったバケツに雑巾を入れた。「それと、パネルもちゃんと磨かないといけない。もし公演が、照明を暗くして行つのであれば、パネルを使って公演者を輝かせなければいけない」

直人はパネルを指差した。

「サクラさん、僕が言えるのはたった一つだけだ」

「なんですか？」

「皆は、スタッフはただの影だつて言うかもしれない。輝くのはステージに立つ者……つまり僕のようなアイドルで、サクラさんのようなスタッフはどれだけステージを磨こうが輝くことはできない。問題は僕たちが輝くかどうかということ……実際に誰か言っていた気がする……だけど、僕はそうは思わない。僕だつて、アイドルとしてステージで立ってきた。だけど、アイドルは自分だけで輝いてるんじゃない。誰かに照らされて輝いてるんだって思うよ」

直人はサクラの手を握った。

「彼女たちを、照らしてくれ」

「……わかつてるよ、そんなこと」

サクラは微笑んだ。

その日の夜。直人の家には、敦子と優子が泊まりに来ていた。別に直人は変な気を起こすことはない。昔から泊まりに来ていたし、軽い気持ちだった。その代わり、その時の家事洗濯はすべて直人が

することになったが。

「だから、ここはこう歌うんだよ……」

「うんうん」

当然、直人は振り付けと歌の練習を2人に施していた。2人は嫌がる事もなかった。

「後一ヶ月で君たちは全く知らない人たちの前で踊ることになるんだから、覚悟しとけよ」

「直人は、初めてステージにたった時、どうだった？」

「そりゃあ、緊張したさ。花蓮さんや詩織さんが裏で何をしたか知らないけど、小さな劇場に人がいっぱい集まった。その時は、同級生とバンドを組んで……学生ライブに出場しただけだった。けど、それがきっかけで、僕は康さんのおかげでアイドルになったんだよ」

そうだ。あの時のライブですべてが変わった。あの場所に秋元康がいなかったら……今直人は孤独に苛まれ続けていただろう。だが、彼は今こうして、ふたりの少女と時を過ごしている。

「君たちがいてくれたおかげで、今の僕は平常心を保てるのかもしれないな」

「平常心を保てるのはその薬のおかげでしょ」

優子が、今直人が飲むうとしていいる錠剤を指差した。

「どうだろうね」

直人は錠剤を一つ飲み干した。

「発狂したら私たちが困るんだよ？平常心を保つためにはその薬を飲むしか方法はない。飲まなければあなたは狂いだしてしまう。そうでしょ？」

「ああ、その通りだ。あの薬は僕の病気の悪化を防ぐものじゃない。僕の発狂を防ぐものだ。病はもう止めることができない。だから、やりたいことを今やりつくしたいんだよ」

「じゃあ童貞は卒業しなきゃね」

優子は言った。

「その話はタブーだぞ」
直人は軽くツツコミを入れておいた。

第四十七話 不安（後書き）

次話からは『デビュー編』に移ります。

第四十八話は直人の初ライブを描いた回想編です。

第四十八話 初ライブ（前書き）

今回は予告したとおり、直人の初ライブの日の出来事です。

第四十八話 初ライブ

中学一年生の6月初期。東京の片隅。

境直人は、バンドを組んで、歌を歌おうと決めてすぐに実行に移した。

高校生の軽音部など、様々なバンドグループがライブを披露する小さな劇場に、眼鏡モードの直人は居た。

「みんな、ありがとう。僕のわがままで、ここまで付き合ってくれて」

「いいことよ」

「そうだよ。私たちはチームなんだし、ね？」

彼とバンドを組んでくれたのは、皆幼少期から音楽の道を目指していた者たちばかりだった。ボーカル兼ギターを担当する直人は、ギターを磨いていた。他に、ベースが一人、ドラムが一人の、3人のチームだ。

「大丈夫？」

「大丈夫ですよ、詩織さん」

直人はギターをテーブルに置いた。

ここは、用意された待合室だ。その部屋には、直人をはじめ、優子、敦子、詩織、花蓮、ベースの健崎当麻とドラムの鮎川陽菜がいる。

「手が震えてるよ、ナオ君」

優子が直人の手をそっと握ってくれた。

「ごめん、人前で歌うのは……初めてだからさ」

直人の心にあるのは、緊張ではなく不安だった。観客席に誰もいなかったら、どうしよう。それでも僕は歌うのだろうか？

直人は優子の手を握り返した。

「ああ……どうしよう」

「ななちゃんに電話したらどうなの？」

「もうしたよ」

行動だけは早い直人だった。彼は考えるよりもまず実行に移すタイプだ。小ライブもその調子で歌ってくれるととても有難いと、全員が想っていた。

「すいませえん、次宜しくお願いしまあす！」

ライブを仕切っている女性が待合室に入ってきた。だが、一言言うとうとすぐに出て行った。

「……優子、いつものおまじないをやってくれ」

「……わかった」

優子は直人の両手を、自分の両手で包み込んだ。

「——あなたは、絶対に後ろを振り向いてはいけない。前だけを向いて走り続けるの。そうすれば、あなたは本当の幸せを手に入れるわ」

一瞬、脳裏を姉の顔が過ぎった。

「——あなたは、今、自分にとってすべきことを行っていますか？」

優子が問う。直人は頷いた。

「——今からあなたがやることは、あなたがやりたいことですか？」

「ああ、そうだ」

「じゃあ、自分の限界を越えるまで、前だけを向いて走り続けなさい」

「……よし、やるか！」

直人は立ち上がった。優子は手を離す。直人は眼鏡をとった。コントラクトを入れ始めたばかりなので、少し眼が痛い。

今優子が言ったのがおまじないだ。少し長いが、彼にとって、このおまじないはとても必要なものだった。

これは、親を失った自分に、希望を与えてくれた姉がいつもしてくれたおまじないだ。これのどこがおまじないか、最初は分からなかったけど、なぜかそのおまじないを聞くと……緊張も……不安も……すべて消し飛んでいた。姉がいなくなっても間もない今、おまじないをしてくれる人は、優子が敦子だけだ。

「いこう、当麻、陽菜」

「おう」

「頑張ろうね」

直人は、当麻と陽菜と共に、ステージに出た。直人は、まだまだ募る不安を頭の中から追い払いながら、ステージに小走りで出た。

観客席は……満員だった。満員どころではない。椅子は見えなくなり、劇場にいる客全員が立って直人の名前をコールしている。

（もしかして、ユーチューブのおかげかな？」

直人は一ヶ月前に、今から歌う歌を動画としてユーチューブに流していた。それが反響を呼んだのだろうか。

「みなさん、今日は……宜しくお願いします！」

直人は笑顔をみんなに見せた。観客席から瞬く間に歓声が沸いた。直人は歌いだした。

それは、心の欠片 だった。後に、彼の持ち歌となるその曲は、人々の心を掴んだ。

「がんばれえ、直人オ！」

観客席の最前列で敦子は右手を振り上げていた。優子も同様だった。

今、歌っている直人は、すべての嫌な事を忘れていた。顔を知らない両親、つい最近自殺した姉、自分の瞳の色を隠さなければならぬ理由が分からないこと、すべてを忘れている。考えられるのは、歌を歌うと、心がスッキリするということだ。楽しくて楽しくて、しょうがなかった。

観客席の後ろのほうで、秋元康は、「見つけた」と呟いた。

第四十九話 恩師との過去

ドン・キホーテ8階のAKB劇場。完成間近のステージで、敦子たちメンバーは踊っていた。激しく身体を動かす少女たちは、夢を追いかけるだけの女の子に見えた。

観客席の後方列、3人の男女が座っていた。左から、夏まゆみ、境直人、秋元康である。

「予定のグラントオープンよりも一週間遅らせて正解だったのかもしれませんね」

直人が呟く。まゆみは頷いた。

「彼女たちはまだまだ見直すべき点がある。一人ずつ指導をするべきだわ」

まゆみは言った。直人も肯定する。康は、両腕で抱える猫に注意を払っていた。

「どこから連れてきたんですか？その猫は」

直人が康に尋ねた。

「君がさつき連れてきたんだろう？」

「そうだったっけ」

直人はあまり覚えていないが、康が言うならそうなのだろう。

「どう思いますか？彼女たちを」

直人は……今度は、2人に尋ねた。

「このままじゃ、この席が満員になることはないわね」

夏まゆみが観客席を見回した。

店員席が、ざっと250人だ。250人集めるのは、彼女たちにとつて困難だ。

「12月7日の、デビュー記者会見のことなんですけど……あなたは本当に参加しないんですか？」

「それは直人君だけで十分だよ。僕は参加しない」

両腕で抱えていた猫が康から離れていった。

安しは少し残念そうな表情をした。

「康さん、じゃがりこあげます」

「ああ、ありがとう」

直人は康にじゃがりこを渡した。近くのコンビニで買ってきたのだ。最初は自分が食べようと思っていたのだが、この際だ、仕方ない。

「じゃがりこは美味しいな」

「ええ、そうですね」

直人は踊り続けるメンバーたちを見る。

みんな、必死だった。それもそのはずだ。グランドオープン、つまり本番まで一ヶ月をきった今、苦手な事があるのはまずい。

優子も苦手な振り付けがあると云っていた。

「ゲームはまだ本編にも至っていない……」

直人は呟きながら、録音機を手についた。30分前から録音をしている。

「そういう言葉好きだね」

まゆみが言った。

「なぜか、『ゲーム』っていう言葉を使いたくなるんですよ。何をゲームに例えてるのか、使ってる僕もあんま分かんないんですよ」

「……はは、直人君らしいな」

康がじゃがりこをかじった。

気がつくと、メンバーは疲れ果てていた。倒れている子もいる。

「みんな、だいじょう——」

直人がみんなを心配して立ち上がるとした時……

「もう動けない奴は観客席に座ってな。動けるものだけ練習を続けな」

まゆみが言った。

「まゆみさん！」

「……あんたは甘すぎなんだ、直人。お前も分かってるはずだ」

「……………」

直人はステージの方向に眼を向けた。

カラーコンタクトが、ずれた気がした。

「……確かに僕は甘い。だけど、僕にはこうすることしかできないんだ」

直人は言い切った。そして、ステージに近づいた。ステージにいるのは25人ほど。そのうち10人がその場に倒れていた。優子も、その一人だった。

「これじゃ、熱中症になっている人もいるかもな」

直人は、劇場をでた。出ですぐのところに、ぬるめのスポーツ飲料が置かれた机がある。その奥には水道。直人はありったけのタオルを集めて、冷たい水に浸した。

タオルをすべて絞り、再び劇場に入った。

スポーツ飲料とタオルを一つずつ、メンバーに渡していった。次は倒れている者たちだ。エアコンの設備は整っていないし、何より微風が必要だった。

「ほらよ」

いつのまにか、夏まゆみが扇風機を二台持ってきてくれていた。

その後ろには同じく扇風機を二台持った秋元康。

「ありがとうございます」

直人は倒れている人を全員ステージから下ろした。最後に下ろしたのは、優子だった。

直人は優子を抱きかかえた。

「また……助けられちゃったかあ」

「これでまた借りができたな」

「またって……どうということ？」

直人は優子を抱きかかえたままステージを降りた。

「レッスンの初日に昼食奢っただろ？あんときの借りはまだ残ってるぜ」

「何の話かなあ……？」

「とぼけんなよ」

そう言いながら、直人は優子をゆつくりと最前列の椅子に座らせた。延長コードをつかって扇風機を最前列の前において、微風にしてお動させた。

「みんな……がんばろうな」

聴こえない人もいたかもしれないけど、直人は小さくみんなに応援の言葉を送った。

「ゲームは、もう本編なのかもしれないな」

直人は、録音機の録音モードをオフに切り替えた。

第五十話 族・恩師との過去（前書き）

今回は回想で、恩師との過去を本当に明かします。

第五十話 族・恩師との過去

中学一年生。

初のミニライブは大成功を収めた。

直人はこのミニライブに大満足だった。もちろん、当麻や陽菜も満足していた。3人は汗を垂らしながら待合室でスポーツ飲料を飲んでいた。

「よかったあ。私のおまじないのおかげかな？」

「そうみたいだ……もちろん、敦子やみんながいたおかげでもあるよ」

直人は微笑んだ。

「ああ、すつきりしたあ」

直人がスポーツ飲料を一気に飲み干した。

と、その時。

「やあ、お邪魔するよ」

いきなり、待合室に一人男性が入ってきた。小太りのその男は真っ直ぐ直人に近づいた。

「僕は、秋元康という者だ。君に少し用がある」

「なんですか？」

直人は明らかに警戒の目を向けていた。だが、その瞳もすぐに見開かれる事となる。

「僕は君の歌声に惚れてしまったようだ。どうだい？男性アーティストとして音楽界にデビューしてみないか？」

「え？」

「は？」

その場にいる全員が声を漏らした。

直人はそんなこと想像もしていなかった。

「僕はプロデューサーもしていてね。そうだなあ……『おにゃんこ』も僕が手がけたんだよ。あと、『着信アリ』の脚本とかもやったよ」

「いや、さすがにそれは知ってます」

直人は空になったペットボトルをテーブルに置いた。

「君たちバンドグループ全員で、今度大きなライブをしてみないか？」

「そりゃあ、いい話ですけど……」

「実は……君たちのライブ映像をたったいまサイトにアップしてねえ、今……一気に1000人ほど見ているね」

康はさも冗談のように言っているが、直人には冗談のように聞こえなかった。

「どうだい？話に乗ってみるかい？」

尋ねられた直人は、敦子に視線を向けた。

敦子が……姉さんのように思えた。

——姉さん、あなたはなぜ、僕を置いて逝ってしまったの？

その答えが返ってくるはずもなかった。

直人は強い眼差しを秋元康に向けた。

「やります。やらせてください！」

「……よし、決まったな」

秋元康は満足そうに微笑んだ。

当麻も、陽菜も、直人についていくと言って賛成してくれた。

「君たちは、今から二週間後の土曜日に、ある劇場で歌ってもらう。それじゃあ」

康は待合室を出て行った。

「ナオ君、本当に大丈夫なの？」

優子が尋ねた。

「いや、大丈夫じゃない。なんかわかんないけど……」
直人は天井を仰ぎ見た。

「——姉さんが、やれって言ってる気がするんだ……」

第五十一話 心

「ああ、ほんとにいけんのかあ？」

ドン・キホーテの休憩室。直人は音楽を聴きながらソファに寝そべっていた。この部屋にいるのは同僚の陽菜だけだ。

「大丈夫？」

陽菜が尋ねる。直人は首を横に振った。

「このままじゃ駄目だな。初公演はチームAにすることにしたけど…… まだまだド素人なんだよな」

直人は言った。それは嘘ではない。

まだ、誰も完璧じゃない。この公演をするために必要な事が出来ていない。振り付けが出来ても、歌が上手くても、まだ足りないものが一つだけある。

それは、観客に見せるための笑顔だ。その笑顔が観客の心に届けば、その観客はいつしかファンへと変わっていく。

直人はそう信じている。いや、確信している。自身も、そうしてファンを増やしていったのだ。いや、ファンが増えた理由が絶対そうだとは限らないが。

「陽菜、ありがとうな。この三年間、ついてきてくれて」

「いきなり何言ってるの？何かあった？」

「……」

直人はイヤホンをとった。そしてポケットからI pod…… を取り出したはずだった。だが、直人が今手にしているのは録音機だった。直人は今初めて陽菜と視線を合わせた。

彼はカラーコンタクトをとっている。だから、彼の瞳はアクアブルーの色を宿していた。深海のような綺麗な瞳が陽菜の視線に映った。

次第に、直人の瞳に潤いが生じた。

そして、彼の頬を大量の涙が流れていった。

「どうしたのよ…？」

直人は上体を起こした。それと同時に陽菜が直人の隣に座り、両手で直人の顔を包み込んだ。

直人は声を出せなかった。一体、彼の身に何が起きたのか陽菜には全く理解できなかった。

一分間、その状態が続いた。そして、涙が流れ続けるまま、直人は声を上げた。

「何も……思い出せない………」

「……そんな」

陽菜が悲痛の声を上げた。

「何も……って……いつの事を思い出せないの？」

「……僕は……自分の名前が……分からない」

「そんなことまで………」

「僕が病気で、記憶障害を持っているのも忘れてない……君たちの事も、敦子たちの事も覚えてる。なのに……唯一、思い出せない人がいるんだ………」

「それは誰？」

陽菜が尋ねる。直人の涙はこぼれ続けた。

「姉さんだ………」

「ああ……写真を探さないと」

陽菜は直人の携帯をとって彼の姉の写真をさがした。

「ひ……な………」

直人はもう涙を流さないが、放心状態になっていた。

「ほら、お姉さんの顔よ」

陽菜が直人に携帯を渡す。

「姉さん………」

携帯に映っているのは直人と姉が幸せそうに笑っている写真だった。

「なあ、愛奈——」

「また」

「あ、ごめん」

「もう、仕方ないなあ、これからは愛奈でいいよ」

「……」

いつのまにか、泣いていたのは陽菜のほうだった。

彼女の本当の名前は、愛奈だった。彼女は昔からその名前が嫌いだった。なぜなら、大嫌いな殺人犯の叔母と同じ名前だったからだ。陽菜という名前は直人が考えたのだ。

でも、彼は自然と、本当の名前を覚えていた。何回か呼ばれた時は、陽菜は嫌がっていたが、直人に呼ばれるのは、自然と嫌ではなかった。

「このまま、僕は君たちの事も忘れてしまふのかな？」

直人が恐れたような表情を陽菜……愛奈に見せた。

愛奈は直人を見据えた。そして、黙ったまま直人を抱き寄せた。女性の甘い香りが漂った。

「例えあなたがすべてを忘れても、私が、すべてを思い出させてあげる」

「……愛奈」

直人は、自分を抱き寄せる少女の名を呟いた。

そして愛奈は、今の状況に罪悪感を感じると共に、嬉しくもあった。

（ごめんね、ななちゃん、許して。私だって、好きな人ぐらい居るんだよ……とっても優しく、それでいて想いを伝えることができなかったけど、私が持つ彼への想いは、これからずっと変わらないと思う）

愛奈は、声に出さず言った。それは、想い人の——想い人へのメッセージだった。

その頃、直人と愛奈がいる休憩室。そのドアの反対側。それは通路だ。その通路で、休憩室のドアにもたれかかる少女が1人いた。

前田敦子である。彼女は、親がいなくなつて情緒不安定となつた直人を支えてきた1人だった。姉がいなくなつて、境直人という人物をおそらく端から端まで知るであろう人物は敦子を含め3人だけとなつた。

他の2人は、同じく幼馴染の優子と、彼が一番大事とする恋人ななである。

敦子はずっと、今までの2人の会話を聞き取っていた。直人が「何も思い出せない」と言つた時には、敦子は顔を両手でうずめてその場にしゃがみ込んでいた。

「どうしたの……あっちゃん？」

敦子は顔を上げた。彼女に話しかけたのは、優子だった。

「直人が……」

敦子の口から出たのはその言葉だけだった。

「悪化したんだね」

優子は敦子の前でしゃがみ込んだ。

「大丈夫だよ。きっと良くなるから……」

最後は不安であり言葉にならなかつた。

優子は信じていた。信じたかつた。

直人が、たかが病気で死ぬわけがないと。

第五十二話 曇り

AKB劇場。チームAのメンバーは、レッスンを始めるためにここに集まっていた。後は、彼らの指導を担当する夏まゆみが来ればいいだけだ。夏まゆみが来ればレッスンは開始される。

だが、彼女たちはステージ上で踊っていた。

自主練習だ。彼女たちは、自分たちでも分かっていたのだ。このままでは駄目だと。

初日の公演は、チームAが担当する。公演名は『PARTYが始まるよ』だ。その公演で彼女たちは計10曲の歌を披露してもらう。披露する相手が喜ぶかどうかはまだ分からない。

いや、喜んでもらわないと駄目だ。

「ねえ、直人君は？」

自主練習の最中、麻里子は敦子に聞いた。

「誰にも会いたくないんだって」

敦子は答えた。その表情は、明るくはなかった。

姉の顔を思い出せなくなったのが相当のショックだったのだろう。姉が映っているのは、愛奈がとっさに見せた、直人の携帯にある写真だけだった。

あの写真がなければ、直人はもう大切な姉の顔を思い出せる事はなかっただろう。

「どうしたんだろう？」

「さあ、私にも分かんない」

敦子は言った。

「お、やってる」

劇場に夏まゆみが入ってきた。彼女はメンバーを一瞥するなり、最前列中央の席に座り込んだ。

「今日はたっぷり時間があるから、すべて通してやってみようと思ってるから。ステージへ上がる前から、降りた後まで、すべて通す

よ」

ふと敦子はまゆみの手元にラジカセがあるのが気づいた。天井に視線を移すと、まだスピーカーは設置されていなかった。

「はい。裏から入るところからやるから、みんな裏に回って」

まゆみが指示を出した。メンバーはすぐさまステージ裏へと駆け込んだ。

休憩室。

直人はソファに寝そべっていた。愛奈を部屋から追い出した直人の瞳は、輝きを失っているようだった。直人の瞳を見ると、深海の淵を泳いでいるようだ。

彼は放心状態と言っても過言ではなかった。

恋が実らなかった、なんてものじゃない。一番大切だった人、想い出の中で生きるたった一人の家族が思い出せなくなったのだ。

直人は左手に携帯を握り締めていた。その携帯の画面には、姉と直人の一枚の写真が映っている。

これを手放したら、また姉を忘れてしまふんじゃないかと、不安でたまらなかった。

ふいに、ドアが開いて横山由依が入ってきた。ちなみに今日は土曜日だ。

「ごめん。今日は1人でいたいんだ……」

直人の声はかすれていた。由依は心配したようにソファに近づいた。ソファの近くに椅子を置いて座った。

「少しだけでも、話できないですか？」

まだ関東の言葉に慣れていないようで、由依の喋り方はなんともうかなまっていた。

「ちょっとだけにしてくれよ」

直人は瞼を閉じた。

「お姉さんですか？」

由依は携帯を覗き見ていたようで、気になって尋ねた。

「ああ、そうだ。僕にとつて、とても大切な人だよ」

直人は答えた。五ヶ月ほど前のTV番組で、直人は家族が誰もいない事を明かしている。中一の頃に、姉がストーカーに殺されたという事も、インターネットで公表した。

それでも尚、公表していない事はたくさんある。

「悪い夢でも、見たんですか？」

由依が心配した。

「まあ、そんなとこかな」

実際は違う。だけど、記憶障害があることを口外してはいけない。知っているのはメンバー内では敦子と優子だけだ。

「世の中には、色んな人がいるよね？」

「え？」

直人は瞼を開けた。

「乱暴な人、優しい人、格好良い人、可愛い人、美しい人……みんな違うよね。例え、血が繋がっていても、愛する人でも、好きなものが同じでも、他人が自分と違うのは当たり前だ。だから、人は……僕たちは、誰かを愛せる。それが、当たり前なんだ。だったら――」

――

直人と由依の目が合った。

「人を愛せない僕は、誰なんだろう？」

由依は返す言葉もなかった。

きつと、姉を失ったショックをまだ感じているのだろうと、由依はそう思った。そう思う事にした。

「ホンマは、あなたを初めて見た時、どうでもいいやとか思ってたんだけど、あなたと話してて、ほんとははこんなにも優しいんやって思ったよ」

「ありがとう、嬉しいよ」

直人は、目の前の相手が自分を必要としてくれるのが分かった。自分なんて必要ないのかもしれないと感じていたが、それは間違い

だったようだ。

再びAKB劇場。みんな、息を切らしていた。まだ通し練習は終わってはいない。今は6曲目を踊っている最中だった。

「まだまだ終わらないぞぉ！」

まゆみが声をかけた。チームAはたとえ練習であっても全力で踊り続けた。

その場に、今まで休憩室に引きこもっていた直人が現れた。敦子は少し驚く。だけど、喜んでいた。直人は黙ったまままゆみと同じ列（しかし少し離れた位置）の席に座り、ダンスをじっと見ていた。一人ずつ、確実に、全員。

「やっぱり、来た」

麻里子は、かすかに微笑んだ。

第五十三話 日曜日

日曜日を過ごす学生は、きつと二つの思いを抱くことだろう。

一つ、それは、今日は授業はない！

もう一つ、明日は授業だ……。

昨日まで、辛いレッスンに耐えてきた少女たち。たまには休暇も必要だと直人は思い、朝一時間だけ練習をさせて後は自由行動にした。

直人はせっかくなので、午前は高校のバスケット部の練習に参加した。バスケット部のメンバーは直人の登場に喜んでくれていた。顧問はしていた練習を中止してすぐさまゲームを開始した。彼も直人が来たのを喜んでいる模様。

「おい！そこはこうやるんだぞ！」

直人はディフェンスを軽々と避けてスリーポイントシュートをうつ。

ボールは綺麗にネットを抜けていった。

直人はゲームを11時に終えて、渋谷を歩くことにした。

もしかしたらメンバーに遭遇するかもしれない。まあ、1人は寂しいからそちらのほうがいいのだが。

「どこいこつかなあ」

両耳にイヤホンをつけて直人は渋谷の街を歩いた。

少し歩いて直人は足をとめた。目の前の洋服店に視線を向ける。

「そういえば、友美と会ったのはここだったな……」

あの時は、荷物持ちをさせられて本当の目的を忘れていた気がした。

この半年間、とても短かったようで、長かった気がする。この半年間で色んなことがあった。48人の少女の出会いの時期。初めて

歌から離れた時期。そして、境直人が変わった時期。

48人とも、全く異なった人物だった。当たり前のことだ。まあ、他にも何人か候補の人と会ったのだが。

「部屋の模様替えでもしようかな……」

そう思いながら、直人は雑貨店に立ち寄った。

彼の家は、生まれた頃から同じだ。マンションに住み替えようとも思ったが、今住む家には数え切れない思い出がある。なかなか離れることができなかった。

雑貨店に入った直人は、本棚などを見て回った。彼の家にはたくさんの本棚と、スピーカーがある。

直人の家は皆で洋館と呼んでいる。それは屋敷が広いからだ。一戸建ての家に1人暮らしという状況はあまり愉快ではない。直人はそう感じて、家に音楽を流すことで寂しさを消している。

友達に家に泊まってもらうのも、寂しいからなのかもしれない。

「あれ？」

雑貨店を見て回っているうちに、直人は知っている人物に出会った。

「あ、直人？」

宮澤佐江だった。携帯で誰かと会話している。

「あ、ママ。後でかけなおすねえ」

佐江は母親と電話しているようだった。電話を終えて佐江は直人に向き直った。

「あなたもここに來てたんだね」

「まあね。僕1人暮らしだからさ」

「ああ、そうだったねえ」

佐江は相槌を打った。

「せっかくだから、一緒に他の店行く？」

「いいね」

直人は微笑んだ。

「じゃあ、早く行こう」

佐江が雑貨店のドアを指差す。

「じゃあ、行こう。もうちょっとで昼時だ」

直人は佐江の手を握った。そのまま引いて雑貨店を出て行った。

「うわ、強引だねえ」

「僕はどちらかというと肉食系でね。さあ、行きたいところは山ほどあるよ」

「さえも山ほどあるかなあ」

佐江が直人の横の位置までたどり着いた。歩道は人でいっぱいだった。だが、その大半が直人に視線を巡らせていた。

「あの人、格好良いなあ……」

「あれ、境直人じゃないの？」

「ほんとだあ。女の子と手繋いでるう。いいなあ」

周りから女性の声がいくつも聴こえてくる。佐江はきつと彼のフアンだろうと思った。それは正解だ。彼は優しくてイケメンだと思うし、学校では女子に人気があると敦子から聞いた。それも分かるような気がする。

「色々見て回る前に、お昼にしない？」

「いいね。マクドとか？」

「ファーストフード好きなの？」

ちよつと意外だなあと、佐江は心の中でそう思った。

第五十四話 日曜日のハンバーグ

「何が食べたい？」

直人が佐江に尋ねた。

「直人は？」

「うーん、ハンバーグ、かな？」

「おお、グッドタイミングだねえ」

そう言いながら佐江は目の前の店を指差した。その店はハンバーグをメインとするレストランだった。

「じゃあ、あそこにしようか」

佐江は頷いて、今度は彼女が直人の手を引いた。先程からずっと握ったままだったので、直人は手汗大丈夫かな？などと心配していた。なぜずつと握っているのかは考えていなかった。

「あ、境さん！また来てくれたんですね？嬉しいなあ！」

「久しぶりだね、恵美ちゃん、元気だった？」

「はい！とっても元気です！」

レストランに入るなり、若い女の子のアルバイト店員が出向いた。その女の子は直人と知り合いのようで、佐江は話に入り込めなかった。

「あ、境さん、彼女さんですか？」

恵美と呼ばれた少女は佐江を一瞥してから直人に尋ねた。

「いいや、違うよ。でも、大切な友人かな」

「そうなんだ……」

恵美はふつと安堵の息を吐いた。

「どうかした？」

それを見て直人が心配した。恵美は首を左右に振って応えた。

「席に案内してくれるかな？」

「あ、そうだった……2名様、ご案内です！」

直人と佐江は窓に近い席に案内された。四人分の席に2人は向か

い合って座った。机に携帯などを置く。

「それ、録音機？ちよつと聞かせてよお！」

「駄目だよ」

「じゃあそこに置かないでよお」

「仕方ないだろ。ジーンズなんだからポケットにいれてたら座れないだろ」

「どのズボンだったと一緒にような気もするけど」

「早く食べたいもの探せよ」

「ああ、話そらしたあ」

傍から見れば、佐江と直人は恋仲に見えただろう。だけど、実際は親と子のような関係だ。何せ、直人は彼女をアイドルとしてデビューさせなければいけなくて、彼女はアイドルである直人に様々な事を学んでデビューしなければならぬのだ。

「はい、お水でえす」

2人が仲良く喋っているのを邪魔するかのように恵美が水を運んできた。

「僕、チーズハンバーグで」

「あ、じゃあさはダブルチーズで！」

「かしこまりました」

恵美は2人の注文を聞くなり、厨房の方へ向かった。

「さっきも思っただけど、2人って知り合い？」

「まあね。ここに来たことあるのは一回だけんだけど、恵美ちゃん……インターネットのあるサイトで知りあつてたまたま会つたってわけ。なんていうのかな？掲示板、ていうんだっけ？みんながインターネット通じて会話するやつ」

「まあ、掲示板、かな？私、読むのは得意じゃないからそういうのも良くわかんないや」

「そうなんだ。じゃあ小説も読まないほう？」

「うん、そうだね」

佐江が人差し指を自分の顎にあてた。何かを考えているのだろう。

「ねえ、メアドってどれくらい持つてる？」

「数えたことないな…… 800人くらい？」

「嘘！マジで！凄いなあ」

「外国にも友達いるからねえ」

「じゃあ、あの恵美って子のメアドもある？」

「ああ」

「ふーん、ねえっと履歴見してよ。メールの履歴」

「別に構わないけど、つまんないよ？」

直人は机の上に置いてある携帯を佐江に渡した。

「うわ！女の子ばっか！あれ？あっちゃん、優子、由依ちゃん、麻里子——etc……すごいメール量」

「etcは言わなくても良かったんじゃない？」

「それで……」

直人の小さなツツコミは遮られてしまった。

「佐江の予想だけど、あの子絶対あなたに気があるよ？」

「恵美のこと？そんなのありえないだろ」

「直人って、意外に鈍感なんだね」

「鈍感？」

直人は、佐江の言っている鈍感の意味が良く分からなかった。

第五十五話 ファーストキス

「へえ……そう見える？」

「見える見える。さえは絶対そう思う」

直人は本当に分からなかったらしく、首を傾げていた。

「そういえば、雑貨店でお母さんと話してたよね」

「うん……実はさえ、人見知りで、店員さんに話しかけることさえ出来ないんだよね」

「ああ、だからお母さんと」

直人は納得したように相槌を打つ。

羨ましいな……と思った。佐江には仲の良い母親がいるが、自分にはいない。あの交通事故さえなければ、今頃母と仲良く紅茶でも飲んで笑いあっているのだろうか。そんなの、夢でさえ見られない光景だ。交通事故がなければ——いや、自分が生まれてこなければ、あの交通事故だって起きなかったかもしれないじゃないか——。

「どうしたの、直人？」

「え？」

「泣いてるじゃん？」

そう言いながら佐江が右手を彼の頬に近づけて拭き取ろうとした。だが、直人はその手を遮った。

「いや、君の話が可笑し過ぎて、つい」

「ええ！何それ！ひどおい！」

佐江が手を直人から離す。苦し紛れに言ったのだが、どうやら誤魔化せたらしい。

女の子に弱い所は見せたくない。

「あ、そろそろ来たね」

気がつくと、恵美が二つハンバーグを運んできた。直人の前に置かれたのが、チーズハンバーグとう名称のハンバーグ。佐江の前に置かれたのが、それにさらにチーズを加えたダブルチーズハンバー

グ。

「ありがとう」

「ありがとね、恵美ちゃん」

「いやいや、仕事ですから」

恵美はお辞儀をしてから去り際に佐江に話しかけた。

「佐江ちゃん」

「何？」

「彼、恋愛経験豊富だから、キスの経験も多いんですよ？」

「おい——」

直人が何か言おうとする前に、恵美は厨房へ逃げていった。

「へえ、ファーストキスはいつなの？」

聴かれて直人は少し戸惑ったが、答えることにした。

「小5」

「相手は？」

「彼女」

「え！彼女いたの！今も付き合ってる？」

「ああ」

「うわ！すごく長い！」

佐江は驚いたような表情をした。

「どんな子なの？」

「…ちよつと待って」

直人は机に置いてあった携帯を開けて佐江に渡した。

「うわ！直人、なんか太陽の匂いがする」

「どんな匂いだよ」

「細かいことは気にしない。するもんはするの。直人全体から」

きつと、携帯を手に取る時に匂ったのだろう、その「太陽の匂い」とやらは。

「へえ、すごく可愛いじゃん！」

「だろ、君とは大違いだ」

「もう、さっきから思っただけど、あなたたまに人からかうよね？」

「からかうのは君だけだよ」

「ええ！なんでえ！？」

「さあ、なんでだろうね」

直人は誤魔化し、携帯を無理やり佐江からとった。

「君とは気が合うかもしれないな」

「会ってみたいなあ」

「今度デートするときに君も連れていってあげるよ」

「それじゃデートにならないじゃん」

「そうだな、と佐江のツツコミに応えながら携帯を閉じる。」

「キスは何人とした？」

「3人。そういえば、珍しい時もあつたな」

「へえ、聴かして？」

「いいよ」

ハンバーグを一口サイズに切り取り、口にほうばった後、直人は話し始めた。

「女の子が交通事故に遭いそうになって、助けたんだよ。その時、女の子からお礼につてキスされた。僕も女の子も中三だったな」

「なんか、ドラマみたいな話だね」

佐江はそう感じた。

「あっちゃんと優子は幼馴染なの？」

「うん、そうだよ」

直人は塩をかけたご飯を口に運ぶ。

「あ、辛い」

塩をかけすぎてしまったようだった。

「さえのはちよつと塩が足りないかな？」

第五十六話 久しぶりの味

「このハンバーグすっごくおいしいね！」

佐江が言った。

「それ、凄く分かるよ！なんかね、評論家が肉汁がなんちゃら……
って言いそうな程の美味しさだよ」

「ううん、具体的な例え来たね」

佐江が小さくツツコミを入れた。

「しかも、安いんだよなあ」

直人が美味しい料理を食べる子供のように、ハンバーグを口に入れた。

その時の直人の表情が、TVでは見れないほど無邪気だったもので――。

カチャ。

「え？」

「境直人のお宝写真ゲット！」

佐江が携帯の画面を直人に見せた。そこには、無邪気な表情をした直人がハンバーグを口に入れる写真が写っていた。

「あ、佐江！」

慌てて直人が携帯を奪おうとするが、軽く避けられてしまう。

「保存しとこつと」

「なんで!？」

「いやあ、面白いし、グーグルに流したら面白いことになりそうだし」

「いやあ、それは何が何でもやめといってもらわないと」

直人が右手を左右に振る。

「じゃあ、何してくれる？」

「何でもします」

「オッケー。私がもういいよっていうまでねえ」

やられた……と直人は後で気づいたのだった。

レストランを出て30分後。

直人は佐江に付き添う形で同行していた。何も知らない人が見れば、『熱愛発覚！』みたいな記事が新聞の一面に載りそうな光景だが、TVに出演する境直人を見ている人は、その光景を見ても友達と一緒に思うだろう。

「これなんかどう？」

「うーん、これはちよつと地味すぎるかな？」

今、2人は電化店にいて、佐江が買うウォークマンとイヤホンを探していた。

「直人はどんななの？」

「僕はウォークマンじゃないなあ。強いて言うなら、好きな色は青と黒だな」

「青と黒、ねえ……あんまりないよねえ」

佐江は白のウォークマンを手にとる。

「それ、容量もいいんじゃないかな？」

直人が佐江の持つているウォークマンを指差す。

「じゃあ、これにしようかな」

「じゃあ、それに合うイヤホンは……白でこれかな」

直人が別の商品棚から白のイヤホンを手にとった。その値段、実に2300円だ。

「これ、僕が買ってあげるよ」

「え？いいよ、別に。高いよ？」

「いいから、奢るって言っただけ？」

そう言っただけ直人は佐江の手をひいた。

「これとこれお願いします」

「かしこまりました」

レジ店員は女性で、直人を一瞥したあと、少し頬を赤らめていた。

（一体、どうしたんだ？）

直人の脳内で、一つ疑問が浮かんだ。

お金を店員に渡して電化店を出た。すぐ近くのベンチに座って直人がウォークマンの説明をする。

「さっきの店員さん、絶対あなたに一目惚れしたよ？」

佐江が説明を受けながら言った。

「え？そんなわけないよ。一目惚れなんてそうないよ」

直人がそう言った途端――。

「あの、すみません」

直人に、先程レジで会った女性店員が話しかけてきた。

「私、高校二年の真里菜って言うんですけど、もしよかったら、赤外線しませんか？」

その、テニスウェアが良く似合いそうなその真里菜は携帯を取り出した。

「えっと、いいですけど……僕、誰だか分かりますか？」

直人がそう聞いて、真里菜は直人の顔を良く伺う。

「あ！境直人君！？うわ！すごい！生で見たら死ぬほどイケメンじゃん！しかも私、年下に敬語使っちゃったよぉ」

ううーん、よくわからん。

「あ、えっと、どうぞ」

直人が携帯を取り出す。

真里菜は直人のメアドをゲットしておおいに喜んだ後、手を振って去っていった。

「佐江の言ったとおりだったじゃん」

佐江が肘で直人をつついた。

「そう、みたいだね……」

直人もいまだに信じられなかった。

第五十七話 F a l l i n l o v e a g a l e

その再会は、唐突に起こった。

今の直人は、最悪のタイミングだったのかもしれない。

宮澤佐江という同世代の女の子と2人で歩いているところを目撃されたら、恋人としては放ってはおけないのが当然だ。

第一、彼女はとても甘える性格で、それでいて凄く妬く子だ。きつと、ただでは済まないだろう。

「ナオオ！」

いきなり後ろから抱きつかれた。呼び方が多少違った気もするが、直人には確信できなかった。

「えっ？えええええー！？」

隣で佐江が奇妙な動きをして驚いている。

直人は全くこの事態を予想していなかったもので、少しよろめいた。予測できる人がいたら教えてほしいものだ。

「え？」

直人も声を上げた。左肩に抱きついた人物が顎を乗せるのが分かった。直人は慌ててそちらに視線を移すと――。

「なな！」

「えええええー！？」

直人の次に、また変なジェスチャーを繰り返しながら佐江が声を上げた。直人は強引にななを離して向き直る。ナオトの目の前に映るのは、正真正銘自身の恋人だった。長い髪を一束ねにした彼女はナオトを真っ直ぐ見据えた。彼女は可愛いピンク色のTシャツを着ている。

「どうして、ここに……？」

「もう！ナオが全然会ってくれないから、会いに来ようと思ったの！」

「うわああ……」。

直人は少し呆れるように息を吐いた。

「ちよつと、ここを見ていきたいと思つてみたら……超ラッキー！
！あなたに会つちやつた」

言葉の最後にハートマークがついていた気がする、と佐江は声を
出さず言つた。

「会わないうちにより一層格好良くなつてるう。さすが私のナオだ
ね！」

そう言つてななは直人に真正面から抱きついた。

直人は彼女を突き放すことが出来ず、結果応えるしかなかった。

「周りの人が見てるんだけど……」

直人は言いながら辺りを見回した。通行人の注目を浴びていた。
自分が境直人と気づいているのか確かめることはできない。

ちなみに、佐江もこの光景に釘付けだった。

「別に周りの視線なんかどうでもいいじゃん？」

「いや、それでも……」

「ええ……！？寂しいよお」

「近くにいないじゃないか」

さつきと同じように強引にななを離す。通行人何も見ていないと
いった風にその場を過ぎ去っていく。見ていた通行人の中に若干メ
ンバーがいたのは気のせいだろうか？

「あのお、私を置いてかないで……」

入るタイミングを逃さんとばかりに佐江が話しかけてきた。

「ナオオ、もしかして浮気い？」

ほら見る。今は可愛く聞いているだけだが、彼女の頭の中ではい
くつもの考えが過ぎっているに違いないさ。もうそれだけは確信で
きる。

「この人は、宮澤佐江だよ。僕がプロデュースするチームの1人だ
よ」

「へえ……宜しく！私、ナオの恋人の剣崎ななです」

「宜しく」

佐江とななが軽く握手をする。

「一応、佐江は僕たちより年上だからね」

「一応って何よ!？」

佐江がすかさずツツコむ。

「ナオがお世話になってまあす!もう、この人と一緒にいると、絶対飽きませんよ!？」

凄気迫で言われた。

「うん。直人すつごく優しいよ?」

「なんで疑問系?」

直人はそう聞いたが、無視されてしまった。

「じゃあ、私もう行くね?まだ仕事あるんでしょ?」

「えっと、うん」

直人は頷いた。

「会えて良かった。じゃあね」

そしてななは……軽く直人にキスした。

「うわあ!」

両手を頬に当てた佐江の表情はある意味凄かった。

「バイバイ」

手を振りながら、キスをしたななは去っていく。キスをされた直人はさも当然のように佐江に向き直った。

「自分で言うのもなんだけど、彼女は僕にベタ惚れかな?」

「まさにその通りだよ……あんなラブラブカップル見たことないよ
お」

「はは。それは褒め言葉なのかな?」

「でも、なんで嘘ついたの?」

そう聴かれて直人はななが去っていった方向を見た。スキップしているななが小さく見える。明らかに上機嫌だ。直人に会えたのが理由だろう。

「今は、距離を置きたいんだ。会いすぎると、別れる時に辛いから……」

「え？別れるつもりなの？」

「そういう意味じゃないよ。もっと、深い事情があるんだよ。そう、一言で表すなら『タイムリミットの時刻』かな」

「え？意味わかんない」

「だろうね」

佐江は明るく振舞っていたが、直人は知っている。自分は若いうちに死ぬのだと。30歳になることもなく、下手すれば20歳になることもなく死ぬのだと。だから、彼女に辛すぎる死に別れはさせたくないから……

距離を置いておく必要がある。

「そろそろ時間だね。帰ろつか。家まで送るよ。実は近くの駐車場にバイク置いてあるんだ」

「え？いいの？」

「ああ」

直人は佐江を連れて行く。

今のこの時間、短い時を有意義にするには、一つ大事なことがある。

大切なものを手放さないことだ。

第五十七話 Fall in love a gale (後書き)

英語の綴り間違えてるかな？
ちなみに、次話は回想です。

第五十八話 ゆきりんワールド？（前書き）

予告したとおり、今回は回想です。誰のスカウトかは、題で分かりますよね？

第五十八話 ゆきりんワールド？

鹿児島。九州地方の南側の県。

直人がここに来るのは初めてだった。九州で来たことがあるのは、離れた沖縄だけだ。

今日スカウトするのは、柏木由紀。聴くところによると、精神的にも肉体的にも弱い為、月の半分は学校を欠席しているらしい。AKBに入ること、タフになって強くなってほしいと直人は思っている。

今の学校にはお別れだが。

由紀は直人や敦子と同じ同年代。つまりは同じ高校一年だ。きつと話しかけやすいだろうし、好きな食べ物を差し出せば、高感度がアップするはずだ。直人はそう思って、夏の定番スイカを持って彼女の自宅に向かっていた。彼女は、スイカだけで生きていける自信があるほど好きだと聞いた。

直人は薄いピンクのシャツにジーンズというラフな格好をしている。精神年齢が大人であるため、今の直人はきつと由紀の異性のタイプにぴったりだろう。今の由紀に恋愛は興味ないと思うが。

ちなみに、直人は鹿児島弁には慣れていない。

「こゝか」

鹿児島県鹿児島市。柏木由紀の故郷。

チャイムを鳴らすと、結構早く1人の少女が出迎えてくれた。ジャージを着た由紀だった。少し古そうなジャージだった。

「え……ええええつええええ！」

途中で「っ」の文字が入るなんて、あまり見ないリアクションだった。

「や、やあ。君、受かったよ。これ、お祝いの品」

ちよつとリアクションに驚きながらもスィカを掲げた。

「うわ！ スイカ！」

由紀の表情はうつて変わって喜びに変わった。あまり喜んでいるようには見えないが、たしかに喜んでいる。喜怒哀楽がないのか？
「ウチ選ばれた！めっさ嬉しいがよ！」

「めっさ」とは「めっちゃ」ということだろう。

「とりあえず上がってがよ！」

直人は促されるまま家に入った。

それにしても、上手い具合になまってるな。こんなになまってるのか、鹿児島は。

「それにしてもお、かごんままで遠かったかんね？」

「うん、凄く遠かったよ。東京と鹿児島の間離って凄くからね」

鹿児島弁はちよつとわからん。

リビングに案内され、直人はソファに座るよう促された。直人はそのままの流れでソファに座る。

「なんで、ウチ選ばれたんで？」

「なんとなく？」

直人は即答した。由紀は少し驚いた表情をしたが、すぐに元に戻した。

「君、スイカ好きだったよね？」

「はい、めっさ好きがよ」

「あ、直人君って言うんだっけ？」

2人が会話を弾ませようとした丁度その時、ダイニングのほうから彼女の母らしき人物が現れた。

「お、スイカ？今すぐきつてくるがよ！待ってな！」

母は直人が机に置いたスイカを手にとった。

「でさでつかいがよ！」

そう言いながら母はダイニングに早歩きで向かった。

「良いお母さんだね」

「そんなことないがよお。うるさいし、めっさ学校行けとか言うし、ホント嫌なお母さんがよ」

「でも、大好きだろ？」

「……もう、何言わせてん！」

「まだ何も言って——」

由紀が何を考えているのか全く分からなかった。妄想、か？

「はい、切ってきたがよ」

母が切りとったスイカを皿に載せて運んできた。

「大人気アイドルなんだって？ がんばってるねえ」

「ありがとうございます」

直人はスイカを手にとって豪快にかじった。TVでの直人しか見たことがない人には珍しい光景だろう。

由紀はというと……綺麗に食べつくしていた。

「食べるの早」

直人は正直にそう思い、いつのまにか声に出していた。

第五十九話 瞳の奥には

その日の夜。直人が1人で住む家のリビング。いつもの風景が、そこにあつた。

少し違うのは、そのリビングに少女、あるいは女性が多く居ることだろうか。

「え？ほんとに？すっごあい！」

「それでね、その人が凄くおもしろくて——」
軽く見ただけで30人以上いることがわかる。実際には48人いる。

今日は、焼肉パーティーを開こうということで、たまたま会場が直人の家になった。主催者は、敦子と優子。古い洋館のリビングはとても広いため、多くの人を招き入れることができた。焼肉をするためのホットプレートは計五つ。彼のリビングはどれぐらいの広さか、住んでいる直人自身知らない。姉は教えてくれなかった。別に知ってても得することはないが。

ホットプレートの一つは外に置いてある。48人はさすがに人数が多いため、数人は外で食べている。リビングの窓のすぐ外はサンルームに繋がっているため、丁度良かった。で、その窓のすぐ近くにホットプレート一つ。さらにその奥にちらばって三つ群。

唯一心配なのが、金銭的問題だった。

「ああ、そろそろ食材がなくなっちゃうねえ」

優子が言った。ちなみに、優子はリビングの中央のテーブルに置いたホットプレートで焼肉を焼いている。直人や敦子もその団体にいた。ちなみに、優子たちがいるホットプレートに集まっているのは、3人の他に麻里子、たかみな、友美、佐江、才加、陽菜、みいちゃんの計9人。まさかこの9人のほとんどが未来、総選挙という大イベントでAKBのトップになるとは、誰も想像しりえなかったことだろう。

「後で買いに行かなきゃいけないな」

直人が残りの食材を調べる。

「もうちょつと後で、買いに行けばいいじゃん。どうせ近くにできたばっかのスーパーあるしい」

「もうそこへ二回買出しに行ってる気がする。それもどつちも僕」

直人が豚肉を焼く。

その豚肉もそろそろ底を尽きようとしていた。今はまだ7時半だ。

「一回目は、私がいたし、二回目は友美が行ったじゃん」

佐江が言いながら、直人が焼いていた豚肉を横取りした。

「あつ……」

直人が声を上げたが、すでに遅し。佐江は一口で豚肉を口に押し込んだ。

「おいし！」

佐江が喜んだ表情をする。直人は、返す言葉がなかった。優しい性格をした直人には、何も反論できなかったのだった。

「直人さんは、ずっとここに住んでるんですか？」

秋元才加が聴いた。彼女はチームKのキャプテンだ。聞いた話では、腹筋が割れているらしい。

「生まれた時からずっと、ここで育ったからね。中々、この家を手放すことができないんだよ」

直人は今度こそとばかりに豚肉を焼いたが、またとられてしまった。

「はい、豚肉はなくなりましたあ」

優子が言った。それに対して直人はガツカリというふうに項垂れた。

「私たちもお肉なくなりましたあ」

サンルームの近くの団体から美穂の声が飛ぶ。

「仕方ないな、買ってくるよ」

直人が立ち上がった。立ち上がる前に一つ口に放り込む。もちろん、それは今回のパーティーのメインである肉ではなく、野菜のに

んじんである。

「誰か、一緒に来てくれないかな？」

直人は声をかけた。すると、数名が挙手する。直人は一番最初に手を挙げた倉持明日香に頼むことにした。

「明日香、行こうか」

「はい」

直人は明日香を連れて我が家を出た。財布の中身が心配だ。

直人と明日香がいなくなっても、彼女たちの騒ぎは収まらない。

家は直人が音楽を聴いたり練習したりするので、壁は防音できるようにしている。なので、彼女たちがどれだけ騒ごうが、一応安心というわけだ。

敦子は、トウモロコシを食べていた。

「それにしても、あっちゃん良く食べるよね」

たかみなが興味深そうに敦子を見た。彼女は素早くトウモロコシを食べる。

「私、直人がお肉食べれなくて可哀想って思ったな」

「それ、私も分かるなあ」

そう反応したのはたかみではなく友美だった。

「直人さんって凄く優しい人だね」

「才加あ、実はそうでもないんだよ？」

悪いことでも考えてるような優子は箸を掲げた。

「彼、結構チャライよう。彼女いるくせに何人もの女の子口説いてるし」

「目合わせたら一目惚れされてるだけじゃん」

敦子がツツコミを入れる。

「彼女がいるくせに他の女の子にキスしてるし」

「多くは向こうから」

「……私にも口説いてきたんだよあ！」

「どうやって女の子を口説くのかやってみてって言ったのは誰だったっけ？」

「……あっちゃんはある、ツッコミ役しかできないのかな？」
敦子の言っていることは正しい為、優子には反論する言葉がなかった。

第六十話 三度目の買出し

焼肉や鍋のパーティーというものは人数が多い分買出しの量も多いのが当然だ。だから、直人1人ではきつと荷物が多いだろう。

だから、今回も1人連れてきた。倉持明日香。冬にさしかかりの11月終わり。別にパーティーは鍋でも良かったんじゃないかと思うが、焼肉ということになったため、財布の中身は急激に減っている。

「ナオミン、二の腕見せてくれない？」

「いいけど……吸わないでよ？」

「吸いませんよ、男の人なんだから」

明日香は人を独特な呼び方で呼ぶらしいが、直人のニックネームはそれほど珍しくもなかった。直人は「ナオミン」というニックネームを否定していない。それどころか、少し気に入っている。直人はいつも、「直人」か「ナオ」だったため逆に新鮮だった。ちなみに、つい最近までは「ナオミン」ではなく「ナオティ」と呼ばれていた。飽きっぽいのかなと直人は認識している。

直人は服の袖をめくることができなかった。

「これ持つてくれるかな？」

上着を脱いで明日香に手渡した。

シャツの袖が長いため、直人は仕方なくシャツを脱いだ。

「きやつ！」

明日香が小さく悲鳴を上げた。

「大丈夫だよ。シャツ着てるから」

「あ、そうなんですか」

めちやくちや安心されると、逆に気分が悪くなる気がするのはいか
のせいかな……？

「うわぁ、凄く硬い……」

「寒いから早くしてね」

直人が言った。

それにしても、耳たぶと二の腕が好きって、相当珍しいよなあ……。

「体つきが細いののに、筋肉がムキムキですね!」

「そんなに凄いな?」

「はい、凄いですよ」

2人の歩みが止まる。

「私の異性のタイプの髪型って、丁度あなたみたいに長い髪を後ろで縛ってるような人なんですよ」

「へえ、嬉しいなあ。じゃあ、告白したらOKしてくれるの?」

「いやあ、それはどうなんでしょう?」

2人は再び歩みを始める。

「後、私プロレスや野球が好きで、それを否定しない人がいいなあ。それはナオミンもそうなんだけど、ヒゲがないから……」

「明日香は大人の男性が好きみたいだね」

直人はそう言ってシャツを着た。明日香から上着を受け取って羽織る。

「そういえば、僕小橋健太さんと会った事あるんだよ」

「ええ! ホントですか?」

明日香がなんだか興奮したみたいな表情になった。

「どうでしたか?」

「晩飯一緒に食いにいかねえかって誘ってくれたんだよ。その日は、新人アイドルがゲスト出演、って感じでプロレスの会場に行ったんだ。そしたら、一緒に飯に食べに行くほど仲良くなっちゃって。歳は大分離れてるけど」

プロレスが好きな明日香にとって、小橋健太選手はとても好きな人だ。直人は明日香が喜ぶと思って今その選手の話をしたのだ。

「とても良い人だったよ。時間があつたら君にも会わせてあげるよ」
「ホント? 嬉しい!」

明日香が喜んでその場でびよんびよん跳ねていた。

「さ、着いたよ」

直人が指差す先に、スーパーマーケットがあった。

「財布の中身が心配だな」

「大丈夫ですよ。私のお財布には二万円が入っています」

「何でそんなに入ってるの？」

「私、出掛ける時は一万円は入れてないと不安なんです。何を買いたくなるかわからないし」

「それも分かるね。じゃ、野菜を買ってこないかな？肉は高いから僕が買つよ」

「はい」

直人は肉の商品が置かれているコーナーへ、明日香は野菜が置かれているコーナーへ向かった。

「豚肉がなくなったからな、ステーキも買ってやるか」

最近、他人に大して甘くしすぎているのかもしれない。

——お前は甘いから、俺に騙されるんだよ。

確かに彼の言う通りなのかもしれない。僕は彼に騙され、大切な物をオークションに出品されても尚、彼を信じた事を後悔していない。だから、また同じ事を繰り返してしまっただろうな……。

「……」

遠くにいる明日香を見る。彼女はとっても優しく、少しみんなとは違って、可笑しくなってくるような所が好きな女の子だけど、直人は彼女が好きだった。

「……甘えさせるのはいけないよな」

ステーキを取ろうとしたが、直人はすぐに躊躇する。だけど、皆の顔が脳裏に浮かんで、色んな思い出も、忘れ去った思い出も蘇っていく。

「……たまには、サービスもいいよな」

やっぱり、自分が他人に甘いのは仕方ない。だって、もうこの性格は変えられないのだから。

「明日香あ、決まったあ？」

大量の肉をカゴに入れて直人は明日香の元へ向かった。

第六十一話 パーティーの終幕

スーパーマーケットから戻ってくると、アイドルとは思えないような姿勢をとっている少女たちがいた。寝ている人までいる。

「これじゃ、ステーキは食えないなあ……」

直人が独り言のように呟く。すると、一斉に全員が体勢を整え、今か今かとステーキを掴み取る構えをした。

「最近の女の子って……」

呆れる。

「明日香、ありがとう」

直人が持っているビニール袋をキッチンに置く。その中身の大半は人数分のステーキだ。

明日香が持っているビニール袋もキッチンに置く。

「こんな時間にステーキ食べたら太ると思うなあ」

「女の子はいつも先のことで考えてるよ」

みんなを代表してか、麻里子が言った。彼女は最年長で、教師側という直人でさえ五歳年下という年齢差だ。……五歳差だっけ？

「ほら」

ステーキを皿に移し変えて5つの団体へ運んでいく。

みんながあつという間にステーキを焼いていく。一応、別の肉も買ってきたのだが、必要なさそうだった。

直人も優子の隣に座って自分の分のステーキを焼き始める。

ああ、上手そうだ……スーパーの安物だけど。

「美味しい！」

サンルームのほうから幸せそうな声が聞こえる。これは、宮崎美穂の声だろうか。

「お、僕のもやけてきたかな」

明日香が買ってくれた野菜を口にほうばってから、直人はメインのステーキを食べた。

「たかがスーパーのステーキで泣けてくるよ……」

直人は呟いた。いつも姉と二人暮らしで、この三年間は敦子や優子と過ごす日々だった。もちろん、ステーキなんて食べるチャンスなんか滅多にない。敦子や優子の家庭と一緒に食べさせてもらう時だけだ。

この半年間、スカウトの日々に追われてステーキなんて全く食べやしない。

「そろそろ終わり時だね」

「そうだねえ、ナオ君もお腹いっぱい？」

「ああ」

水を一気に飲み干す。

「さあ、片付けの時間だな。別に片付けとしかなくていいからなあ、でも、机の上は汚くしないでね」

そう言つて直人はソファに寝転んだ。

「ゆっくり片付けたいからさ、早めに帰ってくれるとありがたいかな」

直人がそう言つと、みんながそろそろと帰っていく。

「ホントに手伝わなくていいんですか？」

明日香が聞いてきた。彼女の気持ちはおおいに嬉しかったが、直人は首を左右に振った。

「大丈夫だよ。明日は結構レッスンきついと思うから、ゆっくり休んでね」

直人は微笑んだ。明日香も微笑む返すと、玄関へ向かった。

まだ残っている人がいる。敦子と優子だ。後、由依と麻里子がい

た。

「由依、夜行バスで帰るんだろ？良かったら、送るよ」

「え？いいんですか？」

「ああ、実はさ、僕が乗ってるバイクってサイドカーもつけられるんだぜ。しかも屋根もつけられる便利なサイドカー」

そう言いながら直人は立ち上がった。

「ナオ君、実は、年齢偽造してるんだよ？」

「え？」

優子の言葉に由依はぼかんとした。

「バイクの免許って、16歳からとれるんだけど、彼2月生まれだからまだ15歳なんだよね」

「駄目じゃないですか」

由依が言った。

「その通りだよ」

直人は答えた。ダイニングのカウンターに置かれた財布、携帯、バイクのキー、そして録音機を取り出す。

「サイドカーつけてくるから、待っててね。寒いから、屋根もつける？」

「てか、車で送ればいいじゃん」

「もしかして、ナオは車も持ってるんですか？」

由依が聞いた。その質問に対しては敦子が答えた。

「それはね、法律を無視したとかじゃなくて、特別に許してもらったの」

「どうやって許してもらったんですか？」

「……親戚のコネ、って直人は言ってたよ」

敦子は人差し指を立てた。

「ホントは直人君自身が年齢を偽ってるのかもね」

麻里子が呟いた。

「ただ忘れてるだけかもしれないよ」

直人はキーを眺める。バイクのキーはチェーンにつながれ、家やその他様々の鍵が吊るされている。その中に、親戚からもらった車のキーがある。

「僕、車の免許は持ってるけど、乗ったことはないからやめといったほうがいいよ」

直人は言った。

「というか、別にいいですよ。夜行バスで帰ります」

「お金がかかるだろ？」

由依の意見を遮った直人は、キーを振り回した。

「それに、家の片付けも……」

「敦子と優子がどうしてもやりたいんだって」

「そして私は助っ人」

麻里子が手を挙げた。

「じゃあ、頼むね」

直人は言いながら由依を家のガレージへ連れて行く。

あつたのは、どこからどう見てもポルシェだった。シルバーカラーだ。

「あの、これに乗るんですか？」

「検問につかまったら刑務所行きかな？」

直人が冗談を言って笑った。

「冗談に聞こえませんか……」

「大丈夫。車は運転できるさ。それと、バイクのサイドカーが良い？寒いよ」

「あ、車で良いです。でも……なんで免許なんかとれたんですか？」

「中学三年生の頃に、スポーツカーのレースに出場したんだよね」

元々はアイドルゲストとしてきてただけど、選手の1人が直前に足を捻挫。それを知らない観客たちをガツカリさせないために、僕が選手の変わりに運転したんだよ。そしたら見事に優勝したよ」

車のハンドルを回す仕草をする直人。

「僕の運転技術がそんなに良かったのかな？あまりにも凄すぎるから免許を獲得してもいいですよって言われちゃった。無免許運転で逮捕はされなかったよ。姉さんの殺人事件が影響で同情されただけかもしれないんだけど」

直人はポルシェのドアを開けた。

助手席に由依を座らせ、直人が運転席に座った。

「ちなみに、その選手が、僕の親戚だよ」

ポケットからあらゆる携帯端末を取り出して由依に渡した。持つ

ていてくれという意味表示が届いたのか、由依はすぐに持ってくれた。

「シートベルトOK?」

直人がハンドルを握る。

「じゃ、出発進行」

「きゃっ!」

予想を遥かに上回る速さだったため、由依はシートベルトにしがみ付いた。

ガレージを出たポルシェが急な角度でUターンして、時速限度ぎりぎりの速さで走り始めた。

第六十二話 心理的狀況（前書き）

今回は回想です。

時は、中学三年生時。

第六十二話 心理的状况

中学三年生。冬休み。

境直人は、住んでいる街の総合病院に来ていた。

彼は、定期的に病院に診察に来るよう指示されていた。彼の体の状態と、心の状態を調べるらしい。

「いいわよ、状態は」

直人を担当してくれているのは三十代後半の女性だった。戸森先生と言ったか。その人は、同級生の母親であつたため、すぐに打ち解ける事ができた。診察室にはその2人しかいない。

「はあ、無免許運転つて、よくする氣になつたものね」

「いや、お客さんを喜ばせなきゃと思つて」

「アイドルつて……良くわかんないわ」

戸森は直人の頬を引つ張つた。

「肌の状態も良いわね。ただ、いつ死んでおかしくないわね」

「もうちょつと優しい言い方はないんですか？」

直人は笑いながら冗談のように言つた。だけど、本当は恐怖に覆われている。

「遠まわしに言うよりはマシだと思つわよ」

「まあ、否定はしませんよ」

直人は俯く。そのまま質問を投げかける。

「後、何年ぐらい生きられますかね？」

その質問は、直人にとっては聞いてはいけない質問なのかもしれない。だけど、直人は知りたくて仕方がなかつた。

「……………」

戸森は、しばらく沈黙を続けた。その質問の答えが確実であるとは言ひ切れない。だけど、確立は高い。それでも、直人が聞きたいと望むなら――。

「早くて、一時間後ね」

「めちやくちや早いですね」

「いつ死ぬかも分からないって言ってるじゃない。もしかしたら今から一秒後に死ぬかもしれない」

「うっ……」

「死ぬフリはしないでいいわよ」

「あ、すいません」

最近、自分のノリが通じなくてショックな直人だった。

「ま、一時間後っていうのは確立低いけどね。一番確立が高い時を言っと、一年後だと思うわ。今の段階では、成人にはなれないって言う意見が多数よ」

「そうですか……」

直人は顔を上げることができなかった。それは戸森と向き合うことができなかったからか、確実に近づく死に向き合うことができなかったからか、どちらだろう。どちらにしても、目の前にあるものに背いている事には変わりはない。

「失礼します」

診察室にスーツ姿の男が入ってきた。

「直人君。無免許運転はいけないじゃないか。今回は君の心理状態が異常だったと言う事で処罰は受けなかったが、今度はそうでは済まないよ」

「色々とすみません」

現れたのは警察に所属している四十代前半の男だ。名を野村敬二と言う。名前で呼んでも、野村刑事と呼んでも呼び方に変わりはないのだからおもしろい。

「いつ死ぬか分からないということと、1人暮らしということとで同情したんだろう。警察の上層部の方が、君に特別に運転免許証を獲得する事を許してくれた。本当は18歳からなんだぞ？それにお前、バイクの免許証も年齢偽造して手に入れただろ。アイドルがそんなことして良いと思ってるのか？」

「思ってますよ。僕が良い子だと思いませんか？」

直人は顔を上げた。ベテラン刑事が来てくれたおかげなのかもしれない。

「じゃあ、今日はもう帰っていいわよ」

「ありがとうございます」

直人は立ち上がると、2人に頭を下げた。そして、顔を上げると同時に一言言う。

「たとえ寿命がつきても、僕は長生きしてますよ。ゲームはまだラスボスには到達していないから」

直人はそう言った後、静かに診察室を出て行った。

「可哀想な子だよ、ホントに」

野村敬二はベッドに座った。

「死んだ親との記憶は一切なし。唯一肉親だった姉はストーカーの異常行動により殺害されて死亡。その後すぐにアイドルとしてデビュー、か。いいリスタートじゃないか。それで不治の病がなければ最高だろうに」

野村は直人を我が子のように慕っていた。彼の両親が交通事故に遭って死んだ時から野村は直人を支えてきたのだ。親戚もいない、収入も少ない。だからこそ、野村も境姉弟にそれなりにお金を渡していた。

「彼のお母さんはとっても優しくかった。小さい頃、日本に留学して瞳の色のことでからかわれてきて、直人君にも同じ事が起こらないようにコンタクトをしてと言った。ホントに、優しいわよね」

「なぜ、弟の直人だけ瞳の色が青なんだろうな？」

野村が言った。すると、戸森が重々しく答えた。

「病気のせいよ」

「は？」

「彼の病気は生まれつきの障害。彼の瞳が蒼いのは、お母さんのDNAが原因じゃない。病気のせいで、瞳の色が黒から青に変色したのよ」

「おい、冗談言うなよ。そんなことありえないだろ？」

「彼にはありえることなの。現に、彼は一年前と比べて瞳の色が明るくなってる。決して錯覚じゃないわ」

「じゃあ、今も病気の悪化は続いているってことなのか？変色するって、そういうことなんじゃないのか？」

「その通り。彼の瞳の色が変色してと言う事は、病気が悪化してるってことなの」

病院の外。直人はバイクにまたいだ。

「なんで、目の検査までさせられたんだろ？」

そう呟きながら直人はバイクを走らせた。まだ乗り始めて一週間しか経っていないが、自転車に乗ってる気分だと、自然と慣れていた。

第六十三話 ガールズトーク

「さあ、片付け始めよっか」

麻里子が言った。ここは直人が1人で暮らしている部屋のリビング。いつもなら部屋のあちこちにスピーカーがあるが、焼肉の汁が飛んだら嫌だということで階段に詰めて置かれている。

「面倒くさいなあ」

優子はそう言いながらも、真っ先に食器をキッチンに運んでいく。その次に敦子も食器を運ぶ作業に入った。

「よし」

麻里子は服の袖をめくりあげた。2人が運んだ食器を綺麗に石鹸で洗っていく。キッチンは綺麗で、汚れなど一つもない。きつと直人は綺麗好きなのだろう。キッチンだけでなく、部屋全体が綺麗だった。入った時も清楚な印象が強かったことだろう。

「凄い量」

「48皿あるもんね。それに加えてご飯とかね……」

敦子が言いながら食器を積んでいく。先に帰った人はせめてに、とホットプレートのコンセントを抜いたり机を整頓したりはしていた。さすがに何もしないのは気が引けたのだろう。

「直人君って、何か隠してるの？」

「え？」

敦子が麻里子の横に来た時、麻里子は唐突に言った。

「なんで？」

敦子は尋ねる。一瞬、一病——という一文字の言葉が脳裏を過ぎった。

「なんかね、彼、いつも苦しそうなんだよね」

洗い終わった皿を敦子に渡す。敦子は受け取ると、食器専用の乾燥機に入れた。

「何かを抱えてるっていうか、人には言えない秘密をいくつも持つ

ているっていうか……」

麻里子は喋り続けた。そのどれもが予想であれ確実に合っていた。

「そうかもね」

後ろで優子が呟いた。彼女はサンルームの中の机を拭いていた。

直人が隠すこと。それは4つ。1つは、不治の病を抱えていて、いつ死ぬか分からないこと。2つ目に、その病が原因で記憶障害や情緒不安定な面が見られるということ。三つ目に、瞳の色がアクアブルーであるということ。そして最後に、1人の少女を殺そうとしたこと。

「彼が中学生の頃は、ホント大変だったんだよ。色々」

優子が少し大きめの声で麻里子に言った。敦子がうんうんと頷く。「彼、服がオシャレだよ。なんていうか、性格はたまに子供っぽいところあるけど、服装は凄く大人でカジュアルだよ」

麻里子はオシャレに非常に興味を持っている。直人もオシャレのセンスがあり、良く褒められていた。

「彼、たぶん過去に酷い事があったから、服装で誤魔化そうとしてるんだと思うな」

麻里子が呟く。敦子はその言葉を聞き逃さなかった。

「誰にだって、嫌な過去はあるよ。麻里子もあつたでしょ？」

「かもね」

麻里子は、過去には興味なんてなかった。

同時刻。

直人と由依の乗るポルシェはパーキングエリアに停まった。

たとえ夜でもそこには人が多い。だが、その時間帯はトイレには誰もいなかった。直人は洗面台で鏡に映る自分と対峙していた。

「はあ、なんて事思い出しちゃったんだろ」

直人は運転中に思い出さくない過去を思い出してしまった。記

憶障害が原因でずっと忘れていたのに、途端に思い出してしまった。そう、録音した音を聴くまでは。

直人は三年前の記録を消した。

その記録は、自身が発狂して、ある1人の少女を殺そうとした記録。

あの日の自分を、後悔した。他殺未遂で事件になりかけたあの忌まわしき記憶を葬りたい。あのは、彼が病気だと教師が学年生徒に告げたから、いじめやからかいは発生しなかった。だけど、問題は殺されかけた少女だった。

その少女に嫌われると思った。なのに、その少女は嫌うどころか、前にも増して彼のことを好いてくれて、愛してくれた。中一には不釣合いな言葉だけど、そこには本当の愛があったのだと思う。少女は己を殺そうした少年をどう思っていたのか、今となってはわからない。

「本当にごめんな、なな……」

今、直人は恋人を殺しかけた日のことを「暗闇の日」と呼び続けた。それは、今まで過ごしてきた人生にとって、最悪の出来事だったからだ。

第六十四話 夜

トイレから出てきた直人はベンチに座る由依を見つけるなり近寄っていった。

「ごめん、待ったかな？」

「いいえ、大丈夫」

直人に気づくと、由依はベンチから立ち上がった。

「飲み物でも買う？」

「いらないです」

「そっか。じゃあ車にいこっか」

2人はポルシェに向かう。直人は警察がいなかったと辺りを見回していた。事情を説明するのが面倒くさいのだ。

ポルシェに乗り込んだ。ガソリンはまだまだある。彼女を送り届けた後で入れれば問題はない。

「よし」

直人は一声かけてからポルシェを発車させた。やはり非常に早い。高速だと余計に早く感じる。車内では、いきものがかかるの ありがとう が流れている。

「YUIさんの時は、どうでした？」

「え？」

由依の質問に直人は小さな躊躇いを見せた後、

「正直、今と比べたら楽かな」

そう答えた。

「あの時は、まだ中学生だったけど、相手は1人だったからね。4人とはわけが違うよ」

そう、アイドルとして初の大仕事だった初ライブ直後に行った女性アーティストのプロデュース。YUIは、今大人気の女性アーティストだ。

AKBという名の大規模なアイドルグループも、いつしかトップ

になる日がくるのだろうか。冠番組なんかいくつも持つちゃったり会うことが出来ないぐらい有名になっていつて……会えなくなったらコンセプトの意味がなくなっちゃうよな。

由依はさらに別の質問をした。

「この車って改造でもしてるんですか？スピーカーの設置も多いし、車内に本棚もあるし」

ポルシェの後部座席には大きめのスピーカーが設置されている。さらには小さな本棚までも。

「この車、ダブルエンジン積んでね……二トロをガソリンに使ったこともある」

「……今も二トロ積んでるんですか？」

恐る恐るといったように由依が聞く。怖がるのも当然だ。二トロはすぐに爆発してしまう代物だ。

「大丈夫だよ、積んでないから。二トロは無免許運転した日だけ」

直人が冗談だとしても言うようにくすくす笑った。

「冗談ではすまないと思うんですけど……」

「はははは……それよりさ、敬語いい加減やめない？」

「喋り方なんて、すぐに変えられんよ……」

「変わってるじゃん」

直人は今度は小さく笑った。由依も続けて笑った。

これで場は和ませた。直人はそう感じた。

「後、三時間ぐらいだから、寝ときなよ」

「うん、そうする……」

先程から眠気が来ていたみたいで、由依はすぐに深い眠りに落ちていった。

「赤い夢へようこそ……」

直人は呟いた。この言葉は、推理小説の作者が言っていた言葉だ。ただ格好よく言いたかっただけで、別に何も深い意味はない。

直人にとっての決め台詞は、「ゲーム」という言葉を使った台詞と、ある恩師の言葉だけだ。

「僕のゲームは、もしかしたら彼女たちのゲームになるかもしれないなあ……」

無論、直人の言う「ゲーム」とは何のことか分からない。ただ、小さい頃から聞いてきた敦子と優子は、「ゲーム」という言葉は、彼自身あるいは他人の人生の事だと解釈している。

でも、直人はこの言葉をそんな小さな解釈では埋めていない。

この言葉の本当の意味を敦子たちが知るのは、まだまだ先になるだろう。

もしかしたら、直人自身、本当の意味を分かっているのかもしれないのかもしれない。

ふと助手席を見ると、ぐっすり眠っている由依の表情が伺える。とても可愛らしい。

「うぐっ……！」

急に怒った嗚咽。予告もなく襲いかかる吐き気。左手で口を覆い、右手でハンドルを握っている。

吐き気がおさまると、直人は口から手を離れた。

「おいおい……冗談だろ……」

掌を見下ろすと、血がべっとりとついていて。染み付くように、彼の左手は真っ赤に染まっている。

直人の視線がどんどん下へと向いていく。

だから、道路を逆走するトラックが迫ってきていることにも気づかなかった。

「……！」

気づいた時にはもう、トラックが目前に迫っている――。

直人は、間に合わないと思いながらもハンドルを勢い良く回した。スリップするような嫌な音が聞こえたかと思うと、ポルシェが勢いよくトラックに突っ込んでいった。

ポルシェの助手席では、由依はまだ眠ったままだった。

第六十四話 夜（後書き）

中学生の僕は、明日からテスト期間に入るので、しばらく次話の投稿はできないと思います。今の予定では、来週の金曜日に投稿する予定です。決して今週ではありません。

第六十五話 事故

死ぬ瞬間は、世界がゆっくり動いて見える。そんな話は良く聞くけど、実際はどうなのだろう。今、この瞬間に世界ははじけた。これが死ぬ直前なのかは、直人には全く分からなかった。視界がゆっくり動く。聞いた事は本当だったらいい。今、直人の視界に映るのは、夜空だった。車の前部分が小さな爆発で浮いた。その衝撃で由依も起きて「えっ？」という反応をした。

もうどうも出来ない。もし、無傷で生きることが出来たら、必ずあのトラックの運転手のせいにしよう。大丈夫、プレートははつきり見て覚えている。

―だが、今僕がやるべきことは、助手席に座る少女を護ることだ。

直人はとっさに腕を由依に伸ばした。きつと、衝撃は強いはずだ。直人はとっさに由依を抱いた。シートベルトがちぎれんばかりに体を仰け反らせ、前から来る衝撃を由依に出来るだけあたえないようにしようとした。それが、今彼が出来る唯一の事だった。

前の二つのタイヤが地面についた。その瞬間、凄まじい衝撃波が2人を襲う。だが、悲劇はそれだけではなかった。

2人が乗るポルシェはぶつかった場所で止まったが、相手のトラックがスリップするように回転したのだ。さっきはトラックの正面前にぶつかったが、今度はトラックの後ろ側がポルシェにぶつかったのだ。当然、その反動でポルシェも回転することになり、そして最後にはまた運転席の近くにトラックの壁がぶつかった。運転席に乗っていた直人は由依を護る事に精一杯で、自分を護ろうなどとは考えていなかったのだ。アクション映画さながらに運転席のガラス窓が盛大に割れる。ブルース・ウィリスはこんなシーンをどう演技していたのだろうか？と直人は冗談めいた事を考えていた。いつまでもマイペースだ。

だが、そんなマイペースな心境も変わることになった。ガラスの

破片が背中に突き刺さったのだ。白いシャツが真紅の色に染まってい

く。

「うぐう！」

薔薇が流れるようだ。直人はそう感じた。
トラックに横からぶつかったおかげでもうスリップするようなことはなくなった。だが、車はもうボロボロだった。そこら中に穴が開いている。

「大丈夫？」

直人は由依に聞いた。二人の顔は鼻先が触れ合うぐらいの近さだった。だが、いやだからこそ、由依には直人の疲労の表情が見えた。だけど、直人は何事もなかったかのように微笑んで――

「もう、安心していいよ。僕が、護る……から……」

直人の瞼がゆっくりと閉じられていく。

直人が由依の胸に顔をうずくめた。気を失ったみたいだった。直人が装着していたシートベルトはもう千切れていて、背中には大量の出血が見られた。

「え？……なに……？」

由依は、この状況に理解できず、混乱状態に陥っていた。いや、理解したくないのかもしれない。

いつか自分にとって大切な恩師になるであろう少年が、大怪我を負って気を失ったのだから。

――数時間後。午前3時15分。ちょうど、事故を起こした場所が良かった。事故現場200mさきに、高速道路を降りられる道があり、さらにそのすぐ近くに総合病院があったのだ。幸い、由依は軽傷で、トラックの運転手も軽傷だ。由依が軽傷で済んだのは、直人が必死で護ってくれたおかげだ。その代償は少し大きすぎたかもしれない。

午前3時16分。直人の手術が終わった。背中に大きく傷口があ

つたため、それを縫っただけで手術は終了した。あとは打撲や擦り傷だけだ。

「っ……………」

直人が目を覚ますと、視界に白い天井が映った。

直人は状態を起こす。自分はベッドに横たわっていたようだ。左に点滴が見られる。左腕に針がささっている。きつと点滴につながっているものだ。直人はそれをむしりとった。ゆっくりとベッドから降りていく。

「まだ安静にしてなさい……………」って言っても無駄なんだろうね」

病室に、直人の古き友人であり、直人が信頼できる医師戸森先生が入ってきた。

「ほんとにもう、どうしてこう他人のことしか考えられないのかね。まず自分のことを考えないとだめじゃない。病気のことだってあるのに」

「そういえば……………僕の私物は？」

「ラッキーが重なったわね。すべて無傷よ。多少は傷とかが残ったけどね」

戸森が一つの机を指差した。今まで気がつかなかったが、その机には録音機、携帯、I p o d が置かれていた。

「はあ……………ゲームってのは、時にゲームオーバー直前までいくけど、結局ゲームオーバーにはならないんですね」

「いつも思うけど、あなたの言うゲームって何？」

「……………現在と未来……………そして、自分かな？」

「何それ？良くわかんないわよ」

———そんなの、僕にだってわかんないよ。

第六十六話 その後

「ほんまにもう大丈夫なんですか？」

由依が尋ねた。尋ねられた相手は由依に向かって微笑む。

「ああ、もうこの通り、元気サマサマさ」

直人は右腕を勢い良く叩いた。

「……」

「顔が引きつってますけど？」

「なんの、なんの……」

ここは、長野県長野市の総合病院にいる。境直人という名のアイドルが運び込まれた場所だ。

午前十時十一分。由依は、京都へ帰ることもできた。だが、直人を看病し続けた。手術から立ち直った直人は医師の反対を押し切って引退したのだが――。

「あちゃあ、こりやおじさんに怒られるなあ」

直人は体中に包帯を巻いての引退となった。傷口がいつ開くのか分からない為、近日行われるダンスライブは当然中止だ。直人はそれでもやりたいのだが、2人のマネージャーがそれを許さない。

直人は白いYシャツを着ているため、中の包帯は丸見えだ。しかも、ポルシェに入っていた高校の制服だ。ちなみに、袖を肘までめくるのが直人のスタイルだ。

高速道路で起きた事故がニュースで放送されるにあたって、目の前には取材してきたスタッフが数多くいる。その群れの奥には、つぶれたポルシェがあった。

「ええ、まあ、非常に残念なのだが、僕の手が修理できないぐらいに粉々になってしまったことですね」

記者の質問に答える直人。

「女性の方は無事なのですか？」

「ええ、軽傷で済んだので、ほんとによかったです」

「また、人を救いましたね」

女性記者が言いながら録音機を直人に向けた。

「また、かあ……今回も僕が護ったわけじゃありませんよ。それに、前だって、たまたま僕があの場合に居合わせただけのこと、中学生だった僕には全然勝てない相手でしたし」

記者がさらに詰め寄る。

直人は、困り果てた表情をしていた。

「すごいですね、有名人は。あんなにカメラがあつて」

「全然凄くないよ。業界にはもつともつと凄い人たちがいるんだから」

ようやく記者達から解放された直人はポルシェの前にいた。その隣に由依が立っている。

「記者さんが話してたんで、あんたが中学生の時に有名人を助けた事？」

「ああ、そうさ」

今から二年以上も前の事。アーティストとして知名度が上がり始めていた頃、初めて俳優活動のスカウトが来た。ある恋愛映画の主人公に抜擢され、その頃の直人は演技に集中することしか考えられなかった。そんな時だった。先輩役として共演することになった女優（言っちゃうと夏帆さん）が襲われたのだ。その場に居合わせた直人が、襲った男に掴みかかったのだ。さすがに、相手は成人男性であつたことから到底敵わなかったが、その行為が日本に高く好評された。

「僕は人に褒められるのがあまり慣れてなくてね。それより、このポルシェどうしょ」

直人が自身の愛車に手を添える。
冷たかった。

「トラックの運転手さんはどうやって逆走したんやらね」

「さあ。とにかく、酔っ払ってみたいだね。まあ、いいよ。反省してくれているみたいだし、弁償もしてくれたから」

「え？もう？」

「あの人、最近宝くじあてたらしいよ」

「わあ、すごい」

あまり凄いと思っっているような感じではなかったが、そこは由依の優しさとして受け取っておこう。

とりあえずは、由依を京都に送らなければいけないことにある。

「ごめんな、学校行けなくて」

「大丈夫です」

由依は微笑んだ。いや、微笑んでくれた。

第六十六話　その後（後書き）

今日から、別に、『AKB48外伝』を創作したいと思います！
その小説では、境直人の過去をメインに様々な物語をお届けしたい
と思っています。短編風です。たまあにしか投稿しないようなもの
なので、皆さんお気軽に読んでください。

第六十七話 言葉の意味

今日はほんとに散々な日だったと、境直人は溜息をついた。

直人は今、由依と共に京都の、彼女の家にいる。

たった今、彼女の母親に頭を下げた所だった。相手が飲酒運転をしていたからとはいえ、直人には由依を傷つけた責任がある。

「僕は、とても大きい罪を犯してしまいました。本当に、申し訳ございません」

「いいのよ、別に」

由依の母は、叱咤激怒することもなく、ただただ2人の無事を喜んだ。なぜ、僕が無事だったことまで喜んでくれるのだろう、と直人は疑問に思っていた。

「ほんとにごめんね。今日は、怪我は大丈夫？」

「大丈夫だよ。ただのかすり傷なんやしい」

「それでも、僕は心配で仕方がないよ」

「……優しいんやね」

「え？今、なんて？」

「なんでもありませんよ」

言ったのが少し気恥ずかしかったのか、由依は話を逸らそうとした。

「僕、そろそろ帰らなきゃ」

「どうやって帰るんですか？」

「マネージャーが迎えに来てくれたんだよ。じゃあね」

「バイバイ」

直人は由依の元を去っていく。

由依に背を向ける直人。

「優しい……か……」

そんなことは良く言われるけど、いざ正面から言われるのは本当に久しぶりで、慣れてなくて――。

少し、照れくさかった。

だが、そんな甘い考えはすぐに吹き飛ばされることになった。

直人は新幹線で東京へ帰ったため、夜の七時に帰ることができた。丁度レッスンが開始された時間であったため、直人はすぐにドン・キホーテへ向かうことにした。

だが、そこで目の当たりにしたのは、ろくに踊れていないメンバーの姿だった。

今日は夏まゆみが急用でいないため見ている人がいない。だから、一生懸命やっている姿が、いつもと違う気がした。

これじゃあ、いつまで経っても舞台には立てないじゃないか……。

しかも、ステージ上で練習しているのは二十人ほど。他の者たちは、ステージの端で喋りながら適当に大切な時間を潰している。

—だからお前は甘いんだよ。

騙されたという過去と向き合いつつ、今の自分を未来へと繋げた。そのはずだ。何度騙されても自分の性格を、精神を、意志を曲げずにやってきたのに。

彼の甘さは、どこまで行っても辛くなることはなかった。

「——おい！」

劇場スペース全体に響き渡るぐらいの怒声を、直人はあげた。その場にいる少女全員が直人を見た。外で作業をしていたスタッフも思わず動きを止めた。

「そんな練習で、何が出来ると思ってんだ！ ああん！？」

思わぬ直人の怒声に、少女たちは声を張り上げることが出来ない。「お前からしたら一生懸命やってもなあ、こつちからしたら……」

……だらだらばーっとしているようにしか見えねんだよ！」

直人が一つに束ねた後ろ髪を揺らした。

ここには由依はいない。良かった……こんな自分を見せたくない。

「そんなダンスしかできないんだったら、家に帰れ！」

直人は出入り口を勢い良く指差した。

「お前らに、ステージにたつ権利はねえ！もし、立ちたいんだったら、死ぬ気で踊るしかできねえんだよ！お前に、そんな覚悟なんかこれっぽちもみえねえ！」

直人はその言葉を最後に、劇場を出て行った。

その後、みいちゃんが直人の言葉に相当なショックを受けたのか、泣き出してしまった。

彼女だけではない。直人の幼馴染である敦子も、麻里子の胸に顔をうずめて泣いていた。他に大勢の人が、涙を流していた。

それもそのはずだ。優しく、頼りになって、みんなの味方になってくれる人。そんな人が、いきなり皆に罵声を浴びせたのだ。ショックを受けて当然だ。

「どうして、こうなっちゃうんだろ……」

敦子が麻里子の胸の中で呟いた。麻里子は彼女の頭を優しく撫でる。

「きつと、私たちの事を思ってたんだよ」

「違うよ！」

麻里子の言葉を聞いて、みいちゃんが叫び声をあげた。

「きつと、私たちのことがどうでもよくなったに決まってるよ！後一週間しかないのに、私たちが全然できてないから……」

みいちゃんの言葉を、誰も止めることができなかった。

哀しみを押さえきれず涙を流すのは彼女たちだけではなかった。

劇場を去った直人は、すぐ先の廊下の壁にもたれかかると、そのまま尻餅をついた。

「チキシヨウ……なんてひどい事を言ってしまったんだ、僕は……」
直人は顔を両手で覆った。

「今頃、みんな僕の事を罵ったりとかでもしてんのかなあ……まあ、

当然の報いだよなあ」

指が彼の瞳をなぞる。

「瞳の色なんて、なんでいちいち隠さなきゃいけない……！」

目の前にあった椅子を直人は勢い良く蹴り上げた。椅子は勢い良く回転して、廊下一体に物音を響き渡らせた。

直人は、両目のカラーコンタクトをとった。彼の真実の色が姿を現す。

アクアブルー。深海の色。呼び方は様々だ。だが、今の直人にとって、自分の瞳の色は、暗闇の色としか思えない。

実際、直人は、彼女たちにあんな酷い言い方をするつもりはなかった。だけど、彼女たちのことを思うと、自分の甘さがいけないのかと……心の中で、大きな不安が生じて、その結果、彼女たちを内側から傷つけることになってしまった。

もう、後悔しても遅い。

「僕は……プロデューサー失格だよ……」

直人が呟く。

泣き続ける直人へ、1人の小太りの男が近づいてきた。

彼の恩師である、秋元康だ。

直人は、康を見おうともしない。

「なぜ、僕をこんな大役を選んでんですか……？」

「それは、君が境直人だからだよ」

康が発した言葉はそれだけだった。

その言葉の意味なんて、分かりたくもなかった。

第六十八話 独りの絶望（前書き）

前半は回想、後半は現在です。少し重い話になります。

第六十八話 独りの絶望

中学二年生の頃。

自殺なんて、所詮は馬鹿がやることだと思っていた。苛めとか、家庭問題とか、理由は色々あるだろうけど、とにかく自殺なんて行為は……ただただ現実に顔を背けているだけだと思っていた。

だが、自殺の理由はそんな甘ったるいものだけじゃない。

僕は知った。過去に二つの自殺未遂を経験して。

——私なんて、どうせいらぬよお！

小学六年生の頃に、父親からの虐待を受けて酷く怯えていた女の子がいた。その女の子は、自分がいない存在だと想いはじめ、小学校の屋上から飛び降りようとした。その場に居合わせた僕は、とにかくとめなきゃと思ったんだ。だけど、彼女の辛い想いが僕に飛んできて……。

立ちすくむしか出来なかった。

結局、女の子は自殺を思いとどまったが、それから僕はずっと、ある恐怖に包まれてしまった。

もし、姉さんが自殺してしまつたら——。

両親のいない生活に苦しみを感じて、僕を置いていなくなつてしまつたら——。

そんなの、絶対嫌だ！

でも……姉さんの未来を決めるのは、姉さん自身だ。姉さんが自殺したいのなら、僕に止める権利はない。それは、女の子もおんなじだけ。

境直人として、舞台に立ち始めた僕だけでも、結局は本当の自分を隠すためにやっているにすぎない。

アイドル。

人を喜ばせる仕事。誰もが幸せに感じられる歌を届ける役目。

僕は、何のためにアイドルをしている？

人を喜ばせたいから？それとも、歌いたいたから？
いいや、違う。

僕は、僕が怖いんだ。本当の自分が怖いんだ。発狂した時みたいに、皆を傷つけてしまいかもしれない。いつ頭がおかしくなるかも分からない上に、いつ死んでもおかしくない。情緒不安定と言われるかもしれないじゃないか。

歩き出す、屋上を。

僕は、今何をしようとしているんだ……自殺？いや、違う。父さんと母さんに、姉さんに、会いに行くんだ。

家族に会いに行く。それだけだ。それだけ。

ああ、本当に、それだけなんだよ。

だから、構わないでくれ……敦子。

「何しにきたんだよ……」

「愛奈ちゃんとは……違う理由でここにいるんだよね？」

敦子が尋ねる。直人は敦子に背を背けたままだ。

「自殺なんて……しないよね？」

「ああ、しないさ……ただ、父さんと、母さんに……」

それ以上は、言葉が出ない。

「駄目だよ、そんなことしちゃ。もう、戻ってこれなくなっちゃうよ」

敦子が僕に歩み寄る。

「近づくな！」

いつのまにか怒鳴り散らしてしまった。

敦子は、何も悪くなんかないのに。どうして、こうになってしまうんだろう――。

「なあ、いいだろう。ちょっとぐらいさ……」

僕のズボンのポケットから、錠剤の入った小さなビンが地面に落ちていく。

僕は、そんなこと気にもしない。

ただ、ただ、飛び降りれる場所に向かっていく。

「待つて！」

後ろを振り向かなくても敦子が走ってくるのが分かる。敦子は僕の左手を掴んで引く張る。

「何すんだ……」

左手を引く張られて僕は振り向く形となった。

敦子の表情を伺う。彼女の頬を、一筋の涙が伝っていた。

「ごめん……」

謝った。きつと、彼女が泣いているのは僕のせいだ。

ななも、泣いてくれるんだろうか……？

いや、それよりも……。

僕の脳裏を、優子が過ぎった。彼女は、敦子と同じ幼馴染で、とても明るくて、優しく……とても、とても……。

なんで、そこまで優子のことを考えてしまうんだ……。

好きなのか？僕は、彼女のことを……いや、僕にはなながいるじゃないか。

「ねえ、行かないよね？」

——ああ、行かないさ。

そう言いたい。言いたかった。

だけど、今の僕には言えない。言いたくても、言えないんだよ。

「それは……」

僕は口ごもる。やっぱり、言えない。言えそうで、簡単には言えない。

「僕には、死ぬ資格もないのかな？」

本当に、その通りなのかもしれない。

ようやく、直人は立ち直りかけていた。

とつくに廊下でうずくまるのはやめているし、今いる待合室で直人はいつもと同じ動作を行っている。

「人って、難しいよなあ」

「お前はここで何をしている」

直人の目の前で、黒のパーカーを来た当麻が座っている。暇そうに机をつついていてる。

「お前さあ、何やってんの？」

「だから、こっちの台詞だつて」

当麻は直人の言葉を無視して話を続けた。

「女の子は泣かせちゃ駄目じゃん」

「分かってるけどさ、この状況は、僕の甘さが原因だと思うんだ」

「ああ、その通りだ」

「え？」

あつさりと肯定されて、直人は少し驚いた。

「だがな、いきなり厳しくすんのもどうかと思うぜ？女つてのはな、傷つきやすいんだよ。特に、お前みたいな優しくて、イケメンで、何においても完璧なやろうはな」

「妬いてんの？」

「んなわけねえだろうが」

当麻は少しご立腹のようだ。

「ありのままのお前でいる。それが、一番お前にとって良いことだ」
「そうかなあ」

直人は少し否定するような言い方をしたが、実際はそうでもない。

あの日、自殺しようとしたあの日。あの日に、僕は誓った。

もう、誰も哀しませないと。なのに、泣かせちゃったじゃないか。
ありのままの自分。それは、バスケに夢中で、歌に夢中で、隣には、大切な人がいて。

そんな自分が、僕の、ありのままなのかもしれない。

第六十九話 デビューに向けて

公演グラントオープンまで後5日を切った。そろそろ、非常に焦らないといけない。

「当麻……僕は、どうしたらいい？」

「知らねえよ」

即答だった。もうちょっと考えてくれてもいいと思うんだが。

「謝ったほうがいいのかなあ……」

「それが、甘いつつてんだ」

確かに、その通りだな。僕だって自覚はしていたさ……だけど。

直人は立ち上がった。

「ちよつと気晴らしにドライブでもしてこようかな」

「バイクで秋葉原ん中でも走んのか？」

「かな」

「やめとけて。歩けよ。俺もつきやってやつから」

「そう？じゃあ」

直人は机から携帯と録音機を取った。

「あのさあ、そんな記録ばかりつけてもさあ、意味ないと思うんだよな」

「なんで？」

「お前が忘れたくないと思えば、記憶は失われなと思うぜ」

「……僕のゲームも、たまにはそういうのもありかな」

直人は微笑んだ。

当麻は、直人の秘密を知る数少ない人物だ。

彼の秘密を知るのは、ななと敦子、優子、それに愛奈や2人のマネージャー、そして当麻だ。他に知っている人がいるのかもしれないが、もう直人には思い出すことができない。

「お前のゲームは、きつとまだまだおもしろくなるぜ」

当麻が言った。彼は、軽い性格で、周囲にとけこみやすく、人

をからかうのが好きな奴だけどいざつてなると格好良くなる。誰よりも、格好良くて、目立たないところでみんなの役に立っている。直人だってそうだ。いつもはただの友人関係だけど、実はずっと助けられてる。最初のライブの時だってそうだ。緊張して足がすくんでいた僕を勇気付けてくれたのは、当麻だった。

それだけじゃない。初めて……死ぬことではなく、記憶を失うことに恐怖を覚えた日。僕を殴ってまで激怒してくれた。自殺しようとした日も……。

「よし、さっそく行こっか」

直人が待合室のドアを引いた。途端――。

「うわあああ！」

「ちよっ！」

優子と敦子が倒れてきた。直人は何とか2人を抱きとめる事ができたが……。

「感心しないな。立ち聞きは」

少しお怒りのようだった。

「いつから聞いてたんだい？」

「うーんと、20分ぐらい前から」

ほとんど最初っからじゃん。もしかしたら廊下で泣き崩れてるところも見られてたのか？

「ごめん、立ち聞きしていて」

優子が言った。泣き崩れているところは見られていないらしい。

もし見られていたなら、きっとからかいのネタにされていたことだろう。

「大丈夫だよ、もう怒ってないから」

別にそんなことを聞かれているわけじゃないが、直人は言わなくちゃと思った。

「ごめんな、急に怒鳴ったりして」

何度甘いと言われても、やっぱりこの気持ちはどうしようもできない。きつくあたってもしょうがない。それだけは分かっていたこ

となのに、僕はなんて馬鹿なんだろう……。

「あれ、直人がおかしくなっちゃったって思ったじゃん」
敦子が安心したように言った。

「ほんとにごめん」

直人は深く反省しているつもりでいた。

その想いが2人に届いたどうかはわからない。

「お取り込み中悪いけどさあ、早く行こうぜ直人」
当麻が直人の肩を叩く。

「ああ、ごめんごめん。それじゃあ、敦子、優子。僕たち2人は散歩してくるから」

「こんな夜中に？」

「ああ、君たちは練習の終了時間までしっかり練習しといてくれたらいいから」

そう言い終えると、直人は当麻と共に外に繰り出した。

「ナオ君、最近変わった？」

「かもね」

待合室に残された二人は、劇場へ戻っていく。

劇場では、全員が全員レッスンを続けていた。

直人の言葉が大きく影響を与えたのかもしれない。彼女たちの表情は、今までと違った。絶対に、諦めないという……決意のこもる表情だった。

「私たちものんびりしてられない、行こう優子！」

「そうだね！」

2人は勢いよく舞台上上がっていく。

第七十話 散歩

秋葉原はやっぱり人混みが多い。いつ歩いてても。

直人は当麻と共にその人混みの中を歩いている。当麻は本当良い奴で、直人の良き親友で理解者だ。

「なあ、YUIさんとは最近会ってないのか？」

「いつも同じ質問ばっかするなよ」

当麻は相当なYUIのファンで、会わせた時は嬉しすぎて号泣しながら握手したぐらいだ。

YUIは直人のおかげで今大人気アーティストとして活動しているが、実際は直人はYUIよりも年下であり、直人はYUIに偉そうな事は言えない。

だけど、直人は彼女に敬語を使っているわけではない。直人とYUIはとても良い仲だ。それは当麻が敦子たちが一番良く知っている。

その2人の仲を快く思わない者も何人かはいるが……。

「僕たち、どこ目指してんだ？」

「さあな」

行き先なんてない。目的地なんてない。

行き先なんて、目的地なんて、今の僕たちには必要ない。

そっぴうのが、散歩つてもんだろ？

「どっかに可愛い女の子いねえかな？」

当麻が言った。直人は呆れたと言うように溜息をついた。

「僕の傍でナンパしないでね。ナンパなんてもつてのほかだよ」

「そんなのは、モテル奴しか言えねえ台詞なんだよ」

やきもちを妬くように当麻は言った。

自分はモテないという風に言っている当麻だが、直人は知っている。彼に好意を寄せる人物を何人も。表では普通の男子生徒だが、当麻の親友である上に恋人のいる直人は良く相談されるのだ。どう

やったら当麻の恋人になれるのか、と。

「ゲームの舞台には絶好の場所だな」

直人は呟いた。

「お前、最近の仕事どうしてんの？」

「仕事はほとんどキャンセルだよ。平日の昼時に多くの仕事をこなすことにしてるから、ここ一ヶ月は学校に行ってない」

「辛いよなあ。友達に会えないってのは」

そう言いながら当麻は親指で自身を指差す。

「そうだね、愛奈に会えないから寂しいな」

「俺はどうしたんだ！？」

当然、当麻は怒ってしまった。

「愛奈に手だしたら俺がゆるさねえぞ！」

当麻が勇ましく叫んだ。周囲の通行人が数人こちらを振り向いたのは気のせいだろうか？ いや、気のせいであることを願おう。はつきり行って今の発言を叫ばれるのは恥ずかしい。

「大丈夫だよ、僕にはなながいるから」

「最近希ちゃんとも会ってるだろ？」

「かもね」

実は、当麻は愛奈に好意を寄せている。それはもう、YUIへの過剰なファンとしての愛情みたいに。

だけど、それは残念ながら片思いだ。愛奈の想い人は……言ったらナルシストみたいじゃないか、やめておこう。

「希ちゃんは清楚だけさあ、浮気はいけないぞ？」

「浮気なんて、してないだろ？ しかも、あんなドジの何処が清楚なんだよ」

「浮気するかもしれないだろ？それに、AKBのメンバーと仲良いだろ、お前？誰だっけ……あのお、横山とかいう奴」

「由依のことか？」

AKBのメンバーで横山と言ったら彼女だけだ。

「お前、あの横山とかいう奴とななちゃん重ねてるだろ？」

「……さあね」

正直違うと断言することが直人には出来なかった。

「しょうがねえよなあ。最近ななちゃんと会うことできてねえし。しかも、ななちゃんと横山結構顔似てるしな」

「それでも、浮気はしないさ」

「そうだろうよお。お前はそういう奴だ」

確かに、由依とななは、どこか表情が似ていて……雰囲気と同じだった。

それでも、ちゃんと区別はつけている。どれだけ雰囲気似ていようとも、表情が似ていようとも、由依は由依でななはななだ。

「俺あ、都会の夜空は嫌いだな」

当麻がいつのまにか夜空を見上げていた。ちなみに、挑発の直人に対して、当麻は短髪であるため非常に対照的だ。だけど、2人の心は堅い絆で結ばれている。それはもう、ドラマみたいにどうしようもなく厚い。鎖でつながれた関係だ。

「僕には、分からないな。夜空の違いなんて」

直人は言った。

「……嘘だな」

「まあね」

直人は微笑んだ。

当麻の出身は、東京から遠く離れた鳥取県だ。彼は音楽が好きで好きでたまらなかった。だから、ボーカル兼ギタリストとして音楽界に行きたかった。父の転勤で東京に来た時、当麻は出会った。若いアーティストとして音楽界に躍り出る少年と。

同じ音楽を愛する少年たちはたちまち前向きに音楽を始めた。愛奈というメンバーと共にバンドを結成し、いつしか、直人だけが音楽界でデビューしたのだ。

――所詮、俺たちは直人のバックなんだよ。

昔、当麻は愛奈にそう言ったが今はそんなことこれっぽっちも思っていない。

直人のバックだとしても、必ずあいつの歌を成功させる。
それが、今の当麻の願いであり、目標だ。

「なあ、当麻」

「うん、なんだよ？」

「俺もさ、姉さんみたいにストーカーに殺されちゃったりするのかな？」

「何がいいたいんだ？」

「……つけられてんだよ」

直人と当麻がゆつくりと、確実に後ろを振り向いた。

人混みの中、静かに2人の後をつける男が1人――。

第七十一話 追跡者

「おいおい、冗談だろ？」

当麻が焦る表情をしていた。後ろにいる男は、確実に自分か直人、あるいは2人をつけている。高い確率でつけているのは直人の方だろう。当麻は、ここで逃げても男には追われないだろう。

「どうすんだ、直人？」

「どうするもなにも、今は夜だし……路地裏にでも入ったら明らかに問題がおこるよな」

当然の事だ。後ろにいる男は肩幅が広く、非常にがつつりした体格だ。

「もしかしたら、包丁とかもってるかもしれない。俺が確かめてくるよ」

当麻が振り返ろうとした。直人は静かに彼の腕を掴んだ。

「やめろ、そんなことは絶対にやめろ」

「大丈夫だって——」

「何かあったらどうすんだ？」

当麻は腕に痛みを感じた。直人の手は握りが強くなっている。

「やめてくれ、お願いだから。これ以上、誰も失いたくない」

「そんな大袈裟な——」

そこで、当麻は言葉を閉ざした。直人の鋭い眼差しを正面から見たからだ。

自身に怒りを表しているような眼差しだが、微かに涙腺が潤んでいた。

俺は、なんて馬鹿なんだ……。直人の気持ちも考えないで、馬鹿なことをしようとして……。どうしようもなく、馬鹿で馬鹿で莫迦だ。直人は、生まれた時から不幸だったかもしれない。親を亡くしたのは物心つく前で、唯一の肉親である姉も殺されて……。それでも尚、直人は歩み続けた。アーティストとしての、一つの人生を。どれだ

け明るく振舞おうが、直人にも辛さはあった。

そうだ、寂しかったんだ。直人は、ずっと独りだったんだ。ずっと独りで、誰も慰めてくれなくて、みんなの同情の言葉が彼の心を曇らせたんだ。

「……俺が悪かったよ、直人」

当麻は、自身の腕を掴む直人の手を優しく掴んだ。

「俺はもう、あぶねえことはしねえから、安心しろよ」

「……よかった」

直人は、ほっと安堵の息を吐いた。

「ほんとに、良かった……」

もう何も失いたくないんだ、直人は。

それを、俺はずっとわかってあげられなかった。

——ごめんな、直人。

直人は当麻の腕をゆつくりと離れた。

「歩こう」

「うん」

2人は止めていた足を前に突き出す。

「……で、結局あの男どうすんだ？」

交差点を左に曲がっても尚、後ろには黒いコートを着た男が歩いていた。

ストーカーだ。

「僕に、考えがあるんだけど？」

「どうせ、映画でよく見るシーンを真似すんだろ？」

「……まあね」

2人はしばらく歩き続けた後、右に曲がって路地裏に入った。

当然、男は路地裏に入って——。

「誰だ！」

路地裏に入った男の腹を直人は勢い良く膝で蹴って手を拘束して床に体ごとたたきつけた。

「いててててて！」

「え？」

良く見ると、その男は見覚えのある人物だった。

「野村刑事？」

「いやあ、非常にすまないと思っている」

「いや、こちらこそ、いきなり押し倒してすみませんでした」

野村敬二と共に直人と当麻は今警察庁にいた。野村は元々直人に用があつたのだが、いらぬ誤解を生む結果となつてしまった。

「最近ね、君の異常なファンが増えてきたんだよ。いやあ……・お姉さんと同じ事態にならないように気をつけてほしいからずっと君を追っていたんだが……・いらぬ誤解をかけてしまつてすまん」

野村は机に額をこすりつけんばかりに頭を下げた。

「顔上げてくださいよお。僕が勝手に勘違いしただけですから」

野村は顔を上げた。

それでも尚、彼は言い続けた。

「ほんとにすまんのう」

もしかしたら、その謝罪の意味は違う意味だったのかもしれない。

第七十二話 励ましの言葉

グランオープンまで後3日。

直人は今、千葉県に居た。

そこは、直人にとつて大切な人がいる場所でもある。

「会いに来てくれて嬉しいな」

「でも、学校休むことはなかったろ？」

「うんうん、学校なんてナオに比べたらどうでもいいもん」

「嬉しい事言ってくれるね」

直人は、ななに会いに来た。今はまだ平日だ。もちろん学校はあるが、ななは直人に会うために学校を休んだのだ。

「で、今日は何しに来たの？」

「理由があるのかい？」

「うんうん、別にいらないし……ナオがここにいてくれるだけでいいよ。それより、大丈夫なの？女の子たちは」

「全く大丈夫じゃないよ。僕も不安で不安でしかたない。だから、君に励ましてもらいたくって」

「ああ……そゆこと」

なながちよつとがっかりしたような表情をした。もう少し期待していた言葉があったみたいだ。

「どんな言葉を期待してるのかなあ？ナオは」

「色々期待してるのかもしれないし、何も期待してないかもしれない」

「何それ？良くわかんない」

なながそう言いながらも微笑んでいた。

「そういえば、ナオ。私には学校の事言ってたけど、あなたは大丈夫なの？もう一ヶ月ぐらい学校に行けてないんじゃない？」

「まあ、そうだね」

「今日、学校行きたいんじゃないの？」

「ああ、確かに行けたね」

「なんで行かなかったの？」

「それは……」

「なんでだろう？わざわざなに会いに学校まで休むことなかった
だろうか？」

「いや、そんなことはない。学校に通う事と、彼女に会うのとはま
た別の話だ。」

「別に、成績は良いし、単位なくても僕にとってはどうでもいいよ」
「へえ、意外。ナオがそんなこと言うなんて」

「確かに、あんまり言ったことないから他の人にしてみれば意外な
んだろうな…… 案外ずっと思ってたことなんだけどな。」

「まあ、ナオは頭が良いもんねえ」

「逆に君は頭が悪い」

「そうだ。成績優秀な直人とは裏腹に、ななは非常に勉強嫌いで、
テストの点も平均点以下というほどだった。テスト期間、直人は夜
ななの家に行き、勉強を教えていた。そのおかげでななの今の成績
は学年トップだ。」

「ナオトには統率力がある。それと同じように、説得力というもの
がある。彼の説明はとても分かりやすいもので、理解するのが得意
でないなでもすぐに分かった。」

「きつと、ナオはあっちゃんや優子さんを大女優にすることができ
るよ！」

「今目指してるのは大女優じゃなくて人気アイドルなんだけどね」
「だけど、人気があるアイドルというものは、映画に主演したりも
しちゃうわけなんだよな。」

「実際、近い将来多くのメンバーが女優になるのだ。」

「やっぱり、励ましの言葉はいらない」

「直人は言った。」

「どうして？」

「君に会えたことが、僕にとっての励みだよ」

「その言葉嬉しいけど、高1が言つと逆にチャラくて引くよ?」

「実際言われるとシヨックだな」

……薄々自覚はしていたのだった。

「今日はもう帰るよ」

「せつかくきたんだから、ゆっくりしてけば?」

「いや、いいよ」

直人はななに背を向けて歩き出した。

「今度は、ゆっくり話そうね」

「バイバイ」

見なくても、ななが手を振っているのが分かった。

第七十三話 記者会見にて

ついに、グランドオープンが翌日に迫った。

「まゆみさん、一週間オープン遅らせたのはいいんですけど……もう遅らせなくていいんですか？」

「これ以上延期しちゃ駄目でしょ、さすがに」

「まあ、そうなんですけどね」

グランドオープンは12月8日。最初はその一週間前に予定日を置いていたのだが、彼女たちのダンスの振りや歌でまゆみはオープン日を延期することを判断したのだ。

「じゃあ、まゆみさん、記者会見に参加しない人たちのレッスンお願いしますね」

「任せといて」

これから、AKB48デビュー記者会見が開かれる。

今から一時間後の午後6時30分だ。

「で、記者会見には誰が参加するの？」

「チームAの16人に加えてチームKとチームBから2人ずつ。延べ20人だ。康さんは参加しないんだってよ」

「一応、彼の発案したプロジェクトなのにね」

夏まゆみは微笑んでから直人に手を差し伸べた。直人は彼女の手を握った。当然のようにまゆみは握り返した。

「ちゃんとアピールしてきてくださいよ。あなたは彼女たちの保護者なんだから」

「彼女たちの保護者が僕なら、僕の保護者は康さんだ」

記者会見場所に移動するまで早々時間はかからなかった。

AKBメンバー20人と共に会見場にやってきた直人は、まず記者やカメラマンスタッフに挨拶をして回っていた。記者会見なんて

初めてだというメンバーたちはとりあえず待合室に待ってもらった。

「境君、ほんとお久しぶりです」

スタッフの中には以前収録で会った事がある人もいた。

「今回もよろしく願います」

直人が挨拶する。

直人のスタッフからの評判はとても良い。収録現場に来て彼がまずすること、それはスタッフ全員に挨拶することだった。

全員に挨拶を終えた直人は、一旦待合室に戻ることにした。

特に着替えなどもしないため、直人はメンバーと同じ部屋になった。メンバーは20人いるので部屋は二つになったが、直人は敦子がいる部屋になった。

その部屋には敦子含むチームA6人と他の4人だ。

「ねえ、記者会見ってまだ？」

「ともさ、そんなに好きだった？記者会見」

チームKから来たのは、峰岸みなもと板野友美だ。友美は、名前が同じメンバーが居る為、普段他人を名前で言う直人は「とも」とニツクネームで呼んでいる。ちなみに、みいちゃんやたかみなも同様である。

「私はちよつと緊張するなあ」

「大丈夫だよ、夏海」

チームBから来たのは平嶋夏海と渡辺麻友だ。2人とも本当に良い子で、直人は彼女たちが救いのように思えた。なぜかって？とても近い人が困った子ちゃんだからさ。

「もうちよつとで、記者会見だから。ちゃんと心の準備しとくんだよ？」

直人は部屋全体に聞こえるように言った。

「そっいえばさ、敦子」

椅子に座って読書をしていた敦子の隣に直人が座った。

「最近、学校どう？」

「うん、すっごく楽しいよ。まあ、私も遥香もたまに質問攻めに会

うけど」

「学校に行かなくて良かったかもねえ」

直人はそう言いながらポケットからガムを取り出した。

「ガム噛む？緊張ほぐせるんだよ」

敦子がガムを受け取った。

……莓味だった。

「わあ、私もたべたあい！」

気がつくと、倉持明日香がガムをおねだりしていた。

「あ、ああ……はい」

直人が明日香にガムを渡すと、彼女の気持ちが伝染したかのように、

「私もほしい！」

「私も！」

次々とガムがほしい者が現れたため……ガムがなくなってしまうた。

「僕、ちょっとスタジオの様子見てくるよ」

直人が待合室を出た。

そして、花蓮に会った。

「お久しぶりです、花蓮さん」

「一応、マネージャーなんだけどね、私」

そう言うと、花蓮は着こなしたスーツのポケットからグレープ味のガムを取り出した。

「良く分かりましたねえ、ガム」

「あなたはお人好しだから、絶対自分の分のガムなくなると思ったわ」

「あっははははは」

苦笑いするしかなかった。

……僕って、そんなに単純なのかな？

「有難うございます。ほんとに、今まで。こんな僕を支えてくれて」「今更何を言ってるの、あなたは？」

花蓮は微笑んだ。

本当に、彼女はすべてを知っているのだろうか？

もしかしたら、自分自身が気づいていない事実さえ、彼女は知っているかもしれない。

第七十四話 抱負

記者会見まで後20分。

スタジオにはまだ心の準備が整っていないであろう少女たちがいた。彼女たちは、たつて待つことしかできなかった。それが許せない子もいたかもしれない。だけど、少女たちの努力が、何かまずいことになりそうで直人は不安でたまらなかった。

「何もなければいいんだがな……」

直人は呟いた。それを聞いた花蓮が直人にコーヒーを渡す。

「記者会見ぐらいで何不安になってるの？」

「いや、いつもなら僕だけだけどさ……今回は彼女たちがメインだからなあ」

彼女たちに、記者会見なんて経験は人生上ないはずだ。いや、ケールテレビかなんかで取材されてるかもしれないが、今回はそんな学校行事で、みたいなもんじゃない。

極端に言えば、これは宣戦布告だ。

芸能界で活躍する先輩アイドルたちに向けての。

……てことは、彼女たちは僕にも宣戦布告するのか？

自分で言っただけで悩む直人であった。

「本番10分前です！」

カメラマンが言った。

直人は少女たちを配置につかせた。直人は彼女たちに囲まれる形になって宣伝するということだ。

「緊張するなあ……」

敦子が言った。

「最初は、そういうもんだよ。誰だつて……」

「直人もそうだった？」

「ああ、もちろんだよ。そりゃあ、すつごく緊張するさ。なんせ、知らない人たちにいっぱい質問されるんだから」

直人が初めて経験した記者会見は、あんまり長くは続かなかったけど……アイドルへの大切な一歩だったと思っっている。

カメラの調整が終わり、記者がスタジオに群がってきた。

ついに、記者会見が始まる。

「本番5秒前……4…3…2…」

カメラが回った。

「ええ、みなさん、お久しぶりです。僕がTVに出るのは、半年ぶりでしたっけ？」

この記者会見は、生放送だ。失敗や問題が起こったりしたら、もうアウトだ。

「僕は、半年前、アイドル仕事を休止しました。そして、新たなアイドルプロジェクトに向けて……僕は日本各地に飛んだんですよ。それで、48人の少女と出逢いました。その48人で構成されたのが、秋葉原48。通称、AKB48です」

直人はさらに説明を続けていく。

「今日、僕は48人のうち20人と共に、ここにいます。彼女たちには、決して諦めない心と、今まで積み重ねてきた努力の結晶があります」

「あなたは、この半年間どう想いながらこのプロジェクトを進めてきましたか？」

記者の1人が質問してきた。直人は、少し間を置いてから答えた。「正直、不安でしたね。高校生になったばかりの僕に一体何ができるだろう、って。プロデューサーって言ったって、考案したのは秋元康先生ですし……なぜあの方が僕にこんな重要な事をやらせるんだろうっていつも思っていました。同じ世代だからだと、当初は自分にそう言ってやってきました。でも、今は……僕にしか出来ないことだと思ってます」

「そうでしたか」

質問した記者は相槌を打つように答えた。

「明日、公演が始まりますが、今の気持ちを？」

別の記者が問う。

「それは、僕じゃなくて、彼女たちが答えるべきだと思います」
直人が、適当に回りの女子の肩を叩いた。

……偶然、敦子だった。

「え！？あ、いや、その……」

敦子は辺りを見回しながらも、少し照れくさそうに言った。

「凄く緊張してますけど、私は精一杯頑張りたいと思っています。
きつと、私だけじゃなくて、ここにいるみんな……ここにいないみ
んなも、同じ気持ちだと思います」

「そうですか、ありがとうございます」

カメラのシャッター音が増えた。

それは、皆が彼女たちに期待しているという意味なのか、それと
も別の意味なのか、直人や本人たちには分からない。

だけど、この日の翌日から彼女たちにとって地獄のような日々が
訪れることを、まだ誰も知る由はなかった。

第七十五話 朝日と朝陽

翌日。

12月8日だ。この日は、一体どんな日になることだろう？華々しいデビューを飾った日となるか、現実を目の当たりにして号泣した日となるか、それともその両方のどちらでもないか。

まだ朝を迎えたばかりの直人には分からなかった。

いや、まだ朝とはいきれないかもしれない。

朝4時。直人はその時間に目を覚ました。今日はオフなため、久しぶりに学校に行ける。

その前に、いつものランニングだ。直人は一時間かけて自身が育った街を走っている。それは、特に意味もなくこの街を歩いているわけじゃない。自分を育ててくれたのは、この街自体なのかもしれない。直人はそう思っていた。

朝5時。帰宅してシャワー。シャワーの後は軽く筋トレ。その後は読書するなり朝食をとったりする。

それが、一日仕事がないの直人の生活スタイルだ。彼はたださえ睡眠時間が短いというのに、自分自身でその睡眠時間をさらに削っている。

これでは、彼の体が持たない。それは直人自身が一番分かっているはずなのに――。

「良い朝だな」

朝陽がのぼる。

とても綺麗だった。

「うん？メールだな」

携帯のランプが点滅している。確認すると、優子からのメールが着ていた。

『おはよう。今日はすごーい楽しみ……かな？』

それが、メールの内容だった。

直人はメールを返した。

『おはよう。今日はすごーい楽しみだよ、たぶんね』

正直、ハッキリと楽しみって言える自信はなかった。

あ、もうメール来た。

『家に行つていい？朝御飯一緒に食べない？』

直人はすぐにメールした。きつと、朝御飯を作るのが面倒くさいのだろう。最近一人暮らしはじめたとか言ってたし。

『いいよ』

優子からの返信はなく、声がかえってきた。

「すぐ近くにいたんだろ？」

「まあねえ、元々ナオ君の家に行くつもりだったから」

「何しに？」

「本借りに」

直人のつくった目玉焼きをほうばる優子。

この家にあるもなんていったら、音楽か物語だけだ。TVをはさむようにスピーカーが置かれていて、その周りにもスピーカーがいくつも設置されている。本棚には大量の小説や漫画、さらには雑誌が飾られていたり、本屋のように綺麗に補完されている。CDはCDで一つの本棚に納められている。

今日、直人が作った朝御飯は、目玉焼きやベーコンにサラダ、小さく切ったウインナー。それにお味噌汁とお米だ。優子は直人の料理を気に入っている。直人自身、料理には自信があるのだ。

「今日は学校行くの？」

「うん、せっかくのオフだしね」

「じゃあ、家、掃除でもしとこつか？」

「大丈夫だよ。掃除ぐらい自分でするから。せっかくだし、映画でも見といたら？」

「ああ、あれDVDなの？」

CDケースの隣には映画やアニメが収められている。そういえば、これを見た麻友が「アニメだあ!」とか言ってはしゃいでたっけ。
「今日は、チームAの公演日だ。君たちは舞台裏で見てもらうことになるかな」

「お客さん、来ると思う?」

「……その質問には、答えられないな。正直、どう言ったらいいかわかんないから」

そう言いながら、直人はふと時計を仰ぎ見た。

「……そうだ!バスケ部の朝練に行く約束してた!」

直人は慌てて味噌汁を飲み干して制服を着た。この時期、直人はもう冬服を着る。シャツの上に生地が薄いジャケットを着るだけだ。後はネクタイだけだが、直人はネクタイを鞆に押し込んで玄関に向かった。

「ごめん、後片付け宜しく!」

「はい!」

優子が大きな声で応えた。

直人は家を出るなり、学校への道を走っていった。

「あ、おはよう直人君!」

「おはよう、おばさん!」

小さな駄菓子屋を経営しているおばさんに挨拶する。

当然この街で境直人を知らない者はいない。ただ、それはアイドルとしての境直人ではない。1人の住人としての直人を知っているのだ。親を失っても、姉を失っても前を向いて生き続ける直人に感動した者も少なくはない。

次第に、同じ学校の生徒にも会ってきた。

「よう、直人!」

「あ、高木先輩!おはようございます!競争はまた今度にしてくださいね」

「わあってるよお!」

陸上部の先輩に挨拶をする直人。

「あ、直人」

「お、敦子」

幼馴染である敦子を見かけた直人はようやく足を止めた。敦子の隣には仲川遥香もいる。

「やあ、今日はどこに行くのかな？ レンタル部員君」

「バスケ部」

直人は応えた。

直人は、バスケが好きで好きでたまらなかった。

もう、できない日がいっつも来るかもわからない不安を持ちながら、直人はバスケを楽しむ――。

第七十六話 僕の心臓

2 限目。数学。

「であるからして……」

担当教師の説明が続けられていく。

高校は、一度は通う事を諦めた場所だ。

入学という形で通うことはできなかったけれども、直人は学校生活を充分満喫している。

授業終了のチャイムが鳴る。

「次は、小テストをやるかもしれんからなあ」

「ええ」

ごく当たり前の日常。良く見る風景。こんな日が、いつまで見れることやら……。

「あれ？どうしたの、直人」

敦子が直人に尋ねた。彼は、窓際の席だ。ずっと窓の方向を眺めたままにいる。

「これからさあ、病院いなくちゃいけないから、先生に言っといてくれないかな？」

「え？うん、分かったけど……」

「ありがとう」

何も入っていない鞆を右手で持って直人は教室を出ようとした。

「あ、待つて。これ、忘れてる」

敦子が録音機を渡す。机に置きっぱなしだったみたいだ。

「ありがとう、じゃあ」

直人は小走りで教室を出て行った。

「どうしたのかな……？」

敦子は呟いた。それに答える者は誰もいない。

家に着いた直人は制服のジャケットを脱いでシャツ状態になり、袖を肘の辺りまでめくってから、バイクに跨った。バイクはエンジンの騒音を鳴らして走り出す。

彼の向かう先は、病院だ。彼を担当する、戸森今日子がいる病院にだ。

授業中、マナーモードにしていた携帯が鳴ったのだ。直人はアイドルということもあって、携帯を手に持ち歩く事を許されている。メールの内容からすれば、悪いとも良いとも分からない呼び出しだった。直人は、ちよつとスピードを加速させながら病院に向かった。

病院に着くと、すぐに受付の女性が話しかけてきた。

「どうやら、診察室で戸森先生が待っているらしい。」

「戸森先生え」

診察室に入ると、緊張した面もちで戸森今日子が椅子に座っていた。

「どうなさったんですか？急に呼び出して」

「単刀直入に言うわ。直人君、あなたの病気は急激に悪化しているわ」

「……なぜ？」

「運動しすぎよ」

「……そうですか」

「正確には、バスケでおこるぶつかり合いによる心臓の圧迫」

「圧迫？」

「衝撃がね、心臓の鼓動を速くしてるのよ」

「……」

「あなたは、心臓が悪くなってきた。最悪の結果には、心臓を入れ替えなきゃいけない」

「心臓を、入れ替える……ドナーを探してるんですか？」

「もつ、探してあるわ」

「……誰ですか？」

直人がそう聞くと、戸森は黙りこくった。

僕の、知り合いか……？

一瞬、そう思った。

「……あなたのドナーの件は、ずっと昔から考えてた。あなたのお姉さんはもう亡くなられて心臓は駄目だったし。あなたに一致する心臓は、全然見つからなかった。でも、昨日、ようやく見つかったの。あなたのドナーが。すぐ近くに」

「誰ですか、それは？」

直人に迷いはなかった。聞いてはならない気もしたけれど、やはり聞かないと前へは進めないと思ったのだ。だけど、戸森はそれでも尚言う事をためらった。

だけれど、彼の強い眼差しは自信の決心を物語らせた。

戸森は浅く息を吸って答えた。

「あなたの……恋人よ」

「……なな？」

直人の目が大きく見開かれる。

予想だにしていなかった。まさか、彼が最も大切にしている人が、ドナーだったなんて。

「……彼女にはまだこの事実を伝えていないわ。あなたが伝えないでほしいと言うのなら、私は伝えないわ」

窓に何かがぶつかる音がし始めた。雨だ。大量に、降っている。

直人の心境を表すかのように。

「……すいません、これで、失礼します」

直人は、そこから逃げ出すように診察室を出て行った。

バイクを飛ばしながら直人は無我夢中に走り続けた。雨の中、だけどバイクがこれ以上濡れるのを避けたかったため、暴走することなく家に帰ることができた。

駐車場にバイクを止める。携帯などの貴重品は小さな鞆に入れて玄関へ向かう。

一旦、玄関に鞆を置いてから、直人はポストに手紙が入っていない

いか確かめようとして玄関から離れた。雨に打たれても直人は気にしない。今は、それどころではない。

ずぶ濡れだった。だけど、そんなことはどうでも良い。なの事で頭がいっぱいだった。

頭がいっぱいで、どうしようもなくて――。

「えっ？」

下を向いた視線を上げた。すると、目の前に……女の子が立っていた。

ピンクの可愛い傘をさしたその少女の顔は一瞬良く見えなかったけれど、確認できた途端、うつろな瞳をしていた直人の目は再度大きく見開かれた。

「なな……」

「こんにちは、ナオ」

雨の中、突風がなびいた。彼の頬を伝うのは、雨の雫か、それとも涙だったのか……どちらだったのだろうか？

第七十七話 彼女の優しさに包まれた少年は……

「なな……」

「こんにちは、ナオ」

嘘、だと思った。彼女がこんなところに居るはずがない。彼女が東京に居るわけじゃないじゃないか。彼女は今頃、教室で友達と当たり前のように仲良く喋っているはずで――。

「どうして、いるの？」

「あなたに、会いたかったの。いや、会わなきゃいけないと思った。ただ、それだけ」

彼女は微笑んでいた。それは、自然に出来たものなのか、それともわざとやっていたのか……。

「どうして、泣いてるの？」

「え？……泣いてないよ。これは、雨にうたれてるから……」

「嘘ばかり」

ななは彼女に歩み寄った。

「昔から嘘をつくのが下手なんだから」

「嘘じゃないよ。だって、ほら。こんなに雨が降っているじゃないか……」

直人は言い訳する子供のように言った。

「あなたに嘘はつけないわ。だってあなたは、優しい人だから」

「僕が、優しい？」

「うん。自分にどれだけ負担がかかって、あなたは人のことばかり考えてる。優しくすぎて……嫉妬してたかも」

「なんだよ、それ……」

ななの言葉が、腹が立つように感じられた。

僕が、優しいだって？そんなわけじゃないか。人を殺そうとしたことだってあるのに……。

「自分が優しくくないと思ってるの？人間失格とでも？」

ななが尋ねた。いつものはしゃぎたてた表情じゃない。彼を必死で助けようとしてくれる、真剣な表情だ。

「だって、そうじゃないか……莫迦みたいに人に色々アドバイスとかしちゃって……ただ僕は善を偽ってるだけじゃないか」

「あなたは偽善者じゃない」

「いいや、偽善者だ。それに、僕は君を巻き込んだ。僕は太莫迦だ。僕のドナーが君だったなんて……あんまりじゃないか」

そこで、直人ははつと気づいた。

「まだ、彼女にはこのことを伝えていないわ。」

そうだ、ななはまだ知らないんだった。

「……ごめん」

直人は俯いた。罪悪感から、彼女の表情を伺うことがとても出来なかったのだ。

きつと、ななは哀しむに違いない。僕のために死ぬなんてこと、

嫌なはずだ……。

「なんで、謝るの？」

ななは、涙ぐむように言った。やっぱり、嫌なんだ。僕のドナーってことが……。

「ナオ、私の心臓は、あなたに適していたのね。よかった……」

ななはほつとしたように胸をなでおろした。

「よかった……？何がよかったんだよ！君は、僕のドナーになったぞ！君は僕に心臓を与えて死んじゃうんだぞ！」

「私は、あなたに心臓をあげないわ」

「え……？」

ななは傘を離れた。当然、傘は床に落ちる。ななもずぶ濡れになった。ずぶ濡れになりながら、彼女は直人の手を優しく両手で包み込んだ。

「だって、あなたは死なないもの」

直人はその言葉を聞いた瞬間、心の中で何かが解けた気がした。

「あなたは病気なんかで死んだりしない。それぐらいで死ぬような

あなたじゃない」

「病気は、今も悪化し続けてんだぞ……それでも僕が死なないって思ってるのか？」

「ええ、死なないわ。だって……」

直人は、ななの手に力がこもるのを感じた。

「たかが病気で死ぬようなあなたじゃない。誰もそう思っていないくても、私はそう思っている。あなたを信じてる。私は……あなたがこれからずっとずっと、幸せに生きていくことを、信じてる」

やっぱり、僕は偽善者で、嘘つきだ。

だって、泣いてないって言ったのに……こんなにも涙が止まらないんだから。

「みんながあなたを見捨てても、あなたの隣には……いつも私がいるよ」

もう、号泣だった。直人は、今までになく、号泣してしまっていた。

何で、悩んでたんだろう……僕は。彼女がドナーだ。だからなんだ？僕が、彼女の心臓を授かる状態にならなければいいだけの話じゃないか……そうだ、これは僕だけの問題じゃないんだ。

「……晴れた」

いつの間にか、雨はゆっくりとやんできていた。そして、雲が消え、いままでの雨が嘘のように快晴の空が広がっていた。

「はくしゅん！」

ななが小さくくしゃみをした。直人は、うつすらと微笑んだ。

「風邪ひいちゃうから、とりあえず家に入る。シャワー浴びるといいよ」

「うん、ありがと」

直人はななの手をひいて玄関の戸を開けた。

ここに、一つの小さな問題であり、物語が解決した。

だけれども、今夜、また新たな物語が始まる。

そう……耐え難い現実を目の当たりにしながらも前向きに踊り続

けた少女たちの、デビュー戦が。

第七十八話 緊張感

午後4時30分。授業が終わるなり、前田敦子と仲川遥香は家に帰宅した。

今日は、彼女たちが初めて舞台に立つ日だ。たとえ観客が1人であろとも、2時間みっちり踊り続けなければいけない。

ここから秋葉原までは電車で行く。敦子も遥香も同じチームAで、今まで共に練習し、これから隣で踊っていく存在となる。

敦子は今直人の家に向かっていた。彼はまだ秋葉原には行っていないだろうと判断したのだ。

早退した理由は大体分かっている。きつと急の仕事か、それとも病院に呼び出されかだ。彼は出来れば学校にいたいのだ。普通に、友達とどうでもよい話がしたかったんだ。

「悪い話じゃ、ないよね……」

少し、心配になってしまった。

直人の家に着く。幼い頃から優子を交えた3人で洋館と呼んで遊び親しんだ場所。直人のお姉さんは、仕事をするのに精一杯でいつも家にはいなかった。敦子や優子の両親は、姉弟に同情したためかよく家に泊まらせてくれた。その時の事情は姉が知るだけで、弟の直人はまだ幼かったため何も知らないで泊まっていた。

インターホンを鳴らすと、「入ってきて」という直人の声が聞こえてきた。正午すぎあたりまで雨が降っていたためか、少々湿っぽい。

「入るよお」

敦子が玄関の戸を開けて中に入った。

「あれ？」

女性用の靴があった。これは、ハイヒールだ。リビングに入る。

直人とななが、ソファで並んで座っていた。

「私、お邪魔だったかな？」

「いや、そんなことないよ。今から秋葉原に行こうと思ってたんだ。一緒に行く？僕はバイクで行くつもりなんだけど」

「うん、遥香もいるからあ」

「そっか。じゃあ、電車で行くの？」

「うん、そうなるかな」

「じゃあ、僕もそうするよ」

「え？いいの？」

「たまにはそれもいいかなって」

「うん、わかった」

敦子は、瞬間的にななを一瞥した。ななは微笑んで挨拶してくれた。

同じ年で、同性でも、自分と彼女はどこか違うと敦子は感じていた。彼女にはあつて、自分にはないものがある。

それはきつと、直人に対しての愛情だろう。

「もう、行くの？」

「うん、そのつもり」

「そっか、じゃあ——」

直人はななに振り向いた。

「ふっふん、これを見たまええ」

ななは勝ち誇ったように小さな鞆から紙を取り出した。

それは、今日、敦子たちの初舞台となる公演のチケットだった。

「買ってくれたんだあ」

「うん、まあね」

ななは立ち上がった。

「後で行くから、2人は先に行つていい」

ななは言った。

「ありがとう……敦子、先に行こう」

「うん」

直人は敦子の手をひいてリビングを出た。背中を向けていたが、

ななが手を振るのが分かった。

「ななちゃんって、合鍵持ってるの？」

「うん。今、渡したんだ」

そうだ。彼女に慰められるようにして、直人は今日の前半を過ごした。

彼女に対する感謝は、言葉だけでは言い表せない。もちろん、当麻や愛奈、それに花蓮や詩織、そして優子と隣で歩いている人にも……感謝している。支えてくれた人全てに感謝している。

「嘘を本当にした人に捧げる——」

直人は呟いた。

「何、それ？」

敦子が聞いた。

「これは、偽りの扉のキャッチコピーだよ」

偽りの扉。それは、直人が持ち歌である心の欠片の次に売れた曲である。心の欠片は一週間で100万枚数売れた今も尚人気の歌だ。

「ちなみに、心の欠片のキャッチコピーは？」

そう問われて、直人は空を見上げた。

「いっぱいあるよ」

「へえ、直人が一番気に入っているのは？」

直人の表情はどこか哀しげだった。

「——人生にまずいた全ての人へ捧ぐ……これは、愛する意味を伝える歌である」

第七十九話 歌

電車の中。

「あれ、境直人じゃね？」

「ホントだ……あ、こっち見たよ！」

やっぱり、電車の中はやめておいたほうがよかったか。

敦子と遥香は今日がデビュー日だとして、直人はすでに絶大な人氣を誇っているアイドルだ。別の見方言えば、敦子たちの先輩に当たるのだ。

「ちよつとは、サービスしてあげたら？」

敦子が冗談っぽく笑った。それを見た直人は近くにいた十代後半らしき少女に視線を向けた。偶然にも、その少女と目が合った。相手は直人のことに気づいたようで、少しばかりか頬を紅潮させた。

直人は軽く手を振った。少女は慌てて視線を逸らした。

「ひいちゃったかな？」

直人は苦笑した。

「きつと、照れたんですよ」

遥香が言った。

「はは」

電車に揺らされる3人は、秋葉原駅に着くまで、どうしてもよい会話を弾ませた。

ドン・キホーテ8階。

チームAは、夏まゆみ指導のもと、最後のリハーサルを行っていた。直人たち3人が来た頃にはもうすでにメンバーが揃っていた。

直人は、誰もいない廊下で、恩師と対面していた。直人はポスターが並んでいる壁にもたれて噛んでいたガムを紙に包む作業をしていた。ガムを包んだ紙をゴミ箱に向けて放り投げる。バスケット部の直

人にとって、こんなものをゴミ箱に入れることは造作もなかった。

「直人君、次の歌の件なんだけど……」

康が話をはじめた。直人はどうでもいいように康から顔を背けたままだ。

康は気に留めようとしめない。最近の直人は、どこか不良に近くなってきたまってる。

きっかけは、このプロジェクトだろう。

「歌って、13カ月ぶりの？」

「そうだよ。君の持ち歌である 心の欠片 は、今も尚売り切れ状態が続くほどの人気だ。世界で発売されているから、軽く30億は売れたじゃないかなあ」

「たったの一年でそんなに売れるなんて、信じられないですねえ」

それは、康も同じだ。一年で30億とは、音楽界にとって異例だ。過去にいくつかあったかもしれないが、直人は最年少である。

「発売予定日は？」

「12月24日」

「クリスマス・イブじゃないですか」

「そうだよ。君には、今から16日以内にクリスマスソングを完成させてもらいたい」

クリスマスソング。クリスマス・イブに発売される曲。

「曲名は、何ですか？」

直人は聴いた。今日初めて、秋元康を見た。

真正面から、見据えた。

康が、ふと笑った。

「それは、君が決めることだよ」

康は直人に楽譜を渡した。約7枚の楽譜には、新曲の歌詞が記されている。

直人は、簡単に歌詞と楽譜を読んでいく。

「うん、ピアノ？」

遠くからピアノの音が聞こえてくる。

「花蓮ちゃんが弾いてるんだよ。新曲のね」

康が弾かせたのか……直人は、爆笑した。

「何がおかしいんだい？」

「いやあ、花蓮さんピアノ弾けるんだなあって」

「彼女を莫迦にしちゃ駄目じゃないか」

そういう康も、笑っていた。

「決めました、曲名」

「なんだい？」

康は、直人にボールペンを渡した。楽譜に書けという意味表示だろう。

直人は壁を下敷きにして曲名を書き記した。そして、康に向かって前に突き出す。

「…… 白夜」

直人は、自信満々に言った。

「理由は？」

康が聞く。

「…… 白夜とは、太陽が沈まないこと。クリスマス・イブは、きっと大切な人と過ごす。だけど、同じ家に住んでいない限り、きつと夜になると別れの時間がやってくる。別れるのは嫌だって人が多いと思う。だったら、夜にならなければいい…… クリスマスソングっていうより、――愛――を訴えたい曲かな」

直人は、ほくそ微笑んだ。

去年のクリスマス・イブは、ななに会えないと悔やみながらそう感じていた。去年のクリスマスは仕事はなしだったから、家で敦子や優子、他の友達と一緒に過ごしていた。ななに会えなかったのは、彼女が友達とパーティーをする予定を入れていたからだ。

「 白夜 か…… 良い名だ。きつと、初日でミリオン達成するよ」

「それはどうでしょうね…… 楽譜からして、これは明るい歌でも、重い歌でもないですね。何か、こう…… 感動を呼ぶみたいない」

「そうだね。だから、 白夜 という言葉はぴったりかもしれない」

康は、直人に背を向けた。そして、歩き出した。

直人は、新しいガムを噛んだ。

「このヘッドホン、何か意味でもあるんですか……？」

直人の傍にある机には、手持ち型のCDプレーヤーとヘッドホンがあった。

「ああ、ある」

康の背が遠のいていく。

直人は、ヘッドホンをかけた。セットされたCDを再生する。

直人の瞳が、天井を睨むように細くなった。

「心外ですね……あなたがこの曲を僕に聴かせるなんて」

「最近の君は、全く傷ついていない。人というものは、傷つきながら成長するものだ。悪いとは思うが、やはり君にはこの曲を聴いてもらわなければいけない。ほんとに、すまない」

嘘だ。本当は、悪いなんて思っただけに……。

「チキチヨウ……」

直人は、手で顔を覆いながら、苦笑した。

「茂君は、良い人だった」

康は呟いた。

「茂さんは、嘘つきで、大嫌いで、最低な人で、憧れだった……」

└

直人は呟いた。

和泉茂。直人が最も尊敬し、最も嫌いだった人。

今、直人が聞いている曲の名は スターダスト。

和泉茂の唯一のミリオンセラー突破の曲であり、茂の恋人であった直人の実姉が死に際に聞いていた曲である。

第八十話 道路

康は、もう廊下にはいなくなっていた。

それでも直人は、スターダストを聴き続けた。

聴きたくない。こんな、最低の曲なんか。

だけど、これを聴いていると今まで忘れていた記憶がすべて蘇ってくるようだった。

忘れた記憶なんか、もういらぬのに。

ていうか、いつの記憶を忘れたんだ？僕は。

「あれ？なつくん、どうしたんですか？」

ヘッドホンをかけていてもその声ははっきりと聞こえた。

「歌を聴いていただけさ」

直人はヘッドホンを机に置いた。

そして、チームK菊地あやかに向き直った。

「大切な歌ですか？」

あやかが聞く。

「うん……たぶんね」

直人は頷いた。

「ふーん、そうなんだ」

あやかは相槌を打つように声を出した。

「君は、何してたのさ？」

「私？私は、散歩してただけ」

「迷子になってたんじゃなくて？」

「うわ！なつくん意地悪う！」

あやかは僕のことをなつくんって呼ぶんだあ、クラスにも同じ呼び方してる人いるよ……なんて、会話とは無関係のことを考えていた直人は、携帯で時間を確認した。

まだ、予定の七時までは余裕がある。

「あやかはさ、なんで本名みたいにファーストネームを漢字表記に

しなかったの？」

あやかの本名は、菊地彩香であり、名前の文字すべてが漢字表記である。

「うーん、得に意味はないんだよねえ」

人差し指を顎にあてながら答えた。

「君、いつも笑っているね」

「うん、よく言われるんだなあ。学校ではムードメーカーとか、天然って言われるんです」

自信満々という風にあやかが胸を張った。

「ムードメーカーで天然、かあ……僕もよく言われるよ」

「私たち同じですねえ……相性バッチリですね！」

「はは、そうかもね」

直人は笑った。

確かに、相性バッチリなのかもしれない。

相性バッチリだから……これから何ヶ月も後に起こるプリクラ事件も一緒に乗り越えることができたのかもしれない……。

「僕、ちよつと外を散歩してくるよ」

「いつてらっしゃあい」

陽気なあやかは歩いていく直人に向かって手を振った。次第に直人が視界に映らなくなると、あやかは先程まで直人が聞いていた曲を聴くためにヘッドホンをとった。

スターダスト が流れ出した。

「良い曲……これ、和泉茂の曲かな？」

昔、売れない一年間を乗り越えて、最初にして最後のミリオンセラー曲を作り出した男性アーティスト。彼は、恋人の自殺をきっかけに発狂して精神病院に送られてしまった。

その恋人が、直人の実姉であることは知っている。デビューして半年ほど経った時に、直人は自分でその事実を公表した。

そのときの自分はまだ中学生になる直前だった、と過去をプレイバックするあやか。

「なつくん、ずっと孤独と戦ってたんだ。お姉さんのいない現実と……」

秋葉原の道路はきつと熱いだろう。何百人、もしかしたら何千人という人が、この道路を踏みしめているのだ。

世界はとてつもなく広く見えて、とてつもなく狭い。

直人の瞳に映る世界は、まだ暗黒の世界だった。

「田舎の空気って、どんなだろう……」

どうでも良いことを考えながら直人は歩いていた。

そんな時だった。

「あつ！」

「あつっ！」

直人は、一人の少女とぶつかった。直人は胸の辺りに熱く感じた。どうやら、少女の持っていたコーヒーマグが服にかかったようだった。

「すいません、大丈夫ですか？」

ぶつかった少女は「ごめんなさいと言わんばかりにハンカチで染みをふき取る」とする。

「ああ、大丈夫ですよ、あなたこそお怪我は？」

「私は大丈夫ですけど、服が……」

「大丈夫ですって」

直人はそう言いながらシャツを脱いだ。シャツの下にはちゃんとTシャツを着ているため、裸にならずには済んだ。

よく見ると、相手の少女は同年代に近い顔立ちをしていた。ストレートの黒髪に清楚なイメージをひきだしてしまうような表情。

「ごめんなさい、東京には慣れてないもので……今日も、せっかくの学校創立記念日だから東京に行こうって来たら迷子に……」

「そうなんですか。どこから来たんですか？」

少女は弱弱しそうに答えた。

「愛知からです」

「へえ、遠いですね」

「はい、まあ」

「今日は一人ですか？」

「いえ、友達と来てたんですけど……」

「友達ってあれかな？」

直人は遠くを指差した。そこには、複数の高校生と思しき女の子が手を振っている。

「あと、メアド交換しましょう。クリーニング代もありますので」

「いいですよ……クリーニング代は……まあ、でも」

直人は携帯を手に取った。

「赤外線ぐらいなら」

少女は微笑んでメールアドレスを送信する。直人も自分のメールアドレスを送信した。

「君って高１？」

「はい、そうです」

「へえ、同年か。ちなみに、僕のこと分かる？」

「はい。境直人さんですよね？」

分かってたんだあ……とガツカリする直人。

自分がアイドルであつたということに驚いた彼女の表情を見たかつたのに……

「それでは」

少女は礼をして、友達の元へ行こうとする。

「ああ、待って！君の名前は！」

走り出そうとした足を止めた少女は軽く振り返って微笑んだ。

「……松井玲奈です」

「じゃあね、また会おう、玲奈」

いきなり呼び捨てもどうか、と後悔する直人だが、そのときにはもう彼女はいなくなっていた。

第八十一話 時間は確実に

時間はゆつくりと、それでいて確実に過ぎていく。

時の刻みは、少女たちの不安を大きくしていく。

リハーサルが終わり、ついに劇場のオープンが始まった。客が何人来るかは分からない。だから、少女たちが出入り口やその付近を歩くことはなかった。

「どうしよう……劇場に誰もいなかったら」

レスンススタジオ。みいちゃんは、今にも泣きそうな表情だった。

「大丈夫だよ、きっと」

そんなみいちゃんを敦子が励ました。

彼女は、自分たちの公演を見に来てくれる人を1人知っている。

だけど、たったの1人だ。

劇場の席の定員は250名。このAKBプロジェクトや事務所関係に携わる人たちが70人近く様子を見に来る。そう、直人が言っていた。

……みいちゃんの言うとおり、好き好んで見に来る人はいないのかもしれない。

「ねえ、直人は？」

敦子は適当に聞いた。個人に聞いたわけではなく、誰かが答えてくれると思って訊いた。

「なつくんならさつき散歩しに外出て行ったよお」

答えたのは、菊地あやかだった。敦子にとって、あやかの声を聞くのは初めてなのかもしれない。

「そっかぁ」

（こんな時に暢気だな、直人は

敦子はそう思った。声に出さなかったのは、言う必要がないからだ。

ドン・キホーテには様々な設備が整っている。

二階には、直人が何度も心に迷いを生じたり号泣した廊下がある。その廊下から入れる一室に、休憩室というものがある。休憩室は、飲み物などの自動販売機が設置されており、さらにカップ麺をそこで食せるように小さなキッチンが設けられている。

そんな休憩室に、後のセンターとなる大島優子はいた。

彼女は自動販売機でコーラを買って飲んでいた。この部屋にいるのは優子の他に誰もいない。まだ、誰もいない。

「やっぱコーラって美味しい」

独り言を呟く。

飲み干してしまうと、優子はそこから缶をゴミ箱に放り入れた。

「上手いね、それだけは」

「それだけはってどういうこと!？」

休憩室に直人が入ってきた。彼は優子の傍にあるものを置いた。カップヌードルだ。

「後30分なのによくご飯なんか食べる気になれるよね？」

「おなかすいたんだから仕方ないだろ。すぐに食べれるように君にお湯を沸かしてもらったのは正解だったよ」

直人がそう言ったと同時に、キッチンのほうで沸騰音が鳴った。

優子が休憩室に来たのは、メールで直人からお湯を沸かすように頼まれたからだ。

「タイマーないよ？」

「大丈夫さ。僕の体の中には時計が入ってる」

「そんな万能な体があったら地球に時計はいりません」

「はは、みんなの体がそうだったらの話じゃないか」

沸かしたお湯をカップヌードルに注ぎ込んで蓋を押さえる。すぐさま直人は携帯で時間を確認した。

午後6時27分。3分後には丁度30分じゃないか。

「ほら、君の分も買っていていいから、僕のも買ってくれ。ジュース」

直人はズボンの後ろポケットから財布を取り出して百円玉を三枚取り出した。

「あいあいさあ」

百円玉を受け取った優子は自動販売機でジュースを2本買う。

「上着はどうしたの？」

「汚したから選択中」

「女の子とぶつかって相手が持ってた飲み物がかったとか？」

「……」

「え！的中？私ってもしかして超能力持ってる！？」

「何勝手に納得して妄想働かせてんだよ……まあ、間違ってるじゃないけど」

「やっぱり僕は単純なのか……いつもの悩みにふける直人であつた。」

「どんな子？メアドは？」

「当然ゲットだよ。クリーニング代請求しないと」

「ホントはそんなこと思ってないくせに」

「まあね」

「で、どんな子？」

「そうだなあ……と直人はつい先程の記憶を蘇らせた。」

「凄く可愛かったなあ」

「……」

「髪の色は黒で、ストレートだったかなあ。目がおっとりしてて清楚って感じがして……とにかく可愛かった！」

「莫迦あ！」

「ぐおっ！なんで蹴る！？」

「いくらここにいないからって……ななちゃんのこと考えてあげなよあ！」

あ、そうだった……。

「どうせ、ななちゃんのこと忘れてたとかっていうんでしょ」
「……まあね」

「否定しないんだ、呆れた」

そう言いながらも、優子は微笑んだ。

ここ数ヶ月、彼女たちは夏まゆみのきつい指導を受けながらレッスンの日々を送った。そんな彼女たちにとって、直人の天然で陽気で優しい性格は癒しだった。彼がいなければ、レッスンを断念する人が続出していたかもしれない。直人はずっと彼女を支え続けてきた。時には厳しい言葉をぶつけ、時には脱水症状を起こしたメンバーを助け、時にはプライベートの素顔で彼女たちと接した。中学卒業と同時に始まった直人の総合プロデュース企画。それは、今となつては序章から本編にさしかかろうとする場面だった。

「今頃、チームAはメイクしてる頃かな」

気がつけば、もう6時40分だった。

「ああ、麺が伸びちゃってるなあ」

そう言いながらも、直人は割り箸を割って麺を吸い始める。

「私もほしいなあ」

「ほしいの？ほら」

直人は優子にカップヌードルを渡す。

……昨日のプレス発表、もうちょつと発言しといたほうがよかったかな。

直人はもう過ぎた事に後悔していた。

「公演、見に行くの？」

「いいや、いかない。今の公演は、見るに耐えない……別に悪い意味で言ってるわけじゃないんだ。ただ、今日は……本当の客は10人にも満たないから」

優子は目を大きく見開いた。

（本当の客は……10人もいないの？）

その頃、劇場裏の待合室に移動したチームAのメンバーは今までレッスンを指導してくれた夏まゆみの周りに集まっていた。

皆が皆、夏まゆみの腕を力強く握っていた。

「……自信持つて、想いつきりやって。想いつきり……全然、番号とか間違えても、振りとか間違えても、そんなの気にしなくていい。全然気にしなくていい。いっぱいいいっぱい、今までやってきたことを全部そのまま出せば充分だから。ガンバ」

夏まゆみの言葉を聞いて泣かない者は1人もいなかった。

「がんばっていこう」

夏まゆみは皆に掛け声をしようと言う。

「AKB！」

夏まゆみが言う。

「フオーティエイトオ！」

少女たちの手が勢いよく上がった。

午後7時。

チームAは劇場に躍り出た。

目の前に映るのは、前の座席にしか観客が座っていない、ガラガラ
の観客席だった。

第八十二話 涙の初公演

ガラガラの観客席が、目の前にあった。

泣きたくなった。どうしようもなく、泣きたくなった。

それは、全員同じ事。舞台に立っているチームAの面々や、密かに見守る夏まゆみやチームK、Bの面々全員がだ。

それに、ほとんどが関係者であり、ただ純粹に興味を持ったのはほんの数人しかないだろう状況に見えた。

それでも、チームAは、公演をしなければならない。

公演は全13曲の約2時間。たった2時間舞台に立たなきゃいけないということが、こんなにも辛くなるなんて思わなかった……。

敦子はそう思った。そう思考を巡らせる時間は一瞬だった。すぐにテロップが流れて彼女たちの踊る時間がやってきた。

最初の曲はPARTYが始まるよ。この曲は振り付けが多いため、彼女たちに不安を考える余裕なんて一瞬もなかった。

客席に座っているのは殆どが男性であり、無表情だった。

敦子は唯一の女性客に気がついた。敦子は彼女と目が合った。彼女はそつと微笑んでくれた。

(優しいな、ななちゃんは……)

彼女がここに来たのは、直人のプロジェクトだから……それとも、私や優子のためなのか……一体どっちなの？

「駄目……これじゃ全然駄目……」

敦子は歯を噛み締めた。

「これじゃあ、今までの努力が無駄じゃないか……」

照明スタッフがばやいた。それを聞いた直人は、力強く断言した。

「いいや、無駄じゃない。努力は、きつと報われるはずだ」

「そう言いたいのは分かるけどよお……」

途中で、照明スタッフの言葉が途切れた。直人の瞳が、あまりにも鋭かったから。

(……時間が必要なんだ。こういう事には)

そう思った。そう、信じたかった。

きつと、そのうちインターネットの「つぶやき」とかで噂が広まってそのうち人気になるはずだ。

きつと……きつと……。

「なんで、僕が泣いてんだ……僕は……苦労なんかしてないのに」「いや、この涙は自分の苦労の涙ではなく、彼女たちの苦悩の涙なんだ。」

「そろそろ、休憩室でぼんやりしてないで仕事行ったらどうですか？」

「おう、じゃあいつてくらあ」

照明スタッフは休憩室を出て行った。

関係者の1人はドン・キホーテの直接的なスタッフであるため、この公演を録画していた。その録画記録を照明スタッフはリアルタイムで携帯で見ていたのだ。

直人は、とても見る気分にはならなかったが……。

「優子は見に行かなくてもいいの？」

「いい。彼女たちを見てると、他人事みたいな感じで可哀想に思えてくるから……」

「他人事で思いたくはないんだね」

「うん。私は3つのチームに分かれてるけど、AKB48は、48人でAKBだから。嬉しさも哀しさもみんな全て、私たち全員で抱えなきゃいけないと私は思ってる」

「……名言だね」

「そうかなあ？」

優子はちよつと照れくさそうに頬をかいた。

「あなたも言ってたじゃん……確か、恩師の……」

「僕は逃げないから、非常口はいらない……だろ？」

「そうそれ！」

優子がポンとひらめいたように相槌を打った。

「あれ、どういう意味なの？」

「僕の目の前で言った台詞なんだけど……」

直人は少し目を細めた。口元が吊り下がる。

哀しそうな表情だ。

「姉さんが死んで、恋人だった茂さんはずっと放心状態になってた。その三カ月後ぐらい後に僕がアイドルデビューをして……だけど、僕にも氷河期つてのがあったんだ」

「氷河期？」

「そう。全然人気もなくて、CDも売れなくて。全然駄目だった。このまま終わりなのかなって思ってたんだよ……そんな時に、放心状態だった茂さんに会ったんだ。彼と口喧嘩して……拳句に彼は言ったんだ」

「それが、さっき言った名言？」

直人が頷いた。

「その言葉がきっかけで、僕は立ち直れた。茂さん自身も……茂さんは絵画の道を選んでアーティスト活動はやめちゃったけど、僕はその後すぐにニューシングルのCDが大売り上げだった。僕は、茂さんのせいで姉が死んだとか勝手に思ってた茂さんを憎んだりもしたけれど……やっぱり僕は、彼を憎みきれなかった。だって、どれだけ憎んでも……今の僕があるのは、茂さんのおかげだから」

もちろん、優子たちのおかげもあるけどね、と直人は言い足す。

今までの話を聞いて、優子が言った感想は一言だけだった。

「深いねえ……」

「まあね」

直人に感想を追求する気はなかった。

公演は、最後の曲にさしかかった。

最後の曲は AKB48。その名の通り、このグループをアピールする曲だ。

少女たちには、涙を堪えることしかできなかった。

最後の曲が終わる。チームA全員がお辞儀をすると観客席から小さな拍手が上がった。

真に拍手をしていたのはただだったかもしれない。

少女たちが舞台から姿を消した。

チームB、K、そして夏まゆみがいる待合室に入ると……。

「うえええ〜ん!」

全員が全員、激しく泣いた。号泣している人や、すすり泣く人。

泣き方は様々だが、AKBメンバー全員が泣いていた。

理由は、言わなくても分かるはずだ。

「私たち、駄目なのかなあ？」

「いいや、きっと君たちは日本……いや、世界一のアイドルグループになるはずだ」

静かに泣く優子の肩を、直人はそっと抱いてやった。

第八十三話 涙の後に……

「優子、そろそろ泣き止んでもいいころじゃないかな？」

「……ナオ君、もうちよつと言葉選んでほしいわよ」

「ごめんね、今の僕は莫迦だから」

直人は、優子の肩から手を離れた。優子はすつと立ち上がる。

「みんなのところに行かない？きつと、他の人も泣き止んで思うよ」

「家が遠い人はもう帰らせてるよ」

「横山は？」

「彼女は今日は来てないんだ。一応、平日だし学校あるから。ちなみに、莉乃も今は上京したばっかだから荷物取りに一旦九州に帰ってるし」

「へえ。指原って九州なの？」

「たぶん……」

直人も立ち上がった。優子の手を握って直人は歩き出した。

「急ごう。帰りたい人もいるだろうから、僕が行かないと」

皆が皆、座っていた。さすがに家が遠い人は帰っていたけれども、ほとんどは残って待合室の椅子に座っていた。

「へえ……誰の指示でこんな状況になったのかな？」

「みんな、自分自身の意思です」

「残ってるってことは、まだ帰らなくていいってことだよな？」

直人は言いながら、優子にアイコンタクトを送った。なんと、それで通じたらしく、優子は空いている椅子に座った。

「単刀直入に聞くけど、君たちは何がしたい？」

「もつと、練習を重ねたいです。たった今から」

A K B キャプテンである、たかみなが言った。

「練習を重ねて……どうする？」

直人の質問に、たかみなは言葉が詰まった。

「客がこないのは、君たちの練習の時間が短いから？ 違うだろ。君たちに必要なものは練習時間じゃない……特徴だ」

「特徴……か」

麻里子が呟く。

「アイドルってさあ、ただ笑顔向けてたらいだけじゃ駄目だろ？
どれだけ歌が上手くても、どれだけダンスが上手くても、自分たちの個性を引き出さなきゃ、『ただの良いアイドル』それで終わりだ」
直人はこの場にいる全員を見回した。劇場に続く通路の近くに夏まゆみが立っている。椅子に座る少女たちの後ろだ。

「僕から言える事は、それだけだ………今日はもう解散してくれ」
直人は少女たちに顔を背けた。

これ以上、彼女たちの顔を見ることができなかった。

きっと、彼女たちの心は大きな不安でいっぱいのはずだ。このまま、自分たちの公演は失敗で終わるんじゃないかと。

直人はそうは思わない。それは何度も言っていることだ。自分に言い聞かせていることだ。

「どうしたの、帰らないの？ 今日は疲れただろ。早く帰ったら？」

それでも、椅子から立ち上がろうとする者はいない。やれやれ、と直人は頭を抱えた。

「練習したいんなら、すればいいだろ？」

直人は言いながら夏まゆみを一瞥した。彼女も同じ想いらしく、やれやれという意思表示が表された。

「しかたねえな」

直人は唸った。

「後30分。30分間、踊り続ける。いいな？ いる人全員でだ。途中でもう帰らなきゃいけないって人は帰ってくれてかまわない」
それだけ言っただけで直人は待合室を出て行った。

「おらおら、時間はないよお！ さっさと始めな！」

夏まゆみは大きく手をあわせて音を鳴らした。

少女たちはすぐにシューズを履き替え、舞台に入った。さすがに全員が入りきれなかったために、他の人は待合室で踊ることになった。実は待合室はレッスンスタジオと同じ設備になっているのだ。それから30分間、少女たちは踊り続けた。

待合室を出たと言っても、廊下に出た直人はドアにもたれたままでそこから離れようとはしなかった。

「……甘い、か」

——だからお前は甘いんだよ！

いつまで根に持っているのだろう、二年も前の言葉を。失われる記憶の中で、失われることのない記憶を。

「……隆、君はいつまで経っても、君のままなのか？」

当然、答えは返ってこない。

第八十四話 辛い日々は続く

翌日。2回目の公演。

関係者は昨日より少なく、興味本位で訪れた人は増えたものの、全体的な人数で言うところ……確実に減っていた。

2日目だけではない。3日目も4日目も、夜を迎える度に観客席から人が居なくなっていく。

人が減る。公演が始まる度に、少女たちの不安が募っていく。

「もう出たくない！」

そう泣き叫ぶ者も少なくない。それでも、皆が立ち続けた。

「こんなの耐えられない……チームAだけに公演をさせるなんて！」
直人は怒りに任せて椅子を蹴り上げた。

ここはドン・キホーテ待合室。直人が自室のように幾度となく使ってきた、そして今も尚使い続ける待合室。ナオトの泣く姿も、笑う姿も、怒る姿も、この待合室ではすべて起こっている。

「そうカリカリすんなよ。秋元のおっさんも何か考えがあると思うぜ？」

当麻は直人の八つ当たりの被害にあわないためにテーブルの上で胡坐をかいていた。

右腕で足に肘をついて顔を支える。

「あんさあ、別にそうキレるこたあねえだろ？」

「だってさ、チームAだけが今舞台に立たされて、踊らされて、歌わされてんだぞ？ガラガラのお客席を真正面から見てるのは他の誰でもない……チームAの彼女たちだ！」

「それぐらいはあ、俺でもわかってらあ」

「くそ！康さんは何考えてんだ！」

もう一つの椅子を持ち上げて壁に叩きつける。当然、椅子は勢い良く壁に叩きつけられた。鉄製の椅子は少しはげてしまい、壁にも薄いへこみができた。

「後で弁償させられてもしらねえぜ？」

「弁償ぐらいしてやるよ。金なんて、使い道なんかねえんだ」

そつだ。姉さんもないんだ。自分自身に金なんか使ったって、結局は……。

「今日の公演、終わったぜ？」

当麻が腕時計で時間を確認する。午後の8時51分だ。

もう、グランドオープンした12月8日から一週間が過ぎた。

昨日は、観客の人数がギリギリ一桁という数字だった。

今日の観客人数は知らない。知りたくもない。

「俺あ、今から大阪いっけど、おめえも来るか？大阪のバンド仲間
に会いにいくんだけどよあ、来たら喜ぶぜ？明日は土曜日だし、ゆ
つくりできるじゃん？」

「いや、行かないよ。明日は午前撮影入ってるし、午後別の仕事があるんだ」

「そつか、それじゃしかたねえ……ちなみに、向こうのバンドでは俺
ギター担当だけど、ボーカルもやってんぜ！」

「……それでも行かないよ」

「そりゃあ、残念だ。じゃあ、俺は行くぜ？」

「どうやって大阪行くの？」

「……伯父に連れてってもらうんだ」

「君の伯父が大阪まで送迎？なんで？」

「……親父が、大阪にいんだ」

「え？」

直人は、耳を疑った。

「君のお父さんが、大阪にいる？彼は、アメリカの刑務所にいるん
じゃないのか？」

「脱走したんだってよ」

「……通報は、しないのか？」

「まだ、しねえ。あんな奴の気はしらねえが、真相は知るときてえ
んだ」

「そっか」

直人は、先程より気が落ち着いていた。さっきまで荒れ狂っていた自分を思い出して、直人は微笑を浮べた。

「じゃあ、早く行けよ」

「ああ、言われなくてもそうさせてもらうぜ」

当麻は、その場から逃げ去るようにドアノブを掴んだ。

「なあ、一つ聞いていいか？」

「……何？」

直人と当麻は互いに顔を合わせようとしない。

「お前はさ、死に別れで家族を失ったよな？」

「ああ」

「全員」

「そっだ」

きつと、直人はそれがどうした？というような表情をしているだろう。

「生きたまんま失うのと、死んで別れるのと、どっちが辛いと思う？」

「……辛さなんて関係ない。家族を失うってのは、どうしようもなく辛いことだ。もちろん、仲間もそっだ」

「俺を失ったら辛えっていいてえのか？俺はそんな甘っちょろい友情なんていらねえよ」

「……嘘だね」

直人が不適に笑った。それは、当麻の事を分かりきっているからできる表情であるのだ。

「ああ、嘘だ」

当麻はドアノブから手を離した。体を回転させ、立ちすくむ直人に近づいた。

「一発、殴らせろや」

そう言っつて、当麻は右手に拳を作り、想いきり直人の左頬にぶつけた。

「……いてえよ」

直人も負けずと拳を当麻にぶつけた。当麻の足が少しすくんだ。
「倍返しはねえだろうが」

そうは言っているが、当麻の口元は吊り上がっていた。それは、直人も同様だ。

「「よっしゃ！」」

2人は勢いよく拳をぶつけた。その拳は離れない。

「「気合100パー！闘魂注入！」」

2人は目を合わせた。

これは、2人の昔ながらの流儀だ。落ち込んだ時、喧嘩した時、怒り狂っている時、ライブ前の休憩時間の時、大切な人を失った時、そんな時に2人は殴り合って決まりの台詞を言うのだ。

——気合100パー！闘魂注入！

と。これをやりはじめたきっかけを辿ると、何年も前まで遡ることになる。

「じゃあな」

今度こそ、当麻はドアノブを回した。

「——お前、いつから聞いてたんだ？」

「直人が椅子を蹴った時から」

「要するに最初からってことじゃねえか」

ドアを開けた向こうには、敦子が立っていた。

「たく、しかたねえな」

当麻はドアを開けたまま敦子の横を通り過ぎるように廊下を進む。

「2人でごゆつくり」

当麻はそう言い残して、歩き続ける。

「なんか、ちよっと恥ずかしいな」

「2人の殴り合いは私も優子も昔から知ってるわよ」

「そうだったか？僕病気だからそんなこともうとつくに忘れちゃったよ」

「じゃあ、昔から皆に好青年って言われることも覚えてないわね」

「それは覚えてる」

「都合の良い記憶障害だこと」
全く頷ける話だ。

翌日。大阪。

「ありがとな、じつちゃん」

東京から大阪までわざわざ送ってくれた伯父に当麻は深く感謝した。

目の前にあるのは、古い一軒屋。

「こんなところにいるのか」

当麻は、家に入った。ノックはしない。この家にいるのは、赤の他人などではない。

「よう、当麻あ。元気にしてつか？」

「ああ、この通り元気さ、お前のおかげでな、このクソ親父が」

当麻は部屋を見回した。色んなゴミや残骸が散らかっている。

「よくもまあ、こんなゴミだらけの部屋で生活できるもんだ」

「ここには三日しかすんでえよ。お前がここにくんの待ってたんだ。さつさと落とし前つけようぜ」

男は、部屋の中央で胡坐をかいている。右手に、ナイフを持って。

「殺し合うのは、趣味じゃねえよ」

「まあそついうなよ。五年前は殺し合ったじゃねえか」

「ほとんど俺の一方的だったじゃねえか」

「そんなこたあどうでもいいんだよ」

男は立ち上がり、左手にもう一つナイフを取り、放り投げた。当麻はそれをキャッチする。

「どうした？こいよ。家族に家族を奪われた憎しみを失っちゃったのか？」

「……黙れ」

当麻はナイフを捨てた。彼の瞳に宿る意志は、憎しみなどではな

男の右手に掴まれたナイフは、深く当麻の腹を刺していた。

第八十四話 辛い日々は続く（後書き）

ここで、ちょっと次回予告。

次話は続き。その次は、直人と当麻の「殴り合い」についての回想編です。

第八十五話 世界は狭い

「あ、ぐ……」

腹部に恐ろしく痛みが走る。とてつもなく、鈍い痛み。どうしようもなく、痛かった。

「どうだあ？痛いかな！どうだ！刺された気分はよあ！」

当麻は、急に頭痛に襲われ、倒れた。解放された男は無防備になった当麻にのしかかった。腹部に突き刺さったナイフをえぐる。

「ぐわあああああああああああ！」

「ヒヤハハハハハハハハハ！」

男は高らかに笑った。聞いていると、不気味で不気味で仕方なかった。

「気分……だと？」

当麻は抵抗しようとして男の胸ぐらを掴んだ。

「ああ、最高だよ！」

右手の拳を相手の顔面にぶつけた。男は仰け反った。その隙を逃すことはない。今なら逃げれる！

当麻は素早く立ち上がった。玄関に向かおうとする。

「ああっ！」

当麻の左足に向かって男がナイフを投げた。ナイフは見事に左足を貫通し、当麻はリビングドア付近で倒れることになった。

「これで、終わりだな、息子お。今まで、退屈な人生だったろ？」

男は尋ねる。そんな男に、当麻は微笑を浮べた。

「確かに退屈だった……退屈すぎて、死にそうだった。けどよあ、退屈な人生でも、俺はそれで良いと思ってる。どんだけ退屈でもなあ……大切な人がいたら、それでいいんだよ」

「遺言は、そんだけかよ」

男は、上唇を舐めた。

左足を貫通したナイフを抜き取る。

「うぐっ！」

当麻は悶えた。男がナイフを振りかざす。

「チキシヨウ……」

俺はこのまま死ぬのかよ。家族を失った苦しみをずっと味わってきて、もう終わりなのかよ？

―僕たちは、もう永遠の親友だよ。

あん時、俺を通り魔から救ってくれたのはお前だったよな、直人。助けて、俺に手を差し伸べて、お前はこんなくさい台詞を言いやがったんだ。全く、笑える話だぜ。まだ中学生にもなっていない奴が通り魔の高校生から俺を助けるなんてよ。ま、そんな時が俺たちの出会のきっかけだけど。

ずっと、俺は直人、お前のバツだった。お前の隣で、ずっとギターを弾きたかった。だけど、1人だけ成長していくお前を見て、俺は少し嫉妬しちまったんだよ。

そうだ、敦子と優子にだ。あいつらはこれからも直人と一緒に音楽界を渡り歩いていくんだろうな。

なあ、直人、お前はもう、俺に音を預けてくんねえのか？

「死ねよ！」

ナイフが振り下ろされる――！！

その瞬間だった。

銃声が響いた。

気がつくと、男が肩を抑えてうずくまっていた。きっと、誰かが男の肩を撃ち抜いたのだろう。

「間に合ったか」

「野村のおっさん……」

家の中庭から、野村敬二が入ってきた。昔から直人や当麻がお世話になってきたベテラン刑事だ。

「なんで……」

「出張つてやつだ。大阪に来た途端、近所の人から通報があつてな。来てみたら、お前が殺されそうになってたんだよ」

懷から手錠を取り出した。

「逮捕するぞ、実の息子から家族を奪った罪は、お前の人生では償えない」

野村敬二はそう言つて、男を連れていった。当麻の、実の父親を。「親父！」

当麻が呼びかけた。

「あんたは、なんで母さんを、妹を殺した！」

「……人を殺すとなあ、たまらない快樂がするのかなあと思つてよ。興味本位で殺しちゃった」

男は、父親は不適な笑みを浮かべた。その言葉を聞いた途端、当麻は実の父親から顔を逸らした。

「……あんたは、最低だ」

「愛奈、わざわざ大阪までくるこたあなかっただろ？」

「そんなことないよ、あなたはずっと一緒にバンドをしてきた仲だもの」

大阪の総合病院。当麻は手術を施されて一命を取り留めた。元々命に別状はなかったらしく、当麻もそれほど深刻そうに考えてはいない。

昔のバンド仲間である愛奈。当麻の想い人であり、片思いの相手だ。

「愛奈、もういいからさ」

「ホント？」

「ああ、愛奈。これから用事あんだろ？」

「そうだけど……」

「じゃあ、速く行けよ。遅刻しちまうぜ？」

「……ありがとう」

愛奈は軽く手を振つた後、病室を出て行った。すれ違い様に看護婦が花束を持ってきた。

「大切な友人に渡してほしい、と先程フードをかぶった青年から渡されました」

「あ、ありがとうございます」

看護婦は病室を出た。

ああ、そういうことが、チキシヨウ。俺はまた助けられちゃったってことか。

当麻は、机においてあった携帯を手に取り、ある男に電話をかけた。

【もしもし？】

「お前の仕業か、直人」

【何のことやら】

「とぼけんじゃねえよ」

【気づくのが予想よりも速かったね】

こいつ、最近喋り方がむかつくな。

「花束も、警察に通報したのもお前だろう。ついでに愛奈を俺んとこに差し向けたのもてめえだな？」

【ご名答。でも50点かな？】

「なんで」

【野村さんは僕が大阪に行かしたんだよ。出張じゃなくて。襲われたときに、助けられるなら知人のほうがいいだろうって思っ】

「お前、最低だな」

【褒め言葉をどうも。じゃあ、僕は切る――】

面倒くさくなって、こつちから電話を切った。

たく、本当に最低な奴で、最高な奴だ。

「あいつ、一体どうしちゃったんだ？」

「どうしたの、ナオ君？」

「いいや、なんでも。ただの他愛もない喧嘩さ」

直人は電話の蓋を閉じた。

「優子、君はなんでここにいるのかな？」

「撮影現場が見てみたかったんだよねえ」

「ここは、ドラマの撮影現場。優子は特別に見学者という形で同行させてもらってる。」

「当麻……ワリイな。僕なんかが、無二の親友で」

第八十六話 人と人（前書き）

今回は予告どおり回想です。

第八十六話 人と人

中学一年生の冬。いや、もう春にさしかかっている。
後二週間ほどで一年生の生活が終わる。

「早いなあ、もう桜が咲いてるんだあ」

月曜日の真昼。直人は学校に来たばかりだった。

愛奈、それに当麻を含めたバンドを結成して行ったライブ。その後、一度は出逢った……正しく言うとしれ違ったことのある秋元康の誘いを受けてアイドルデビュー。長い髪が特徴、さらに完璧な容姿と歌声が人気をよんだ。そしてたちま雑誌やTVに主演するようになりはじめて、今にさしかかる。

「桜だあ、綺麗だねえ」

学校のグラウンドに咲く桜を見て、前田敦子はそう言った。さらにその隣で愛奈は……机に突っ伏して寝ていた。今は弁当時間が終わって昼の休み時だ。教室には様々な人たちがいるが、アイドルの直人に興味を持つ者はいない。小学校時代から、ずっと同じ学び舎で育ってきたからだ。

「あ、直人のファンかなあ」

グラウンドの奥に位置する正面玄関。その門の奥の住宅地の前には多くの人たちが集まっていた。役8割を女性が占めている。

「いいな、人気者は」

「なんで僕がこんなに人気になるのかわからないなあ」

「天然な人は自意識過剰じゃないからじゃない？」

敦子が言った。

直人は決して自分を過大評価したりなんかしない。そこが彼の良いところだ。

そして優しすぎるころは、彼の悪いところだ。

「先生もきつと困ってると思うよ？直人が色んな人を連れてきちゃうから」

「勝手に来るんだよ」

そこで、直人は目を細めた。

「所詮、ここにいるのは、僕が、アイドル、だからだよ。それ以外に理由なんてない。有名人がいたらそれでいいんだ」

ああ、人なんて所詮そんなものだ。ただの人間になんか、興味なんかないんだ。

「よお、直人のやろう!」

途端に、肩を思い切り掴まれた。当麻だ。

「いつも荒いんだよ、当麻。君は僕の体のことを知らないのか?」
「もちろん知ってるさあ」

当麻の言葉を聞きながら直人は録音機を確認した。今はストップ状態にある。直人は、録音モードをオンにした。
「もうちょつとで、授業始まるよ」

夕方。当麻は愛奈と共に帰路を歩いていた。

「直人ってほんとすっごいよねえ」

「まあな。あいつはさ、イケメンだし、性格良いし、頭ええし、完璧な奴だよ」

「現実にいるんだねえ、そんな人が」

全くその通りだ。

川の横辺りの土手上的の道を2人は歩いていた。2人とも昔からの幼馴染で、良く共に行動してきた仲間だ。

当麻は、そんな幼馴染の横顔を伺った。当麻にとって、なびく愛奈の黒髪がとてつもなく美しく見えた。

愛奈に対して恋心を抱くようになったのは、小5の頃からだった。その時は言つの恥ずかしくて何も打ち明けられなかった。

だけど、その後に会った直人には打ち明けられた。

あいつは、いつも味方をしてくれた。

(今なら、気持ちを伝えられるかしんねえな)

「なあ、あい……」

「ねえ、当麻」

当麻が話し出す前に、愛奈が言葉を遮った。

「私ね、直人の事が好きなんだ」

「……え？」

一瞬、世界が真っ白になったのかと思った。

だけど、それは間違いだった。

色は……真っ黒だった。

「あなたに言うのが初めてなの」

「お、おお、そうか……頑張れよ。あいつだったら、オツケーしてくれると思うぜ」

「どうだろう？彼、たぶん優子さんの事が好きだと思うよ」

「いや、それはねえだろ。彼女いんのによ」

「あ、そうだったね……私、用事あるから先に行くね」

「おう、また明日な」

「じゃあね」

軽く手を振って愛奈は走り去っていく。一本の静かな道を。

「たくよ、盗み聞きなんて趣味ワリいじゃねえか」

直人は土手を滑っていく。その隣では、土手の斜めを利用して寝そべっている直人がいた。

「寝てたら君たちが勝手に来たんだろ？」

直人はふつと笑った。

「皮肉だな。僕は君の恋路を応援してて、でも彼女は僕のが好きで……」

「てめえ、調子こいてんじゃねえ！」

笑うのが許せなくて、いつのまにか当麻は直人に殴りかかっていった。

「いてえよ！」

当然直人も反抗した。

そのまま、2人は殴り合いに陥ってしまった。通りかかった人に

警察を呼ばれるんじゃないかというぐらいの激しさだ、そこにはあった。

「ハア……ハア……」

ようやく収まった。2人はそのまま大の字で土手に寝そべる形になった。

「友達と喧嘩すんの、おれはあ……初めてだ……」

当麻が言った。言葉が終わるのと同時に、直人が立ち上がり当麻に手を差し伸べた。

「友達じゃねえ……親友だ」

「直人お、くさい台詞言いやがるなあ」

そう言いながらも、笑いを絶やさない当麻は直人の手を握った。起き上がった当麻は、直人に拳を向けた。

「俺たちが親友の証だ」

「え？」

「拳をあわせんだよ」

直人は、言われたとおりに拳を拳へぶつけた。

「にひひひ！」

ただ、それだけだった。口からにじみ出る血が見えなくなるほど、彼の笑顔は、輝いて見えた。

これが、2人の殴り合いの物語。

第八十七話 人の難しさ

今日も公演はある。休みなんてない。少なくとも、彼女達がデビューするまでは。

今日は公演の二時間前に集合してもらった。チームAの公演が満員にならない限り、チームKやBが舞台上に上がる事はない。

「今から、チラシ配りをしてもらいたい。やっぱり、自分たちのことは自分たちで何とかすべきだと思うんだ」

ここは、ドン・キホーテは近いの劇場。チームAの面々が揃う中、直人は何枚ものチラシを手に抱えていた。

「分かったよ、直人君。配ればいいんだよね？」
「愛想よくね」

直人が持つチラシを最初に受け取ったのは、最年長である篠田麻里子だった。

麻里子は、皆に声をかける。次第に、麻里子が持つチラシの量は少なくなっていた。それは、敦子やたかみな達でチラシを手分けしているからだ。

「じゃあ、行ってくるね」

麻里子が直人に言った。

「うん」

12月の夕方は薄暗く、午後5時30分だというのに空は真っ暗だ。

それでも、秋葉原の一通りはいつでも変わらない。歩道はいつだって無数の人であふれかえっている。

「AKB48をどうか宜しく願います！」

直人がドン・キホーテを出ると、さっそくというか必死に敦子たちチームAの面々が宣伝活動を行っていた。

「僕も……なんとかしなくちゃな」

直人は、ある場所に向かっていた。

どこかへ向かう直人を見た敦子は、それでも必死にチラシを配り続けた。

敦子だけではない。麻里子もたかみなも陽菜も、皆が一生懸命にチラシを配り続けていた。

（直人、あなたが言う一生懸命って、こういうことなのかな？）

敦子はもう一度直人が向かった方向を見た。

もう、直人の姿は見えない。

一生懸命。

一生懸命。

どちらの言葉も、敦子にとっては大切な意味を成していると言えるはずだ。

敦子だけでなく、優子にとっても。優子だけでなく、きつと……

AKBにとってもだ。

「おう、お前がそこまで言うんだたら、暇が出来たら寄ってみるよ」

「ああ、ありがとな」

秋葉原の西側の通り。キャバクラの出口から出てきたのは、かの有名な境直人であった。

今、直人は知り合いが経営する店を手当たり次第にあたっていた。そして、客を含むその場の全員に宣伝をしているのだ。もちろん、AKB48の公演をだ。

直人だって、自分がプロデュースしているのだから自分にだって宣伝ぐらいしなければいけないとは思っている。今は、自分のアイドルという職業を利用することしか出来ないけれども、何もしないよりはマシだ。

きつと、そのうち自分をも越える大人気アイドルグループになっ

て、そのうち日本の文化になってしまっただ……さすがに言いすぎか。

「……明日、か」

直人のニューシングルが、明日全国で発売される。約一年ぶりの新曲だ。予約しきれないファンがCD店の前に並んでいるだろう。

今日見たニュースでは、今日の朝から並んでいる人がいるらしいが、「きつと、いける……！」

直人の考えはある意味では的中であり、別の意味では間違いだろう。

観客席は、約9割を占めていた。

もう少して、満員になることができる！

そうだ、夢は少しずつ、現実になりつつあるんだ。

それに、今日は良い日だ。

なんでかっていうと、直人の瞳に映る敦子たちは、とても輝いて見えたからだ。

第八十八話 一步

翌日。午前中、直人は学校に行ける日だったのだが、生憎今日は土曜日だ。

今日は仕事もないため、とにかく暇だった。だから、秋葉原……ではなく、渋谷に来た。

今日は帽子をかぶっているためか、自分がかの有名なアイドルだとは誰も気づかない。それはひとまず安心なのだが、誰も気づかないとなるとさすがに寂しい気がする……。

そんな事を考えているうちに、人気者の直人に新着メールが届いた。

メールの相手はグランドオープン日に、いかにも漫画でありそうなベタな出逢い方をした松井怜奈だ。

直人はクリーニング代を請求しなかったが、友達としての関係があの後始まったのだ。なかなか東京には来れないのでメールのやり取りだけの関係だが、直人はこれも大事な交友だと思っている。

また新たなに新着メール。今度は優子からだ。

内容は……昼飯奢って！……だった。まあ、大体予想はしていたけれども。

「優子は……僕を何かと勘違いしてるんじゃないのか？」

「誰が勘違いしてるの？」

「わあああ！」

いきなり後ろから声をかけられて直人は危うく携帯を落としそうになった。気を取り直すと、直人は声をかけた人物を確認しようとした。

「……麻里子さん？」

「やつぽー」

年下かなあと思っていたので直人は心底驚いた。

「こんなところで何やってるんですか？」

「ちょっとねえ。ねえ、それよりさあ、そろそろ敬語やめたら?」

「一応あなたのほうが年上だよ?」

「気にしない、気にしない」

目の前にいる人物は、マイペースな人だ、と直人は思う。年齢はAKB最年長でも、中身は完璧に子供だ。

直人は、麻里子と話しながら、こっそり優子への返信メールを送った。

『嫌だ』

たった二文字で終わらせた。絵文字なし。携帯を見ずに返信したから間違っただけな文章になっているかもしれない。

怜奈へのメールは、ちゃんとしなければならない。優子と違って、彼女はとても優しい。いや、もちろん優子も優しいんだけど……。

って、一体誰に言い訳してるんだろう、僕は?

「良かったら、カレー一緒に食べに行かない?」

麻里子が言った。もちろん、直人は頷いた。

「いいですね、すぐそこに店あるから行きましょっか」

こうして、直人は麻里子と一緒にご飯を食べることになった。優子と違って、奢ってなんて事は言わないだろう。

……優子と比べてばっかだな、僕は。

「誰にメールしてるの?」

「凄く可愛い子です」

「彼女?」

「だったらさぞかし僕は幸せなんだろうね……」

冗談を口ずさみながら直人は返信メールを送った。

……もしかしたら、冗談じゃなくて真にそう思っているかもしれない。

「だったら、あなたの彼女はどんな子?」

「一言で説明すると……絵に描いたような人です」

直人は言った。その言葉だけは、直人にとって非常に自信があっ

た。

「そろそろ、チームKの公演が始まると思いますよ」

直人の言葉に、麻里子は眉を細めた。

「どういうこと？」

そう聞かれると、直人は空を見上げて微笑んだ。

「今日は、きっと満員ですよ」

グランドオープンした日から一ヶ月。

これedyouやく、一つの物語が終わり、新たな物語が始まる。

第八十九話 AKB48のデビュー

「嘘……」

公演開始まで後20分。今まで客の少なかった劇場の観客席は……見渡す限り満員だった。

席は全て埋まっている他、後ろで立っている者もいる。

この様子を劇場裏から見ていた敦子は呆然と立ちつくす事になった。目の前の現実が、彼女にとっては全く信じられなかった。

それは敦子だけじゃない。他の皆もそうだ。唯一覚えていないのは、境直人だけだ。

「やっぱり、今日は良い日だな……」

直人は微笑んだ。今日の待合室は、いつもと違う気がした。

今日一緒に部屋にいるのは当麻ではない。ダブルマネージャーの内の1人、花蓮だ。

「あなたの努力は報われたみたいだね」

「僕の努力じゃなくて、彼女たちの努力だよ」

「でも、色んなお店回ったんでしょ？」

「……それだけだよ」

ああ、それだけだ。

「今日、ななちゃん公演に来てるらしいですよ？」

「らしいね」

さつき、観客席を見て居るか確かめたところだ。オシャレに冬服を着こなしたななが最前列に座っていた。

「やっぱななちゃんはサイコーに可愛いですね」

「それは恋人だから言えることでしょ？」

「みんな言いますね」

花蓮は直人より遥かに年上……でもないんだけども優子とそう年は変わらない。

「公演開始まで後15分かあ」

直人は呟いた。時計を確認すると、針は45分を越えている。

「チームKの公演日を決めないといけないわね」

「そうだな……いつぐらいが目安だと思う？」

直人が聞いて花蓮を見ると、彼女はいつのまにか手帳を手にとっていた。

「告知の時間がほしいわ。今から、4週間後にしましょう」

「それじゃあ、チームAのみんなの疲労が重なってしまう。遅くて3週間だ。明日から告知する」

「分かったわ。さっそく作業にとりかかる」

「ありがとうございます。明日の午後0時にAKBと僕のホームページに告知を掲載してくれ。チラシを100枚作ったら秋葉原を中心に東京全般に配ってください。都市の掲示板でいいので」

「分かりました」

花蓮は手帳にメモを取ると、そそくさと鞆からノートパソコンを取り出してチラシの作成にとりかかった。

彼女が作業にとりかかるのと同様だっただろうか。部屋のドアをノックする音が響いた。

「はいっていいよお」

「失礼しまあす……」

自信のない声で言いながら少女が入ってきた。

AKBのキャプテンであるたかみなだった。

「どうしたの？ たかみな」

「いやあ、ちよつと不安になってしまつて……」

「ああ……」

そりゃそうか。いきなり満員になって、不安にならない人なんていないよな。そりゃ当然だ。

「大丈夫だよ、たかみななら。歌も上手いし、ダンスにもきれがある。きっと今日も成功するさ。昨日と同じようにやればいいんだよ」

「まあ、そうなんだけど」

不安を消し飛ばす言葉なんて直人には思いつかなかった。

直人には一言しか言えない。

「君がきつと出来る。僕がそう信じてる」

「……ありがとう、直人」

たかみなほつとしたのか、そつと胸を撫で下ろした。

「そろそろ行つてきなよ、舞台に。みんな待つてるからさ。僕もちやんと見てる」

「うん、わかった。じゃあね」

軽く手を振つてたかみなは部屋を出た。その表情からは、不安の色など一切なかった。

「後10分か……」

言いながら直人は席を立った。

「何処に行くの？」

花蓮が問う。

「屋上だよ」

ドン・キホーテの屋上は風当たりがとても良い。中学校の屋上を思い出すほどだ。中学のときは何度かアイドル仕事を口実にして屋上で読書しながら途中で寝たものだ。

今はそんな余裕さえないが。

「今日はそよ風が気持ちいいな」

独り言を呟く。

思えば、「中学の屋上」では色んなことがあった。自殺未遂や、卒業式の日でのななどの再会も屋上だった。それだけじゃない。優子と敦子と3人で夜星観察に行ったりもした。警備員に見つかつてこつ酷く怒られたけれども。

他にも、あの屋上には色んな思い出がある。卒業した後だつて、後輩に連れていってもらつたことがある。

ここの屋上ではどんなことが起こるだろう。

「始まつたか」

午後7時。初めての、満員の中の公演が始まった。

その時、新着メールが届いた。

内容は、今日発売された新曲 白夜 の売り上げ数だ。

売り上げ数は約200万。軽くミリオンを突破していた。

第九十話 ファンレター

その日の公演は何よりも迫力があつた。初めての満員の中での公演だ。失敗は許されるはずがない。

後半の一時間を、直人は観客席の後ろ側から静かに見尽くしていた。

「今日は、ホントに良い日だ」

直人は2通の手紙を見下ろす。

それは、AKB48に宛てられた、初のファンレターだった。

目の前では、16人の少女、あるいは成人女性が踊っていた。いつもよりも、体を激しく動かし、音楽に合わせてキレのある動きを観客に見せる。

今この場に居る観客は、いつしかファンとして客席に座ってくれるに違いない。

「僕も、いつしかそうなるのかな」

アイドルとしての自分を終わらせ、1人のファンとして劇場に来る日がやってくるかもしれない。

いつしか、僕はAKBに比べたらただのヒヨッコになるという現実が来るかもしれない。

「はぁ……疲れた」

公演が終わり、皆はレッスンスタジオに集まっていた。チームAの皆の汗の量はいつもより多かった。

「皆、お疲れ様。今日の公演はとても良かったと思うよ」

直人は言った。彼は、ファンレターを手渡すタイミングを見計らっていたが、タイミングは中々来そうになかった。

「今日は大分疲れたなあ」

亜樹が呟いた。

そりゃそうだろうな。

「すっごいびつくりしたあ。人がいっぱいいるんだもんねえ！」

皆、疲れてはいたけれども、喜びの表情であふれていた。

……今、渡したほうがいいよな。

「皆、渡したいものがあるんだ」

皆を1箇所に集めた。皆を座らせて、直人も同じように座った。

そして、1通の手紙を床に置いた。

「これは？」

前田亜美が問う。

直人は短く答えた。

「ファンレターだよ」

「嘘オ！」

「見せて！見せて！」

チーム最年長の麻里子が手紙の封を開けた。

「読むわよ」

麻里子が手紙を読んでいく。当然麻里子の周りに人が集まっていた。

そんな中の1人の肩を叩いた。

「はい？」

「たかみな、いいかな？」

「あ、はい」

小声で会話を済ませてから、直人はたかみなを廊下へ連れて行った。

たかみなからは少し汗の匂いが漂っている。

「これ」

直人はたかみなにもう一通の手紙を渡した。

「これもファンレターなんだけど……君宛だったんだよ」

「え？」

「直接渡されてね、僕に読ませろだってさ……いいかい？」

「あ、はい」

「じゃあ、読むね」

直人は封を開けて中の本紙を取り出した。本文をちらつと流し読むと、直人は声に出して読み始めた。

「……私は、一度だけ公演を見に行きました。見ているうちはただの素人かなあとは思ってなかったけど、次第に、君たちはただ一生懸命にやっているだけなんだと思いました。ただ、諦めない決意を感じました。私は偶然にも、境直人と友人関係にあったので、この手紙を彼に朗読してもらうことにしました。私はしがない年配だけれども、君たちにはまだ希望と未来がある。ずっと、頑張ってください。私はいつまでも応援しています」

たかみなはとつくに号泣していた。

「どうだったの？」

「たかみな、号泣してたよ。まさか、野村刑事のファンレターがなんなんにも感動的なものだったなんてね」

夜。メンバーを解散させて、直人はななと一緒に駅まで歩いていった。

バイクは、置いてきた。ここまでは敦子と遥香と共に電車であた。二人は考慮したためか、「邪魔はしないよ」と言って先に帰ってしまった。

「最近、良く会えるね。AKBのおかげかな？」

「かな」

「そうだ！私、白夜 買ったよ！」

「そっか、ありがとな」

それは素直に有難い。今から言う事はただの自慢のように聴こえるけれども、近くを通る人の中にはきつと 白夜 のCDを買った人がいると思う。

「最近、他の女の子と遊びすぎじゃない？」

「あ、ちよっ！」

素早くズボンのポケットから携帯を取られた。携帯のメール履歴なんて一個も消してないぞ。

「敦子ちゃんに、愛奈ちゃんに、希ちゃんに……怜奈って誰え？」

「最近会った子だよ」

「ナンパしたの？」

「違うよ」

直人は携帯を取り返した。

「浮気しちゃ駄目だよお？最新メールに載ってる写真見たけどすごい可愛いじゃん！」

「あ、もしかして妬いてる？嬉しいなあ」

「妬いてなんかないもおん」

ななは頬を膨らませた。

やっぱり可愛いな、なんて思っていたので、気がつく人と人になんかぶつかっていた。

第九十一話 新たな踏み出し

朝起きてTVをつけてみると、直人の新曲 白夜 がミリオンセラーを突破したというニュースが放送されていた。

私は、それを見ながら朝食を取る。

その前に顔を洗って自分の顔を見た。当然、鏡に映るのは私、前田敦子だ。

昨日、本当のデビューを果たしたAKB48の1人だ。

直人とAKBを比べたら、天と地の差ほどもある。

「きつと、私たちなんて一生直人に追いつけないんだよ」

いつも、そう思っていた。TVに直人が出る度にそう思った。

直人の新曲のニュースが終わり、次にAKBのニュースが放送された。

「え？」

一瞬、嘘かと思った。

『今日午前0時に、境直人、及びAKB48のホームページから、AKBに新たなメンバーを導入、3週間後に新メンバーの公演を始めるということです』

食べているパンを落としそうになった。

昨日、やっと客席が満員になって、これから頑張っていこうって、チームAのつながりが強まったと思ってたのに……。

私たちだけじゃ駄目ってことなの？

ねえ、直人。なんで、そんなことするの？

昨日の私たちの公演見たよね？満員御礼の公演。 桜の花びらたち なんか、お客さんと一緒に歌ったんだよ？

劇場の、公演の中に、何かが築き上げられてきた気がしたのに……

何とかいってよ、直人……

直人はドン・キホーテの新たな設置部屋である楽屋にいた。最近設備を整えたため、部屋はどこもかしこも綺麗だ。劇場に近いため、公演を終えたメンバーも立ち寄れるだろう。

最近のAKBは希望を見出せていた。1月3日に 桜の花びらたち が深夜ドラマのエンディングテーマに選ばれ、メンバー自身も少しだが本編に出演することができた。

そして、2月4日。昨日のことだが、初の満員御礼の公演が始まった。

「やっぱり、皆に事前に話しておくべきだったかな」

3日前の2月1日。実は、メンバーには事前に話さずに初のシングル 桜の花びらたち が発売されたのだ。いまだ発売していることを知らない人がいるかもしれない。

もしかしたら、メンバーの中にも

「ああ、僕はなんて莫迦なんだろう……」

直人はノートパソコンの電源を落とした。落とそうとした。

「あれ？」

Eメールが届いていた。Eメールをしていた覚えなんてないんだけど。

直人はメールを開いた。

それは、直人に対してのファンレターだった。

「誰からだ？」

本文を読んでいく。ごく普通のファンレターだ。だけど、最後の文だけは……

なんだよ、これ？」

思わず嘖き出しそうになった。

『頑張らないと、逮捕しちゃうぞ！（ハートマーク）』

二回読むと、もう我慢できずに爆笑してしまった。

差出人の名前を見なくても分かる。

「ハッキングしてきたんだな、あの人は」

まだ18歳だというのに、やはり彼女は天才だ。

天才が故に、警察の上層部に這い上がる事が出来たんだ。

まあ、今はただの若い研究者だけだ。

「どうしたの？」

「わあああああ！」

いきなりマネージャーの詩織に至近距離から声をかけられるとビツクリした。しかも、左耳の僅か5cmの距離から言われると余計に。

「もう、気配消すのやめてくださいよぉ」

直人は文句を言うが、詩織はそれを無視した。

「このメール……ああ、鈴梨蘭っていうあの変人」

「変人呼ばわりしたら怒りますよ。あの人」

「怒らないでしょう。あの人は周りの調子に惑わされない人だし」

「まあ、そうなんでしょうね」

鈴梨蘭。どこまでも不器用な人で、器用な人。

直人と彼女の出会いはいわゆる偶然的であり、必然的だ。

いや、どちらかというと必然だ。鈴梨蘭という人物は、境直人という人物とその身体状況、並びに心理状況を知りたくて、わざわざ精密な作戦を練って直人と蘭を出逢わせた。蘭という研究者は怖い物凄く怖い。

だけど、見方を変えれば直人と蘭の出会いはいわゆる偶然だ。直人が不治の病に侵されたのは神の前触れである。蘭が境直人を見つけたのも、彼がただ単にアイドルで有名な人物だっただけのことだ。

別に、偶然とか必然とかどうでも良いんだけど。

「さあ、ショータイムだ」

直人はズボンのポケットからチェスに使うキングを取り出した。

「これからが、楽しい所なんだよ」

第九十二話 チームKのデビュー

あれから数週間が経った3月31日。

予定では3週間後にするはずだったが、大分予定を先延ばしにしてみました。色々な準備や管理についても問題があったが、最も重要だったのがチームKの実力だ。

彼女たちはどう見ても素人だ。それは分かっている。メンバーには身体能力が良い人、それでない人、歌唱力が高い人、低い人様々な人がいる。

だけど、皆はまだまだ未熟だ。それが唯一の共通点だ。だから、夏まゆみの提案により、公演開始日を先延ばしにした。

今、劇場ではチームKのメンバーが最後のレッスンを行っていた。皆公演日が明日ということもあってか、いつもよりも気迫が違った。チームKのキャプテンに選ばれた秋元才加は皆を仕切りながらも、自分のレッスンに集中していた。

「みんな、頑張れ！」

公演の振り付けを確認する。そんな時だった。

才加の視線に、一つの出来事が目に映っていた。

ここからじゃ誰か分からないが、ある2人が歌詞の紙に落書きをしていたのだ。

それを見た才加が2人に近づいていく。どうやら、1人は最年少の藤江れいなだった。もう1人は仁藤萌乃。

「歌詞の書いてある紙に絵なんて描くなよ！時間ないだろ！練習しろよ！」

劇場が一瞬、静寂に包まれる。れいなと萌乃は何が起こったのかわからなかった。だけど次の瞬間、2人は大声で泣き出した。

その時に佐江が才加を近くのエレベーターホールまで連れていった。そう、メンバーがいない場所まで。

佐江にも、才加の気持ちは分かった。もちろん、歌詞の書いてあ

る紙に落書きをするのはいけないことだけでも、やっぱり今のところはそこまで強く言わなくて良いと思う。

「あんた！あの言い方はないわ！」

「なんだよ！」

佐江の言葉を聞いた才加は負けずと彼女の胸ぐらを掴んで反論した。

「何よ！」

佐江も一歩も引かない。当然、その騒ぎを聞きつけたメンバーが駆けつけてきた。

「あなたの言ってることは正しいと思う！でも、あの言い方はない！あの子たちを何歳だと思ってるの！」

佐江の言葉を聞いて、才加はやっと我に返った。

「うわあああああ！——ごめん！」

才加は号泣する。それに続いて佐江も。

「私のほうこそ言いすぎた、ごめん！」

丁度その時にはチームK全員がエレベーターホールに集まっていた。

チームK全員が、2人と同じように号泣していた。

チームKが一つになる瞬間だった。

翌日、公演直前。

夏まゆみを交えてのチームKの円陣が組まれた。その円陣の中で、夏まゆみは注意事項と付け加えて言った。

「手からパワー、毛穴からオーナ、目からビームを出して。30人の人たちを自分のファンにしてきなさい」

緊張もあつてか、優子は涙が出そうになった。

「チームK、行くよQ」

チームKが肩を組んだ。

そして、舞台へと走り出る。

チームK初の公演が始まった。
観客席は、埋まっていた。

第九十三話 満員御礼の公演

観客席は、埋まっていた。それはもう文字通りに、満員だった。

チームKは、チームAも行っている公演『PARTYが始まるよ』を行った。観客席からは歓声と拍手が巻き起こっていた。チームAの地獄のような公園の日々と比べれば、今日の公演は「幸せ」と言っ
てよかった。

「ああ、チームAの皆はきつと悔しいだろうな……」

舞台裏で直人はぼそつと呟いた。チームKは表情豊かに歌の振り付けを難なくこなしていく。

ゆっくり見ていたかったが、新着メールは無視できなかった。

差出人は、高校の同級生だ。

アイドルであると同時に、直人は他人から深く尊敬される人物だ。相談も良くされる。

名は、諸星芽衣。同じクラスで、気が弱く……いじめを受けていた少女だ。

彼女をいじめの対象としたのが、直人の通うクラスであった。原因は、クラスを中心人物だった男子生徒が未成年にも関わらず飲酒をしていのを注意したから。完全なる逆恨みだ。男子生徒と交友の深かったクラスメイトや、その男子生徒に好意を抱いていた女子生徒、さらには彼女と中の良い女性生徒も加わり、完全なる多対一のいじめとなった。

直人は、仕事に専念しすぎて、芽衣の相談役をすることしか出来なかった。それがどうしても許せなかった。

優子と敦子は、いじめに加勢してはなかったが、見て見ぬふりをしていた。

直人に彼女たちを攻める気はない。攻めるべきは自分自身だ。

『私、もう駄目……こんな世界、嫌い。もっと綺麗な世界に逝きたい』

メールの本文は、たったの一文だけだった。

「行きたいじゃなくて、逝きたいか」

その言葉の意味が、直人には分かる。

直人はステージのほうを一瞥した。ずっと踊っている。16人の少女たちが。

彼女たちにはもう、僕は必要ないのかもしれない。

今は、芽衣が僕を必要としてくれている。いや、逆だ。僕が芽衣を必要としている。

「戸賀崎さん、ここに居ますか？」

「後ろにいるけど？」

そう言われると直人は後ろに振り向いた。

「僕は、いつかこのプロジェクトが外されるんですか？」

「プロジェクトとは、AKBのことか？それとも、精神実験のことか？」

「……両方です」

「……外されたときには、君はもうこの世にはいないだろう」

「まあ、そうですね」

……戸賀崎さん、言葉にトゲがあるよ。

「また問題か？」

「問題じゃありません。ただの……イレギュラーです」

「そういうのを問題と言うんだ」

「ふん」

戸賀崎の言葉に、直人は鼻で笑うことによって答えた。

そして、走り出した。

高校の屋上へ。

直人が通っていた中学校の屋上は、3年間の直人の記憶の保管庫。直人の通う高校の屋上は、今までの1年間、さらにこれからの2年間の記憶の保管庫だ。

思い返せば、今日は4月1日。直人をはじめ、彼の同い年が二年生へと進学する日だ。

記憶障害のせいなのか、今日の学校での出来事が深く思い出すことができない。

……また僕のせいで、人を傷つけてしまうのか？
屋上についた。

案の定、諸星芽衣がそこについた。ご丁寧に靴までぬいでいる。

「芽衣」

直人は優しく話しかけた。

「こないで」

芽衣は、低い声で言った。彼女は、完全に境直人を拒んでいるようだった。

「やっぱり私、耐え切れないな……弱い女だから」

「何言ってるんだよ、そこ危ないぞ？早くこっちこいよ」

「来ないでって言ってるでしょ」

芽衣が塀を乗り越えようとする。それを見て直人は手を伸ばした。「いじめられた？だからどうしたよ？お前の未来に、こんなことは関係ねえだろ！僕が、絶対何とかするから！」

芽衣が飛び降りないように直人は必死に説得を試みる。

直人の想いは、まだ彼女には届かない。

名に伝わる言葉。

——人っていうのはね、寂しがり屋なの。誰だって。

ああ、ありがとう、蘭さん。あなたの言葉はきっと正しい。

「君は独りじゃない！」

「え？」

初めて、芽衣と目が合った。

泣いていた。

「皆が君を嫌っても、みんなが君を見捨てても……僕だけはずっと君の傍にいるから！」

「……ホントに？」

「ああ、ホントだ！」

芽衣は、体を直人に向けた。そして手を伸ばす。直人は、芽衣に近づいた……その時だった。

「きゃあ！」

突風がなびいて芽衣がバランスを崩した。走り出した直人が手を掴むことによってギリギリ芽衣をキャッチすることに成功できた。

（暗くて、何も見えない！）

今はもう夜だ。しかし、グラウンドの電気がついているので全く見えないわけではない。

「助けてやるから、暴れるなよ」

直人はぶら下がる芽衣を引っ張り、どうにか助けることに成功した。

「大丈夫？」

「うん、ありがとう、直人君」

直人は微笑んだ。景色は薄暗かったけれども、芽衣には彼の微笑みがはっきり見えた……気がした。

「おや、直人、どうしたんだよ……諸星か？」

屋上に現れたのは、芽衣の自殺の原因を作った男子生徒であった。後ろには彼に好意を寄せる女子生徒を含む5人のクラスメイトがいた。

「なんで直人、諸星といんの？オメエラ付き合ってたの？」

「……隆、前はテメエを許した。なんせ、傷つくのは俺だけだったからな」

僕、ではなく俺と言う直人。

「だけどさ、正しい奴を傷つけるカスは放つとけねえよなあ！」

直人は男子生徒を殴り倒した。そのまま馬乗りになって男子生徒の顔面を殴り続けた。

僕には、これしか出来ない！

「お前さあ、ふざけんなよ。オメエもハミゴだな」

「構わないさ。だけどなあ、芽衣を傷つけんのはゆるさねえかな

！」

直人が、ある物を男子生徒の首に突きつけた。

それは、刃渡り15cmの小さなナイフの刃だ。男子生徒の顔が一気に引きつった。

「もう、芽衣に関わるなよ」

「ああ、わかった」

「後、今僕がしていることはみんなには言わないでくれよ。後一応ハミゴにしないでね。さっき構わないって言っちゃったけど。アイドルとしての株がさがっちゃうから」

ナイフを持つ手に力をこめる。

「分かった！わかった！だからどいてくれ！」

男子生徒のわめきがあまりにもうるさい為、直人は立ち上がった。男子生徒はそそくさと、ただじっと見ていた女子生徒たちと共に逃げ去った。

「林檎の皮むきナイフでびびるなんて、所詮は凡人だな」

直人はナイフを放り捨てた。そして、怯えてうずくまる芽衣に手を差し伸べた。

ずっと、怖かったんだ。あいつが現れて、ずっと怖がっていたんだ。

「握れよ。君にはまだまだ色んなことが残ってるよ」

涙がポロポロと溢れてくる。芽衣は涙を拭きもせず、直人の手を握った。

直人は、握り返した。

第九十四話 さくらまつり

チームKの公演は、その名の通り大成功に終わった。途中から直人は観ることができなかったが、優子によれば、最高の公演だったらしい。

「みんな、お疲れ様」

直人が楽屋に戻ってきた頃にはもう公演は終了の後であり、メンバーは楽屋で一息吐いていた。みんなの表情からは達成感が伺える。

「由依、明日の公演はどうする？」

「出来ません。夜行バスには間に合うから」

「そっか」

由依は、毎週京都から夜行バスで来ている。もちろん、京都へ帰るときにも夜行バスを使用する。

「私、良い部屋見つけたんです！」

「お、ホントに？」

「うん、明日、時間空いてるときに見に行くことになってるから……ごめんなさい、部屋見つけるのもっと早かったら12日間連続公演に出られたのに」

「大丈夫だよ。他のみんなも……君のぶんまで頑張ってくれるさ」
なぜ、一瞬言葉に躊躇ってしまったのだろうか……。

「一緒に行ってみたいけど、神社のさくらまつりでチームAが桜の花びらたちを公演するからなあ。どっちに行こうかなあ」

「さくらまつりのほうに行ってください。私は別に……」

「いや、やっぱり由依と部屋見に行く」

「どうしてなん？」

「さくらまつりはね、去年行ったときは凄くつまんなかったから。それに」

直人は優子を一瞥した。

「もう彼女たちに、僕は必要ないから」

「――私はまだあんたを必要とします」

「まだって、そのうち必要なくなるってこと？」

「そんなことありませんって」

「はは。からかってごめん」

直人は笑った。

……やっぱり、僕は由依を誰かと重ねてみているみたいだ。

ななか？いや、確信はできないな。じゃあ、蘭さん？それとも、

優子や敦子？いや、それはないな。母さん？それゝあないだろ。母さんの顔も覚えてないのに。

「……」

姉さんか。僕は、姉さんと由依を重ねているのか。

だったら、僕はいつまで立っても自立できないみたいだな。もうこの世にいない姉にいつまでもすがって、駄目な奴だよ、ホントに

……

「直人、どうしたん？」

「……あ、いや、その、なんでもないんだ、別に」

（明らかに怪しいなあ。ま、いつか）

由依は深く考えることをやめた。だから、直人の秘密を探らないですんだのだ。

「今日はみんな帰るといい。僕も帰るから」

直人は携帯で時間を確認した。9時は軽く越えている。

次第に、楽屋には人がいなくなっていた。

「由依もそろそろ帰ると良い。泊まるころはあるんだろ？」

「はい。安いホテルに」

「そつか。じゃあ安心だね。おやすみ」

「おやすみなさい」

先に由依が楽屋を出て行った。

「じゃあ、そろそろ僕も行かないとな」

椅子にかけてあった黒のジャケットを羽織り、楽屋を出た。

優子に足を引っ掛けられて転んでしまった。注意した由依はとい

うと、優子に抱きしめられて身動きがとれなくなっていた。

第九十五話 イタズラ

「いってえ〜。完全なる不意打ちだよ……」

「ごめんねえ。まさかそんなに面白くこけるとはおもわなかった」
「不思議と僕も同感だよ」

起き上がったて体勢を立て直した直人。息を深く吸ってから、ゆっくりと優子の肩を叩いた。

「もうやめてよね」

「いやでえす」

優子は直人に向かって舌を出した。

「全く、君は昔からイタズラっ子だったな。すっかり忘れてたよ」
優子と話しながら、直人は由依を見た。

彼女は苦笑いをしていた。

当然の表情だ。

「早く帰りなよ」

「バイク乗せてってえ〜」

「ええ？言っんなら最初っからそう言えばいいのに……なあ由依？」

「え？あ、はい、まあ、そうですね」

「ああ、急に話しかけてビックリした？だったら、ごめん」

「いや、大丈夫です、はい」

きつと、何か考え事をしていたのか、それともただ聞いていたのだろう。どちらにしろ、自分に話題が振られるなんて思わなかったんだ。僕だってそういうときはあるんだ。

だけど……

何でだろう、今日是由依とあんまり会話が弾まないな。

由依と姉さんを重ねて見ていたから？いや、そんなの前からだ。

問題は、意識して喋っていたからということにあるんだろう。

「2人とも、早く帰りな。優子、一応二人乗りは詩織さんから堅く禁止されてるから」

「うん、分かった。横山、いこ」

「あ、はい」

2人が直人に背を向けて歩き去っていく。

そんな2人の後姿が、なぜだかかすんで見えてる。

かすんでる？いや、違う。視界全体がぼやけてる。

ただの視力悪化なんかじゃない。視力に関わる神経が、やられてきてるんだ。

……病という名の僕に。

一番最初に眼がやられるとは予測もつかなかった。だけど、いずれ来るであろう病の悪化が今来ただけなのだ。どうこうすることもできない。そのうち、眼だけでなく、耳の嗅覚や臭覚、そして言葉を話す喉、身体、最後に脳。

ああ、悲惨な末路だ。

「悲惨な末路……だからどうした」

直人は廊下を歩いていく。

視界がぼやけて前に障害物があるかどうか分からない。

何も見えなくなるのは当然嫌だ。読書もできないし、ゲームもできない。チェスもできない。ステージで大勢のファンを見ることができない。AKBの成長を見ることができない。大切な人の笑顔をすることもできない。

だけど、それでも明日はやってくる。

だったら、笑顔で迎えようじゃないか、明日を。必ず来る明日を。――笑顔で明日を迎えられますように。

あの時、そう言ったのは誰だったっけ？記憶障害のせいで、誰が言ったのか想いだせない。その台詞はハッキリと覚えているのに。

「僕は、どうしても悪役にはなれないみたいだな」

直人は走り出した。

「ああ、横山を帰っちゃったなあ。終電には間に合わないかあ」

そう言いながら、優子は秋葉原の歩道を歩いていた。1人で、寂

しく、歩いている。

「やっぱりナオ君は怒らないな……」

そう感じた。いつものナオ君なら、真面目そうで、だけど知らない内に氣遣ってくれていて。私がどれほどイタズラをしても、ナオ君は怒らなかつた。レッスン中に一回だけ怒ったけれど、彼は本当は怒る気なんかなくて、ただ偽っていただけだつた。

ナオ君は、はっきり言つてムチャクチャだ。家族失つて哀しいはずなのに、幼稚園であなたは泣きながら笑つて……。

小学生時代のナオ君は、とてもやんちゃで、毎年クラスの人気者だつた。場を盛り上げてはさらにオチをかけるムードメーカー。ナオ君はそんな人だ。口調も悪くて、人をからかつてばっかで、ずっと笑つてた。私たちの前だけでは……。

きつと、知り合いがいない所では泣いていたんだ。それが辛かつた。だから、徐々に彼は大人しい性格になつてしまった。

ナオ君は特別に入団費なしでミニバスの練習に参加させてもらつていた。メンバーとすぐ打ち解けていた。ナオ君は自称友達作りの天才だつたから。

一歳年下の女の子が言つた。ハードな練習で体調を崩したところを、いつも自分をからかつていたナオ君が声をかけてくれたと。それでも練習を続けようとした私の腕を握つて、「こんなところで仲間が倒れるのを見たくねえ」と優しく話しかけてくれて、椅子に座らして休めと言つてくれた。その時に、ナオ君は言つたそうだ。

「何かあつたら、俺の名前を呼べ。たとえ地球の反対側にいても、絶対にお前を助けてやる！」

小学生が言うような言葉じゃない、と女の子は言い返したけど、心の底ではカッコイイなつて思つて……いつのまにか好きになつてた……らしい。

「ナオ君、昔と比べるとずっと変わつてるようで、ホントは全然変わつてないな」

きつと、敦子も同じ事を言うだろう。

「おい、優子お！」

後ろから声をかけられて優子は振り返った。

直人がバイクで疾走してくるのが見えた。優子に追いつくと、直人はバイクを止めてヘルメットを脱いだ。

「ほら、後ろに乗りなよ！」

「乗せないんじゃないの？」

「いやあ、僕には女の子を置いていくようなことはできないみたいだ。僕って女好きなのかな？」

「……ナオ君らしい」

ほら、やっぱり天然だ。

だって、自分が純粹に優しいって事に気づいてないんだから。

第九十六話 二つ目の公演

「康さん、企画仕上がりましたけど……見ます？」

「いいや、見ないよ。企画はもう君に任せる」

「そう言うと思いました」

それにしても、本当に大丈夫なんだろうか。

チームAの2nd公演『会いたかった』

この企画は順調に進んでいた。ただ、問題が一つある。

渚のCHERRY という曲がこの公演の収録曲の一つだ。この曲は敦子がリードヴォーカルを取り、後ろでみいちゃんを主とする3人がバックダンサー兼コーラスを担当するということになったのだが、問題なのが名前を挙げた2人だ。敦子はひとりだけ前に出ることには酷く抵抗するはずだ。逆にみいちゃんはいつも前にでていた。全く対の考えを持っている2人が、考えとは逆の事をする。

やっぱり、やめたほうがいいのか。でも、とりあえずは2人に説明しないとイケない。バックダンサーはみいちゃん他に2人必要だが、それは場合によって異なる。一応平嶋夏海が決定しているが、後もう1人必要だ。今は候補に倉持明日香と高城亜樹が上がっている。

「今から呼ぶか」

今日は4月2日か。昨日はチームKの初公演日だった。そして今日は……

姉さんが死んだ日だ。

直人が良く居るドン・キホーテ7階の待合室に敦子とみいちゃんを呼び出した。

「4月15日から始まる公演の『会いたかった』に収録されてる

渚のCHERRY についてだ。敦子、きみはリードヴォーカルをやってもらう。みなみはメンバー2人と共にバックダンサーをやってもらう」

「え？」

その声は2人同時だった。

「そんなのやだよ……なんで私だけ前に出るの？」

敦子が震える声で聞いてきた。直人は敦子の瞳を見ることができない。

「決定事項だ。言う通りにしてくれ」

「私が、バックダンサー……？」

みいちゃんの瞳から涙が零れるのはすぐだった。

「私だけ前に出るのなんていや！」

次に敦子が号泣した。みいちゃんも声をあげた。みいちゃんは悔しくて仕方がなかった。逆に敦子は、自分だけが前に出るなんて不平等だと自身に問い詰めている。

それからずっと、2人は泣き止むことはなかった。

やっぱり、今回の公演の構成は間違っていたのかもしれない。もしかしたら、合っていたのかもしれない。

「世界ってのは、ゲームでは狭すぎるマップだよ」

1人でそう呟いた。2人の泣く姿を見れなくて待合室を飛び出す形になってしまったが、逆にやることがなくなってしまった。

…… ああ、またやってしまった。

後悔するしかない。

これまでで、僕はいくつ後悔をしてきただろう？ 数え切れない。いや、実際は思い出すことが出来ないんだが。

第九十七話 僕とあなた

土曜日。

場所は、市内の総合体育館。

そこでは、直人の通う高校のバスケット部の決勝戦が行われていた。この試合で勝てば、今日の大会の優勝チームとなり、全国へと這い上がることになる。

直人は、正式には入部していないが、5番の選手が足の骨折により出られなくなったために急遽5番として出場することになった。直人は運動神経抜群だった。別に激しい行動をとったからといって病が急激に悪化するわけでもない。

相手チームは優勝候補のチームだったが、直人の出現によって圧倒せれつつあった。いや、もう圧倒されている。

ドリブルでディフェンスを交わしていく6番のパスを受け取った4番……当麻は、相手の4番を出し抜いてスリーポイントシュートだが、華麗に舞ったのもつかの間、ボールはリングに当たって跳ね返ってしまう。そのボールを、高くジャンプした直人が掴んでそのままダンクシュートに持ち込んだ。

直人を止められるものは一人もいなかった。直人は華麗にシュートを決めた。リングが激しく揺れ、そのリングにぶら下がる直人は床に着地すると、すぐさま自身のゴールを護るためにゴール下へ走った。

エンドボールから始まった相手のオフENSEは、速攻という手段であつという間に台形の近くまで詰めてきた。速攻とは、遠いパスでゴール下かその近くにいるオフENSEがボールをキャッチしてシュートするというオフENSE方法である。

その攻め方は成功したかに思えた。ボールをキャッチした選手がシュートをしようとしたとき、直人にシュートブロックさせられたのだ。直人はすぐさま7番の選手にパスをおくった。そのままゴー

ル下まで全力疾走。

まだ第2クォーターだというのに、点差は40点まで広がっていた。

「はあ……はあ……」

試合が終わった。111対41。優勝候補だったチームは、圧倒的な点差をつけられて敗れた。特別出場した、境直人に。

だけど、相手チームは不公平なんだと言おうともせず、ただただ「ありがとうございます」と頭を下げていた。もちろん、直人も頭を下げた。

「お疲れ様」

ベンチに戻ると、マネージャーの愛奈が温めのスポーツ飲料を渡してくれた。

「ありがとう」

直人にスポーツ飲料を渡すと、愛奈は他のメンバーに渡すために去っていく。

スポーツ飲料を飲みながら、直人は観客席を見た。自身のチームのベンチに近い観客席は2階だてとなっている。一階は関係者やサポーターたちの観客席だ。2階には様々な人たちがいる。

それは、直人の通う高校の生徒たちだ。学年は問わない。性別も問わない。ただただ、仲間が優勝するところを見たくてきたただけだ。もちろん、その中には敦子と遥香もいる。他校の生徒もいるが、直人は皆その生徒を友達として認識している。

反対側の観客席。一階に観客席はなく、2階だけに固定されたベンチが並んでいる。そこには、AKBのメンバーがいた。きっと何人かは気づいていると思う。彼女たちがAKBのメンバーだということに。

「あ、恵美ちゃんだ……真里菜もいる」

秋葉原のレストラン店員や電化店のレジ店員も見に来てくれてい

た。他にも様々な知人が見に来てくれていた。

その大半は、もちろん女性である。

「……なな」

もちろん、恋人の出場する試合を見に来ないはずがない。ななは、唯1人、ガラガラの本チ列に座っていた。

1人で来たのか、それとも一緒に着たけれど目的地は違ったのか。どっちみち、今会いに行かなきゃならないのは事実だ。

なんでかって？そりゃ、僕が境直人だからだ。

直人は、ななに外で待つてとジェスチャーを送った。あまり自身はなかったが、なんとか伝わったらしい。ななは頷いてベンチを立った。

「愛奈、式はまだだよな？」

「え？うん、そうだけど——」

「僕、ちよつと行くとところあるんだ。すぐ戻ってくるから」

「え、ちよつと待つて！」

言い終わる前に、直人は汗を飛ばしながら走っていった。

「なな」

「こんにちは、ナオ」

ななは涼しい顔をしながら微笑んだ。それに対して直人は、試合を終えたばかりで息を整つちやいない。しかも汗だらだらで、脱いだシューズを片手に持ったまま履き替えた靴はちゃんと履けていない、かかと部分は踏んでいた。

「来て……くれて……ありがとな」

ここまで全力疾走で来たせい、かなり息が上がっている。それほど距離はなかったのだが。

「今日、すつごく恰好よかった」

「ありがとう、別に、そこまで皆の役にたてなかったと想うよ」

「それ、遠まわしの自慢？」

「そうとも言っ」

きつと、小学生時の直人なら、「俺のおかげで優勝したな!」と言っていただろう。だけど、今の直人はやんちゃなときの直人ではなく、優しい直人だ。言うことは違っている。まあ、人をからかうのが好きな所はいつまで経っても変わらないが。全く、記憶障害でからかいたい衝動を消してほしいものだ。

「最近、あなた希ちゃんに会った?」

「なんで?」

「告白したってメールきた」

「まあ、そうだけど。丁寧に断ったよ」

「ふふ、良かった」

ななは微笑んだ。

「まさか、僕がOKするとも想ってた?」

「想ってた」

「はは……マジで?」

ななは頷いた。

ちよつとシヨツクかもな。そこまで信じてもらえないというのは。

「そろそろ行かないとまずいんじゃない?」

「え?」

直人が時計を確認する。

「やっべ!もうすぐで式だ!それじゃ、なな。また後で!」

直人は再び体育館内へと戻っていった。

「どうだった?久しぶりに見た直人のユニフォーム姿は?」

「凄く興奮したかも」

ななは言った。それに対して、大島優子という女性は爆笑した。

「予想通りの答え!やっぱななちゃんって凄く面白い!」

優子の爆笑は止まらない。その後ろで、敦子は優子の爆笑に対して苦笑いを浮かべていた。

第九十話 過去の追憶

「ナオ君とこれからどうすんの？」

もうちよつと爆笑がしたい優子だったが、さすがに周りの視線が気になるので話題を少し変えた。

「交際を続けてそのうち結婚する」

優子の質問にななは即答した。即答できた。

「きつと、ナオ君も同じ事想つてると想うよ」

境直人と剣崎なな。このカップルが破局するなんて事は絶対に考えられなかった。だって2人は、相思相愛の関係なんだから。

2人が話している間に敦子が入ってきた。

「ななちゃんつて、直人の何処がいいと想うの？」

「ああ、私も気になるなあ。教えて、ななちゃん」

まあ、その質問の答えなんて皆一緒だった。彼に好意を寄せる人たちの答えは異なるが、全体的な要素は皆同じなのだ。きつと、ななも。

「えつと、ナオはねえ」

見ての人差し指を顎に当てる。その仕草はあまりにも可愛く見えた。

「優しいし、恰好イイし、頭よいし、スポーツできるし……まあ、でも、一番はナオが『境直人』だからかな？」

「え？」

優子と敦子は同時に口をぽかんと開けた。全く予想外の答えが帰ってきたからだ。

「幼い頃に親を失って、姉を失って、友達失って、色んなもの失って……それでも諦めずに頑張ってきた。それで今の地位を手に入れた。私は、何があつても諦めないナオの心に惚れちゃったんだよね」

「へえ、そうなんだ」

質問を投げかけた敦子は、まるでドラマみたい、と想った。それ

はきつと優子も同じ想いだと思う。ななは本心を言つたまでだ。

「ななちゃんってホントにナオ君のことが好きなんだね」

優子が言つた。その台詞を聞いたななは満面の笑みを浮べた。その笑みがハッキリ2人に向けられていく。

「私がこの先一生愛すのは、ナオ唯1人だから！」

「そんなクサイ台詞よく公の場でいえるね。周りからの視線が痛いよあー」

敦子が言いながら辺りを見回す。通行人が3人を見ては歩き去っていく。

「クサイ台詞だから言えるなんだよ。じゃあ、私そろそろお家に帰らないといけないから、じゃあね」

「また会おうねえ」

「バイバイ」

ななは、軽く手を振って総合体育館を後にした。

大会は式を通じて正式に終了した。当麻率いる男子バスケ部は全国大会への出場が決まり、境直人は、代理選手とし全国大会に出場する選手の中にエントリーされた。本当の5番の選手はそれでよいと喜んでくれた。身体の一部が骨折しただけだ。試合を見に来られないというわけではない。

「当麻、僕もう疲れたよあ。なんか頭がクラクラする」

「それは疲れたんじゃないやなくて睡眠不足だ」

当麻は軽く直人の頭をつついた。

「お前、この後も仕事あんだろ？前田と仲川も公演だろ？」

「まあ、そうなんだけど」

そう言いながら直人は視線を観客席に移した。

あれ？敦子がいない。ななと一緒なのか？そういえば優子もいないあ。

まあ、今は別に会いに行かなくてもいいんだけど。

「愛奈、悪いけど、近くのコンビニで板チョコ買ってきてくれない？」

「いいよ、それぐらいなら。他に何かほしい人は？」

「俺にも板チョコ買ってきてくれよ」

当麻が言った。

「分かった、じゃあ買って来るね」

愛奈は小走りで体育館から非常に近いコンビニへ向かった。

「しかし、また板チョコかよ？」

「疲れている時はいたチョコ食べると良いんだよ」

直人は大きなあくびをした。

「この試合が勝ったのも、俺たちの殴り合いのおかげか？」

「それは疲れるからしてなかったじゃねえか。優子が姉さんのおまじないをしてくれたおかげだよ」

「……そうか」

当麻は微笑んだ。直人は気づいているだろうか。「姉さん」という言葉を言っているときの自分の表情に。昔は自分で言ったときながら涙をポロポロ流してくせに、今はちゃんと笑顔のままで言えてるじゃねえか、なあ直人。

第九十話 過去の追憶（後書き）

テスト期間に入ってしまったので、しばらく投稿はできません。
すいません……。

第九十九話 久しぶりの再会

今日は一日仕事がなかったため、直人は東京を離れて……愛知県名古屋市に来ていた。

AKB48はまだまだ未熟だが、秋元康と共に様々なプロジェクトを考案している。もし（必ずそうさせてみせるが）、AKB48の人气が上がった場合のその後のプロジェクトが仕上がっている。その一つが、AKBの全国展開。簡単に説明すると、妹分となる新たなチームを結成するということだ。その候補に名古屋市が上がつている。

土曜日ということもあって、商店街はとても賑やかだった。

「愛知県って……彼女の出身も愛知だったっけ？」

「何さつきから独り言呟いてんだ？」

ああ、当麻がいるの忘れてた。

「どうせなら、敦子と優子さんも連れてきたらよかったのによお。

愛奈だったらもっとよかったぜ？」

「君の狙いはお見通しだ、この女好きめ」

「お褒めの言葉をどうも」

別に褒めたわけじゃねえつつうの。

「で、誰に会いてえんだ？」

「……別に会いたい人がいるってわけじゃないんだ。豊橋市に行きたい」

「豊橋市かあゝ」

当麻は時間を確認する。

「じゃあ、そっちで昼飯喰うか」

「うん」

愛知県豊橋市。

「おい、ここつてさあ……」

「当麻が言いたいことはよくわかるよ。彼女がここにいる」

「直人、希ちゃんってまだお前のこと諦めてねえんだろ？ バッタリあっちまったらどうすんだよ？」

「そんな時はそんなさ」

「そうかよ」

当麻は腕を組んだ。

愛知県豊橋市。この街には、数年前からずっと直人に片思い中の高校一年生の少女がいる。その女の子は辻村希と言うのだが、きつと直人が探し求めている人は希ではないだろう。

「じゃあ、俺はそこらへんぶらぶらしとくわ」

「うん、僕も用があるから」

当麻は直人に背を向けた。その途端に携帯を手にとって、ある人物に電話をかけた。

「あ、もしもし、希？ よお、久しぶり。おお、元気元気。実はさあ

当麻の口元がわずかに吊り上がった。

直人には悪いが、読者のにはこっちのほうが面白いだろうからな…… なんちつてね。

「お、じゃあな」

通話終了ボタンを切る。

直人、きつと 아이폰 買いに言ってるんだと想う。

直人は早く電話の機種を変えたいと言っていた。二年前も昔の記憶を遡るが、駅の近くには電話専門店があつたはずだ。

「俺あ、これからどうっすっかなあ」

実のところ、当麻に今後の行動の予定なんて全くない。当麻にそこまで細かく考えることのできる脳なんてものはない。

当麻は商店街に入った。老人に子供に若いカップルに…… まさに老若男女。

この中に希がいたりして……。

「あれ？」

商店街の道を歩いていく人通りの中に見覚えのある顔を見つけた。希ではない。ストレートの髪に少しタレ気味のおっとりした眼。

「あれ……松井怜奈か？」

直人から何度か話を聞いた。写真で顔も見た。だから分かる。

（人見知りじゃなかったっけ）

人見知りの人がよくこんあ公の場にでられるもんだな。それかただ相手が知り合いか。

怜奈は奥へ奥へと進んでいく。

「あ、ちよっ！」

いつの間にか、彼女を追いかけていた。

「え？」

人通りが少なくなってきた所で彼女に追いついた。

「あのお……どこかでお会いになりました？」

「いや、僕はその……直人の友達で」

「え？直人さんの？」

「うん。ちよつと、話いいかな？」

これが、当麻と怜奈の出逢いだった。

もう一つ。それは出逢いではなく、再会。

「久しぶり、ダーリン」

「や、やあ」

携帯の機種を 아이폰へと変え、これからと馬と合流しようと想い始めたとき、彼は再会してしまった。今となっては古い漫画『うる星やつら』が大好きで、その漫画の登場人物のようにダーリンと彼を慕う少女。

「希」

直人は、目の前にいる少女の名前を呟いてみた。

「なあに？」

答えることなんてできなかった。

第百話 ドジな片思い

松井玲奈は久しぶりに街に出かけていた。今日は母が風邪で寝込んでいるため、買出しをすることになったのだ。

その行き先に地元の商店街を選んだ。

そこで、一人の男の子と出会った。

黒色の短髪に茶色の瞳。ブラウンのジャケットとジーパン。ちょっと汚れ気味の黒のブーツを履いている。傍から見たら不良に見えなくもない。

「あ、えっと、僕はその。直人の友達で」

男の子がいった。

直人……直人さん。

そういえば、クリーニング代支払うためにメアド交換したのに、メールの内容はお金とは全然違う。

「あのお、えっと……松井玲奈です。もしかして、当麻さんですか？」

「俺のこと、知ってんの？」

あれ、一人称が変わってる……私に慣れてきたの？

「直人さんが、よく話してくれたもので」

実際に対面して会話を交わしたのは一回だけなんだけど。

「そっか、あいつが俺のこと……」

「あ、えっと、今日は何しに？」

「ああ、今日は休みだから直人と一緒に散歩しにきたんだよ」

「散歩にしては遠いですね」

「当たり前だ。散歩だけで東京から愛知まで来ているのだから。」

「直人さんはここにはいないんですか？」

「うん？ああ、うん、まあ」

当麻が視線を逸らす。

「……？」

私、顔に何かついてるのかな……

当麻は焦っていた。ドキドキしてしまっている自分に。

目の前にいる松井玲奈が、愛奈にどことなく似ていたから。

出会った頃も、髪をショートにしていた中学生の彼女も、片思いを胸に秘めて直人を支え続ける今の彼女も、すべての愛奈が玲奈と似ていた。

どこがだろう……瞳？鼻？口？いや、全体だ。

「ああ、松井さんはあ……」

「無理しなくていいですよ。好きな呼び方で」

「じゃあ、玲奈ちゃん。君は……今から暇？」

「え、まあ、はい。ちょっと買出しに出てきただけなんで、急ぎの用はありませんけど」

「じゃあ、これから一緒に昼食食べないか？直人がきつと喜ぶ」

「あ、えっと、別にかまいませんけど」

「そっか、それは良かった」

当麻はあはは、と笑った。

俺、なんで誘っちまったんだろう……

「や、やあ」

「久しぶり、ダーリン」

「まだその呼び方してるんだね」

目の前に希がいる。僕に告白してきた少女。その時は僕は、剣崎ななという大事な恋人がいたから気持ちに応えることはできなかったけれど、彼女のことは大好きだ。

「髪型、変えたんだね」

一年ほど前にあったときは、ロングストレートだったが、今は髪を両端に軽く結んだツーサイドアップだ。

「にはははは。可愛いでしょ？」

「いや、両端の結び目が合っていないよ」

「え、ホントに？」

希は手探りで確認する。

「うわあ。ホントだあ。ナオ太君結んでえ」

「あ、ダーリンやめたんだ」

「うんうん、やめてないよ。気分次第で呼び方変わるからねえ」

それじゃわけわかんないよ。

直人は希の髪を結びなおす。

彼女を一言で説明すると、いわゆる不思議ちゃんだ。ものすごく天然でドジな場面が多い。今だって髪型がまとまってない状態だ。

「ほら、出来た」

「うわあ、ありがとね、管総理」

「違う人じゃないか。僕は境だよ」

そうして話を進めていると、さっそく新たな携帯の着メロが鳴った。みんなに機種変えたのを知らせてまだ10分しか経っていないだけだな。

「もしもし、あ、当麻？」

『よう、今丁度玲奈ちゃんと会ってよお、まあ初めての対面なんだけどな。お前もそろそろ希ちゃんに会っただろ？』

「君が仕組んだのか」

『まあ、硬いこと気にすんなって。これから4人で飯食いに行こうぜ』

「う、うん。まあ、それはかまわないけど。どこに集まるんだよ？駅まで行ったら飯食うの遅くなるぜ？」

「近くに公園あるよ」

「え？」

直人は視線を希に移した。どうやら彼女が言っただけらしい。

「公園って行けるか？」

『うん？ちよっと待て』

あ、玲奈に聞くのだろうか？

3秒程松。

『おう、いいぜ。じゃあ、また後でえ』

「じゃあ」

携帯をしまった直人は、希に手を差し伸べた。

「公園まで案内してくれる？」

「あいあいさあ」

なぜか知らないけど、希のリアクションは敬礼だった。

第百〇一話 メール

舞台は愛知から離れて、東京。

宮澤佐江は、柏木由紀と一緒に渋谷の公園通りを歩いていた。

後に熱愛疑惑なんてかけられてしまうこの二人は、せつかくの休日を満喫しようとしていた。

今はファーストフード店で昼食中。

「このハンバーガー想ったよりおいしい！ボウリングの後に食べる
と余計美味しい！」

「佐江、ボウリング強すぎだよ。ストライク連続三回なんて」

「由紀、ボール後ろに投げちゃってよねえ、さえ、あれもう爆笑だった！」

「もう……」

由紀がポテトを口に放り込む。

「あ、そうだ！直人にメールしよつと」

「直人さんに？なんてメールするの？」

「ストライクの回数を教えよっかなつて」

携帯を取り出してメールの本文を打ち込む。

「よし、オツケー……ああん」

佐江は豪快にハンバーガーを口に放り投げた。

「私直人さんのメアド持ってないなあ。佐江にだけひいき？」

「直人はそんなことする人じゃないよ、私は自分から交換頼んだだけだから。由紀も頼んだらメアドぐらくれろと思うよ？」

ストローを口に加えながら携帯でメールボックスを確認する。

返信が一件。

「ええ、何々……『僕の最高記録を抜いてみ？ちなみに最高記録は
ストライク連続10回』だつてさあ……てパーフェクトストライ
クじゃん！むきい！むかつくう！」

「ちよつ、佐江、そこは抑えよう！みんな見てるから！」

「あり？」

気づけば店の視線は佐江に一極集中。

「あ、えっと、すいませえ〜ん」

苦笑いを浮かべながら佐江はメールを返信していく。

『私のパーフェクトとってやるう！』

メールを送信した。

「何勝手にメール返したんだよ。しかもパーフェクトストライクなんかとったことねえよ」

「ええ、でも連続9回だったじゃん。大した差ないじゃん！」

メールを返信したのは直人ではなく希だった。

希から携帯を取り返した直人はメールボックスを確認している。

「あのお、2人は相思相愛なの？」

直人と希が2人並んで歩くのをすぐ後ろから見ている玲菜は尋ねた。その隣で当麻は首を横に振る。

「希ちゃんの片思いだよ。告白したけど、あえなく玉砕。まあ、まだ諦めてないと思うね、あの様子を見ると」

当麻は希を指差す。

希は隙あらば直人にベタベタ触ろうとしていた。

「なんで断ったんだろ。あんなに可愛いのに」

「そんな時には心に決めた人がいたんだよ」

「あ、もしかしてななさんですか？」

「うん？まあ……そうかも」

「かも？」

「いや、なんでもない」

言葉は選ぶべきだよな、と当麻は内心で呟いた。

あいつの心に決めた人は、ななちゃんじゃなくて、優子さんじゃないのか？

いや、違う。ななちゃんでも、優子さんでもなくて、あつ——。

「当麻？」

「あいで！」

足元を見て歩いていたものだから、直人にぶつかってしまった。

「あ、いや、すまねえな」

「どうしたんだよ、急に」

「女好きにはわかんねえよ」

「な、僕が女好きだと！なんて失礼な――」

しばらく2人の口喧嘩（？）が続いた。

第百〇二話 続・メール

「お前、メールする前に早く選んでくれねえかな？」

「ああ、ごめんごめん」

慌てて返信メールを送ってメニューに集中する。

「さっきから誰とメールしてんだよ？佐江ちゃんにしちゃあ返信速すぎねえか？」

当麻が聞いた。直人はメニューから目を逸らさない。

「色んな人からメール来るんだよ。いやあ、モテる男は辛いねえ」

「1人で何盛り上がってんだよ」

当麻はにやりと口元に笑みを浮べた。すると、素早く直人の携帯を奪った。

「うわあ、ちよっ！」

「ちよっと見るだけじゃねえか、ケチケチすんな。ケチ男か、お前は」

「ちよっと言いすぎじゃない？」

今、直人たち4人はファミレスにいる。4人専用のテーブルに座っており、直人の隣に玲奈、当麻の隣には希が座っている。

この店はパスタやハンバーグなど、様々な料理がメニューにある。

「当麻は何にするの？」

「俺あ、カルボナーラ」

「相変わらず好きな食べ物は変わらないんだな。生意気な所は変わったのに。悪い方向に」

「余計なお世話だ」

直人はメニューを開いた。

「よし、僕は醤油ラーメンにしよう」

「この店そんなのもあったっけ？」

隣から玲奈がメニューを覗き込む。ちなみに、メニューは電子式という全く新しいタイプだ。

「うーん、快くないなあ、この光景は」

希が頬を膨らませる。

「なあ、いい加減諦めろよ、直人のことは」

当麻は希の肩に腕を回した。口を彼女の耳に近づけ、直人に聞こえないように言う。

「玲奈ちゃん、直人のタイプとぴったしだぜ」

「嘘？ホントに？」

希も小声で返す。

「あとな、由依ちゃんって子がいんだけど、これがまたななちゃんにちよつと似ててだな……」

「何をコソコソ話してるんだい？」

直人が低い声で言った。

「イチヤイチャしちやって」

「イチヤイチャしてねえよ」

当麻は腕を希から離れた。

「あ、ダーリン。もしかして妬いてる？」

「ダーリン？」

玲奈が首を傾げた。

「その名前で呼ぶなって！」

慌てて口を塞いだ。

その途端、直人の携帯が鳴った。

「またメールかよ」

当麻が呆れたように言った。

「なんか、ごめん」

直人は謝りながらも携帯を手取る。

「もう、店の人に頼んでいい？」

玲奈が皆に聞いた。

「あ、まだ頼んでなかったっけ」

直人はテーブルに置いてあるベルを押した。それからすぐして店員の女性が来た。

「ご注文はなんでしょうか？」

「えっと――」

希と玲奈が4人が選んだメニューを言っていく。

「分かりました……あのぉ」

店員が何かに気づいたようだった。直人の顔を覗き込んでいる。

「もしかして、境直人、さんですか？」

「え、あ、はい、そうです」

メールをするのに夢中になっていた直人は慌てるようにして首を縦に振った。

「うわ！凄いい！えっと、サインください！」

制服のポケットからメモ帳を取り出してボールペンと一緒に直人に渡した。

「あ、はい」

何の気なしにサインをしていく直人。あんまりサインの経験はないんだけど。

「どうぞ」

「ありがとうございます！」

メモ帳とボールペンを受け取った店員は頭を下げると、嬉しそうにその場を去っていった。

「ちえっ。俺は眼中にねえのか」

「知らないだけなんじゃないの」

当麻の言葉に希が冷たく言い放った。

当麻だって、昔は最年少ギタリストとして有名だったのに。愛奈だって同様だ。

当麻は話を逸らすために直人に話しかけた。

「今度は誰からのメールだ？」

「えっとお……敦子から」

第百〇三話 前田敦子

前田敦子は直人にメールを送ると目の前の事に集中した。

集中すると言っても、麻里子と一緒に直人の洋館でポテチを食べ
ているだけなのだが。

暇さえあれば食べる、というほど食い意地は立派な敦子だが、い
つもやる気がなさそうな表情をしている。

麻里子は、別に沿う直というわけでも、かといって食いしん坊と
いうわけでもない。

「直人君、今どこにいるの？」

麻里子が口の中でポテチを噛むと、傍に置いてあった缶ジュース
を飲んでいった。

「愛知県だつて」

「なんでまたそんなとこに？」

「なんとなく……だつて。今友達と会ってファミレスにいるんだつ
て」

「なんとなくつて……まあ、そこも直人君らしいんだろうね」

麻里子は微かに笑った。

「てか、勝手に入つていいの？」

実は、2人は直人の許可なく洋館に入っている。敦子が合鍵を持
っていたので容易に入れたのだが、あろうことか玄関のドアは鍵は
開いたままだった。危機感がないだろうか。この家には金目のもの
があるところか、金庫（非常に嚴重だが）の中には大量の資金があ
るのだ。

ちなみに、直人自身パスワードを忘れたそうだ。パスワードを知
るにはあるクイズを解かないといけない。

「そのクイズつて、これ？」

麻里子が画用紙を取り出した。その画用紙には文末が「？」の文
章がかかっている。

「あ、そうそれ。私には難しすぎてとけないや」

「へえ、そうなんだ」

「麻里子は分かるの？」

「ぜえ〜んぜん」

麻里子は画用紙を机に置いた。

「これから、AKBはどうなるんだろうね？」

敦子が問いかける。

「この前、ツイッターに、素人にそんなことさせるな！って書き込みがあつたらしいよ」

「それは……ひどいね」

正直、かなりショックを受けた。きつと、もつと酷い書き込みがあつたんだと思う。

それでも、今は歌い続けるしかない。踊り続けるしかない。

「あ、メール来た」

右手でポテチを口に放り込んでいたので左手で携帯をあさる。

ちなみに、敦子は左利きだ。

「なんて言ってる？」

「えつとね……ラーメンおいしい！だつて」

「ファミレスにラーメンなんてあるんだねえ」

麻里子が最後のポテチを平らげた。

「あつ」

敦子が少し残念そうな表情を浮べた。

「残念でした」

「ホントに残念」

敦子は言いながらメールを返信した。

「やつぽ〜」

「あれ？優子？」

よく勝手に入ってきたなあ、と想ったけど言うのはやめた。リビングに入ってきた優子は当たりを見回す。

「あれ？てつきり直人があるものかと」

「今は愛知にいるよお」

敦子が優子に教えた。

「え？なんで？」

「希ちゃんじゃない？」

「ああ、そういえば愛知に住んでるんだっけ」

優子は敦子の隣に座った。二人用のソファに座っているため、敦子に密着することになった。

「そんな遠くに行くってことは、きっと当麻も一緒なんだろうなあ」
「よく分かるね」

「ナオ君いつも誰かと出掛けるけど、遠くへはいつも当麻とだもん」

「まあ、そうだね」

「私だけ話にのれないんだけどお」

麻里子は言った。そして、ジュースを飲み干した。

第百〇四話 小説

人つてのは非常に難しい……世の中には「当麻倒して!」「当麻救つて!」なんて無理な要求をしてくる女の子もいた。

「今日はありがとう、玲奈。希も、またね」

「うんうん、またね」

「バイバイ」

玲奈と希が手を振りながら同じ方向に帰っていく。

それに対して当麻と直人も手を振っていた。

「それにしても、希ちゃん可哀想だよな。好きな相手に恋人がいるつてのは。いやあ、そいつはもう罪だな。裁判にかけられて死刑になれ」

「当人が隣にいるのわかってて言ってるよな?」

2人は今駅に向かっていている。今は午後の3時頃。向こうにつくのは丁度日が沈む頃だろうか。

「最近ななちゃんとはどうだ?上手くいつてんのか?」

「なんでいきなり?」

「あのさあ、ナンパから始まる恋っていつかは終わると想うんだよね」

「あれはナンパじゃない。ぬいぐるみをとったそうだったから僕がとつてあげただけだ」

「それをナンパって言っただよ」

「君のナンパはいつも失敗に終わるよな」

「んだと、てめえ!」

2人のはしゃぎぶりは周りを歩く通行人も不思議だというような眼で見ているほど大きかった。

「ねえ、これからどうすんの?ギタリストの道に行くか、スタイリストの道に行くか」

「どっちでも良い。お前と一緒にだったらな」

「嬉しいこと言ってくれるね」

直人は微笑を浮かべた。

当麻は、空を見上げた。

空はまだ青かった。

「え？昔会ったことあるの？ナオ君に？亜樹が？」

優子の問いに、亜樹はゆっくりと首を縦に振った。

「はい、中学生の頃なんですけどね」

「ふんふん」

北原里英が興味をもったようで、亜樹に顔を近づけてきた。

ここは、とある喫茶店。優子が直人の洋館に行く一時間ほど前のことである。

「一年生の終わり時だったかな？」

亜樹は2人に話し始めた。

「ナオナオねえ、たぶん仕事だと思うんだけど、東京に来て、私も友達と渋谷行ったんだよ。その時に会って——」

——三年前。

「亜樹side」

友達がトイレに言っている間、亜樹は近くの書店にいた。文庫本が並ぶ棚の前に来ると、棚に並ぶ本の題名を流れるように読んでいく。あまり本は読むほうではないため、小説のページを開こうなんて想うことはなかった。

それに、亜樹は視力が悪い。今だって本を見るために眼鏡をかけている。

「うーん、どんな本が良いのかわからないなあ」

「こんなのが良いんじゃない？」

「え？」

ふいに、それは突然に、突然に話しかけられた。

左耳から声が聞こえてきた。亜樹は訳がわからないという風に左に顔を向けた。

亜樹と同じように眼鏡をかけている長髪の少年がいた。少年は、山田悠介という作者の小説を手にとっていた。

「この小説ね、すつごく面白いから、読んでみてよ」

少年は小説を亜樹に差し向けた。

「あ、えっと、はい」

とありあえず、と思い亜樹は小説を受け取った。

「あ、ありがとうございます……」

「いや、いいよ。とりあえず読んでみて。絶対ハマるから」

少年は微笑んだ。爽やかで、少年はよく見れば物凄くイケメンだった。

「じゃあ、またいつか会えたら」

バイバイ、というように少年は手を振りながら亜樹のもとを去っていった。

まるで霧のように、あつという間に少年の姿が見えなくなる。

「なんか、変な人。でも……」

亜樹は小説を見下ろした。黄色が目立つカバーの本は、一日をあったら余裕で読めそうなくらいのページ数だ。

「読んでみよっかな」

「直人 side」

女の子の様子を見てついあんなこと言っちゃったけど、きっとひただろうな。

ああ、どうしよう。買おうと思ってた小説つい渡しちゃったよお。あれ、確か最後の一冊だったよなあ。ああ、どうしよう。とりあえずなんか買おうかな。

直人は適当に新刊の棚から本を取ってレジへ向かった。

「げっ、これ第二巻じゃん」

——現時刻。

「へえ、ナオ君、あなたにナンパしたんだあ」

「ああ、確かに今考えてみればナンパだったかもです」
「なんで今更気づくかなあ、と優子は内心呟いた。

まあ、きっとナンパのつもりじゃないんだろうけど。

「それが、この本なんですよ」

亜樹はサイズにしては大きめのポーチから本を取り出した。黄色いカバーの本は何回も読まれたことを物語るかのように所々に折れが見られた。

「たぶん、ナオナオは覚えてないんだろうなあ」

亜樹は独り言のように呟いた。

「あ、この本」

ドアが常時開いている書店の前で立ち止まった直人は、一つの本に目を落とした。

「この本がどうしたんだ？」

「この本ね、何か買おうと思って適当に選んで買った本なんだよ。シリーズものだって知らなくてね、一巻読んだこともないのに続きの二巻を買っちゃって。その時はほしかった本を人に譲っちゃったし」

「全くドジだなあ、お前も」

当麻は高笑いをあげた。

「ドジで生まれてきちゃったんだよね、僕は」
直人も笑った。

第百〇五話 時間はゆっくりだけど確実に進む

5月4日。

「ウワアッア！」

観客席から歓喜の声上がる。声を真正面から受けたチームKの面々のダンスのキレは一瞬前よりも良かった。

今日は、チームKの29公演ぶりの満員御礼だった。

「そろそろオリジナル・セトリストを考えてやらないと」

観客席の後ろで直人は立ちすくんでいた。チームBのデビュー日も決めないといけない。

それより問題なのが、広がりつつある『チーム内格差』だ。

数ヶ月前に、『センター』と『それ以外』について顕著な問題があった。渚のCHERRYで敦子がセンター、みいちゃんをはじめとする3人がバックダンサーの立ち位置だったこと。敦子とみいちゃんは号泣していたのを直人は今でも覚えていた。

今、AKBのファンは、チームAとチームKに分かれていた。

「どうなるんだろう、これから」

—自分のファンがチームKに流れた気がするんだよね。

何日も前だが、小嶋陽菜は僕に言ってきた。

二つのチームの公演。二つのファン。

「ほんとに、どうなるんだ」

僕は、アンダー制を導入することにした。だから、チームA公演にKのアンダーが入れば、Kのファンが増えていくかもしれない。

チームAとチームKは、同じメンバーであり、ライバルだ。

6月7日にインディーズ2ndシングル スカート、ひらりが発売される。それにあたって、発売記念イベントを今日の6月4日にすることにした。場所はアキバスクエア。

初めての、チームAとチームKの混合ライブだ。

待合室でメンバーはメイクを行っている。既に会場には1200人を超えるファンが集まっていた。

「ああ、なんかやりたくないなあ、ライブ」

敦子は呟いた。

「それでも、時間が止まることはないよ」

敦子の前に座る直人は部屋の置時計で時間を確認した。イベントが始まるまで後30分以上もある。

「敦子、チームの中の差は大きいけれど、それでも君たちは皆AKBの1人。みんな仲間だという事実には、変わりはないよ」

「……そうだよな」

敦子は微笑んだ。

三十分後、ライブは始まった。

メンバー全員の口元は、吊り上っていた。

第百。六話 チームの絆は深まった

混合ライブは、大成功に終わった。今まで争うように公演を続けたAとKの間に、初めて絆が生まれた瞬間だった。

ファンに、チームなんか関係ない。少なくとも僕はそう思う。入ってのは、新しいものが好きだ。だけど、古いものも何かと捨てがたい。

結局、どっちも好きなんだ。

Aも、Kも、どっちも好きなんだ。

数日後。今までと同じように、今日も公演はある。

今日は、チームAの公演予定だ。直人はこれからあまり公演に顔を出すことはしないようにしようと決めた。もう心配することはない。

心置きなく、高校生活を謳歌できるときがきた――。

「おおい！次こつちい！」

「は、はい！」

（なんでこんなことになるんだ……）

今、直人は剣道部のレンタル部員として練習に付き合っている。

運動神経もよく、なんでもできちゃう直人はいつもこうして借りられているのだ。主に部活とかから。

昨日はサッカー部。今日は剣道部。明日は男子バレー部。週末はバスケ部の全国大会だ。

「よし、行くぞ！」

「は、はい。直人先輩」

「声が小さいぞ！」

直人は竹刀を振り上げた。相手をする後輩はあつという間に一本とられる。

「まだまだだね」

テ。プリの名台詞、言ってみたかったんだよねえ……剣道だけど。その後、教室に入ると、遥香と敦子が喋っているのが目に入った。「まだいたんだね」

「いないほうがよかった」

「着替えたいんだけど。僕の裸見なくなかったらでてってくれ」
タオルで髪を拭きながら直人は自身の机に向かった。

彼は正式な部員ではないし、何よりも鞆を置いていくので基本的に着替えは教室。

2人は直人を待つていたのか、それとも別の理由でここにいたのかは知らないが、今の直人にとってはいてほしくない人材だ。

「ここでヌードなんて見たくないだろ？さあ早くでてってくれ」

追い出すように二人を教室から出るように言う。二人は渋々ながらも廊下に出ると、すぐに立ち話を始めた。

「女の子ってよくわからないな」

なんでここにいたんだ？と思いつながら着替えを始めていく直人。

明日は、何の部活だったかな。

大家志津香。AKBチームAメンバー。福岡県出身。直人と同年代。秋元康に言いたいこと。

「アドレス交換したいです」
だそうだ。

東京都のある一室。そこには、チームAの志津香と、チームKの由依がいた。

その部屋は志津香の家。ここには良く北原里英や指原梨乃など多くのメンバーが泊まりに来ていた。

今日の場合、横山由依である。

直人が剣道の練習を終えて仕事に行った頃……の丁度24時

間後のことである。

「そうそう、ウチねえ、最近小説書いてよつと」

「へえ、そうなんやね」

博多弁と京都弁の相性つて意外といいんだな。

「じゃあ、ちよつと見せてもらつてもいい？」

「だあめ！めつちや恥ずかしいよ」

あのお、僕のこと忘れてない？

「「忘れてない」」

会話に入れない……直人は俯く。

第百〇六話 チームの絆は深まった（後書き）

いやあ、博多弁と違って難しいですね。

第百〇七話 博多弁ってたまに分かりづらい

「ナオティン、今なにしょーと？」

「何そのネーミング？」

「変なニツクネームをつけるのは明日香ぐらいだと思ってたけど、ここにもいたんだな……。」

「ちよつとね、メール」

「ナオはん、よくメールするけんね、たまにウチの声聞こえないときあるとよ」

「そうなの？ごめんね。これからは気をつけるよ」

「あれ？呼び方変わってくない？」

「ナオ、今誰とメールしてはりますん？」

「えつとね……優子と梨乃」

「さっしーがナオはんと！？ずるいわいなあ。あなたも隅におけないけんね」

「そんなんじゃないよ」

「直人は言いながら返信を済ませる。」

「そうだ。ウチとメアド交換しよーと？」

「いいよ」

「ナオ、違う人のメアドしーちゃんに教えあんといてな」

「そんなことしないって」

「でも前私にしとったやないですか」

「嘘マジい？」

「志津香がとっさに取り出そうとした携帯を引いた。」

「そんなことしないよ。由依はちよつとからかいがいがあったから……。」

「それどうゆう意味ですかあ！？」

「あ、由依が怒ってる。これ、怒ってるのか？」

「よし、メアド交換終わりっ！」

直人が言った。

「やりい！ウチうれしいけんね。今、メアドの数かぞえとあと」

「なんでそんなことしてんの？」

「友達100人でつきるっかな？みたいな」

「なんじゃそりゃ」

思わず笑ってしまった。

なんか子供みたいだな。

「ナオは今日はもう仕事ないんですか？」

由依が訊いた。

「うん、学校休んで今日の分は終わらせた。ここに来たのも、近くで仕事やってたからなんだ」

「へえ、そうやったけんね」

志津香が何かを思い当たったかのように立ち上がった。

「急にどうしたの、志津香？」

「ウチ、思いついたっちゃ！」

「何を？」

「しーちゃんラップ」

「ラップ？」

志津香はどこからか紙とペンを取り出した。必死に何かを書き込んでいる。

「歌詞考えたよっと。感想訊かせて！」

「え、あ、うん」

渋々紙を受け取る直人。ここは先輩として、1人の歌手として厳しく評価すべきなんだろうか。

直人はラップを読み取っていく……正直良かった。

「とっても良いんじゃないかな？MCで披露するといいよ」

「ホントに！いやあ、嬉しいとよ！」

志津香はピョンピョン跳ね回った。いや、別に跳ね回ってないんだけど。気持ちだけはしゃいでる。

「まあ、嬉しいんなら、構わないか」

「そうですよ。何事も終わりよければ全てよしですよ」

由依が言った。

「由依はそう思ってるんだ」

「はい。私は、嫌なことがあったら一日で忘れるようにしていますから」

「へえ。それは良い心意気だ」

直人はそう思う。嫌なこと。それは中々忘れることが出来ないと思う。僕の場合は自分の意志関係なく忘れてしまっただけ。

「あれ？どうしたの、こんなところで？」

「優子さんこそ、なんで直人の家に？」

「いやあ、合鍵もらってるって非常に便利だね」
要するに、何か食べにきたってことか。

「当麻くん、なんかつくつてえ」

「優子さん、それだけのためにここ来たら直人ガッカリしますよ」

「え？なんで？」

「自分で考えてください」

当麻と優子は顔を見合わせる。

「はあ。何が良いですか？」

「なんでもお」

優子は携帯を手にとった。誰かにメールしているようだ。きっと直人にだろう。

「直人は今どこいんですか？こんな美人放っておいて」

「大家ん家」

「大家？誰だ、それ」

当麻は呟く。まあ、それよりもびっくりしたのは優子さんが「美人」を否定しないとこなんだけどなあ……まあ、優子さんらしいっちゃ優子さんらしいんだけど。

「ワリイな、直人。食材減るぜ」

冷蔵庫から卵を一つ、それにベーコンを取り出した。

「卵焼き作りますから、ちょっと待っててください」

「ああい。いやあ、ナオ君も当麻君も料理師の免許とってて凄いよねえ」

「免許なら他にもありますよ。俺ら昔から資格とってたから」

「執事できんじゃないの？」

「かもですね」

フライパンの上で卵を割る。卵から黄身がゆっくりと落ちていつて、フライパンの中に綺麗に入った。

「この前あれでしょ？ええっと……ナオ君と漢方師とかいう免許とったんでしょ？」

「ええ、まあ」

免許をとったのはつい数ヶ月前のことだ。一週間直人と必死で勉強した甲斐があった。

次はマッサージ師の資格をとろうと思っている。

「ねえ、卵焼きまだあ？」

優子の声が聞こえてくる。

「まだですよ。それより、さっきの免許の話しませんか？」

「自慢したいんでしょ？」

「……はい」

優子には当麻の笑う姿を思い浮かべることができた。

「今年に入って結構とったんでしょ？」

「はい。スクーバダイビングのアドバンスドオープンウォーターダイバー、オープンウォーターダイバー、スクーバダイバー、スペシャルティ・ダイバーテクニカル・ダイバー、ダイブマスター、インストラクターを取得したし、2級小型船舶操縦士免許や特殊小型船舶操縦士免許も取得しました。1級は年齢の関係で無理だけど、18歳になったら試験を受けようと思ってます」

直人が言った。この先の未来、当麻の知らない大家在自分たちの持つ免許を取ろうとするのは知る由もない。

「全部ナオ君とでしょ？」

「はい」

当麻は頷きながら卵焼きの形を作っていく。

「ナオ君は一発試験で運転免許取ったけど、当麻君は運転免許いらないの？」

「俺はまあ。直人は普通二輪免許持つてるんすけどね、ホントは十六歳以上じゃないとれないんすよ」

「直人君年齢偽造したんだあ。ていうか、バレないの？」

「まあ、レースのおかげもありましたしね」

そうだ。レースでの功績で特別に直人は免許を取ることができた。それでもホントはポルシェなんてものには乗るべきじゃないんだけど。

ちなみに、直人の誕生日は12月である。

「直人は俺よりも免許とか資格たくさん持ってますよ。例えば、インテリアコーディネーターとかね」

「インテリアコーディネーター？」

「主に、生活におけるあらゆる空間やインテリアをコーディネートする専門家のことですよ。直人は同じ時期に建築士の資格も取ったらしいですけど」

卵焼きを載せた皿を運ぶ当麻。

「うわ、おいしそう」

「ちよつと失敗しましたけどね」

当麻は苦笑いを浮べた。

第百〇八話 勉強

志津香の家を出てこれから家に帰ろうと思っていた矢先のことだった。

『今からちよつと勉強につきあってください！30分後の16時からお願いします！』

というメールが来た。相手は菊地あやかだ。断るのも何だからとりあえずあやかの家に向かうことにした。

……30分後つて、18時だよな？

「ええー！ナオ君、今から友達に勉強教えに行くんだって！いつんなつたら帰ってくるかなあ」

当麻の目の前では優子が唸っている。直人を待っているという態度は全然表れてないけれど。

「優子さん、どうすんすか？」

「うーん、今日はここに泊まっていこ！当麻君も泊まりなよ。ナオ君喜ぶよ？」

「あなたの考えはバレバレなんすけどねえ」

そう言いながら皿を洗面台に置いた直人はゆっくりするために本棚から漫画を取り出した。

「直人、人からなんか頼まれたらあんま断れないタイプだかなあ」

「心が広いつてことだと思うけど、私は？」

「あいつの心は広くななんてですよ。自分を許せない奴なんだから」

「……………それはななちゃんに対してのこと？それとも病気のこと？それとも私たち？」

「そりゃ……………全部に決まってるんじゃないすか」

「一言言っけど、これホントに分からない？」

「ゼンゼン、ワカンナイ」

「なんでカタカナで喋るかな？」

菊地あやか。AKBチームKのメンバー。

直人の彼女に対する感想。

予想よりはるかにバカだ。ここまで問題がとけないとは。まあ、直人がIQ200を軽く越えているから差があるのは当然だが、あやかのIQはもしかしたら50以下ではないだろうか……。

「私い、昔っから勉強苦手なんだよねえ」

「時間の読み方間違えるような人が勉強なんか出来るわけないよ」

「ええ、なっくん言葉がきついですよ」

「じゃあ寝転ぶなよ」

あやかの態度は完璧に勉強を教わってますみたいな態度じゃないなあ。これは一つお説教が必要かもしれないな。

「もう、今日は良いかい？大切な人を待たしてるんだ」

「え？彼女！？」

「いや、残念ながら違うよ」

直人は立ち上がった。

「じゃあ、また明日」

「うん、ありがとお」

はあ、無駄のない時間を一時間費やした気がする。

「……」

バイクに跨りエンジンをかける。

……大切な人、か。

バイクのアクセルを回した。

僕にとって、一番大切な人は誰だろう？

敦子？優子？なな？それとも当麻？愛奈か？由依か？

姉さん？

いや、この世に一番なんてない。

一番大切な人？

そんなのいるわけないじゃないか。

だって、みんな大切なんだから。

第百〇九話 お姉さん

小さい頃、ある子供たちが「洋館」と呼んで親しむ家があった。大都会にしては珍しい一戸建てであり、敷地も広い。家内は明るい壁色で統一されている。

その家の主は妻と共に交通事故で亡くなっている。残された子供2人もそのうち1人は他殺。もう1人は発狂、つまり頭がおかしくなってしまった。今は少し落ち着き、精神不安定という形で錠剤を呑み続けている。呑むのをやめればまた発狂して誰かを傷つけてしまうかもしれない。

その1人。今は立派な青年だが、昔から友達に助けられていた。幼馴染の2人、同じ道を歩む2人。誰よりも自分を大切にしてくれている1人。

その誰もが、今となっては家族同然の存在である。

――4年前――

「姉さんが……死んだ？」

中学生として新しい学校生活が始まって間もない頃。

まだアイドルじゃなかった境直人。運動神経抜群、成績優秀、スポーツ選手に関してもあらゆる仕事に関しても、成人の直人はきつと良い人材になるだろう。

だけど……

「ああ、そうだ。昨日の夜、ストーカーに襲われて胸を刺されたそうだ」

「そんな……姉さんが死ぬはずない。死ぬはずないじゃないか」

直人は警察署にいた。ある一室に野村敬二という刑事と対面している。

野村敬二と名乗る男は説明を続けていく。

「犯人は依然逃亡中。大丈夫だ、必ず助ける」

「はあ！」

直人は激昂して野村の胸ぐらを掴んだ。彼は身長が170cmと高く、体格の良い野村と同じぐらいの背だった。

「逃亡中だ？ だったらこんなところで油売ってんじゃねえよ！ 説明してる暇あつたら！ 犯人を俺のところに連れて来い！ 俺がぶつ殺してやる！」

直人は野村に怒鳴る。別に野村が悪いわけではないのに、本当の自分がそれを許さない。

「おい！ 訊いてん——」

さらに直人が怒鳴り散らそうとしたとき、野村に殴られた。直人はその場でたじろいだ。解放された野村はさらにもう一発、直人の頬に拳をぶつけた。

「生意気言ってんじゃねえ！」

直人は野村を見た。彼の目は大きく見開かれている。明らかに驚いている。

「何もできねえガキが警察に口出しすんじゃねえ！」

野村は直人を見下ろす。その瞳からは大きな怒りが伝わってきた。

「あんたなんか、だいつ嫌いだ」

直人は呟いた。それ以上、何も言うことができない。野村の迫力に押されていた。

野村は黙って部屋を出た。

「チキシヨウ……」

翌日。学校に登校したはものの、彼の瞳からは生気が失われている。た。

彼の姉が殺されたというニュースを今日のTVで知り、さらには担任教師からも聞かされていた同級生や先輩たちは直人に声をかけ

ることが出来なかった。直人は何も喋らずただぼーっとしながら歩いていく。教室の机に座ると、直人は窓の向こうに移る景色を見た。それからずっと動かない。

彼が教室に入ってきてから、誰も喋りだそうとしない。

直人はクラスの中心的人物であり、ムードメーカーだった。そんな彼が今放心状態にあるのだ。どうすることもできない。

「……………」

そんな直人を見た当麻は、彼を放っておくことに苦痛を感じた。それでも話しかけることができない。

「ちっ」

それでも、いつものように振るわなければいけない。だってそうゆうもんだろ？

「なあ、直人。今日は雲ひとつねえぜ？今から外でバスケしねえか？」

思い切って直人の机の前の椅子に座った当麻は話しかけた。

直人はゆっくりと当麻に瞳を向けた。蒼い瞳ではない。コンタクトカラーを通して直人の眼が当麻を見る。その瞳からは、うつすら涙が。

…………そんな眼で見ないでくれよ、直人。俺まで泣きたくないじゃねえか。

「よお、当麻」

かすれた声を出しながら直人は微笑んだ。いや、当麻からしたら苦笑にしか見えない。

「あれ？当麻。どうしたの…………笑えよ」

直人は当麻の両頬をひっぱった。だけど、当麻は俯いた。

「ねえ…………笑ってよ」

「お、おう、そうだよな。笑わなくちゃいけないよな」

当麻が微笑んだ。下手くそな微笑みだと当麻は思ったが、直人は満足そうに頷いた。

「それで、いいんだよお、君は。よおし、遊びにいこ？」

直人は無邪気な子供のような表情を見せる。

……完全に精神が壊れている。

「なあ、あいつ大丈夫か？」

男子生徒が小声でなにやら話している。

直人のその生徒の声を聞いた。訊いてしまった。

「……」

直人は立ち上がった。

「お、おい、直人？」

当麻が心配そうに声をかけるが、直人は黙ったまま男子生徒に近づいた。

「な、なんだよ」

男子生徒が尋ねる。

「……」

直人は男子生徒を——突如殴り倒した。

倒れた男子生徒は殴られた頬をさすりながら直人を見上げた。

「何すんだよ！」

「ああ？」

「ひっ！」

男子生徒は思わず悲鳴を上げた。直人の形相が鬼のように感じられたからだ。

「……ハア」

拳を作る直人。

だが、その場で意識を失ってしまった。

「大丈夫、直人？」

気がつくと、そこは皆が洋館と呼んで親しんでいる境家のリビング。直人はソファに寝そべっていた。幼馴染の敦子がこちらを覗きこんでいた。

「大丈夫かい？」

その隣には野村敬二がいた。そんな彼に付き添うようにもう1人刑事らしき男が立っている。

「犯人の目撃情報があった。今日はそれを報告しにきてな。ただそれだけだ」

野村は立ち上がった。ただ、一言だけ。一言だけ述べて家を出て行く。

その情報が古くならないうちになぜ捜査を始めなかった……。

あんな奴、だいつ嫌いだ。

直人は上体を起こした。

それと同時に、もう1人の刑事が話し始めた。

「野村さんはね、昔は警部だったんだよ」

「は？」

直人は刑事に向き直る。

「彼は優秀な警部だった。誰からの人望も厚い。だけど、ある殺人事件があつてね。その事件を担当した野村さんは犯人を追い詰めたんだけど、中学生の娘を人質に取られたんだ。丁度君のような可愛い娘だった」

そう言いながら刑事は敦子を指差した。

「とっても可愛いくて、野村さんのことが凄く大好きだった。そんな娘を取られて野村さん興奮しちゃって……思わず発砲してしまった。銃弾は、犯人ではなく、娘さんを貫いた」

「え？」

思わず、直人も敦子も声を上げた。

「その後、野村さんは自ら警部としての職務を放棄して刑事に戻った。そして殺人事件だけを担当するようになった。せめてもの娘さんへの償いなんだろう。君の姉さんと娘さん、重ねちゃったんだろ」
そこで刑事は口をつぐんだ。これ以上話すことはないということなのだろう。

「野村……さん」

直人は、玄関を見た。

初めて、彼の名前を呟いた。

——現在——

バイクを走らせながら、直人は過去を振り返る。だけど、いくつもの記憶は脳内から消えていた。

だけど、野村刑事の話だけはいつまでも忘れることはない。

「ありがとな、野村さん」

直人は呟いた。彼の言葉は風に流された。

第百十。話 3人の夜

洋館につくなり、優子からケーキを作ってくれと要求された直人はキッチンから離れることが出来なくなった。

「俺も手伝おうか？」

当麻がキッチンにやってきたが、直人は首を横に振った。

「いや、いいよ。レアチーズケーキだったらすぐ作れるし」

「まあ、そうだけだよあ」

今は7時30分。直人は簡単にケーキを作ると言っているから大体1時間ぐらいだろう。

当麻は机においてあった漫画を棚に戻す作業を始める。直人が帰ってくるまでずっと当麻は漫画を読んでいた。

それから1時間後。

「よし、出来た」

直人が3人分のレアチーズケーキをテーブルまで運ぶ。

「そういえば、優子にはまだ言ってなかったね」

「え？何を？」

優子の隣に直人が座った。直人の前に当麻が座った。

すぐさま優子が手を合わせるとケーキを食べ始めた。

「来月、チームKの新しい公演が始まる予定だ。公演名は『青春ガールズ』」

「それって……」

「そうだ、チームAのお下がりがなんかじゃない。君たちチームKだけのパフォーマンスだよ」

『青春ガールズ』

初めてのチームKオリジナルセットリスト。体育会系のチームKをそのまま表すかのような曲 転がる石になれ を筆頭に、様々な代表曲を構成した。

この公演は、後に神公演と呼ばれるようになる。

「へえ、オリジナルかあ」

「うん。明日からきつういレッスンだから、あまりバクバク食べちゃいけないよ」

「ふあゝい」

優子の口の中はすでにケーキでいっぱいだった。

「当麻、明日ライブだかな」

「わあってるって」

当麻の口の中もケーキでいっぱいだった。

もちろん、直人も同様だ。

「凄くおいしい」

優子が幸せそうだった。

「気に入ってくれてよかったよ」

「さすがパティシエだね」

「パティシエじゃないよ。パティシエになるためには専門学校に通わなくちゃいけない」

「でも一応認められてるんじゃないの？」

「洋菓子店で働いただけじゃないか」

直人と当麻は料理師の資格を得た一カ月後にある洋菓子店で働いていた。アイドル仕事も兼ねてであり仕事に來られなかったうえに彼の作ったケーキの美味しさ、さらに容姿を見て「幻のイケメンパティシエ」なんて呼ばれていた時期がある。

「ゲームってのは辛いよなあ」

直人は呟いた。

「どうしてそう思う？」

訊きながらケーキの最後の一口をほうばる直人。

「それは、僕たちのゲームだからだよ」

直人も最後の一口をほうばった。優子はすでに完食している。全く、食べるのだけは速いんだから。

「じゃあ、片付けるね」

直人が皿を洗面台に片付けていく。

「なんか、眠い……」

優子が沈んだような声で言った。

「今日は泊まりたいんだろ？」

「うん」

「はぁ……姉さんの部屋掃除してないんだけどなぁ」

「大丈夫だよ、別に」

優子や敦子は何度もこの家に泊まりに来ている。その時彼女たちが寝るのは直人の姉の部屋。直人の自室に寝るなんてことは絶対ない、当たり前だが。

「優子、泊まるんならせめて事前に言っというてね？」

「うん、分かってるよ」

「絶対分かってないだろ」

「にひひひ」

優子の笑う声が直人の耳に届く。

毎度のことだが、優子は子供だと思う。

第百十一話 2人だけの時間

「当麻、帰るのか？」

「おう」

ソファに座っていた当麻は携帯の画面を見ながら立ち上がった。さつきからずっと時間を潰していたが、当麻はしびれを切らしたのだ。

「当麻も泊まっていったらどうだ？」

「いいよ、俺は。これから用事あんだ」

「夜中の十一時から？」

「ああ、大切な人と待ち合わせてる」

「そっか」

洋館を出た俺はある場所に向かっていた。移動手段は徒歩だ。

この街は、俺が小学5年生のときから育ってきた場所だ。生まれは鳥取県だ。

この街で俺は境直人という生涯の親友を手に入れた。俺にとって直人は最高の人物で、何でも相談できた。

そして、もう1人。俺にとっては人生最高の出逢いとなった人物がいる。

それは、愛奈だ。俺は初めて人を好きになった。好きになれた。

だけど、その恋も儚い結果になった。告白する前に、その恋は終わった。頼れる親友への恋があったからだ。愛奈は直人のことが好きだ。俺からしたらあいつは恋敵だ。だけど、そんな封に思うことができない。幾度となく喧嘩して、その度に俺たちの絆が深まって…何言ってんだろっな。

「やあ」

「はあい」

ここは川原。愛奈の気持ちを知った俺が直人に八つ当たりしちまった場所だ。

今は夜中だから辺りは真っ暗だ。電灯のおかげでそこは光で照らされているが、周りはとても薄暗く、誰かが歩いてきても近くに来るまで気づかない。

俺は目の前にいる少女に呼び出された。俺の想い人。

「どうしたんだ？急に？」

俺は尋ねた。質問を訊くと、愛奈は黙って微笑んだ。

「明日は何の日か覚えてないの？」

「……ああ、そういうことか」

俺は溜息を吐く。告白ではないらしい。少し期待していたのが恥ずかしいな。

「後10分で明日が今日になるわ。そうしたら、私はあの言葉を言うから」

「そうか。じゃあそれまではお預けか」

昔のように、俺は草原に寝転がった。

「4年前だったっけ？ここでお前が直人のこと好きだって知ったんだよな」

「うん、私が言った」

「その気持ちは、今も変わらねえのか？」

「うん。たとえ直人に恋人がいても、私の気持ちは変わらない」

上に立つ愛奈の顔が見える。まるで恋する乙女だ。

やっぱり、俺の想いはとどかねえよな。

「そういうあなたはどうかなの？好きな女の子いるの？」

愛奈が俺の横に滑り込むようにして寝転がった。

「そんなのいねえよ」

俺は寝返りを打って愛奈に背を向ける。

「うそだあ。ホントは絶対いるよ」

「だからいねえって」

「あっちゃん？それとも優子さん？あ、希ちゃんとか？」

「人の話訊いてる？」

「あはは。ごめんごめん。でも、気になって。当麻が誰かのこと好きだったら、私が手伝ってあげるね」

自信満々といった声色が届いた。

手伝うとかぜってえ無理だろ……。

「あ、そろそろじゃない？」

愛奈が携帯で時間を確認した。

午後0時。明日が、今日になった。

愛奈は携帯をポケットに閉まって愛奈は俺の眼を見据えた。

「お誕生日おめでとう」

「おう、ありがとな」

そうだ、今から始まる今日は、俺の17回目の誕生日だ。記憶障害を持つ直人が覚えているのかどうかは知らない。確率は低い。

だけど、愛奈は覚えていてくれた。こんな俺の誕生日を。実の親父を殺そうとした俺を。

愛奈が微笑んでくれている。

その時だった。

「え？」

大きな爆発音が轟いた。その途端、大きな花火が空に映った。

「花火？」

様々な色の閃光が美しさを彩る。

「一体誰がうつたんだ？」

俺は花火を眺める。赤と黄色と青、色の三原色が彩る花火は鮮明だった。

「あの花火、直人と俺が初めて打ち上げた花火」

「そうなんだ……とっても綺麗だね」

愛奈の瞳に花火が映るのが分かった。

花火が消える。一瞬の花火だったけど、とても綺麗だった。

「……メール」

着信音がなり、俺は慌てるようにメールボックスを開いた。

『誕生日おめでとう、無二の親友・直人から』

「やっぱりあいつかよ」

俺の口元が吊り上がった。

あの花火をうつたのは、直人だ。

チキシヨウ。こんなの不意打ちじゃねえか。花火のおっさんに教えてもらわなきゃよかったよ。

「直人からのメール？」

「ああ、たく、あいつ余計なことしやがって」

「……やっぱり直人は優しいね」

愛奈の言葉を聞きながら俺は鼻をすすった。

「ああ、そうだな」

俺はもう一度、空を見上げる。もう花火は上がらない。

「昔は荒いし人からかうの好きだったような奴で、今は優しい。性格が変わっても、結局こういうところは変われねえんだよな、あいつ。このサプライズ野郎め」

俺は愛奈にもハッキリ分かるような笑顔を浮かべた。

ああ、俺の泣いてるところ、愛奈には見られなくなかったなあ……。

数日後。

「あ、麻友。ごめん、待った？」

「いいえ、大丈夫です。それより、ホントに付き合ってくれるんですか？男装喫茶」

「ああ、別に構わないよ」

秋葉原の街中を直人と麻友は歩き出す。

「あれ？裾、こげてません？」

歩き出してすぐに麻友が直人の袖の汚れに気がつく。明るい色のシャツなので分かりやすい。

「ああ、火花散ったのかな。この前花火打ち上げたからなあ」

「え？直人さんそんな事出来るんですか？」

「うん、まあね」

直人は自慢するように頷いた。

「ある花火師の人に特別にやり方を教わってね」

「じゃあ、数日前に花火が上がったって話、あれ直人さんだったんですか？」

直人は肯定した。

「すごい口悪いけど、恋愛には何かと不器用な奴がいて。そいつのために打ち上げたんだ。乱暴な奴だけど、僕にとっては大切な親友なんだ」

「へえ、そうなんですか」

直人の説明を聞いて、その人が誰なのか麻友はすぐ分かった。

麻友は歩みを進める。直人は麻友の歩幅に合わせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3985u/>

AKB48 少女たちの軌跡と少年の奇跡

2011年12月7日22時52分発行